



ブロードウェイ・クイーンズ

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

- file-201 凶事の発端
- file-202 秒殺の構図
- file-203 詐略の隘路
- file-204 惨夢の連鎖
- file-205 謀意の底流
- file-206 邪計の短絡
- file-207 空漠の証人
- file-208 虚実の交信
- file-209 反転の地平

★タップすれば各章へジャンプします

file-201

凶事の発端

または
イケない男はお仕置きよ！

「……被疑者確認。今しがたバスを降りた。一人だ。
……駅に入るぞ。サツキ、目を離すな」

「ラジャー。……こつちからも見えたわ。……歩きながら……定期を出して……今、自動改札を通るところ。どうやらそのまま、エスカレーターに向うみたい。リエ、そつちは？」

「ホームには、もう次の電車が入ってる。たぶんこれに乗るわね。ミミ、OK？」

「あたし、とつくに乗り込んでるよ。打ち合わせどおり四両目の前ね。もし、あいつが別のドアから乗った

ら教えて。移動するから」

「了解。……あ、来たみたい。……今、ホームに上がった。……ん？ 立ち止まって三両目の方を見てる。

……でも、結局、いつもの場所に乗るようね。あたし、すぐ後ろにつくから」

「ラジャー。あたしも今、エスカレーターに乗るところ」

「俺も改札を入った。へたに警戒させないように、発車間際に飛び込む」

「了解。でも、駆け込み乗車はよくないわよ、公平ちゃん」

「公平ちゃんって、呼ぶな！」

名古屋市名東区「藤が丘」駅。

名古屋を知らない人が見たら、ここを地下鉄の駅だとは思わないだろう。

駅舎の階上を高架が走り、そこにプラットホームが

あるからだ。ホーム自体も、線路の上に空が見える吹きさらし。ふつうの高架式電車駅と変わらない。あえて地下鉄らしさをさがすとすれば、入ってくる車両の屋根に——電源は車輪そばの側壁からとっているから——電線やパンタグラフが見あたらないことくらいか。

市営地下鉄東山線の東の終点であり、当然のことながら始発駅でもあるこの「藤が丘」を出たあと、電車

は、同じ構造の「本郷」「上かみやしろ社」の二駅を過ぎたところ、やっと地面の下に潜る。建設された一九六九年当時、このあたり、名古屋市東部の丘陵地帯はまだ市街地とは言えず、わざわざ穴を掘って電車を通すまでもなかったということだ。

そんな「藤が丘」周辺も、この「地上を走る地下鉄」ができて以来、次々に宅地造成され、今や一大ベッドタウンとなっている。なんといっても、名古屋の中心

「栄」^{さかえ}まで20分少々という利便性のおかげだろう。

さらにバブル期には、市の中心部にあった大学の多くがこの東部丘陵一帯に移転した。一等地を売った金で積年の赤字を解消するとともに、何万という学生を「藤が丘」駅に連れてきたわけである。

だから今では、この駅の乗降客は多い。ことに通勤通学の時間帯ともなれば、「栄」方面に向かうサラリーマンやOL、そして、そちらからやって来る学生た

ちでござった返す。

とはいえ、ここから乗り込む通勤客は恵まれていると言つてよい。市営地下鉄で最も利用者の多い東山線は、この時間帯、2分間隔で電車が出る。始発駅である「藤が丘」からなら、まず確実に座って行けるのだ。あとの駅から乗ってくる客たちのように、立ったまま人に揉まれることもない。

現に今も、発車待ちの車内には、まだあちこちに空

席があつた。

ところが――

今しがた四両目の前部ドアから乗り込んだサラリーマン、山久保鉄馬は、車内吊り広告の真下に立ち、座席に近づこうとしなかつた。その位置から連結部のデッキ越し見える三両目に目をやり、先刻ホームから見ていた時と同様、いまいましげに舌打ちする。

……ちっ！

そこには山久保の「獲物」がたくさん集まっているというのに、山久保自身はその車両に乗れないのだ。

何年か前、東京のどこかの私鉄が、なにを血迷ったか「女性専用車両」なる制度をつくった。それがニュースで報道されるやいなや全国に波及し、半年もたたないうちに名古屋の地下鉄も真似た。この東山線西向ききの電車で言えば前から三両目が、始発から9時まで、女しか乗れない車両になるのである。

：：まったく、くだらん。人気とりのポピュラリズムの極みじゃないか。

山久保は、そう思っていた。

：：ふだんは、男女平等だとか共同参画社会だとかほざくくせに、一方では都合のよい理屈をこねて、こんな「逆差別」を持ち込む。自分自身は男に相手にされない不細工なインテリ女どもと、それに媚びへつらう似非民主主義者たちの考えそうなことだ。反吐へどが出

るぜ。

そんな愚にもつかない市民社会への反感が、よけいに山久保の劣情を駆り立てる。

：：だいたい女にしたところで、本心では、あんな車両に乗りたいたいはずはないのだ。ブスなインテリ女どもに気兼ねして、表面上は歓迎するそぶりをしているが、本当のところ、みんな、男にちよつかいを出されたくてうずうずしているにちがいない。その証拠に、

まだ肌寒い季節だというのに、あんなに短いスカートをはいているじゃないか。ロングブーツとミニスカートの間にも、いかにも触ってくれと言わんばかりに太腿をさらしておいて、その気がないとは言わせない。

山久保は心の中でそう思ったあと、そこで、ちよつと皮肉な笑いを浮かべた。

：：ふっ、まあ、とはいうものの、あんな車両がで
きたおかげで、やたら騒ぎ立てるブス女に引っかかる

愚は犯さなくてもすむわけだがな。

そして今度は、さほどの期待も抱かず、自分の乗っている車両を見渡した。

まだすいているこの駅から「女性専用」以外の車両に乗ってくる女は少ないし、いたとしても、たいてい座席に座る。だから山久保はいつも、立ち客が増える「一社」^{いっしや}駅以降で、その日の「獲物」を物色することにしていた。

ところがどうだ。今朝はすでに、山久保の周囲に、二人も若い女がいた。

：：うむ、今日はいいい日になりそうだ。わざわざこの車両に乗って、しかも立っているところを見ると、こいつらは、最初からそのつもりだということだ。

山久保は思わぬ幸運にほくそ笑みながら、二人の女を観察した。

山久保のすぐそばでつり革に手をかけているのは、

OL風のスーツ姿の女。短大を出て、就職後一年か二年というところか。多少背は高いが、そのぶん、スタイルのよい美人だ。

：：清楚でおとなしそうに見せてはいるが、こういう女にかぎって、スカートの中に手を入れると、すぐに下着が湿ってきたりするものだ。

舌なめずりしながら、もう一人の女にも目をやる。

こちらは、女子高校生だった。この駅での乗り口と

は対面の――つまり閉まったままの――ドアにもたれ
ている。

セーラー服のスカートは下着がのぞくほどの超ミニ
で、ルーズソックスとの間に、ナマの膝と太腿を大胆
に見せている。春まだ浅い外気の中をやって来たせい
だろう。その肌は多少青ざめ、陶器のような硬さを感じ
させるが、山久保の指が這ったとたん、きつとピン
ク色に上気するにちがいない。

……顔もかわいいじゃないか。まだあどけないあの顔を、いやらしく歪ませてみたいものだ。

近くのOL風にも惹かれたが、山久保は、とりあえずのねらいをその女子高生に定め、体ごとそちらを向いた。

と、その時、山久保の背後に、ホームを小走りに来るハイヒールの音が響いた。

その音にある予感を抱き、山久保はふたたび振り返

った。

車内に入ってきたのは、真っ赤なトレンチコートを羽織った女だった。女はちよつと車内を見渡したあと、すぐにドア脇のスペースに立った。この女も、どうやら座る気はないらしい。

女を品定めする山久保の目にまず飛び込んだのは、そのコートの下での白い肌だ。首筋から鎖骨、さらに胸のラインぎりぎりまでの肌が露出していた。下に着て

いる黒のサテンは、どうやらキャミソールかチューブ
トップのようだ。

女がかすかに体を動かしたせいで、サテンに包まれ
た豊かな胸が揺れた。

それに思わず生唾を呑み、山久保は少し目を上げ、
女の顔を観察した。

この女もまた、美人だった。しかも、他の二人には
ないセクシーさがある。男を誘う生来の妖艶さで、周

囲にフェロモンを振りまいている感じだ。

：：まったく、今日はなんて日だ！

山久保は心の中で快哉の声をあげた。いつもこの段階では、立っているのは山久保一人だというのに、今朝は、それぞれにタイプの違う、しかもモデルばりの女たち——実際、三人ともすらりと背が高く、その点だけは共通していた——が、自分のまわりを取り囲んでいるのだ。

：：まあ、いくらご馳走を並べられても、朝っぱらから一度に食うわけにはいかないわけだが：：。

高まる興奮の中に多少の悔しさも感じつつ、山久保がふたたび迷っていると、その赤いコートの女と目が合った。

女は、そんな山久保の目つきに気づいたのか、おびえた感じで長いまつげをしばたかせた。しかしそれは、単純な意味での「おびえ」ではなかった。そんなふう

にしながらも、女が、コートと同じ色の唇を半開きにし、そこに舌を這わせたのを、山久保は見逃さなかった。

……やっぱりこいつ、生まれついで淫乱らしいぜ。

俺のことを、それとわかった上で誘ってやがる。

山久保は、その女の挑発に応える気になり、完全にそちらに向き直った。

そこで発車のベルが鳴った。

と、その時また、ホームを駆けてくる靴音が響いた。といつても、今度のは、先刻の女のものとはまるでちがう、ばたばたという音だ。

両開きのドアが左右から閉まろうとする寸前、山久保が想像していたよりさらに大きな影が目の前をふさいだ。そのせいで、車内が一瞬暗くなった気がした。その重量に、車両全体が揺れた感じさえした。乗ってきたのは、それほど巨大な男だった。男はそのまま、

閉まったドアを背にして——つまり赤いコートの中の真横に——立った。

そんな体軀とはミスマツチな、人のよさそうな顔つきに、ちよつと間の抜けた感じも受けるが、それでも山久保は男の巨軀にたじろいだ。

どうやらあの男も、座席に着かずに立っていくつもりらしい。例の女の挑発を受けて立てないのはしやくな気もするが、もしあの男に見とがめられ、腕をねじ

上げられでもすれば、こちらはひとたまりもないだろう。

山久保は、先刻、心の中で「くだらない市民社会」をののしっていた威勢も忘れ、電車が発車する揺れにまぎれて、ふたたび女子高生の方へと向きを変えた。

……今日はやっぱり、こっちにしておこう。

「……どうやら、今朝のターゲットはミミに決まりみ

たいね」

「あいつ、駅ごとにじりじり近づいてるもんね」

「サイテー。なんであたしが貧乏くじ引かされるのよ
お」

「立ってる客は増えたが、まだすき間がある。奴が行
動を起こすとすれば、混んでくる『星ヶ丘』以降だな。

がんばれよ、ミミ」

「そんな」

「本郷」で残りの席が埋まり、「上社」かみやしろから乗った客は一人も座れなかった。電車が地下に潜ったあとの「一社」いっしや駅でもそうとうな人数が乗り込んできて、立っている客の方が多くなった。次の「星ヶ丘」はバスターミナルのある駅でもあり、乗客は倍増するはずだ。

ただ、「星ヶ丘」は、ホームがこれまでの駅とは反

対側にある。つまり、これまでとは逆側——今、女子高生のもたれているこちら側——のドアが開く。乗ってくる人波に押されると、彼女との距離が離れてしまいかねない。

山久保は頭の中でそんな計算をし、シート脇に立つステンレスポールの手すりとは女子高生の間、体をすり入れるようにした。

と、そこで、女子高生がなにかつぶやいた気がした。

地下壕に響く電車の音でよくわからなかつたが、山久保の耳には「わっ、来たッ」と言ったように聞こえた。

こちらの下心を感じかれたのかと思い、一瞬警戒したが、どうやらそれは取り越し苦労だったらしい。女子高生はこちらを気にするそぶりも見せず、耳のあたりに手をやった。片方のイヤリングをはずしたようだ。制服でそんなものをしていることにも、それに、今どきの子には珍しくピアスでなくイヤリングであるこ

とも不思議な感じを持ったが、おそらく学校ではピ
アスの穴を開けることも禁止されていて、それで、通
学中だけイヤリングをしているのだろう。山久保はそ
う理解した。

通学のわずかな間もオシヤレしたい……そんな女心
に、山久保はさらにそそられる気がした。

そう思って見ていると、女子高生は、そのイヤリン
グを包むように持った手を口のあたりに当てた。

そして、そこでまた、なにかつぶやいたように見え
た。

それを聞き取ろうと耳をそばだてると、今度は、ま
ったく別方向からささやき声が聞こえたように感じ
た。

……ん？

声のした方を見ると、反対側のドアの所で、例の大
男が携帯電話を耳に当てていた。本人は人目を避けて

こっそりかけているつもりらしいが、まわりの人間より頭ひとつ分飛び出ているのだから、丸見えだった。

：：：さつきから何度も、携帯電話の使用を禁じる車掌のアナウンスが入っているというのに、なんて不道徳な奴なんだ。

山久保は、自分の方の「不道徳」は棚に上げ、そう思った。

：：：それにしても、走っている地下鉄の中で、携帯

が通じるのか？

山久保が首を傾げた時、電車は「星ヶ丘」駅のホームに滑り込んだ。ガラス越しに見やると、やはり多くの人々がドアが開くのを待って並んでいた。件の女子高生もそれに気づいたらしく、ドアの前を避けて脇に動いた。背中を向ける形ではあったが、山久保のすぐ目の前に立ったのだ。どうやら、哀れな小うさぎは、自ら罨にはまりこんできたようだ。

ドアが開き人が乗り込んでくると、女子高生の体
人波に押され山久保の体に密着した。山久保のズボン
の前にミニスカートのヒップが押しつけられ、体温が
伝わってきた。それに触れる山久保の部分も、当然、
反応していた。

車内の人が増えたせいで、ドアが閉まったあとも、
その体勢は変わらない。

：：ふふ、たまらんな。

女子高生の髪から立ち上る匂いに鼻腔をくすぐられ、山久保の劣情はさらに昂まった。しかし、それでもまだしばらくの間、山久保は我慢した。

次の「東山公園」駅も、開くのはこちらのドアだ。

その前に手を出せば、そこで逃げられる可能性があった。

「……まだ、触ってこないみたい」

「ミミ、あたしは、それとなく奴の後ろ側にまわりこむからね」

「リエ、気をつけろよ。感づかれるな」

「それはだいじょうぶみたいよ。ここから見るとよくわかるわ。あいつ、目下のところ、目の前のかわいいミミちゃんに夢中だから」

「……もう、サツキったら。こっちの身にもなってよ」

「東山公園」でドアが開いた時、乗ってきた客の流れに押され、女子高生の体が一瞬離れそうになった。しかし、そのおかげで、山久保にとってはさらにおいしい体勢ができあがった。

ちよつとあせつた山久保が、不自然でない程度に腕を伸ばし押しとどめると、流れに体を回転させた女子高生が山久保の方を向いたのだ。正面から体をくっつけ、まるで抱き合っているような体勢だ。しかも、差

し出した山久保の手は、女子高生の片方の腰骨あたりに置かれていた。その手のすぐ上には、セーラー服の上着の裾がある。周囲の客たちの体も密着しているから、山久保がそこから手を入れても、誰にも見えないだろう。

ドアが閉まり電車が動き出したところで、山久保は、その状況に思わずほくそ笑んだ。

ここから先、「本山」もとやま「覚王山」かくおうざん「池下」いけしたの三駅は、

また反対側のドアが開く。簡単に逃げることはできな
いはずだ。

：：さて、始めるか。

山久保は、電車の揺れのせいを装いながら手の位置
をずらし、セーラー服の裾に指先を滑り込ませていつ
た。

スカートの上のへりをなぞったあと、その指が脇腹
あたりの肌に触れる。下にTシャツでも着られていて

は興ざめだと思ったが、どうやらブラ以外の下着は着けていないようだ。

素肌の上を這う山久保の指の動きに、やっと女子高生は、自分が陥っている状況に気づいたようだ。体をびくりと震わせ、上目づかいにこちらの顔をうかがってきた。

それに対して山久保の方は——周囲の目もあり——なに食わぬ顔を装った。そんな顔をしながらも、女子

高生の素肌に触れた手をさらにじりじりとずらしていき、

女子高生の全身に緊張が走るのがわかった。

そして次には、いやいやをするように体を揺すった。

なんとか山久保の手を振り払おうというつもりらしい。しかし、身動きもままならない車内で、それは、しよせん無駄な努力だった。

「本山」で反対側のドアが開き、名古屋大学に通う

学生らしい若者が何人か降りた。それで周囲からかかる圧力が少しだけ弱まり、女子高生は体の向きを変えようとした。しかし、山久保の方が、それを利用してセーラー服の中にさらに手を滑り込ませた。

すぐに、降りた人数以上の客が乗り込み、女子高生の体はさらに山久保に押しつけられることになった。短い裾から腕を突っ込んでいるのだから、セーラー服が多少まくれ上がっているようだが、周囲の人間は、

やはり誰も気づいていない。

そのセーラー服の中で、今、山久保の手は、女子高生のブラジャーのへりに触れていた。山久保は、そこに指先を這わせ、ブラのレースの感触を楽しみながら、女子高生の顔をうかがった。

女子高生は、頬を赤らめ、山久保の視線を避けるようにうつむいていた。どうやら、騒ぎ立てたりするつもりはないらしい。

……こいつ、見かけによらずウブなのかもしれないぞ。もしかしたら、男にこんなことをされるのは初めてか？

ただ恥ずかしそうにもじもじしている女子高生を見て、山久保の興奮はさらに高まった。

手のひらでそのふくらみを包み、揉むように動かす始める。

と、女子高生は、かすかに身もだえながら首をひね

り、山久保から顔を背けた。

：：ふふ、感じるのか？

顔がにやけそうになるのを必死にこらえながら、山久保はさらに手の動きを速め、女子高生の反応をうかがった。

女子高生は、耐えられないというように、先刻イヤリングをはずしたまま頬に添えていた手で、口のあたりを被った。

：：：つい、よがり声が出てしまったってか？

山久保は、そんなふうに関心の中で女子高生と会話しながら、若い弾力あるふくらみを楽しんだ。

「やばいよお。直接胸をねらってくるとは思わなかった。パッドがずれそう。それに、ブラの中に手を入れられたら、バレちゃうよお」

「シリコーンのパッドだから、だいじよぶなんじやな

い」

「リエ、そんなのんきなこと言っていないで、早く捕まえてよお」

「もうちよつと、やらせてからの方がいいんじゃない？」

「そうだな。ここはまだ千種署ちくさの管内だし、よそのシマで逮捕するとなにかと面倒なことも多いから、うちの管轄に入るまで我慢してくれ」

「こ、公平ちゃんまで、そんなさ」

「ミミ、あんまりしゃべらない方がいいわよ。いくらイヤリングの発信機を口にあててても、それだけ密着してると、奴に聞こえるわ」

：：ウブなくせに、こいつ、そうとう感度がいいと見える。

手で口元を隠しながらもだえ声をあげたらしい女子

高生を見て、山久保は、さらにいたぶってみたいという気持ちにかられた。

∴∴しかし、ここは用心した方がいいな。

「池下」駅を過ぎたところで、山久保はそう思った。

次の「今池」は、またこちら側のドアが開く。それに、桜通線への乗換駅でもあり、降りる客もけっこういる。それにまぎれて逃げられないようにしておいた方がいいだろう。

そう考えた山久保は、胸に入れているのはちがう方の手をもぞもぞと動かし、女子高生の腰にまわしていった。

今度は手が尻にあてられたせいで、女子高生は、腰を振るようにした。そんな全身の反応を楽しみながら、山久保は、小振りで固いつぼみのような、その尻をゆつくりと撫でた。

……この感触、やっぱりお前は、まだ男を知らない

らしいな。胸は、こんなに大きいのに……。

山久保は、その乳房をじかに揉んでやろうと、そちらの方の手をふたたび移動し、ブラジャーの下のへりにかけた。そこに指先を滑り込ませようとすると、女子高生がこれまで以上に身もだえた。

……ふふふ、そんなに触ってほしいのか？

しかしそこで、山久保は、その行為を中断せざるを得なくなった。

電車が「今池」に着いたのだ。

せつかくのおいしい「獲物」が逃げ出さないように、山久保は、胸の手も移動し、ふたたび脇腹に回した。

そして、尻にあてた手と両方で、女子高生の体を抱え込むように固めた。

ドアが開き、思ったとおり降りる人間がいて外に向かう流れができた。それで山久保は、さらに両手に力を込めたのだが、女子高生は思ったほど抵抗しようと

はせず、騒いだりもしなかった。そして、この駅から乗り込んできた客に押されるままに、ふたたび体を押しつけてきた。

おそらく、こんなことをされて、足がすくんでいるのだろう。

：：いや、それとも、俺のテクニクにまいって、もつとして欲しいと思っっているのか？ どっちにしてもかわいい奴だ。

山久保はそう考え——もはや、他の乗客も気にせず——にやついた。

……しかし、……。

山久保が降りる「栄」までは、あと三駅。途中の「千種」「新栄町」しんさかえまちは、また反対側のドアが開くのだから逃げられる心配はないが、残された時間はあまりない。

……そろそろ仕上げにかかるとするか。

山久保はそう考え、胸への攻撃はあきらめて、女子高生の脇腹にあてた方の手をそのまま下へとずらしていった。プリーツの下にある太腿を感じながら、その手を裾まで伸ばすと、わざわざスカートをたくし上げることもなく素肌に触れた。

：：こんなミニの制服を着てるお前が悪いんだぞ。

指先がとらえたナマ脚の感触を確かめるように、山久保はその手を這わせ、両脚の合わせ目まで持ってい

った。

と、女子高生はまた体を小刻みに震わせ、片膝をちよつと前に出すようにして、そこをぎゅつと閉じた。

山久保は、それをこじ開けるように、手を差し込んだ。

「……腿の間に入ってきた。くすぐったいよお」

「もう少しだけ、時間を稼いでくれ」

「……わっ、この人、手が汗ばんでる」

「シッ！ ミミ、しやべっちやまずいって言ってるでしよ」

「そんなこと言ったって……、あッ……、……」

「……ん？ どうした？」

「……ああっ、……あッ」

「……うん、そういうのならオツケーよ」

女子高生の内腿に手を入れた山久保は、手のひらで円を描くようにしてそこを撫でながら、じわじわと位置を上げていった。

見ると、女子高生は、せつなそうな顔で片方の肩に頬をすりつけている。

：：おや、待ち遠しいのか？、もうすぐだ。もうすぐ、お前のいちばん感じるところを触ってあげるよ。

それでも、山久保はじらすように手を移動させた。

電車が「千種」を過ぎ「新栄町」にさしかかったところ、やっと女子高生の下着に達し、それでも手のひらをそこにあてがったまま動かさず、ドアが開いて閉じるのをやり過ごした。

：：さて、いよいよクライマックスだぞ。

山久保はそう思いながら、コットンらしいその下着の上から、そこをまさぐった。

：：ん？

その違和感に、山久保は思わず首を傾げた。

：：：なんだ？

いつもはあるはずのやわらかな盛り上がりがない。

いや、あるにはあるのだが、少し前の方なのだ。

：：：こういう質たちの女なんだろうか？

そう思いながら、手の位置を下着の前側にずらした。

：：：えっ!?　　：：：!

山久保は、いわば生理的にその手を引いていた。

その動かし方があまりに急だったせいで、斜め後ろの乗客をひじ打ちするような形になってしまい、その客がにらみつけてきた。

しかし、そんなことにかまっていられないほど、山久保は動転していた。

今の感触は……、どう考えても……。

急に感じ始めた電車の振動に不安定に揺れながら、山久保は、おそるおそる女子高生の顔に目をやった。

と、先刻まで恥ずかしそうにしていたその「女子高生」が、こちらを見ながらふくれた顔をしてみせた。

「おじさん、なんでえ？　せつかく気持ちよかったの
にい」

それは、日頃、山久保が女に対して抱いている妄想どおりの言葉だったにもかかわらず、山久保の顔は蒼白になった。

と、人混みの間に中途半端に挟まったままの山久保

の手に、「女子高生」の手が伸びてきた。そして、その手首をぎゅっと握った。

「『栄』に着いたら、いつしよにいいところ行こうね」

「女子高生」は、今度は小首を傾げるように言った。そのコケティッシュな笑顔は、ふだんなら山久保の気持ちを浮き立たせただろう。しかし、今の山久保は、それに身震いした。

先刻まで「女子高生」を身動きできなくさせていた

車内の人垣は、今や、山久保の逃げ道をふさぐものに変わっていた。

：：いや、しかし：：。

混乱しながらも、山久保は頭を巡らせた。

：：たとえ、こいつが：：その、つまり：：男だつたとしても、一人だけだ。「栄」でドアが開いた瞬間、振り切って逃げられないことはないはずだ。

そう思っていると、今度は、もう一方の腕に誰かの

腕がからみついた。

……えっ？

思いきり首をひねり自分の真後ろあたりを見ると、そこに、ひとりの女が立っていた。やはり「藤が丘」

から乗ってきたOL風の女だった。

……え!?! 俺は……はめられたのか？

山久保は、そこではじめて、自分が陥っている抜き差しならない状況を正確に認識した。

……やつら……おとり……？

と、その「OL風の女」が言った。

「いつもおんなじ電車のおんなじ車両でおイタしてるから、こんなことになっちやうのよ」

……つまり、俺はこれから、警察に……？

山久保は、先刻「女子高生」の正体を知った時以上に青ざめた。

そうなれば、会社や家族にも知られることになる。

：：そんなことになれば、俺の人生は：：。

山久保がそこまで思い至った時、電車が「栄」に着いた。

：：くそっ！

ドアが開くと同時に、山久保は、満身の力を込めて腕を振りまわしていた。それは、周囲の人々をドアから突き飛ばすほどの暴れ方だった。

そのせいで、両手をつかんでいた「女」たちの手が

はずれた。

山久保自身も、転がるようにホームに出ていた。

その勢いのまま、ホームを行く人々を弾き飛ばしながら階段へと走る。そして、三段跳びに階段を駆けのぼった。

∴∴これだけなりふりかまわず走れば、逃げおおせるだろう。

そう思いながら、階段をのぼりきった時だった。

山久保の真横を、なにか赤いものがふわりと追い越した。

……え？

その赤が、自分の前に立ちはだかったのに気づき、山久保は足を止めた。

女が、こちらを見ながらセクシーに微笑んでいた。

例の「赤いコートの女」だった。

次の瞬間、また、女が羽織った赤のコートがふわり

と動いた。

見ると、そのコートの間から、ミニスカートの形よい太腿と、その先にはいた黒のロングブーツが真っ直ぐ突き出されていた。さらに視線を手前に引くと、そのブーツのかかとの細いヒールが、山久保のみぞおちあたりにめり込んでいた。

それを認識したことでやっと、山久保は自分の胃のあたりの激しい痛みに気がついた。

「……うつつ！」

山久保は、腹を押さええてうずくまった……というように、崩れ落ちていた。

そのまま、のたうつように仰向けになった山久保の目には、改札口のある栄地下街の天井が映っていた。

腹の痛みにかすみがちなその視野の三方から、例の「女」たちがのぞき込んできた。そして、さらにその後ろから、大きな影が割って入った。例の大男だった。

大男の顔が近づき、そして言った。

「迷惑行為防止条例違反で逮捕する」

「ゆうべも深夜までひったくり相手のおとりパトロー
ルやらされて、その上、早朝から痴漢退治なんて、ま
ったく身が持たないわよ」

名古屋のレトロタウン、大須^{おおず}。その片隅にあるクイ

ーンズオフィスで、ソファにぐったりと体を沈めたサ

ツキが言った。

「でも、なかなか現場を押さえられなかった痴漢の常習犯、捕まえられたわけだし、ま、よかったじゃない」

メーキャップテーブルの鏡に向かい、満員電車で崩れた化粧を直しながら、リエが答えた。

「ふん、二人はいいよね。直接チカンされたわけじゃないんだし……」

パソコンの置かれたデスクに頬杖をつき、ミミはむ

くれた。

「あれえ？ ミミったら、けっこう楽しんでたみたい
だったけど」

「そうそう。あの『：：ああつ、：：あん』は、とて
も芝居だとは思えなかった」

「じよ、冗談じゃないわよ。男にあんなことされて、
気持ち悪くないわけないでしょ。あたし：：僕は、男
なんだし」

二人のからかいに、ミミはあわてて否定したが、その言葉にはどこか言い訳めいた響きも混じっていた。

愛知県警ひろこうじ広小路警察署の警官、佐雲俊さくもしゆん、北川恭一、

美濃部光好の三人が、ひったくりや痴漢対策の特別編成チームとして、女装して仕事するようになってからすでに何ヶ月かがたっていた。毎日、リエ、サツキ、ミミとして過ごすうち、三人の体に、「女」としての感覚が染みついてるのは確かだ。ものに対する感じ

方が、ますます女の子っぽくなっている気がするのだ。

リエにしてもサツキにしてもどこかでそう感じてい
るだけに、ミミの言葉に、お互い肩をすくめ、苦笑す
るほかなかった。まあ、けつきよく三人とも、こんな
毎日がけっこう気に入ってはいるのだ。

と、そこで、部屋のドアが開き、例の痴漢男を署ま
で連行していた権藤公平が戻ってきた。

「あつ、公平ちゃん、おかえり〜」

「公平ちゃんって、呼ぶな！」

権藤は、お約束どおりそう叫んだが、三人は、平然とした顔で聞き流した。

通称「プロードウエイ・クインズ広小路女装隊」と呼ばれているリエたち三

人より年齢も上だし、警察官としての職階も上位だ。

だから、いちおう、このチームのリーダーということになってはいるが、権威などまるでない。いつもこの調子で無視されているのである。まあ、リエだけは時た

ま、それに同情してくれたりもするのだが。

そんな自分の境遇に情けなさそうに首を振りながら、権藤はサツキと対面するソファにその巨大な体を沈めた。と、サツキがまた、さっきの文句を繰り返した。

「ねえ、あいつ、何人もの女の子から被害届が出されてて、顔や特徴までわかってたわけでしょ。出沒する電車や車両まで特定できてたんだし、なんであたした

ちが朝っぱらから出勤して、おとりにならなきやいけ
なかつたのよ」

「だから、昨日も言っただろ。なにより現行犯逮捕し
たかつたんだ。実際に痴漢行為してるところを押さえ
て、言い逃れできないようにな」

「言い逃れっていったって、常習なんだし……」

「いや、最近は、確証なく捕まえると冤罪えんざいだとかなん
とか騒ぐやつも多いらしいんだ。それで署長が……い

や、俺たちのボスが、ぜひ現場を押さえてくれって」

「ブロードウェイ・クイーンズ」の発案者である広小路署署長、綾瀬宏道は、モデルとした「チャーリーズ・エンジェル」にならない、「影のリーダー」というスタイルにこだわっていた。リエたち三人はとうにその正体を知っているのだが、いちおう知らないことになっていいる。権藤がわざわざ言い直したのは、それを気づかっただけのことである。

「でも、こんなことやって、あの人また、鍋島副署長あたりから『独断専行』だって責められるのがオチなんじゃないの？」

サツキはそう言いながら、ロングブーツを履いた脚を高く上げ、組み替えた。

と、それを見た権藤は、とたんにおろおろと目を覆った。べつに、スカートの中が見えたせいではない。

「……サ、サツキ、頼むから、そのヒールを俺の方に

向けないでくれ」

先端恐怖症のせいだ。

元柔道のオリンピック強化選手で、力業ならめっばう強い権藤の唯一の弱点、そして、リエたち三人が彼を馬鹿にしている最大の原因は、「とがったもの」に極端に弱いその性癖にあった。

そんな権藤を苦笑して見ていたリエは、助け船を出すだけでもいうように話題を変えた。

「そういえば、あの人からの定時連絡、今日は遅いわね」

その言葉に、ミミが、パソコンに接続されたメツシユフェイスのスピーカーを見やりながらつぶやいた。

「どうせまた、変なことに夢中になって、すっかり忘れてるんじゃないの」

「うゝむ。本格推理はやっぱり、鮎川哲也先生に限り

ます」

今読み終わったばかりの文庫本を閉じながら、綾瀬宏道は感慨深げに言った。

「この緻密な論理展開に比べたら、最近の新本格派なんて、安易な都合主義ときわどさを競っているばかりで……」

さらに、通人ふうに、そうつぶやく。

しかし綾瀬は、そんなにたくさん推理小説を読んで

いるわけではない。最近、熱に浮かされたように五・六冊つづけざまに読んだのを除けば、せいぜい『名探偵コナン』の既刊分全巻を読破したくらいのものだ。

やはり警察署長たるもの、事件の謎を解く鋭い眼力を養うべきだ。

それが、この間、勤務中に小説を読んでいる綾瀬の言い訳になっていた。もつとも、綾瀬がなにをしようが署の業務は滞りなく動いていたから、そんな言

い訳をする必要も機会もないのだが。

じつは、綾瀬にそんな思いこみをさせたのは、他ならぬリエだった。この前の事件で、リエが披瀝ひれきしたみごとな推理に、綾瀬はつくづく感じ入ってしまった。

いつかは自分も、あんなふうにな、事件の関係者全員を集めて「なぞ解き」してみたい。

そんな願望が、このにわか推理小説ファンをつくり出しているのだ。

「……うむ。このみごとなアリバイ崩しの手法をしつかり身につけるためには、一度、自分なりに整理してみないと……」

また独り言をつぶやいた綾瀬は、手にした文庫本をふたたび開き、拾い読みしながら、デスクの上に置いたレポート用紙になにかを書き込みはじめた。

「えーっと、この時点で人物AとBはここにいて、Cはこっちにいます。で、Dの死体が発見されたのはこの

時点で、殺されたのは、おそらくこの時。だから、
：
「

時間の経過を縦軸に、それぞれの場所を横軸にとつ
て、登場人物たちの動きを整理しようというのだ。と
ころが：：

「：：ここで死体が移動されているわけだから、それ
を運んだBはここにいなければならない。で、ここで、
そのBも殺される。そこに新たな人物Eが登場して：

：、あれっ？ Cはどこ行った？」

その発想は悪くなかったが、残念ながら、ひらめき派である綾瀬の脳の構造は、本格派の巨匠が仕掛けた論理に耐えられなかったようだ。五分もしないうちに、そのメモは、書いた本人にもよく理解できないものになっっていた。

「うゝむ」

ついに綾瀬は、頭を抱え込んでしまった。

そんな無限連鎖地獄から綾瀬を救い出したのは、ノツクの音だった。

「……ど、どうぞ」

我に返って答えると、入ってきたのは、副署長の鍋島と警務課長の斉木、それに刑事課長の三人だった。

どうやら、今度はべつの地獄がはじまるようだ。

綾瀬はそう思って身構えた。

「署長、また困ったことになりました」

デスクに近づいてきた鍋島が、いかにも困ったというジエスチャーで、そのじつ、鬼の首でもとったようにうれしそうな顔で言った。

「……ど、どうしたんですか？」

「いや、刑事課長に相談されたんですが、今朝連行された迷惑行為防止条例違反の男……」

「……あ、ああ、あの痴漢ですね」

「取調中、自分はそんな痴漢などをした覚えはないと

言い出したようでして……」

「い、いや、それは、痴漢をやった人間なら、ほとんど誰でも言うことでしょう」

「それはそうなのですが、やつはそれ以上のことを言っておりました……。これは、自分を陥れるための警察ぐるみのでっち上げだと。不当なおとり捜査だなどと、生意気なことを言っておるわけです」

「ま、まあ、たしかにおとりではあったわけですが、

彼が痴漢をしたという事実は確かなのですから」

「それが、奴は、自分はむりやり手を取られて、痴漢行為を強要されたのだなどと申しておるのだそうです」

「えっ、いくらなんでも、そんな無理な理屈は通らんでしょ」

「いや、彼はこう言っとるわけです。自分を陥れた相手は、まちがいなく女装した男だったと。だからあんな

なことができたのだと。まずはその、自分を毘にかけた連中を取り調べるべきだと」

「ちよ、ちよっと待ってください。この前の会議でも検討したように、あの男に痴漢されたという被害届は、これまでにもう何件も出ているわけです。その被害者たちの証言であの男を立件しようという手はずでしたでしょう。そのために、まずは現行犯逮捕をして……」

「いや、問題はそこなんです。奴を逮捕したのは、今

朝の事犯の現行犯だった。奴は、なにより、そこを突いてきておるわけです。取調中、以前の事犯を追求しようとする、これは不当な別件逮捕だと騒ぎ出す始末で。余罪を追及する前に、まず今朝の被害者の所在を明確にするのが筋だなどと主張しておるわけです」

「逮捕したばかりの被疑者が、いきなり、そこまで言うんですか？」

通常ではあまりないことだけに、疑問を感じて綾瀬は聞いた。

と、刑事課長がそれに答えた。

「いえ、彼は連行されるとすぐに、弁護士を呼びまして」

「まあ、それは、被疑者に認められた権利ですから：
」

「で、その弁護士が接見したあと、奴はそう言い出し

たわけです」

「つまり、弁護士に入れ知恵されたと……」

「ということですよ」

と、そこで、刑事課長の言葉を補足するように、斉木がつづけた。

「問題は、その弁護士なんでして。鬼頭きとう左右衛門さえもん。ご存知ですか？」

「さえもん……？　侍みたいな名前ですね」

「ベテランの弁護士で、そうとうな辣腕らっわんだという噂です。企業の顧問弁護士を多くつとめていて、どちらかと言えば民事専門だったんですが、最近、なにを思っただか痴漢冤罪事件に力を入れています。『中部痴漢冤罪に抗議する会』なる団体の顧問弁護士にもなっていて、痴漢にまちがわれて告訴された男を何人も救ったと、マスコミにもとりあげられている時の人です。彼が乗り出したんでは、検察の方も警戒する。簡単に

は拘置や送検を認めてくれないと思います」

「つ、つまり、その弁護士が、今朝の事犯の被害者を
出せと……」

「そういうことです」

鍋島が、なぜか勝ち誇ったような調子で言った。

「署長のご意向もあつたから、私も、あのオカマ連中
が出てくることに反対はしなかつた。しかし、これは
大問題ですぞ。彼らの正体を明らかにしなければ、立

件はできない。かといって、それを明かせば、広小路署はおとり捜査、しかも極めて常識はずれの不道德なおとり捜査をやっているとされる。鬼頭弁護士は、マスコミにも顔が利くそうですから、そういう論調が広がれば、署長のお立場もあやうくなるのでは……。さあ、どうします？」

鍋島の挑戦的な問いかけに、綾瀬は言葉を詰まらせたが、それでも、考えながら反論した。

「し、しかし、すぐに以前の被害者を呼んで面通しさせたりすれば、その証言で余罪を立件することはできるでしょう」

「まあ、それは、刑事課長も努力すると言っています、その前に、署長にも今回の件とあのオカマ集団の発案者としての責任を果たしていただかないと」

「せ、責任……と、言いますと？」

「その鬼頭弁護士が、不当逮捕抗議のために、署長に

面会させろと言っておるのだそうです。なあ、斉木君」
鍋島の言葉に、腰ぎんちやくよろしく斉木がうなずいた。

それを見ながら、綾瀬は力無く言った。

「そ、そういうことは、なんとか、現場の方で押しとどめてもらえないでしょうか。な、なんととっても、事件は、会議室でなく現場で起きているわけですし：

：」

「だいたいあなたは、痴漢冤罪被害者たちがどれほど悲惨な目にあっているか、それを認識しておられるんですか？」

「い、いや、それは充分……」

けつきよく弁護士の鬼頭は、その予告どおりやって来て、綾瀬もまた、鍋島に押し切られる形で——それが、いちおうはキャリアである自分に対するイジメだ

とわかっていながら——、会わざるを得なくなった。

「いったん痴漢だと決めつけられれば、それで社会的信用は丸つぶれだ。たとえば、無実の罪であることが立証されたとしても、世間はすでにそういう目で見ると。

職場や近所の人間はもちろん、家族にまで『本当はやったんだらう』という不信の目を向けられるわけです。

自営業者なら、それだけで仕事はなくなるし、サラリーマンでも、そんな男に責任ある仕事は任せられない

ということになる。まちがいなくリストラ対象だ。当然、家庭内もぎくしゃくして、それが理由で離婚などということにもなる。たとえば、あなた自身がそんな立場に立たされたとしたら、どうしますか？」

署長室の来客用ソファで、鬼頭は、メモする気もなさそうなのにペンを持ち、それを突きつけながらまくし立てた。五十年配の恰幅かっぶくのいい紳士風だが、永年、法廷で鍛えられたらしい舌鋒ぜっぼうも目つきも鋭い。

「い、いや、私も、職場や家庭内での立場は同じようなものでして……」

綾瀬は、鬼頭の勢いに、すでにたじたじになっていく。

「ご冗談を言っではいけない。あなたは警察署長という権威あるお立場だ。市民ひとりの人生など、簡単にひねりつぶせるだけの権力をお持ちだ。私は、そんな悲惨な被害者を、あなたをはじめ警察が意図的につく

り出しているという、そんな権力犯罪が問題だと言っているんだ」

「い、意図的などとは、とんでもない」

「今朝の山久保さんへの不当逮捕は、充分に意図的じゃないですか。山久保さんは、自分を罠にかけたのは、警察官、それも男性警察官のチームじゃないかと言っている。私にはにわかには信じられない話だが、もし、男性警官にそこまでさせているのだとしたら、それは、

検挙率向上を焦る成果主義のなせる技に相違ない。広小路署は、自らの成績向上のために、不当な捜査手法で、まっとうな市民を罪に陥れている。そういうことになる。そう言われたくないのなら、まず、その痴漢被害者とやらをはつきり示していただきたい」

「い、いや、まだ捜査の初期段階であるわけですし、そ、それに、こういった事犯は、被害者のプライバシー保護という微妙な問題もあります。被疑者の弁護士

にであろうが、簡単に公表するわけには……」

綾瀬はしどろもどろで弁解した。

「ほらご覧なさい。実際には被害者なんていないんだ」

「いや、山久保氏と目される人物が犯した、そうとう

悪質な痴漢行為の被害届なら、これまでもたくさん

……」

「ほお、そのおっしゃりようは、今回のことが不当な別件逮捕であったと認められているわけですな」

「い、いや……」

「だいたい、その過去の痴漢犯とやらが山久保さんだったかどうかも、あなた方は確証を持っているわけではない。その上で、見込みのおとり捜査、それも一般市民を誘導して実際にはない犯罪をでっち上げるような捜査をやって別件逮捕した。そういうことになるんじゃないですか？」

「い、いや、その……」

綾瀬は、必死に頭を巡らせた。少なくとも、鬼頭の言う「権力犯罪」という方向に事を荒立てるのだけは、なんとしても避けなければいけない。

「も、もちろん、私たちは、そんな捜査などいっさいしていません。ですから、その被害を訴えた女性について、われわれは十分な聴取をしているわけで……」

綾瀬は「女性」というところを強調しながらそう言った。

と、鬼頭の顔が急に穏やかになった。

「うむ、そちらも正当に取り調べてくださるといふのなら、とりあえずは納得できます」

「は、はい。もちろん、きっちり調べます」

鬼頭の語調が変わったことで、多少気が楽になり、綾瀬は大きくうなずいた。

「しかし、それなら、山久保さんに対する不当な勾留をつづける理由はどこにもありませんね。本人は、任

意ならいつでも出頭して取り調べに応じると言っているわけですし」

「えっ、それは……」

「だってそうでしょう。あなたは今、その被害者だと称する人物も取り調べると言った。つまり、その人物の主張に対しても疑義を持っているわけだ。とすると、現行犯は成立しない」

「え……」

「山久保さんに被害を受けたと主張し、その上で拘束したのが信頼に値する人物、たとえば山久保さんが言っているように警察官のチームだとするならば、現行犯逮捕として認められる。しかし、それが疑わしい人物だとしたら、逮捕も拘留も、不当だということになるでしょう。ま、他にも痴漢行為の目撃者がいるというなら、話は別ですが」

「そ、それは、そうですね……」

今日の鬼頭のねらいがそこにあつたことに気づきつ
つ、綾瀬は言葉を濁した。

と、そこで鬼頭が、また語調を強めた。

「不当勾留をやめて、直ちに山久保さんを釈放しなさい！」

「……は、はい」

その語気の鋭さに、綾瀬は思わずうなずいていた。

しまった！ ……と思つた時には、すでに遅かつた。

けつきよく綾瀬は、自ら提案し実施した作戦を、自ら台無しにしてしまったわけだ。

綾瀬が、こういう交渉ごとが苦手な自分の性格に情けない思いをしていると、鬼頭は、のり出していた体をソファの背もたれにもたせかけ、今度は鷹揚おうような口調で言った。

「ま、一般論で言えば、痴漢というのは、お互い、やったやらないの世界ではあるわけです。男は加害者で

女は被害者だと、最初から決めつけてかかるのはよくないということですよ」

その、どこか勝ち誇ったような態度には、さすがの綾瀬も悔しい思いがした。

と、鬼頭はさらに、綾瀬をからかうように、こう言った。

「いや、私としても、さつき仮定で申し上げた、警察がおとり部隊を使って痴漢冤罪をでっち上げているな

どとは、本当のところ思っていない。それにしても、その被害者だという、女性……ですか？　それは、いったい誰だったんでしようねえ？」

そんな言葉に、綾瀬の悔しさはますます募った。できることなら一矢報いたい。

そう考え、思わず言っていた。

「いや、私たちは当然、そんなでっち上げなどということはいませんが、実際、痴漢冤罪を意図的、か

つ組織的につくり出しているグループがいるやに聞いておられます」

いかにもこの分野の専門家を気取る鬼頭を驚かせてやろうという出まかせだったのだが、それに対し、鬼頭は「えっ？」という顔をした。

「ほお、ご存知ありませんか。痴漢冤罪弁護の権威である鬼頭先生のお耳には、当然達しているものと思っ
ていたのですが……」

「いや、それは初耳です。差し支えなければ、詳しくお聞かせ願えませんか？」

鬼頭はまた――さつきとはちがう意味で――身を乗り出してきた。

綾瀬は、はじめて自分が優位な立場に立てた気がして、もったいぶってつぶけた。

「捜査上の秘密ですから、詳細には申し上げられませんが……」

そして、頭の中でさらに想像を膨らませた。この間、推理小説を読んでいたことが、思わぬところで役立つた。

「どうも、特定個人を陥れるために、依頼を受けて、女性に痴漢被害にあったと訴えさせている悪質なグループがいるらしいんですな。じつは、そのグループに使われていたという女性の一人から、当署に通報がありました。今、内偵を進めている最中なのです」

その言葉に、鬼頭は、さらにあ然とした顔をした。

：：：どうだ、驚いたか。

鬼頭の表情に、綾瀬は、多少気の晴れる思いがした。

それから数日後の宵の口だった。

地下鉄「大須観音」駅のほど近く、電柱の陰に身をひそめ、あるマンションをうかがっている男がいた。

：：：俺には、決着をつける権利があるはずだ。

男は、ついつい弱気になる自分を奮い立たせるように、もう一度、心の中でそう唱えた。

：：一年もつづいた裁判でなんとか無罪は勝ち取ったものの、その間に俺の人生はボロボロになってしまった。その原因のすべてが、あの女にあるのだ。

あの時たしかに同じ電車に乗り合わせてはいたが、彼は、あの女が大声で騒ぎ出すまで、その存在すら意識していなかった。あの女が彼の方を指さし、「痴漢

です。誰か捕まえて！」と叫んだ時、その顔を見て、場違いにも「へえ、こんな美人が近くにいたんだ」と、それまで気づかなかったことを悔やんだほどだ。

それなのに、あの女は警察でとんでもない供述をした。

最初は、あの女がなにか勘違いしているのにちがいないと彼は思った。おそらく、近くにいた他の男がしたことを、彼の仕業だと思っっているのだと。だから、

すぐにその誤解は解けるだろうと高をくくっていた。

ところが、気がつくのと、彼には身の潔白を主張する手だてがなにもなかったのだ。

そして裁判でも、あの女は、彼自身が口に出すのもはばかるようなことを、彼がしたのだと言い張った。

被害者の言っていることはなんでも正しくて、加害者とレツテルを貼られた人間の言うことははなから信用できない。検事はもちろん、裁判官もそう思ってい

るようだった。ことに、あの女がすらりとした美人だったことが――そして、彼自身は風采の上がらない男だったことが――、そんな心証に拍車をかけたようだ。

もし、弁護士や、同じ冤罪被害にあつた仲間たちの支援がなかったなら、今ごろ彼は、前科一犯ということになっていたにちがいない。

気の遠くなるほどの長い時間と、良心がズタズタになるほど露骨な言葉の応酬の末、法律上は無実の身に

なり、これでやつとすべてを忘れられると思った。

しかし、その時にはもう、なにかも遅かった。最初こそ彼のことを信じていると言っていたファイアンセも、とうの昔に連絡してこなくなっていたし、以前の友人たちも、彼には関わりたくないと思っっているようだった。技術より人間関係の方が優先する業界であるだけに、仕事の依頼もまったく来なくなっていた。

けつきよくは、フリーをあきらめて再就職し、今、

職場では「事件」のことは問わないという待遇を受けている。そういう意味では、最近になってやっと、本当にやり直せるスタートラインに立てたのだ。

ところが、そんな矢先、目の前に、また、あの女が現れた。

一週間前、仕事場で顔を合わせた時、彼も驚いたが、あの女も彼の存在に気づいたようで、一瞬、ぎくりとした顔をした。ところが、そのあと、彼の存在など無

視するように、目の前でとりすました顔をしつづけたのだ。いわば、それがあの女の仕事だとはいえ、そんな姿を見ていて、彼は納得できない気持ちでいっぱいになった。

彼が、裁判やその他もろもろのことで苦しんでいる間も、この女は、こうやって、笑ったり気取った顔をししたりして暮らしていたにちがいない。

そう思うと、どうしてもこのままではすませられな

いという気がした。

だから彼は、あの女の所在を突き止め、こうして家まで来たのだ。

女が住むマンションを目の前にして、彼は自分に降りかかった不条理な運命を確認し、うなずいた。

：：よし、行こう。

そして、電柱の陰から一步踏み出した時だった。マンション入口のガラスドアが開いた。

それにハツとし、彼がふたたび身を隠すと、中から縛った古新聞をぶら下げた女が出てきた。

：：ん？ あの子か？

一瞬そう思ったが、ダイエットに失敗しつづけているといったそのシルエットに、そうでないのはすぐにわかった。

と、女は、入口脇のゴミ置き場らしい場所に古新聞を置き、すぐにまた入口まで戻った。

ところがそこで、また入口が開き、中から人が出てきた。今度も若い女だったが、やはりあの女ではないようだ。

同じように縛った段ボールを持った女は、中に入ろうとしていた女と顔を合わせると、そこでなにか立ち話をはじめてしまった。

完全に出鼻をくじかれた格好で彼が見ていると、今度は自分のすぐ脇を人が通る気配を感じた。ぎくりと

してさらに電柱の陰に身を潜めると、赤と白のユニフォームに赤いキャップをかぶった、背の低い少女が、こちらをちらりと見ながら通り過ぎて行った。平べったい箱を水平にして抱えているところを見ると、どうやら宅配ピザの配達らしい。

そんなあまりにも日常的な光景を目の前にして、彼の憤怒は、その出口を失った。

：：まったく、なんで私が、こんなことまでしなきゃいけないのよ。

段ボールを通して熱さが伝わるシングルサイズのピザを胸の前に掲げ持ち、その女の子は口の中でブツブツ言った。

自動二輪の免許も持っていない彼女は、オーダーの受付だけという約束でこのバイトを始めたのだ。だから、デリバリーは本来の仕事ではない。それなのに、

たまたま注文が重なり、デリバイクが出払ってしまつたような時は、彼女にもそのお鉢がまわってくる。今日も、店からいちばん近いこのオーダーを、彼女が歩いて届けることになったのだ。

目的のマンションの前まで来たところで、女の子は、コンピューターでプリントアウトされたオーダー伝票とマンションの名前を、もう一度確かめた。

ひとつつうなずき、ついでに手首にした時計も確認す

る。

「7時20分……と」

先刻、注文を受けてから、ぴったり30分。彼女自身が電話で伝えた「お届け時間」どおりだ。

彼女は、また大きくなざくと、マンション入口のガラスドアの前に立った。

ところが、自動ドアだと思ったそこは開かなかつた。

……ん？

それで女の子は、きよろきよろとまわりを見回した。と、すぐ前の道で立ち話していた太った女性が、それに気づいたらしく声をかけてくれた。

「それ、オートロックだから。そっちのインターホンで部屋のナンバーを押して」

「あっ、ありがとうございます」

女の子は礼を言い、その助言どおり、ガラスドア脇の壁に埋め込まれたインターホンの前に移動した。

そこで、もう一度、伝票を確かめる。そこには、「702」という部屋番号がプリントされていた。それを口の中で小さくつぶやきながら、まちがわないようにインターホンの数字キーを押し、最後に「呼」と書かれたキーに触れた。

と、すぐに「はい」という声が返ってきた。

それで、女の子は、そこにある送話口らしい場所に口を近づけた。

「いつもありがとうございます。ドレミピザです。ご注文の品をお届けに上がりました」

接客マニュアルにあったとおりの言葉で言うと、先方もていねいな返事を返してよこした。

「あ、はい。ありがとうございます。どうぞお入りください」

さっきの電話と同じ声だなと思っていたら、軽いモーター音とともにガラスドアが開いた。

女の子は、ちよつとふり返り、インターホンのことを教えてくれた女性に会釈してから、マンションの中に入った。

入ってすぐ左脇に階段はあったが、その向こうにエレベーターが見えたので、女の子はそこまで行き、ボタンを押した。

エレベーターのゲージは一階に下りていたらしく、ドアはすぐに開いた。

乗り込んで「7」というボタンを押すと、ドアが閉まり、上昇する感覚が伝わった。

エレベーターは、途中、どの階にも停まらず、ランプの表示が七階までいったところでドアが開いた。

七階の廊下に出た女の子は、部屋のドアの脇につけられた番号表示を確かめながら進んだ。部屋は手前から番号順に並んでいるらしく、二番目のドアが「702」号室だった。

女の子は、そこにつけられたドアチャイムのボタンを押した。

ちよつとの間待ったが、中からはなんの返事もないし、気配も伝わってこない。

女の子は首を傾げ、もう一度、そのボタンを押した。ドア越しに、ピンポーンという音がかすかに聞こえる。なのに、やはり反応はなかった。

さらに、もう二度ほどボタンを押してみたが、やは

り同じだ。

インターホンにはすぐ返事してくれたのに……

さらに首を傾げ、女の子はドアのノブに手をかけた。

そこをまわし、引っ張ってみる。

意外にも、ドアはなんの抵抗もなく開いた。

女の子は中をのぞき込むようにしながら、一歩踏み込んだ。

そして、そこで、その動きが固まった。

女の子の足もとにピザの箱がバサリと音を立てて落ち、そこから、「トマトとサラミのバジリコ風味」ピザがはみ出した。

それを合図にするように、女の子は叫んでいた。

「キヤーツ！」

目の前には、若い女性の体が崩れるように横たわっていた。

その体つきやファッションから想像するに、おそらく

くは美人なのにちがいない。でも、それがわからないのは、ぱっくりと口を開けた額の傷から大量の血が流れ出し、その顔を、足もとに落ちたピザそっくりにしていたからだった。

それを見つめたまま、女の子はわなわなと体を震わせ、下駄箱の上のブロンドの置物にすがりついていた。

file-202

秒殺の構図

または
新人モデルはキュート&セクシー

「おはよう、クイーン諸君、元気にやっとなるかね？」
メッシュフェイスのスピーカーから聞こえていたの

——でも、いつより無理に明るさをつくろった感じの——呼びかけに、リエもサツキもミミも、ぷいとそっぽを向いた。そんな三人の顔を見渡し、おろおろした権藤が、やはり取りつくろうような口調で答えた。

「……は、はい。今日も全員……なんとか……」

「う、うむ……」

綾瀬にも、その気まずい雰囲気が伝わったらしい。

それ以上言葉を継げず押し黙った。

そんな沈黙が一分近くもつづいたところで、綾瀬とはべつの男の声が、小さく聞こえた。

「綾瀬署長、なにをしておられるんですか？」

「あっ、いや……」

その言葉に綾瀬はなぜか焦ったようだ。口の中でもごもご言う感じで切り出した。

「そ、その、君たちに、またちよつと……頼みたいことが……、それで、署まで来てもらえないかと……」

と、サツキが嫌味っぽい口調で言った。

「苦勞して犯人捕まえても、どうせまた、すぐに無罪放免になっちゃうんでしようけどね」

「だ、だからそれは……、面倒な人物が出てきて……」
すると今度は、ミミが泣き真似した。

「うえくん。あんなことまでやらされて、あんなに恥ずかしい思いまでしたのに、けっきょく、女って泣き寝入りするしかないのね。あたし、もう、警察なんて

信用しないもん」

「き、君は女じゃあ……、それに、君だって警察……、いや、だから、君が告訴するわけにはいかなかったわけだし……」

綾瀬が、例の痴漢犯、山久保鉄馬の拘置を解いてしまったことで、ここ数日、クイーンズとの間で「冷たい戦争」がつづいていた。まあ、といっても、今回のことでは珍しく綾瀬が自分の失態を自覚しているらし

いので——ふだん、その無自覚ぶりに翻弄されている
クイーンズとしては——、ここぞとばかりいたぶって
いるということなのだが。

「い、いずれにしても、任意での取り調べは、まだつ
づいているのだし……」

「へえ、任意でいいんだったら、最初からそうすれば
いいのに。私たちのやったことって、無意味だったん
だあ」

「い、いや、やはり任意ではなかなか追及しにくいらしくて……。例の弁護士もうるさいし……」

リエの言葉にさらに矛盾した言い訳をする綾瀬をさえぎるように、また先刻の男の声がした。

「……綾瀬署長、早く話を進めてくださいませんか」
先刻より声が大きくなったところをみると、業を煮やして綾瀬のデスクに近づいてきたらしい。

「……ん？ その声は……志水課長？」

リエが気づいて言うのと、ミミが「えっ？　志水のおじさまなの？」とつぶけた。

愛知県警刑事部捜査一課長の志水だった。

「やあ、君たち、相変わらずのようだね」

どうやら志水は、綾瀬を介さず、直接話そうと思っ
たようだ。

「君たちの事務所も大須だそうだから、この殺人現場

とも近いんだろう」

広小路署の署長室までやって来た権藤、リエ、サツキ、ミミを前に、志水はまずそう切り出した。

「ええ、『大須観音』駅のそばだとすると、五分はかからないと思います」

「三日前の夜、パトカーの音が聞こえてたから、なんだろうとは思ってたんです。翌朝のニュースを見て、あ、これだったのかって」

「うむ。あの夜のうちに、こちらの署に特捜本部を設置した」

「殺された女は、モデルなんだそうですね」

「ああ、モデル事務所に所属するプロのモデルだ。仕事は、広告写真などが主だったようだが、ローカルのテレビコマーシャルなどにも出ている、それなりの売れっ子だそうだ。名前は楡島麗子にれしま、二十五歳」

「死体が発見されたのは、その女の部屋だったんです

か？」

「ああ、そうだ。自室の玄関で撲殺されていた」

「撲殺？　なにかで殴られたわけですね」

「うむ、凶器もほぼわかっている。玄関の下駄箱の上にあつたブロンズの置物らしい。その角で前頭部を強く打されて、頭蓋骨陥没。おそらくは即死だ」

と、そこで、いっしよに聞いていた綾瀬が口をはさんだ。

「前頭部というところからですな。被害者は逃げようとはしなかった。ということは、犯人は顔なじみだということになる」

それに対し、リエは首を傾げた。

「玄関という場所を考えると、そうとも言えないんじゃないでしょうか。訪ねてきた客が、いきなり殴ったということだっけ考えられるわけですよ」

志水は、それにうなずいた。

「ドアの鍵がかかっていた点や、室内が荒らされた様子がなかった点から見ても、経緯としてはおそらくそういうことだろう。誰かが訪ねてきたのでガイシヤは解錠してドアを開けた。入ってきた人物は、逃げる隙も与えず、下駄箱の上の置物をとって殴りつけた。それだけで、顔なじみかどうかは限定できん」

「ふむ、この前読んだ小説では、それが犯人を特定する決め手になっていたんだが……」

綾瀬が口の中でブツブツ言ったのかまわず、権藤がきいた。

「ニュースでは、発見は夜の7時半頃って言ってたと
思いますが、犯行はいつ頃なんですか？」

「通報で駆けつけた鑑識課の検死によると、死後1時間半はたっていないということだった。その見立てがされたのが午後8時、つまり20時だから、死亡推定時刻は、18時30分から発見された19時20分を少し過ぎた

くらいまでということになる」

「1時間弱かあ。けっこう短いんだ」

「いや、実際の犯行時間は、さらに限定される。おそらく19時20分から21分の間。もつと言え、20分30秒から21分までの30秒間だ」

「えっ、どういうことですか？」

志水 of 言葉に、全員が、同じ問いを発していた。

「その時間に、宅配ピザのアルバイトの女子高校生が、

ガイシヤの注文したピザを配達している。その少女がマンシヨンの前に到着したのが、19時20分。ところが、このマンシヨンはオートロックシステムになっているんだ」

「オートロック？」

「ホテルの部屋のオートロックなどとはべつの、マンシヨンの入口などによくある……」

「ああ、入口のインターホンで部屋番号を呼び出して、

中の人に開けてもらおう……」

「そうだ。その少女はガイシヤの部屋を呼んで、入口のドアを開けてもらっている。しかも、その時、ガイシヤはインターホンで応答してるんだ。これは、表で立ち話していた住人二人も聞いているから、まちがいない」

「つまり、その時点では、被害者は生きていた？」

「そういうことだ。ところが、このピザ配達少女が、

死体の第一発見者にもなる」

「えっ、ということとは……」

ミミの言葉をサツキがつづけた。

「その女の子が、マンションに入って、部屋に着くまでの間に殺人があつたってことね」

「そうだ。つまり、エレベーターで七階に上るまでの間ということだ。少女がマンションに着いた時刻が正確に19時20分だとすると、犯行時間は、さつき言った

30秒間くらいということになるんだ」

「あの……」

そこで、リエが言葉を挟んだ。

「そのインターホンで答えたという声は、本当に被害者のものだったんですか？」

「いや、そこのところはいまひとつ明確ではない。入口で聞いた二人の住人も、ガイシャとさほど親しいわけではなかったようだ。以前何度か交わしたあいさつ

の声と似ていたというだけで、インターホンを通した声が、本当に本人だったかどうかは自信がないと言っている」

「だとすると、先に殺しておいて、犯人がその部屋から応答したとも考えられますよね」

「うむ、その可能性はある。ただ、そうだとすると、インターホンで応答した以上、19時20分の時点で、犯人は部屋にいたということになる」

「あつ、つまり、その30秒間で現場から立ち去ったことはまちがいない」

「そうなんだ。エレベーターは、その少女が使っていたわけだから、おそらく階段で逃げたのだろう。しかし、たとえ凶行の時間が前にずれたとしても、犯人のアリバイということを考えるなら、その19時20分を基点にすればいいわけだ」

その「アリバイ」という言葉に、なぜか綾瀬が身を

乗り出した。

と、そこで権藤がきいた。

「その時、そのマンションには、何人くらいの人がい
たんですか？」

確かに、犯行や逃走の時間が短いということを考え
れば、まず同じマンションの住人を疑うべきだろう。

「あのマンションは、一階から三階までが八室、四階
から八階までは部屋の広さが倍になるぶん四室で、計

四十四室ある。実際には空き部屋もあつて、現在住人が入っているのは三十八戸。ただ、単身者や単身赴任者向けのマンションだから、日中は留守が多いし、帰りも遅いんだ。しかもあの日は、月末の土曜日で、遊びに行っているものや、実家や家族の元に帰っているものも多かった。ガイシヤのいた七階も、他の三室は留守で鍵がかかっていた。その時点でマンション全体を合わせても十人たらずの人間しかいなかったよう

だ。うち一人はガイシヤ。それ以外に、さつき話に出た表で立ち話していた人間が二人。それに、その二人がマンション内に戻ったところでもう一人、一階の住人が部屋から出てくるのを目撃している。だから、この三人は除外される」

「全体で十人くらいしかいなかったのに、一階に人が集中している感じですね」

「ああ。じつは、翌日の日曜の朝に地域の子供会が廃

品回収をすることになっていたらしいんだ。それで、三人とも、たまたま古新聞や段ボールを出しに出たということだ。いずれにしても、マンシヨン住人で容疑者となりうるのは、ガイシャとその三人を除く残り六・七人ということになる。これらの人物については、今、捜査本部の人間が、その時のアリバイや動機について調べている」

志水がそこまで説明したところで、リエが「でも：

：」と言った。

「：：ん？」

「それ以外にもう一人、確実に犯行におよべる人間がいますよね」

「えっ、誰？」

ミミが聞き返すと、リエは「殺人事件は、まず第一発見者を疑えっというでしょ」と答えた。

「：：あつ、そのデリバリーの女の子？」

「……そうか」

「単純だけど、その子がやったって考えれば、いちばん筋は通るんじゃない」

リエの言葉に、志水がうなずいてつづけた。

「うむ。その上、凶器だと考えられるブロンズの置物からは、その少女の指紋が検出された」

「えっ、じゃあ……」

「状況から考えて最も疑わしいのはその少女だ。だか

ら彼女を、重要参考人として勾留し聴取している。しかし、本人は、自分はただピザを届けに行っただけだと言いつ張っている。ま、実際、彼女とガイシヤの間には、これまでになんの接点もなかったようだ。このマンションに来たのも初めてだったようだし」

「きつと、『遅いじゃない』とかおこられてカツとなつた：：なんて話じゃないの。最近のガキは、女の子でもすぐキレるっていうし」

サツキが言うと、志水は「うむ」とひとつうなずいたあと、つぶけた。

「じつは他にも頼みたいことはあるんだが、今日、君たちに来てもらったのは、まずはその少女に関することなんだ。彼女の供述の中に、何度も君の名前が出てきたんでな」

志水はそう言いながら、サツキの方を指さした。

「……へ？」

「厳しく問いつめると、言うんだそうだ。『私がウツツキじゃないことは、ブロードウェイ・クイーンズって探偵社のサツキ姉様にきいてもらえばわかる』ってな」

当のサツキをはじめ、全員がポカンと口を開ける中、リエが気づいて言った。

「あたしたちのこと、探偵だって誤解してる子っていうと……愛ちゃんね」

「そう。その少女は平林愛という名だ」

それは、前の事件でひよんなことから知り合い、サツキにあこがれて「追っかけ」になってしまった女の子だった。

「どうやら彼女は、君のことをずいぶん慕っているようだ。それで、君が直接会って話を聞いてもらえないかと思ってな」

「あつ、サツキ姉様〜」

サツキが取調室に入っていくと、愛は、いつものように甘えた感じの声をあげた。ただ今日は、それに泣き声が混じった。

「なんか、大変なことに巻き込まれちゃったみたいね」
そう言いながらサツキが前の椅子に掛けると、愛はクスンとすすり上げるようにしてうなずいた。

「……う、うん。あの夜から、家にも帰してくれない

し、おんなじこと何度もきかれるし……」

「家の人には、あたしからも、心配ないって電話しといたから」

「……うん」

とりあえず愛を安心させてから、サツキは言った。

「また同じこと言わせて悪いけど、はじめっから、もう一度話してくれる？」

サツキの言葉に愛は素直にうなずき、話し始めた。

その内容は——約束とちがう仕事をやらされたというピザ店への不平はずいぶん混じったものの——、先刻の志水の説明と変わるところはなかった。

聞き終わったところで、サツキは言った。

「大事なことだから、いくつか確認させてね。まず、そのピザの注文を受けたのも愛ちゃんなのね」

「うん、それが私のほんとの仕事だから」

「その時、注文してきた人の声を聞いているよね。その

声と、インターホンの声は同じだった？」

「たぶんまちがいないと思う。ていねいな話し方をするのと同じだったし。中には、注文してやるんだからって、頭に来るようなしゃべり方する人もいるんだよ。でも、あの人は、きれいな声の優しいしゃべり方だった」

「じゃあね、あのマンションに着いたのは、正確に7時20分だった？」

「それは確実。うちの店、『時間どおりに届ける』ってことに厳しいから。電話で言った時間に遅れるのはもちろんダメだし、早すぎるのもいけないって。『正に約束を守る』っていうのがウリになってるんだって店長はいつも言ってる。だったら、私との約束も守ってほしいよね。だいたい、なんで私がデリバリーまで……」

愛の話がまた店に対する不満に移りそうだったの

で、サツキはあわてて軌道修正した。

「だから、マンシヨンの前でちゃんと時計を確かめたわけね」

「うん。腕時計も、店を出る直前に秒まで合わせたんだから」

「インターホンで押した部屋のナンバーも確實ね？」

「まちがってないと思う。伝票の住所を見て一文字ずつ確かめながら押したし」

「夜だったから、マンションの入口が暗くて、数字のキーがよく見えなかったとかはない？」

「入口は明るかったし、それに、インターホンの上にも、わざわざそこに当たるようにライトがついてたと思う。それだけ目立つようにしてあるのに、私、最初、ふつうの自動ドアだと思って黙って前に立ってて：
：。あそこにいた女の人が教えてくれた時、ちよつと恥ずかしかった」

「マンションに入ったあとは、誰かと会った？」

「ううん。一階には誰もいなかったし、七階でエレベーターを降りたあとも、廊下には誰もいなかった」

「階段を下りてく足音とかはしなかった？」

「それも、聞かなかったと思うけど」

「じゃあ、もうひとつだけね。じつは、女の人が倒れてた玄関の置物に、愛ちゃんの指紋があったらしいのね」

「……あつ、その置物のこと、何度もきかれたのは、
そういうことかあ」

愛はそう言ったあと、なにかに気づいたらしく、ぎ
よつとした顔をした。

「……もしかして、あの人、それで殺されたの？」

そう言ったことで、その夜の光景をまざまざと思い
出したにちがいない。驚いた表情が、次第におびえに
変わっていった。

「愛ちゃんは、その置物を持ったの？」

「……よく……わかんない。置物があつたことも……覚えてないもん」

そのおびえのせいもあるのだろう。これまで明快に答えていた愛が、かすかに首を振りながら力無く言つた。

「私……、死体なんて見たの初めてだったし……、なんか、わけわかんなくなつて……。立ってられないよ

うな感じだったから……、どっかに寄りかかった時に、
触ったかもしれない」

「……」

サツキがゆっくりとうなずくと、愛はすぎるような
目を向けてきた。

「……私、人殺しだと思われてるの？」

その言葉に、サツキは少し迷ったが、愛の目を見返
して言った。

「愛ちゃんにウソついてもしょうがないから正直に言うけど、疑われてることはたしかよ。でも、あたしは愛ちゃんを信じてるわ。愛ちゃんが早く家に帰れるように頑張るからね。もちろん、リエやミミもそう言うと思うわ」

イヤリング型トランシーバーを通して今の会話を聞いていた署長室のリエとミミは、大きくうなずいた。

そして、名前を出してもらえなかった権藤は口をとがらせた。

そのあと、しばらく待っていると、サツキが、志水とともに戻ってきた。

愛への聴取の間、デスクで文庫本かなにかを熱心に読んでいた綾瀬は、志水の顔を見ると、またうれしそうに近づいてきた。いかにも、事件の話にひとことかみたいという顔だ。

「どうやら、君たちの心象としても、彼女は犯人じゃないということだな」

ソファに座りながらリエとミミを見て、志水はそう言った。

リエたちがまた大きくうなずくと、志水もかすかにうなずき返した。どうやら志水も、愛についてはそういう印象を持っているようだ。

「しかし、唯一の物証である凶器についた指紋が彼女

のものである以上、彼女が第一の被疑者であることに変わりはない。今、マンションの住人たちを調べていた刑事から報告が入ったんだが、やはり、問題の住人たちの中に有力な被疑者はいないようだしな」

「ふむ、全員に難攻不落なアリバイがあったということですか」

綾瀬が目を輝かせて身を乗り出した。

「いや、そういうことはありません。さつき言って

いた、犯行があつたと思われる時刻にマンションにいて、しかも姿を見られていない住人たち、正確には六人だそうですが、彼らはすべて部屋に一人でいたと言っている。そういう意味ではアリバイは成立しません」

「なんだ……」

綾瀬は残念そうに言った。

「しかし、彼らには、ガイシャとのつながりがまるでない。同じマンションに住んでいながら、ガイシャの

名前すら知らなかったというんです。都会の单身者向けのマンションにはありがちなことですが、住人同士がほとんど没交渉だったらしい。住民組合のようなものはもちろん、近所づきあいさえない。例のマンション前で話していた二人の女性は、顔を合わせれば言葉を交わすという仲だったらしいけれど、むしろ、彼女たちの方が例外的であるようです。しかし、だからといって、このマンションに、騒音とかの、いわゆる住

民トラブルがあつたわけでもありません。ですから、住人たちに殺人の動機がまるで見えてこないんです」

「ふむ……」

綾瀬は、さらにがっかりしたように相づちを打ったが、そこで、志水はリエたちの方に向き直り、「ただ」と言葉を継いだ。

「ガイシヤと同じモデルクラブに所属するスタイリストだという人物が住人の中にいた。というより、ガイ

シヤの楡島麗子にこのマンションを紹介して、入居を薦めたのはその女だったらしい」

「……スタイリスト？」

「ああ、そえざわまり添沢茉莉、三十六歳」

「その女も、その時、マンションにいたということですか？」

「うむ、そうなんだ。しかし、彼女には逆に、アリバイがある」

「アリバイ？」

その言葉に、また、綾瀬が身を乗り出した。

「彼女が、さつき話した、例の二人に目撃されたもう一人なんだ。一階の部屋から古新聞を持って出てきたという」

「犯行があつたという時刻に、一階にいたわけね」

リエが確認するように言ったあと、「でも……」とつけ加えた。

「その立ち話してた二人は、愛ちゃんがマンションに入ったあとも、まだ外にいたわけですよ。部屋から出てくるところを見たというと、そのあと、彼女たちがマンションに入ってからだろうから、その間にある程度の時間はあるんじゃないでしょうか？」

「つまり、どういうこと？」

リエの言ったことの意味がわからなかったらしく、サツキが聞いた。

「その添沢茉莉という女は、七階で被害者を殺した。もしかしたらそれから、被害者の代わりにインターホンに出たのかもしれないけれど、いずれにしてもその後、愛ちゃんがエレベーターで上がるのと入れ替わりに階段を駆け下りて自分の部屋に戻った。それからすぐに、古新聞を持って部屋を出た。そこに二人が入ってきて姿を見た……ってこと」

リエがそう説明すると、志水は「いや、それはたぶ

ん無理だと思う」と言った。

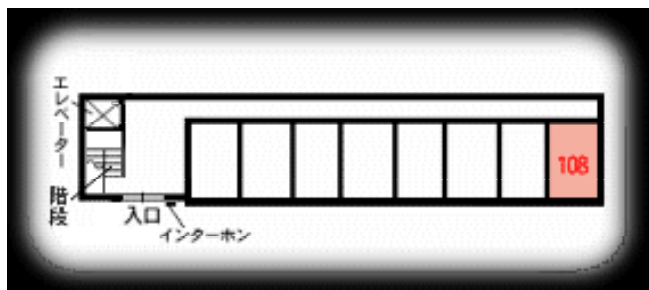
「立ち話の二人は、平林愛がピザを持ってマンションに入ってから、さほど間をおかずに中に入ったようだ。ちなみに、住人の場合は自分のキーで入口を開けるんだがね。で、エレベーターの前まで来た時、添沢茉莉の部屋のドアが開いて、古新聞を持った茉莉が出てきた。さらに、茉莉が廊下を近づいてくる途中で、死体を発見した愛の悲鳴が一階にも聞こえたらしい。それ

で、思わず三人で顔を見合わせたと言っている。つまり、インターホンの応答があつてから茉莉が自室を出てくるまでの時間も、やはり一分に満たなかつたはずだ。それだけの時間で、今リエ君が言ったように、七階から一階まで階段を下りて、自分の部屋に駆け込むというのは、かなり困難だ」

話しながら、志水は、内ポケットから手帳を出し、そこになにかの略図を書いていた。リエたちがのぞき

込むと、それは、マンション一階の見取り図らしかった。

「その上、階段は入口のすぐそばにある。入口はガラスドアだから、二人には、マンションに入る前から階段とエレベーターホールが目に入っていたはずだ。その間に茉莉が駆け下りて走り抜けたとしたら、まちがいなく姿を見



られていると思う。しかも、茉莉の部屋、108号室はここ。一階のいちばん奥だ。条件はさらに厳しくなる」

その図を見て、リエもうなずかざるを得なかった。

と、そこで、綾瀬が言った。

「その茉莉という女が、エレベーターでも階段でもない方法で自分の部屋に戻ったとすれば、そんなアリバイは簡単に崩れますな」

その言葉に、全員が――半信半疑ながら――綾瀬の顔を見た。

「たとえば、マンションの外壁にロープを垂らしておいて、そこにつかまっつて自分の部屋のベランダまで滑り降りたとすれば……」

綾瀬が話し終わらないうちに、全員はふたたび目をそらし、志水は話を先に進めた。

「いずれにしても、平林愛を除いて、現時点でいちば

ん疑わしいのは、この添沢茉莉だ。そこで君たちに頼みたいのは――」

そして、綾瀬がまだ得々と自分のアリバイ崩しの推理を展開しているうちに、クイーンズたちは、志水の依頼を、どこかうれしそうな顔で引き受けていた。

「えーっ？　二人だけなの？」

権藤の言葉に、ミミが不満の声をあげた。

「ああ。このところ、君たちが『備品』だとか言ってるんだ。モデルクラブの登録料五万円を三人分出す金はないよ」

「なんでよく、ケチ。せつかく三人でモデルやれると
思っただのに」

「それにしても、モデルになるのに登録料払わなきゃいけないとは思わなかったわね。いちおう、面接とか

もするわけでしょ」

「うん。でも、しっかりお金を稼ぐ人気モデル以外は、みんな登録制みたいよ。お金を払って登録して、仕事が発生すればギャラがもらえるけど、仕事がないと払い損なんだって」

「高い金出すんだから、ギャラはともかく、内債の成果、しっかり上げてくれよ」

今回の志水の要請は、被害者楡島麗子と、問題の女、

添沢茉莉が所属しているモデルクラブへの内偵だった。表向きは「愛ちゃんを救うため」、そして内心は「モデルになれるんだ」と勇んでクイーンズオフィスに戻った三人に、権藤は「三人で行く必要はないだろう」と言い出したわけだ。

「……で、けつきよく、誰と誰が行くんだ？」

「そりゃ、モデルとなれば、あたしよね」

サツキがすかさず言った。

「やっぱり、若くてかわいい方がいいんじゃない？」
ミミも言った。

「男ってばれたら大変なわけだし、ここは、女装経験
がいちばん長いあたしの出番よね」

リエも負けずに言った。

そして、三人の論争がはじまった。

権藤はそれをしばらく聞いていたが、このままいけば、三人とも事件のことも忘れ、終わりなき激論をつ

づけそうだったので、こう結論づけた。

「ジャンケン、したら」

「うん、二人とも採用」

大須から歩いて也十分ほどの上前津にある「ニュー
センチユリー・モデルクラブ」。その事務所の片隅に
つくられた会議スペースで、面接担当者がいとも簡単
にそう言ったので、サツキもミミも、さすがに面食ら

つてその顔を見た。

「じゃ、この登録用紙にプロフィールを書いて」

これは、二人の容姿のおかげか、それとも登録料五万円のおかげだろうか？

そう首を傾げながら、差し出されたペンを持ち、プロフィールを埋めていると、その担当者が「二人とも、今日、これから時間はある？」ときいてきた。

「え、ええ」

「じゃあ、さっそく、カタログ用の撮影、行ってもらおうか」

「カタログ……？」

「うん、モデルカタログ。広告代理店やカメラスタジオ、オ、デザイン事務所なんかに配布するんだ。彼らやクライアントがモデルを選ぶのに使う。大きな仕事だと、そこから何人か選んで、さらにオーディションをやることも多いけどね。撮影の仕事は、だいたいそうやっ

て始まるんだ」

サツキとミミが納得してうなずいていると、事務所のドアが開き、「おはよう」という声が聞こえた。もう昼過ぎだというのに、これが「業界人のあいさつ」というやつだろう。

「茉莉、遅いじゃないか」

「うん、ごめん。麗子の件で、また刑事に事情聴取されてて」

入ってきた女性と事務所の人間の会話を耳にし、サツキとミミは、あわててそちらを見た。

その女性は、背の高いすらりとした体躯にハイネツクのセーターとパンツ姿で、手には大きなシヨルダーバッグとトレンチ風の春コートを抱えていた。シヨートボブに斜にかぶった大きめのハンチングも粋だ。

さすがに二十代前半には見えなかったが、志水が言っていた添沢茉莉の年齢、三十六歳というのには若す

ぎる気がした。

「こつちにもさつきまでまた刑事が来てて、麗子に関する資料をこつそり持ってた。しかし、うちとしても大打撃だ。稼ぎ頭がいなくなった上に、殺されたとなるとイメージダウンもはなはだしいしな」

事務所の人間がそう言ったのに対し、茉莉と呼ばれた女性は、沈痛な面持ちで抗議した。

「そういう言い方ってないんじゃない。仲間が亡くな

「たつたつていうのに」

「……あ、ああ」

茉莉の言葉に、言われた男は気まずい顔をした。

と、茉莉は、さらに男を問いつめるように言葉を重ねた。

「そんな姿勢だから、うちの事務所は、モデルを消耗品としか見てないなんて言われるんじゃない」

それに対して、男は、いちおう「うん」とうなずい

たが、やりこめられたことが悔しかったらしく、こんなふうに言った。

「いや、しかし、茉莉にしても、どっかでせいせいしたってところ、あるんじゃないのか？　この頃、現場で、麗子につらくあたってたって噂、聞いてるぜ」

「へ、変なこと言わないでよ。こんな時に」

男の言葉に、茉莉は明らかに動揺したように見えた。

「前は、後輩としてかわいがってて、同じマンション

に住ませたりしたのに、この頃、お互い、口もきかないって。あれはたぶん男がらみだ：：なんてな」

「そ、それは、いくらなんでも不謹慎でしょう。いい加減にしてよ」

茉莉が感情的な声をあげた。

と、上司らしい人間があわてて割って入った。

「よさないか。応募に来てる子もいるんだ」

そう言ってこちらをちらりと見たので、サツキとミ

ミは、あわててプロフィールを書きつづけるふりをした。

「ま、こんな事件があつて動揺するのはわからなくはないが、仕事はちゃんと進めてくれよ。茉莉は、これから打合せなんだから」

「え、ええ。山田先生のところで」

と、それを耳にした面接担当の男が、茉莉に声をかけた。

「茉莉さん、シヤチ・フオト？」

「ええ」

「ちようどいい。彼女たち、案内してくれないかな？
カタログ撮影なんだ。ついでに服も見つくるってあ
げてよ。山田さんには、僕から連絡しとくから」

「もう、ふくれるなよ。しょうがないだろ。ジャンケ
ンで負けたんだから」

先刻からソファで腕組みしながら浮かぬ顔をして
いるリエを気にして、権藤はそう声をかけた。

「そんなんじゃないわよ」

リエはそう答えたが、その言い方がなんだかつつけ
んどんだ。やはり、へそを曲げているにちがいない。

まったく、女ってむずかしいな。

権藤は、いったんそう考えてから、自分のその認識
がまちがっていることに気づいた。リエは、本当は佐

雲俊。女ではないのだ。

リエたちクイーンズのメンバーといることにこの頃ではすっかり慣れて、あまり困惑することもなくなつた。しかし、サツキやミミがいつしよならいいが、リエと二人きりになると、とたんに、どこかぎくしゃくしてしまふ。思ったことが気軽に言えなくなつてしまふのだ。

特にこんなふうにはリエの機嫌が悪そうだと、どう声

をかけていいのかわからない。そのくせ、妙にそれが気になるのである。

おそろくりエは、自分がモデルクラブに行けなかったことで落ち込んでいるのだらう。サツキやミミに嫉妬しているにちがいない。そんな気持ちを晴らしてやるにはどうしたらいいのだらう？

「サツキやミミより、君の方がずっとすてきだよ」
とでも言えばいいのだらうか？

それは、じつは権藤の正直な気持ちだったが、体育会系人間の権藤は、女性に対して真顔でそんなことを言うのは、やはり照れる。

：：ん？

いや、ちがう。リエは女性ではないのだ。

リエの方をちらちら見ながら、権藤が混乱する自分の頭を必死に整理しようとしていると、リエがソファを立った。

「あたし、ちよつと、近所を散歩してくる」

ぼそりとそう言って、出て行ってしまった。

まったく、女ってむずかしいな。

権藤は、けつきよくそう思い、自分も出掛けようかと考えた。

さつきの連絡では、サツキとミミも何時になるかわからないようだ。今夜のパトロールはたぶんできないだろう。それなら、例の事件について、元同僚の刑事

と会って、情報収集でもしてこよう。

地下鉄東山線の電車が地上に出て、高架を走り始めたところで、サツキは、先刻から自分なりに推測していたことを、直接、茉莉にたしかめてみた。

「あの、茉莉さんはスタイリストってことですけど、元はモデルをやってらっしゃったんじゃないですか？」

と、茉莉は、すぐにうなずいた。

「ええ、そうよ。でも、どうしてわかったの？」

「だって、やっぱりふつうの人とちがって、きれいだから」

「ふふ、ありがとう。でも、あなたたちの若さには負けるわ」

「いえ、茉莉さんだって、ずいぶん若く見えます」

「見えるってことは、じつはおばさんってことよね」

「そんな……。今でもじゆうぶん、モデルの仕事がで
きそうだって意味です」

「ふふ。モデルって、そんな甘いもんじゃないのよ。

商売になるのは二十代のうちだけ。三十越したら、と
たんに仕事が減るんだから」

「そうなんですか」

「うん。あなたたち二人とも、きれいで個性的だから、
稼げるとは思うけど、仕事のあるうちに次の身の振り

方をしつかり考えといた方がいいわよ。いい結婚相手
見つけるとか、それとも、もしこの世界で食べていこ
うと思うなら、私みたいに、他のノウハウ身につける
とかね」

やはり、サツキが考えていたとおり、茉莉は、モデ
ルをやりながらスタイリストの勉強をして、今の仕事
に変わったにちがいない。

「さあ、次の駅よ」

「本郷」を出たところで、茉莉はそう言った。

サツキとミミがこれから向かう「シヤチ・フォト・スタジオ」は、藤が丘にあるのだという。

大須の町を歩きながら、リエは、事件のことを考えていた。

本当に、志水が言っていたように30秒という限定された時間の中で殺人が行われたのだろうか？

リエがずっと気になっているのは、そこだった。

19時20分にインターホンの応答があった以上、その時点で、楡島麗子は生きていた、あるいは、すでに殺されていたとしても、犯人は麗子の部屋702号室にいたということになる。

でも、そう考えると、かなり無理が生じる気がした。

志水は、茉莉がその時間で一階に戻るのには困難だと言ったが、じつはそれは、茉莉にかぎった話ではない

だろう。

犯人が愛でなく——それはリエも確信していたが——マンシヨンの住人でもないとする、外部から入ってきたということだ。だとすれば、殺人現場から逃げ出して一階の出口から出て行くのは、茉莉の場合と同じ困難があるはずだ。

インターホンでのやりとりのあと、エレベーターは愛が使っていたのだから、逃走経路はやはり階段だろう。

う。階段をそのまま一階まで降りて逃げれば、そこにいた二人と鉢合わせすることになる。

いったん途中の階や踊り場に身を潜めて、一階に人がいなくなったのを見計らって逃げることはできるかもしれない。階段は入口のそばだから、それは可能だろう。でも、一階の廊下でも聞こえたという愛の悲鳴が他の部屋に聞こえた可能性は大きい。住人の何人かは部屋を出てきたにちがいない。現に——警察に通報

したのは愛ではないのだろうから、彼女以外に——現場の七階まで行った人間がいるわけだ。

そんなふうに騒ぎが広がる中で、果たして、人目に触れずにマンションを抜け出すことができたのだろうか？

そう考えると、そもそもその前提となっているインタビューホンに応答したのが702号室だったという事実認識がまちがっている気がするのだ。

権藤には「散歩」だと言ったが、じつは、リエは、それを確かめるために出てきたのである。

大須観音近くから本町通りを南に下った、もう西本願寺別院に近いというあたりに、そのピザ店はあった。

どうやらデリバリー専門らしく、店舗内に食事をするテーブルなどはなく、表からはカウンターが見えていただけだ。そのぶん、店の前のスペースには、赤と白で塗り分けた配達用のバイクが何台も停まってい

る。

「いらっしやいませ」

リエが入っていくと、カウンターの向こうに立っていたユニフォーム姿の女の子がにっこり笑って声をかけてきた。電話注文が主なのだろうが、時にはこうして店で直接注文していく人もいるにちがいない。

彼女の前にはパソコンの液晶ディスプレイとキーボードが置かれ、その横には注文を受けるためらしい電

話があつた。おそらく、愛は、今この女の子がやっているのと同じ仕事をしているのだ。

「店長さんは、いらっしやいますでしょうか？」

リエが言うと、その女の子は、「失礼ですけれど、どちら様でしょう？」ときいてきた。

「あの、平林愛の姉でございます」

その言葉を女の子は素直に信じたようだ。ちよつと驚いた表情をしたあと、納得したように大きくうなず

き、「少々お待ちください」と、奥に入った。

そしてすぐに、同じユニフォーム姿の男を連れて出てきた。

「店長の松林です。このたびは、うちの仕事のせいで、愛さんをとんでもないことに巻き込むことになってしまいました。本当に申し訳ございません」

店長はまず、そう言って頭を下げた。その詫びは社交辞令的な意味合いもあるのだろうが、少なくとも、

愛が犯人だなどとは思っていないようだ。

リエはどう切り出そうか迷ったが、話を都合よく進めるために、愛が口にしていた店への不平を利用することにした。

「いえ、けっしてこちらのお店のせいだとは思っておりませんけれど、父も母も、電話受付だけで外に出ることはないというお話だったので、愛にバイトを許したようなわけです。それなのになぜ……という気持ち

は、正直、ごさいます」

「は、はい。まことにお詫びする言葉もありません。

あの夜は、どうしても手が回らなくなつて、愛さんに無理を言つてしまいました。それが、あんなことになろうとは……」

まだ二十代らしい店長は、さかんに恐縮していた。

「ええ。ご存知だと思いますが、愛は今、第一発見者ということ、警察に嫌疑をかけられております。姉

としては、いてもたってもいられない気持ちにかられ
まして」

「はい、それはもう、よくわかります」

「弁護士を頼むにしても、少なくとも愛がやっていた
仕事の内容だけでもきちんと理解しておこうと、うか
がったようなわけです」

「はい、どんなことでもお聞きください」

店長がそう言った時、ちようど、カウンターの電話

が鳴った。

「いつもありがとうございます。お届け時間厳守のドレミピザでございます」

すかさず受話器を取った女の子が、まるで条件反射とでもいうように、そう応対した。

「……愛は、この仕事をやっていたんですね」

「はい」

店長とそんな会話を交わしながら見ていると、女の

子は「まず、お電話番号からおうかがいします」と、相手をうながした。

そして、相手の言ったらしい番号を、パソコンのキーボードに打ち込むと、ディスプレイを見ながらこうつぶけた。

「門前町四丁目 レジデンス西別院の吉原様ですね」
それを見たりエは店長の方にちらりと目をやり、きいた。

「電話番号だけでわかるんですか」

「ええ、すべてのご注文は、顧客データベースに記録されていますから、以前ご注文いただいたことがあれば、電話番号を言うただけで、ご住所なども即わかるようになっていきます。もちろん最初の時は、お名前とご住所をうかがって入力するんですが」

「あの、いつも頼んでいる通販なんかだと、電話をかけただけで、なにも言わないのに〇〇様ですねって応

答してくることがあるじゃないですか。あれとはちがうんですね」

「ああ、そういうのはたぶん、NTTのナンバーディスプレイのサービスと連動しているシステムなんだと思います。着信番号通知っていうやつですね。着信番号がコンピューターのデータベースにそのまま送られて、顧客情報が自動表示される。じつは、うちのチェーンも、一部の店で試験導入したことがあるんです。

でも、問題が多くて、けつきよくお客様から番号をお聞きすることになっています」

「問題：：といますと？」

「うちのお客様は、若い方が多いんです。若い女性のお客様などですと、番号通知拒否、いわゆる『184』イヤヨをつける方も多い。それだと番号が通知されませんか、自動表示のシステムは働かない」

「ピザを頼むのに、わざわざ『184』をつけるんで

すか？」

「電話機によつては、かける電話すべてに自動的に『184』を付加する設定ができるものもあるんです。あともうひとつ、もっと大きな問題としては、若い方の場合、ふつうの電話があつても携帯電話でオーダーしてくることが多い。二つの電話を時によつて使い分けられたりすると、自動表示の場合、前のご注文記録が出なかつたり、顧客データが二重化したりということ

にもなります。それくらいだったら、電話番号を言っていたらいい、手入力する方がいいだろうと」

店長の説明にうなずいていると、注文を聞き終えた女の子が「確認させていただきませう」と言った。

「エビマヨピザ・クリスピータイプ・ダブルサイズ一枚、激辛サラミピザ・クリスピータイプ・シングルサイズ一枚、コーラペットボトル一本。以上でよろしかったですね。：：代金合計、消費税込みで三三六〇円

になります。……30分後の3時10分にお届けいたします。ありがとうございます。ありがとうございました」

「……これで、オーダーレセプトが完了するわけですよ。女の子が電話を切るのと同時に、店長がそう言った。

「今受けた注文が、自動的に厨房にあるプリンターでプリントアウトされる。その伝票を元にピザが焼かれます。ご注文の品が揃った段階で、伝票とともにデリバリーチームにまわされて配達されるわけですよ」

その説明が終わったところで、リエは「あの……」と切り出した。

「あの夜、愛が受けて配達した注文の内容を見せていただくことはできますか？」

「あ、はい」

店長はそう返事すると、コンピューターのディスプレイとキーボードを自分の方に引き寄せた。

「あの、電話番号は……」

こちらにそうききかけてから、そこで気がつき「わかりませんよね」と言った。そしてそのあと、なんだか苦勞してコンピュータの表示を次々に変えていった。

通常の電話番号での検索は簡単でも、他の方法での検索はしにくいらしい。

「……あつ、これかな？ ニレシマ様……これですね」
やっと目的のデータを見つけたらしく、そこで店長

は、ディスプレイの向きをリエにも読みやすいように変えた。

「トマトとサラミのバジリコ風味ピザ・パンタイプ・シングルサイズ一枚。6時50分のご注文で7時20分のお届け：：とってます。：：ん？ 代金未収？
：あ、そうか。そりやそうですよね」

言いながら画面をなぞる店長の指先を見ていたリエは、そこでちよつと考えてからきいた。

「……この方は、いつも注文されてた方なんでしょうか？」

「えーっと……ああ、そんなに頻繁というわけじゃないですけど、ここ半年くらいの間、あの日を含めて五度ほど」

「ということは、あの夜、愛は、住所をきいたわけではなくて、電話番号だけをきいて入力したということですね」

「ええ、それで住所も表示されたはずですよ」

「先ほどどうかがったお話だと、その番号は、電話をかけた人の自己申告によるわけですよ」

「……え？」

「たとえば、他の人が他の電話からかけてきたとしても、この電話番号さえ言えば、この住所が表示される……？」

「え、ええ。さっき言ったように、着信番号通知とは

連動していませんから……」

店長は、なぜそんなことをきくのかという顔をしながら答えた。

「シャチ・フォト・スタジオ」は、「藤が丘」駅から五分ほど歩いた住宅街の中にあつた。比較的裕福な感じの建売住宅に囲まれた間口の広い敷地の、手前側は駐車スペースになつていて、そこに、ワンボックス

タイプの大きなバンが一台と4WDのジープ風の車が
停まっていた。その向こうに、白い外壁の三階建てく
らいの建物が建っている。

：：ん？ 二階建てかな？

「shachi photo studio」と小さく書かれた両開
きのガラスドアを除けば、外壁の下の部分三分の二く
らいに窓はなく、それより上に一列だけ窓があったこ
とで、サツキはそう思った。

添沢茉莉に次いでそのガラスドアを入ったところで、サツキは、自分の認識が正しかったことにうなずいた。一階の天井がふつうの建物よりずっと高い。いわば、映画館のロビーのようにつくりなのだ。入ってすぐの正面の壁と、そこから七・八メートル右に、同形の両開きのドアがあるところも、どこか映画館めいている。ドアの引き手が、縦に長いステンレスポールになっているから、余計にそう感じるのかもしれない。

正面のドアには「A」、右のドアには「B」の文字が大書きされていた。

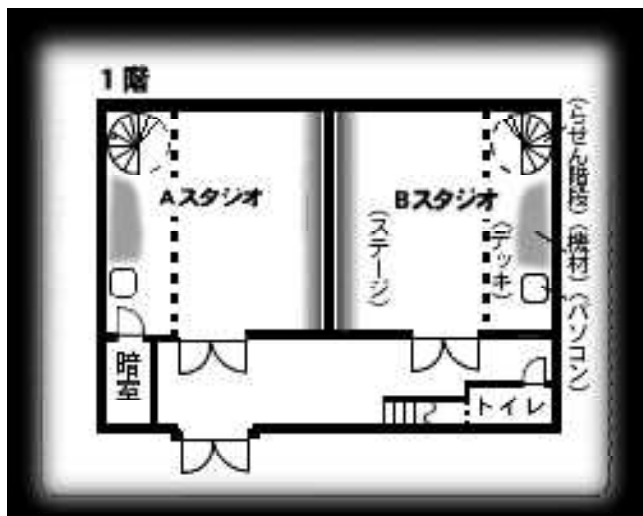
「へえ、この中がスタジオなんですね」

正面の「A」の方のドアに近づいてミミが言ったので、いったん右側の階段に向かいかけていた茉莉が、にっこり笑って戻ってきた。そして、そのステンレスの引き手を握り、ドアを開けた。

「……あっ、おはよう」

中に誰か見つけたらし
 く、茉莉がそう言いなが
 ら入ったので、サツキと
 ミミも、おずおずとそれ
 につづいた。

中もやはり小型の映画
 館のような天井の高いつ
 くりで、全体としては薄



暗い。しかし、いくつかのライトが右側の白い壁とやはり白い床にあたり、そのまぶしいほどの反射光が、逆に、背後の暗さを際立たせている感じだった。

「おはようございます」

その暗闇の中から声がして、ひとりの男が現れた。

年は三十くらいか。ずんぐりと背が低く——実際、サツキやミミはもちろん、茉莉とくらべても低そうだった——、あまり風采の上がない男だ。

「アシスタントカメラマンのこうけつ君」

ミミの方はどうだったかしらないが、その「こうけつ」という名で、サツキはすぐに「瀨瀨」という漢字を思い浮かべた。名古屋地方に比較的多い名字だ。ま、多いといっても、小学校の全校生徒の中に一人いるかいないかという程度なのだが。

「先生は、上？」

茉莉がきくと、瀨瀨は「はい」と答え、「広宣堂の

笠置さんもお待ちです」と言った。

「ありがとう」

茉莉はそう言ってきびすを返すと、すぐにロビーに出た。どうやら、サツキとミミに、とりあえずスタジオを見せてくれたということらしかった。

茉莉につづいて「B」スタジオ前の階段を上がると、突き当たりに踊り場があり、そこから折り返したあと、さらにステップがつづいた。天井が高い分、階段

も長いわけだ。

二階に上がりきったところで、茉莉は、目の前に見えるドアを指さしていたずらっぽい感じで笑った。

「あっちはカメラマンの山田先生の自宅だから、入ったら怒られるわよ。山田先生が連れて入るっていうなら別だけど」

そして、横側——建物全体から言えば正面というところになるが——の大きなドアの方を開けた。

「おはようございませう。

遅くなつてすみません」

茉莉がなんだか矛盾し

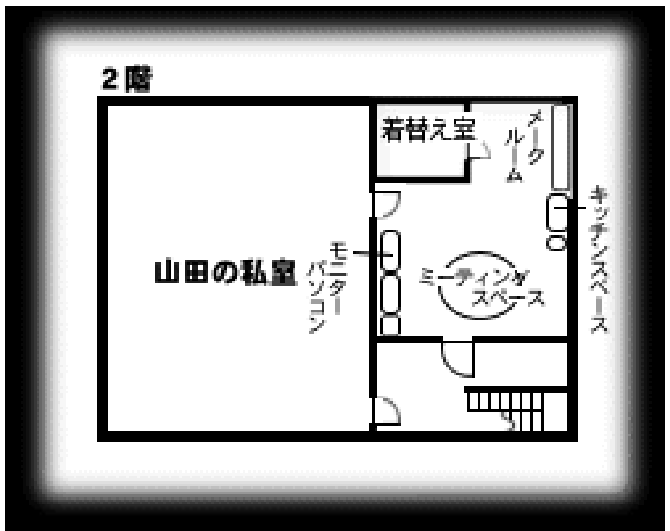
たことを言いながら入つ

ていくと、すぐ前の楕円

形のテーブルに片頬杖を

ついていた男が「あつ、

茉莉ちゃん、なんだか大



変なことになつちやつたねえ」と声をかけた。

「僕のところにも、刑事が聞き込みに来たよ。麗子ちゃんと関わりがあつた人間、ああやって全部きいてまわってるんだな。このスタジオにも来たっていうし」

「いろいろご迷惑かけてすみません。この仕事も、事件のせいで遅れてしまいましたし、彼女のこと、笠置さんがクライアントにプッシュしてくださったっていうのに、それを無にしてしまつて」

「しようがないよ。べつに茉莉ちゃんのせいでも、ニユーセンチュリーさんのせいでもないんだから。それより、麗子ちゃんがかawaiiそうだと思ってさ。モデルとしては、まだまだこれからだったのに」

「ええ……」

茉莉も、そしてその男も、そこで沈痛な表情になった。それは本心からなのか、それともそう取り繕っているのか、サツキには、どちらの人物もよくわからない

い気がした。

と、そこで男が、茉莉の後ろに立っているサツキとミミに目を向けた。

「新人さん？」

男がそうきいたのに対し、茉莉は「ええ」とうなずき、手にしていた資料——要するに、先刻サツキたちが書いた「プロフィール」のコピーだ——に目をやりながら言った。

「えっと……北川サツキと美濃部ミミです」

そして、今度はサツキたちに向かって男を紹介した。

「アートディレクターの笠置さん」

「よろしくおねがいします」

サツキとミミは、新人モデルらしく頭を下げた。

うなずき返しながら、笠置は、二人の頭から足の先まで、まるで舐めるように見てきた。

……なんか、いやらしい目つきだな。

サツキは、そう感じた。先刻、瀬瀬が、笠置の名とともに大手広告代理店の名前を言ったところをみると、笠置はその社員クリエイターなのだろう。服装にしろ、顔つきやそぶりにしろ、どこか業界の「軽さ」といったものが身についてしまっている男だ。

と、そこで、奥のドアが開き、黒のタートルネックセーターに黒のスラックスという細身の男が出てきた。先刻、茉莉が「山田先生の自宅」と言っていた側

のドアだから、この男が「カメラマンの山田」なのかもしれない。

：：しかし、それにしては若いな。

サツキは、茉莉を初めて見た時と同じことを思った。

そう言えば、グレーのハイネックにパンツという茉莉と、服装のセンスも共通するものがある。顔つきまでどこか似ている感じだ。

いずれにしても、下で会った瀨瀨とは正反対の、華

奢な美男子だった。

「先生、うちのものから連絡があったと思うんですけど、また、この二人のカタログ撮影お願いします」

「うん、聞いてる」

そこで笠置が「へえ、ニューセンチュリーさんのカタログ、いつも山田ちゃんが撮ってるんだ」と口をはさんできた。

「ええ、五年前、山田先生がこのスタジオを建てられ

た頃からは、ずっと先生にお願いしてるんです」

「まあ、今、名古屋で女を撮らせたなら、山田ちゃんの右に出るやつはいないからな」

そんな笠置の言葉に面はゆそうにしながら、山田は茉莉に、「今、瀬瀬が下で準備してるから」と言った。

「えっ、山田先生が撮ってくれるんじゃないんですか？」

「だって俺、打合せがあるだろ。だいじょうぶ、腕は

いい奴だから」

山田はそう言うと、ミーティングテーブルらしいその楕円形のテーブルの椅子に腰を下ろし、その上で、椅子ごと後ろを向いて、壁際に並んだデスクに手を伸ばした。

そこには、コンピュータのサーバーらしい機械が一台と、その他いくつかの箱形の機器、配線があり、さらに三つのディスプレイが並んでいた。いちばん左

側は、サーバーのディスプレイらしくウインドウズの初期画面が出ていたが、右の二つは電源が入っていないようだ。よく見ると、その二つのディスプレイには、それぞれ「A」「B」という文字シールが貼りつけてあった。

山田は、その「A」と書かれた方のディスプレイのスイッチを入れた。

と、その画面が白く変わった。白といっても、べた

つとした白ではなく、明るい真ん中あたりから外側のグレーに向かってグラデーションがついている。さらに目を凝らすと、その右縁に、固定ストロボの反射板らしい傘のようなものが映っていた。

そして、その傘の方向を誰かの手が動かしていた。やがてその人物が画面の真ん中に現れ、手に持ったなにかの機械をこちらに向けた。纈纈のようだ。

次の瞬間、画面全体が一瞬白く光った。ストロボを

焚^たいたらしい。要するに、ストロボとシンクロさせた露出計で、露出を測っているのだろう。

「もうちよつとかかりそうだな」

それを見ながら山田が言った。

「デジタルなんだからそこまで厳密にしなくてもいいのに、奴、慎重だから」

そして、茉莉に向かって「今のうちに、メイクと着替えやっておけよ。打ち合わせ、その後でいいから」

と言った。

それに対し、茉莉は「うん」とうなずき、サツキとミミに「こっち来て」と言った。

茉莉について部屋の奥側に行くと、コーヒーなどを入れるためのちよつとしたキッチンスペースがあり、その向こうに、メイキャップ用らしい鏡がついたスペースがあった。

「ミミちゃんから始めようか」

そう言つてミミを鏡の前に座らせた茉莉に、サツキはちよつと疑問を持った。

「茉莉さんは、スタイリストなのに、メイクもするんですね」

「うん。お金のある本格的な撮影とかだと、当然、本職のヘア・メイクさんがつくんですけど、そうでもない時は、私たちがやったりするの。ま、スタイリストつて、服やアクセサリーから撮影用の装飾や小道具まで、

要するに撮影現場のなんでも屋だから」

サツキが「そういうものなんだ」と納得していると、ミーティングテーブルの笠置が、さっきの山田の会話のつづきのように言った。

「ふーん、下のスタジオがモニターでできるんだ」
それに対し、山田が説明した。

「べつに監視カメラがつけてあるわけじゃないよ。コーマシヤルフोटに関しては、銀塩フィルムからデジ

タルへって流れがどうやら決定的だろ。だから、先手を打って、スタジオ全体をデジタル仕様に改装したんだ。スタジオ撮影は、今、もっぱらデジタルカメラを使って、それで撮った画像が、スタジオのパソコンと高速LAN回線を通して、即、このサーバーに送られる。それがそのままハードディスクに保存されるようになってる」

「なるほど。ここですぐに画像の整理や加工ができる

し、メール送信とかもできるってわけだ」

「うん。で、基本的にそれはスチール、つまり静止画専用のシステムなんだけど、ついでに、カメラの液晶モニターに映ってる動画もこっちの二つのディスプレイでモニターできるようにしたんだ」

「ああ、つまりそのモニターは、言ってみればカメラのファインダーの画像ってわけ？」

「そういうこと。スタジオ二つも持ってて遊ばせとく

のももつたないから、ときどき、レンタルスタジオとして他のカメラマンに貸してる。そういう時は、このカメラを俯瞰撮影用のデスクに置いて、スタジオをモニターしてたりもする。高い設備も置いてあるし、盗難でもあるとまずいからな。ま、そういう意味では監視カメラにもなるってわけだ。あつ、これは、ユーザーには内緒だけだな」

と、そこで笠置が、そのモニターを見ながら話を交

えた。

「そう言えばさ。彼、ちよつと訳ありなんだって。噂、聞いたぜ」

モニターに映る纈纈のことを言ったらしい。

メイクの順番を待ちながらサツキが見ていると、山田はいきなり表情を変え、笠置をにらみつけるように強い調子で言った。

「そんなくだらん話は、するなよ」

楡島麗子が殺されたマンションの前まで来て、リエはどうしようか迷っていた。

現場となった麗子の部屋を見てみたいところだが、入口はオートロックだから、簡単には中に入れないのだ。

それで、入口脇の、例のインターホンを見やった。愛が言っていたとおり、文字盤を照らすためらしい

蛍光灯ランプが突き出ている、その下の壁にインターホンが埋め込まれていた。

表面のステンレスプレート
の右上の部分には送話口らしい何本かの切れ込みがあり、その下に、住人たちが開ける時に使うものらしいシリンダー



錠が組み込まれている。そして、左側のステンレスが四角く切つてある部分に、部屋番号を押すための文字盤がある。ただし、「押す」と言つても、コンピュータのキーボードのように文字キーを押し込むタイプではなく、カード型電卓などによくある文字を軽く押すだけの一体パネルになつた仕様だ。

先刻のピザ店で聞いた話で、注文の電話については、麗子以外の人間が麗子になりすましてかけることも可

能なことがわかった。つまり、麗子の部屋以外からかけてもなんの問題もないわけだ。しかし、このインタ―ホンについては、そんな簡単なごまかしは通用しそ
うにない。

愛が言うように、まちがいなく麗子の部屋番号「702」を押したとすれば、702号室で呼び出し音が鳴り、そこにいる相手――生きている麗子か、または犯人――と通話することになる。注文電話のように、

相手がどこかべつの場所にいってもいいということにはならない。

そのことによつて、犯行時間や逃走可能な時間が、極めて狭い範囲に限定されてしまうわけだ。

ここにはなにか、まだ見えないからくりがあるにちがいない。

リエは、そう考え、もう一度インターホンを見やつた。

と、その時、リエのすぐ後ろで誰かが咳払いした。びくりとして振り向くと、太った女がコンビニの袋をぶら下げて立っていた。

リエがあわててその場をどくと、女は、手にしたキーをインターホンの鍵穴につっこみ、それをまわした。どうやら、ここの住人のようだ。

と、軽いモーター音とともに入口のドアが開いた。キーを抜き取った女は、開いたドアからマンション

の中に入ろうとしていた。

これは、中に入るいいチャンスだ。

リエはそう思い、その女の後ろについて、入口をくぐった。

しかし、玄関ロビーを数歩歩いたところで、いきなり前の女が立ち止まって振り向いた。

「あんだ、誰？　どろぼう？」

「……えっ？」

太った女は、怒りの形相でリエをにらみつけていた。

「そういうふうには、誰かにくつついて入るのって、オートロック破りの常套手段でしょ。警察呼ぼうか？」

女はそう言って、リエの手首を強く握った。

「ミミちゃんは、つけまつげとか使って、思いっきりかわいく仕上げたけど、サツキちゃんの方は大人っぽくセクシーな感じにまとめてみたの。どう？」

ドアの外から茉莉の声がした。どうやらサツキの方もメイクが終わったらしい。

メイクスペースのちょうど後ろ側にある着替え室の中で、ミミは、先刻茉莉が選んでくれた服に着替えながら、それを聞いていた。

「……ええ、すごいいいです」

感心したように言うサツキの声が聞こえてきた。やはりサツキもミミ同様、茉莉のメイク技術に驚いたよ

うだ。

こんな仕事をする前からコスプレが趣味だったこともあり、ミミは、メイクにはそれなりに自信を持っていた。しかし、それがいかに素人のノウハウに過ぎないかがよくわかった気がした。

茉莉は、ミミのまだ知らないテクニックを駆使して、その顔をさらにキュートなものに変えてくれていた。たしかに、街を歩くためのメイクとしてはちよつと濃

すぎる気もするが、おそらく写真うつりは、この方が格段にいいだろう。

姿見を見ながら服ともよく合ったそのメイクにふたび感心していると、サツキを促す茉莉の声が聞こえた。

「じゃ、サツキちゃんも服選ぼうか」

そして、着替え室のドアが開いた。

「……あっ、やっぱりね。ミミちゃん、それ、似合う

と思ったんだ。すごくかわいいよ」

入ってくるなり、茉莉は、ミミが着たパステルオレンジのミニワンピースを見てそう言った。

先刻、服を選びながら茉莉が説明してくれたところによると、ここにストックしてある服は、これまで茉莉が関わった撮影の仕事で「買い取り」になったものらしい。

通常、撮影用の服は、アパレルメーカーやショップ

などから「借りる」ことが多いのだそうだが、特殊な服だったり、あるいは撮影中にちよつと汚してしまったりしたものは、どうしても「買い取り」になる。それを、モデルカタログ用に「使いまわしている」のだと、茉莉は言っていた。だから、いつもカタログ撮影を頼んでいるこのスタジオに置かせてもらっているという事だった。

「そうだな……、サツキちゃんは、これなんかどう？」

茉莉は、そう言いながら、ハンガーラックからワインレッドのロングドレスを取り上げた。スタンドカラーのノースリーブはちよつとチャイナ風のデザインで、それに合わせるように、スカートの片側に深いスリットが入っている。

「あつ、そういうの、一度着たかったんだ」

サツキがそう言いながら着ていた服を脱ぎ、受け取ったドレスをかぶると、茉莉はそれを手伝い出した。

サツキは、ブラの中のパッドに気づかれないように、茉莉の目から必死に前を隠すようにしている。

ミミが、ニヤニヤ笑いながらそれを見てみると、部屋の外から、山田と話す笠置の声が聞こえてきた。

「この前の打ち合わせでも言ったように、スケジュールがめっちゃめっちゃタイトでさ。納期に間に合わすのは、ひとえに山田ちゃんの撮影にかかってるんだ」

この着替え室は、もともとひとつの部屋だったところ

ろにパーティションを立て、あとから造りつけたものらしい。それだけに外の声がけっこう聞こえるのだ。

「しかしそれは、そっちの段取りの悪さの問題だろう」
「だから、それはあやまつてるじゃん。でも、それだけじゃなくて、あんな事件で麗子ちゃんがだめになつて、それで延びちやっただけだからさ」

「だけど、ロケもあるんだろ」

「ああ、それも含めて三日であげてよ」

「めちやくちやだね。でも、モデルはどうする？ 蓑

浦元美ひとりでやるのか？」

「クライアントには、今日中に代わりの候補を出すつて言っている」

「そんな都合のいいモデルがいるのかね。俺は責任持てないね」

「そうへそ曲げるなよ。まあ、麗子ちゃんの件では、お互い、いろいろあったわけだけど、彼女もいなくな

つちやったことだし、そこは仕事なんだから大人になつてさ」

「俺はべつに、そんなこと言ってるんじゃないさ」

：：ん？ どういうことだ？

単に仕事の打ち合わせだと思つて聞いていたミミは、二人の最後のやりとりに違和感を感じ、首を傾げた。

「そう、あの子、警察に連れてかれたままなの？ そりゃあ、お姉さんとしては心配だわねえ。事件現場を見なくなる気持ちもわかるわ。さっきは誤解しちゃつて、ほんとにごめんなさいね。なにしろ、あんな事件があつたあとだもんだから」

コーヒーカップをリエの前に置きながら、その女性は、またあやまった。

不法侵入者だと勘違いされ、腕をへし折られそうに

なったりエは、ピザ店で言ったのと同様の「愛の姉としての事情」を説明した。と、彼女は、今度はいきなりリエに同情し、自分の方から事件当時のことを話してくれると言い出したのだ。

その口振りから、どうやら彼女が、事件当日、一階の入口のところに行った二人のうちの一人らしいことがわかった。真相を探る絶好の機会だと思ったりエは、誘われるまま、六階の彼女の部屋に上がり込んだとい

うわけである。

けっこうゆとりある造りの1LDKの部屋で、ダイニングテーブルに着くなり渡された名刺には「Webデ
ザイナー 梅花百合華」とあった。

：：なんてハナのある名前なんだろう！

その名刺を見てリエはそう思ったが、現実の彼女は、「ハナ」よりも「肉」の方に恵まれていた。

コーヒーをいれながら話してくれたところによる

と、注文を受けて企業のホームページをつくるのが仕事だという。フリーランスなので、この部屋が自宅兼事務所らしい。つまり、ほぼ一日中、このマンションにいるわけだ。

「私も、妹さんが犯人だなんて、ぜったい思えない。あんなかわいらしい子が、あんなことできるもんですか。警察はいつたい、なに考えてるんだろ。なんだか、110番した私が責任感じちゃうわ」

「あつ、梅花さんが通報なさったんですか」

リエがきくと、百合華は「ええ」とうなずいた。

「悲鳴を聞いてあわてて上がってきたら、702号室の入口のドアが開いてて、妹さんが腰を抜かすみたい
に廊下に転がり出てきたの。中をのぞいたら、血だらけの死体があるし、私も動転したけど、まず、気を失い
いそうな妹さんを死体の前から動かすことが先決だと思
って、この部屋に連れてきたのね。それから、あわ

てて警察に電話を」

「あつ、じゃあ、その間、702号室の前は誰もいなくなつた？」

「ううん、そんなことないわよ。妹さんの悲鳴で、他の階の人何人も来てたから」

「やっぱり発見後には、犯人が逃げ出すすきはなかつたってことかあ……」

そうつぶやくと、百合華が不可解そうな顔をした。

たしかに、「姉」の反応としてはおかしかつたかもしれない。それで、リエはあわてて言った。

「妹のこと、そこまで気を使ってくださったんですね。ありがとうございます」

「いえ、なにしろ、妹さんって、背も低いし、体格が私の三分の一くらいしかないじゃない。青くなつてガタガタ震えてるのが、ひどくかわいそうな気がして」

実際は四分の一に近いだろうが、そう言うのはいく

らなんでも百合華を傷つけると思い、やめておいた。

「でも、その体で階段を駆けのぼるのって、大変だったんじゃないですか？」

ついそう言ってから、けっきよく失礼なことを口走っている自分に気づき、リエは「しまった！」と思っ
た。

しかし、それを気にする様子もなく、百合華は「まさか、そんな。7階に上がるのに階段なんて使うわけ

ないじゃないですか」と言った。

その言葉に、リエは、百合華に対する疑念を抱いた。それで、確かめるようにきいた。

「じゃあ、エレベーターで？」

「ええ」

「そうすると、一階ずつ確認しながら上がったわけですね」

「なんで？ 直接七階へ来たわよ」

これは明らかにおかしい。

一階で悲鳴を聞いただけの百合華が、なぜ、その悲鳴が七階から聞こえたのがわかったのか？

「私、妹さんと入口でちよつと話して声も聞いてたから、あの悲鳴がした時、702号室でなにかあったんだって直感したわ」

「で、でも、なぜ702だと？」

「ああ、それは、妹さんがインターホン押すところ、し

「つかり見てたから」

「えっ？」

「私、あそこのピザ、しよっちゅう頼むから、下で妹さんを見かけた時、配達がいつもの人とちがうのにな。気づいたのね。それで気になって見てたら、妹さん、なんだか心もとない感じで……。オートロックの仕組みもよくわかってないみたいだし、教えてあげたあともちやんと使えるかどうか心配になって、ずっと

手元を目で追ってたの」

その言葉に、リエは納得がいった。それにしても、百合華は無類の世話好きらしい。

しかし、だとすると……。

「……じゃあ、妹は、まちがいなく702をプッシュした……と？」

「ええ。それを見て覚えてたから、すぐに702号室へ行ったわけ」

愛の言っていたとおり、インターホンで押した部屋番号は正確だった。それを意識的に見ていたという目撃者まで現れたのではまちがいないだろう。つまり、インターホンの応答は、確実に702号室からされたのだ。

「あの……」

そこでリエは、部屋の中をきよろきよろ見まわしながらきいた。

「この部屋は、上の702号室と同じ造りなんですか？」

「ええ。下の方の階はワンルームらしいけど、四階から上は、ぜんぶ同じ構造の1LDKみたいよ」

「部屋の方のインターホンは、どこにあるんですしよ
う？」

リエがきくと、百合華は「あそこ」と、キッチンスペースの脇の壁を指さした。そこにはたしかに、壁掛

け式電話のようなものがついていた。応答する時は、あの受話器を取るのだらう。

「フックしてある状態だと見えないけど、受話器の下にボタンがあつて、マンションの入口を開ける時は、それを押すのね」

そこでリエは、その壁と先刻入ってきたドアとの間を目測した。それなりに距離がある。しかも、そのドアの向こうの通路も、トイレやバスルームらしい扉が

並び、すぐ玄関というわけではなかった。

犯人が——たとえば茉莉が——インターホンに応答し、そのボタンを押して受話器をフックしたあと、玄関から逃げたとしたら、それだけで、ある程度の秒数を費やすだろう。その上、そのけっして広いとは言えない玄関には、道をふさぐように麗子の死体が横たわり、血が流れていたわけだ。へたな証拠を残さないようにそれをまたぐのにも、さらに何秒かをロスしそう

だ。たとうまく部屋を出られたとしても、廊下あたりで、エレベーターを降りた愛と鉢合わせしそうだった。

むしろ、インターホンに応答したのはやはり麗子本人で、そのあと——おそらくはピザを受け取ろうと——玄関に出てきた麗子を犯人が襲い、そのまま逃げたと考える方がずっと合理的な気がした。

リエが考え込んでしまったので、百合華は、それが

心配になったらしい。「妹さんの疑いは、すぐ晴れると思うから」となぐさめた。そして――

「よかったら、これ、食べない？ おいしいわよ」

今コンビニで買ってきたらしい、思いきり甘そうなプリン風のケーキの皿を、リエの方に差し出した。

頭を巡らせつづけたことでちよつと疲労感もあったリエは、一瞬それに惹かれたが、目の前の百合華の「三段あご」に目をやり、「いえ……」と遠慮した。

「上のモニターでちらちら見てたけど、わりとうまく
いってるみたいね」

自分の方の撮影が終わり、今度はミミが撮られるの
を見ていると、茉莉がスタジオに入ってきた。

「……あっ、はい。でも、なかなか……。瀬瀬さんの
言うとおりにできなくて、ちよつと怒らせちゃったか
もしれません」

サツキは、自分の正直な感想を答えた。

実際、これだけのライトが自分に向かって集中する中で、撮られることを意識すると、とたんに体がこわばって不自然な感じになってしまう。カメラマンの顔からさかんに要求された「自然な表情」など、簡単にできるものではなかった。

「ふふ、まあ、初めてだからしょうがないわよ。それに、彼、山田先生とちがって、真面目で実直そうだから

ら、モデルとしてはもうひとつノリの悪い感じ、あるかもしれないわね」

茉莉はそう言いながら、三脚に据えたカメラをのぞく瀬瀬を見やった。

ちよつとファインダーをのぞいていたあと、目を離れた瀬瀬は、前の撮影ステージに立つミミに手振りも含めて指図した。

「君は、かわいさをねらいたいから、両方の手首をこ

ういう：：うん、そういう感じで曲げて、片足をちよつと後ろに引いて：：。そう、それで、こっちに笑いかけてくれるかな？」

そんな纈纈の指示に応えようと、前の撮影ステージでは、ミミが――やはり、どこかこわばった感じで――ポーズをつくっていた。ミミはもともとコスプレ趣味なのだから、こんなふうにならで写真を撮られることには慣れていそうなものだ。しかし、それでも、こ

れだけ本格的な撮影となると緊張するのだろうか。

ミミがなんとかポーズを決めたところで、つづげさまにストロボが光った。

そんな撮影の様子を見ながら、サツキは茉莉にきいた。

「……打合せは、もう終わったんですか？」

「うん、だいたい。あとは、新しいモデルを選ぶ話だけだから、モデル事務所に所属してる私がない方が

いいのよ。その方が、この子がいいとか悪いとか、気兼ねなく言えるでしょ。……といつても、山田先生は、そんな気兼ねなんてする人じゃないけどね」

「その打合せって、どんな仕事なんですか？」

「ん？ 知多半島の観光ポスターとパンフレット。夏の海水浴シーズンに向けてのね」

「へえ、夏用のを今から撮らないと間に合わないんですね」

「うん。モデルの仕事ってだいたいそうよ。実際の季節より半年近く早く進んでくの。だから、冬は人より寒い思いをして、夏は暑い思いをする」

今のカタログ用の撮影だけでも「仕事で撮られる」ことの厳しさがなんとなくわかった気がしたサツキは、さらにそんな苦労があるのかと感心した。

しかし、そんな感慨に浸ってばかりもいられないことには気づき、さぐりを入れてみようと考えた。

「あの、さつき小耳に挟んだんですけれど、この前の殺人事件でなくなったモデルさんも、その仕事をすることになってたんですよね」

「ええ、そうよ」

「その人、山田先生とのお仕事、多かったですか？」

「う、うん、まあね」

茉莉の返事に、どこかふつうでない感情が混じった気がした。

「山田先生、彼女のこと、気に入ってたみたいだから。モデルを選ぶ最終的な決定権は、クライアントや代理店にあるわけだけど、山田先生が彼女を使いたいって言うことも多かったみたいね。彼が言い出すと、みんな、なんとなく逆らえない雰囲気になるのよ」

「それはやっぱり、山田先生にカメラマンとしての実力があるからですか？」

「うん、それもあるけど、カリスマっていうか、みんな

な、彼の言うことときいちゃうところがあるのよ。彼って、言ってみれば、シーザーみたいな人だから」

茉莉の山田に対する呼び名が、途中で「山田先生」から「彼」に変わったことが気になった。オフィシャルな場面と、そこにプライベートな感情が混じる時で、自然に呼び方が変わるのかもしれない。

と、そこへ、当の山田が、笠置とともに入ってきた。

山田はまず、カメラをのぞいている瀬瀬に近づき、

声をかけた。

「瀬瀬、悪いけど、ちよつと撮影を中断してくれるかな？」

「……えっ？」

撮影に集中していた瀬瀬は、山田が入ってきたことにも気づいていなかったらしく、驚いたように顔を上げた。

そんな瀬瀬にひとつうなずいたあと、山田が言った。

「じつは、今、二人で決めただが、明日からの撮影、麗子の代わりに彼女たちにやってもらおうと思うんだ」

「えっ！」

山田が指し示したサツキとミミも驚いたが、それ以上には茉莉が驚きの声をあげた。

「上で二人の撮影画像を見て、笠置さんが、これならいけるんじゃないかって」

「うん。二人なら、元美ちゃんとのバランスもよさそうだし、モデル二人の予定だったのを三人にすれば、麗子ちゃんの穴は埋められると思うんだ」

「でも、クライアントは？」

笠置の言葉に、茉莉が聞き返した。

「今ここで撮ってた画像を担当者にメールしたら、即オーケーが出たよ」

聞いていた瀨瀨が複雑な表情をした。驚いたことも

あるのだろうが、まだ撮影中の自分の写真を知らないうちに使われていたことが、多少、心外でもあるようだ。

「へえ、すごいじゃない。まだカタログにも載ってないうちから仕事が入るなんて」

茉莉にそう言われても、サツキとミミはことのなりゆきが把握しきれず、きよとんとしていた。

そんな二人に苦笑しながら、山田が言った

「明日、昼イチからスタジオ撮りをスタートする。また、ここに来てくれ」

と、茉莉が気づいたようにつけ加えた。

「水着撮影が多くなると思うから、体に傷とかけないように気をつけてね」

「えーっ、水着ーっ!？」

そこで二人は、同時に声をあげていた。

他の人々は、新人二人がいきなりの「水着撮影」に

たじろいだのだと思ったようだが、サツキとミミが動揺したのには、別の意味があった。

「水着なんて、どう考えてもやばいよーっ。どうしよう？」

「ワンピースだとかならいいけど、ビキニだと、たぶんパッドが見えちゃうでしょ」

クイーンズオフィスに帰ると、二人は、すでに戻っ

ていたリエにそう言った。

と、リエは、「そういうことなら、どうにかなると思う」と言つて、電話をとつた。

「……あのー、科学捜査研究所の井上さんをお願いします」

リエの電話を聞きながら、サツキとミミは、「科捜研つて……、県警の？」と顔を見合わせた。

ちよつとして、相手が電話に出たらしく、リエは、

突然男の声で言った。

「あつ、井上君？ 久しぶり。広小路署の佐雲です。元気にやってる？」

そしてそのあと、「ブロードウェイ・クイーンズ」創設から今に至る事情を説明しはじめた。

その長い電話が終わって受話器を置くと、リエは「同期でさ、警察学校でいっしょだった奴」と言い、そこで、自分が男の声のまままで話していることに気づいた

ようで、ソファに腰掛けながら、今度は女の声に戻してつづけた。

「前にちよつとそういう話をしたことがあつて、相談したら、やっぱりなんとかなるつて。あしたの朝、ぜつたいに見破られないようなパッドを届けてくれるわ」

リエの言っていることがよくのみこめず、また、にわかには信じられず、サツキとミミがポカンとしてい

ると、そこでオフィスのドアが開いた。

「ただいま〜」

「あっ、公平ちゃん、どこ行ってたの？」

「公平ちゃんって呼ぶな！」

入ってきた権藤は、いちおうそう言ったあと、やはりソファに腰掛けながら、すぐにつづけた。

「捜査本部の刑事たちに進捗状況を聞いてきたんだ。

どうせ、ほかっといっても、君たちは余分な捜査をはじめ

めるんだろうし、ミミが本部のコンピューターをハツキングしたりするんだろうから、手間を省こうと思つてね」

「わっ、気がきくッ」

サツキがからかったのに対し、権藤はちよつとうれしそうな表情——このあたりが、権藤の人の良さと単純さの証だった——を浮かべたあと、持っていたシヨルダーバッグからノートを出し、さっそく報告をはじめ

めた。

「志水課長が言っていたように、マンションの住人には、添沢茉莉をのぞいて、動機らしい動機は見あたらないうだ。それで、殺された楡島麗子のその他の人間関係ということになるんだが、周囲を洗っていくと、何人か、動機がありそうな人物が浮かんできた。まず、男関係ということだが、麗子は高校時代からの友人に、ある男のことを恋人だと漏らしている。写真家の山田

隆、三十八歳」

「えっ、『シヤチ・フォト・スタジオ』の？」

サツキが驚いてきくと、権藤は「知ってるのか？」と顔を上げた。

「今日、会ったの」

うなずいたサツキに、権藤は「じゃあ、それはあとで」という感じでうなずき返し、つぶけた。

「ところがこの男、どうも、添沢茉莉とも、ずっと以

前から男女の関係がつづいているという噂だ。つまり、恋愛関係のトラブルということでは、茉莉にはもちろん、山田にも動機があったと考えられるわけだ。それから他にも、最近、麗子にちよっかいを出していたらしい男がいる。広告代理店広宣堂の社員で、笠置辰巳、四十歳」

そこでまた、サツキとミミは「えっ？」と小さく叫んだが、やはり早く先を聞きたかったらしく、それだ

けにとどめた。

「この男が、麗子にさかんに言い寄っているところを、同じ会社の社員が見たんだそうだ。なりふりかまわない感じでなにか口説いていたということだ。それから、あと一人だが……。麗子には、ちよつと気になる過去がある。一年少し前に、いわゆる痴漢冤罪事件に関わっているんだ。電車の中で痴漢されたと、ある男を告訴している。けつきよく裁判では、証拠不十分という

ことで無罪になるんだが、この男は、当然、麗子のことを恨んでいたはずだ。そして、この男がなんと、二ヶ月前から山田のスタジオにアシスタントカメラマンとして勤めているんだ。名前は：：えーつと、なんと読むんだっけ：：？」

「こうけつ！」

サツキとミミが同時に叫んだ。

「そう、こうけつ：：だった。瀨瀨義信、二十九歳。

……えっ、なんで知ってる？」

権藤が不思議そうにきくと、サツキとミミは顔を見合わせながら言った。

「けつきよく、今日、あのスタジオに……」

「容疑者がぜんぶ揃ってたんだ！」

翌朝10時少し前、いつもどおりクイーンズオフィス

file-203

詐略さりやくの隘路あいろ

または ああ！ 愛しのタイムテーブル

に出勤してきた権藤は、ドアノブにかけた手を思わず止めた。中から、やけに弾んだクイーンズ三人の声が聞こえてきたからだ。

権藤とちがいが着替えやメイクをする三人は、たいてい権藤より早く来ているし、他愛ないおしゃべりをしていることも多い。しかし、今朝は、その声が妙に興奮し、いつも以上にはしゃいだ感じなのだ。

「キャツ、すごい。ほんとに本物みたい」

「しつかり貼りついてとれないし、境目もぜんぜん目立たなくい」

「キヤーツ！ この揺れる感じも、どう見てもホンモノ！」

首を傾げながらノブをまわし、一歩中に入ったところで、権藤はまた、足を止めることになった。

なんと、スカートだけで上半身裸の背中が三つ、キヤツキヤと騒ぎながら、かわるがわる姿見の前に立つ

ている。しかも、部屋にはもう一人、背広姿の若い男がいて、腕組みしながらそんな三人を見ているのだ。

権藤は、驚くというより、とりあえずこの光景をどう理解したらいいのかがわからず、立ちすくんだ。

と、そこで、権藤が入ってきたのに気づいたミミが振り返った。

「あつ、公平ちゃん、おはよう。ね、見て見て、これ」

「……！」

権藤は、いつもの呼び名に対する抗議すら忘れ、あ然とした。

そのミミの、裸の胸で、二つの乳房が揺れていたのだ。

よくアメリカのアニメなどで、驚いた男のあごが地面までガクンと落ちるといふ描写があるが、今の権藤の実感は、まさにあれだった。

そして、権藤の驚きは、リエとサツキがこちらを向

いた時、さらに大きなものになった。2×3∥6∶∶
個の形のよい胸が、ずらりと並びふるふる震えてい
た。

次の瞬間、今度は、見てはいけないものを見てしま
った∶∶いや、なにか恐ろしいものを見てしまった気
がして、権藤はおろおろと目をそらした。しかし一方、
その脳裏には、「裸の女」たちの残像——特に、リエ
の顔とセツトになった白い胸の残像——が、しつかり

と刻みつけられていた。

と、そのリエが言った。

「公平ちゃん、いいでしょう。新しいブレストフォーム。これで、サツキたちの水着撮影もオツケーね」

「あたしたちだけでいいのに、リエったら、すっかり自分の分も頼んでるんだから」

サツキの言葉を聞きながら、まだ自分が今見たものが信じられず、権藤はやっと「君たち、それは……」

と口にした。

と、リエは、「さつき、彼が届けてくれたの」と言
った。

その言葉に——リエたちの方は見ないようにしながら——、そこにいる若い男に目をやると、男は、爽やかな笑顔であいさつしてきた。

「県警科捜研の井上です」

「は、はあ……」

「昨日、佐雲君……あ、いや、リエさんから頼まれて、急いでつくって来たんです」

「つ、つまり、その……、あれはつくりもの……だと……？」

「ええ。シリコーン製のフォームを特殊な接着剤で貼りつけてあるわけです。よくできてるでしょ」

「……え、ええ、まあ……いや、ほんとに……でも、科搜研っていうのは、こんなことも研究してるんです

か？」

「いえ、僕だってふだんは、残留物の化学分析なんてことをやってますよ。これは、僕の大学時代の先輩が開発した技術で、その先輩がハリウッドへ特殊メイクの修業に行っちゃったんで僕が引きついでなんです。ま、ちよつと事情もあって」

「警察学校の時、彼からその話を聞いてたんで、昨日、相談してみたの」

「ふむ……」

井上とリエの説明に——まだよく飲み込めないところはあったが——、三人の「胸」が本物でないことだけはわかり、権藤はとりあえず安心した。いや、本当のことを言えば、リエに関しては、それにちよつとがっかりしたところもあるのだが。

「……と、とにかく、みんな、早く服を着ろよ」

そこで権藤がそう言い、三人は——「ブラのつけ心

地もホンモノみたくい」とかはしやぎながらではあつたが——やつと「胸」を隠してくれた。

そして、三人が服を着終わったところで、愛知県警刑事部科学捜査研究所員、井上秀明は、そのブレストフォームとやらをはがす時に使う剥離剤はくり三人分をも置いて——さらになぜか「カメラマンには気をつけて」と言い残して——、帰っていった。

「してみると、本部はその四人を被疑者と見ているわけだ」

「ええ、マンシヨンの住人たちに対する捜査も引き続き行っではいるんですが、動機の点から見て、添沢茉莉、山田隆、笠置辰巳、瀨瀨義信の四人に絞り込んできているようです」

今朝の動揺がやっとおさまった頃、綾瀬からいつもの定時連絡が入り、権藤は昨夜リエたちにした説明を

ふたたび繰り返した。捜査本部や刑事課から直接にではなく、権藤を迂回^{うかい}して情報を得ているところが、綾瀬の署内での実質的な位置づけを表しているわけだが。

「しかし、この四人にはすべて、死亡推定時刻：：と
いうか、犯行推定時刻にアリバイがあるんです」

権藤が言うと、綾瀬が、どこかうれしそうな声をあげた。

「うむ、そうだろうそうだろう」

「茉莉については、志水課長がおっしやっていたような事情がありますし……」

「いや、あのアリバイは、この前、とりあえず私が崩しただろう」

「……あ、いや、それはそうなんです……まあ、いちおう……」

「で、他の連中のアリバイというのは？」

権藤は、綾瀬が自分の推理にこだわっていないなさそうなのにはほっとし、話を進めた。

「山田と笠置は、あの時刻、同じ場所にいたようです。19時から、笠置の会社の会議室で仕事のミーティングをしていた。この会議には二人だけでなく、営業マンや他のスタッフたち、コピーライターとかグラフィックデザイナーだとかも参加していて、彼らの証言もとれています。通常、この業界の会議というのは必ず

誰かが遅れてきて、20分や30分ずれ込むらしいんですが、この日は、山田が19時すこし前に現れたところで全員が揃った。『今日は珍しく時間どおりだ』とみんなであい合ったというんです。終わったのは21時近くだそうで、その間、山田も笠置も中座したりはしていません」

と、そこで、黙って聞いていたりエが確認するよう
に言った。

「笠置の会社の場所は？」

「広宣堂があるのは栄だから、事件現場から車で5分
足らずだと思う。ただ、いずれにしても、犯行があつ
たとみられる19時20分頃、二人がそこにいたというこ
とは确实だ」

「ふむ、で、もう一人は？」

「瀬瀬には、事件当時、誰かといっしよにいたとか、
あるいは誰かに目撃されたとかいうアリバイはないの

ですが、当日、カードで銀行預金を下ろした記録が残っていました。その場所が、彼の居住地、岐阜県多治見市の駅前にあるキャッシュユデイスペンサーなんです。で、このCD機の稼働時間は20時までで、彼はそのぎりぎりの19時59分に出金している。これには、監視カメラの画像も残っていますから本人にまちがいないようです。犯行推定時刻の19時20分から40分足らずで、大須から多治見まで移動するのは困難だろうとい

うのが本部の見解です。直線距離としては三十キロくらいですが、電車で行くには乗り継がなければなりませんし、車で東名と中央自動車道を飛ばしたとしても、経路がけっこう回り道になりますから、現場から多治見駅まで1時間くらいはかかる。だいいち瀬瀬は、免許は持っていますが自分の車を持っていないようです。例の痴漢事件の係争中に金に困って売ってしまったとかで」

「うむ……」

そこで綾瀬は、しばらく黙り込んだ。そして、そのあと、自信ありげにこう言った。

「犯人は、その瀨瀨という男だな」

「えっ？　なにか、このアリバイにおかしなところでも？」

「いや、たしかに危ういアリバイだから、これから、しつかり崩していこうと思うが、それより、彼が犯人

だと思われる確たる事実がある」

「……はあ……？」

「名前だよ。だいたいこんなふう to 容疑者が出そろった時点で犯人を見破るには、そこに注目すればいい。

その中でいちばん奇妙な名前の人物が真犯人だ」

「……へ？」

綾瀬の言葉に、権藤とリエは、思わず顔を見合わせた。

「どうしてだかわかるかね？」

なんだかおかしな論理につき合わされそうな悪い予感はあるが：：綾瀬がきいてほしそうなので、いちおう権藤は相づちを打った。

「：：ど、どうしてでしょう？」

「作者が読者のことを気にするんだな。読者にしてみれば、自分と同姓同名の人物が犯人だというのはやはりいやだろう。だから、犯人には、なるべく現実にな

さそうな名をつけるものだ。とすると、この四人の中では、まちがいはなく瀨瀨だろう。かなりおかしな名だ。

山田隆などという、どこにでもありそうな名の男が、犯人のわけはない」

「……」

権藤とリエは言葉を失った。推理小説と現実の事件が、完全にごっちゃになっていく。

「それに、この『瀨瀨』という名は、私の……いや、

署長の『綾瀬』という名に、字づらが似ているのも気にいらん」

「なんじゃそりや……」

あまりのことに思わずツツコンでしまい、権藤はあわてて口をつぐんだ。

リエと権藤の二人が、なんだか冷や汗をかくような思いをしていると、今日は綾瀬の話など聞こうともせずメイクに熱中していたサツキとミミがメーキャップ

テーブルを立った。

「そろそろ時間だから、あたしたち、行くわね」

午後から、撮影が始まるということだった。

なんだか気取った感じで歩き、オフィスを出て行く二人を、権藤とリエは、ポカンと見送った。すでに、すっかりモデル気分だ。

と、そこでまた、綾瀬の声があった

「というわけで、権藤君。君に手伝ってほしいことが

ある。これから来てくれんかね」

なにが「というわけ」なのかよくわからなかったが、権藤は先刻の悪い予感がまたぶり返してくるのを感じた。

「……そうそう、途中で本屋に寄って鉄道の時刻表を買ってきてくれたまえ。あと、地下鉄の駅で市営地下鉄の時刻表をもらうのも忘れずに」

その予感、さらにふくらんだ。

「彼女が元美ちゃん。こっちがサツキちゃんとミミちやんね」

「よろしくお願いします」

いっしょにこの仕事をするモデル、蓑浦元美を茉莉から紹介され、サツキは、その見かけに意外な印象を持った。想像していたのとちがって、モデルらしくないのだ。

確かに顔は正統派の美人だし、体もきっちりとしエ
ープされ文句のつけようがない。服やアクセサリーの
センスもまちがいない。しかし、そのセンスの良
さが、「人より際立つ」という方向ではなく、「まわ
りに緊張感を与えない」という方向に働いていた。モ
デルカタログで見た死んだ楡島麗子や、あるいは茉莉
のように、どこか我勝ちに主張しているという感じを
受けないのだ。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

穏やかに微笑むその物腰も、落ち着いて控えめだつた。

ほんとに、こんなおとなしそうな人に、モデルなんてつとまるんだろうか……？

昨日からモデルのまねごとをはじめたばかりだといふのに、サツキはそう感じた。

「スタジオはもう準備を始めてるから、私たちも急い

でやつちやいましよ。まず、カジュアルなリゾートフ
アッションって感じの服からね」

茉莉に促され、サツキとミミ、そして元美は、さつ
そく着替え室に入った。

サツキたちが「うわっ、このデザイン、けっこう大
胆なんだ」とか、「このサンダル、かわいっ！」とか
ちよつとはしやぎながら着替えている横で、元美は淡
々と、かつ、てきぱきと服を替えた。着替え終わると、

メイクも——サツキたちのように茉莉の手をわずらわせることなく——さっさと自分ですませた。

「茉莉さん、ヘアスタイル、こんな感じでいい？」

「うん、水着の時はなにか髪飾りをつけてもらうかもしれないけど、とりあえずはそれでオツケー」

サツキのメイクをしながら茉莉がそう返事したのにうなずくと、元美は、撮影前の最終点検という感じで、姿見の前に立った。

木綿のフローラルプリントで、丸く開いた襟ぐりのフリルがそのままフレンチスリーブのようにもなっているそのミニワンピースは、明るいうりぞートファツシヨンそのものだったが、元美が着ると、品よくおとなしめに見えた。

サツキは、パープルのチューブトップにゴールドのペンダントとブレスレット、それに大きくフレアをとった生成きなりの麻スカートを合わせるといふ開放的だが大

人っぽいコーディネート。ミミは、ピンクのキャミにジーンズのショートパンツというまさにビーチギャルという組み合わせだ。

サツキたちもメイクを終え、階下に降りAスタジオに入ると、山田と瀨瀨、そして笠置が、準備万端整ったという感じで待っていた。撮影ステージのまわりには、昨日以上にストロボやライト、レフ板が組み立てられている。

「まず、三人のカットからまとめ撮りしてしまおう」
山田の言葉にサツキたちモデルの三人がステージに立つと、纈纈がストロボの向きなどを調節し、さらに露出計を持って忙しく動き回った。

ジーンズ姿のカメラマン二人とはちがい、背広にネクタイの笠置は、少し離れたところで腕組みして黙って見ていた。

「さて、じゃあ、いくか」

山田がそう言ってカメラの前に立った時だった。

まわりの空気が変わるのを感じた。

それは、スタジオ全体が緊張したからでもあったが、それ以上にサツキは、自分のすぐ横でなにかが変化したような気がした。

その気配に思わず見やると、元美の顔つきがさつきまでとはがらりと変わっていた。

先刻まで地味にさえ見えたその表情が、一瞬にして

輝いていたのだ。単に気持ちが悪かったというだけでなく、それは、まさに海辺のリゾートにきた開放感いっぱい笑顔になっている。元美の着ている服までが、さっきまでとはちがう華やかなものに見えた。

撮影が始まり、山田の指図に従ってあれこれポーズするときも、元美はすぐに山田の要求を理解し、体全体の姿勢から指先まで、きっちり決めていながら少しも不自然ではないフォームをつくった。

山田の言葉に——昨日の瀬瀬より確かにやりやすい気はしたが——ただおたおたするばかりの自分やミミと比べ、元美にプロのすごみというようなものを感じて、サツキは舌を巻いた。

「さて、じゃあ、はじめようか」

こちらは、そんな職業的緊張感などまるで感じさせない声で、綾瀬が言った。

その声に権藤は、あきらめ顔でデスクの脇に立った。広いデスクの上には、すでに、権藤が入手してきた大判の全国時刻表と名古屋市営地下鉄の総合時刻表、そして、この地方の鉄道路線図が広げられている。さらに、メモするつもりらしいレポートパッドと、参考書のつもりなのだろう、アリバイ崩しものの推理小説が何冊か積み重ねられていた。

「その瀨瀨という男が預金を下ろした『多治見』とい

うのは、中央本線の駅だね」

綾瀬にそうきかれ、権藤は、しぶしぶながら仕入れ
たばかりの知識で答えた。

「ええ、美濃太田に向かう太多たいた線というローカル線の
始点にもなっています、名古屋から始まる中央線が、
岐阜県に入った最初の駅です」

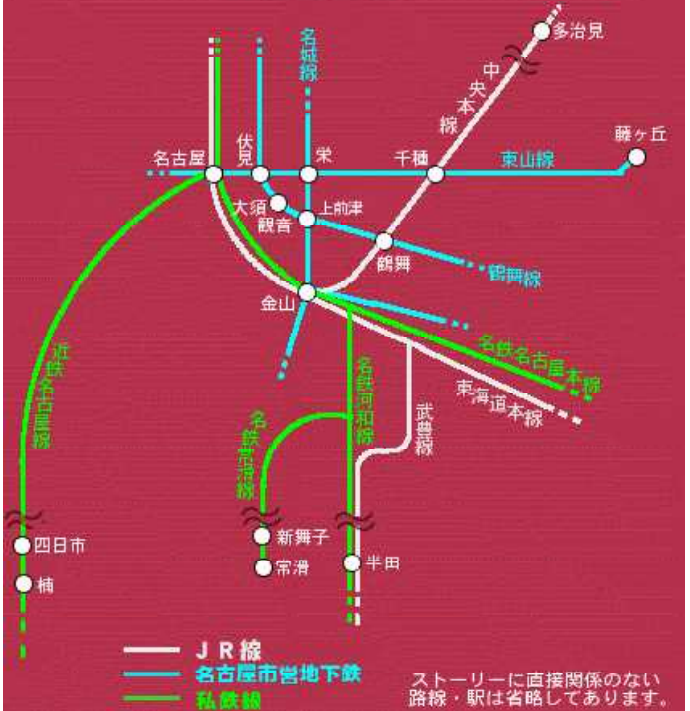
「ふむ。で、今回の事件の現場から中央線に乗るとす
ると、どんなルートが考えられるのだろうか？」

じつは権藤も綾瀬同様、この地方の出身ではないので、今ひとつ不案内なところはあるのだが、少なくとも現場で働いている分、鉄道路線の接続くらいは頭に入っていた。それで、路線図を示しながら説明した。

「例のマンションは、地下鉄鶴舞線つるまい『大須観音』駅のすぐそばですから、まずはこれに乗ります。二駅東へ行くと『鶴舞』駅で、ここにはJRの駅があります。

そこから中央線の上り電車に乗るとというのが、最も乗

関係路線図



り換えの少な
 いルートだと
 思います「
 」とすると、
 瀬瀬が『多治
 見』で出金し
 たという19時
 59分：：その

時刻に間に合う電車が、何時にこの『鶴舞』を出るかを調べればいいわけだね。ちよつと、チェックしてみよう」

綾瀬はそう言って、カラーマーカーを権藤に渡してよこした。

それで、しかたなく権藤は時刻表を繰り、中央本線上りのページをさがした。

ページを見つけると、休日運行の列車を除いて、20

時前後に「多治見」に着く列車をチエックする。

「うーん、キャッシュユデイスペンサーの記録は正確でしようし、多治見は追いつき、越し駅ではありませう。んから、待機のために電車が早く着くようなことはないでしょう。とすると、この20時02

■ JR中央本線 上り ■				
	快速	普通	快速	セントラル ライナー 21号
名古屋	1908	1914	1928	1940
金山	1912	1918	1932	1944
金鶴	1915	1921	1935
千種	1918	1924	1938	1948
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
多治見	1942	1955	2002	2011

分『多治見』着の快速と、20時11分着のセントラルライナー21号というのはそもそもだめですね。19時55分着の普通か42分着の快速ということになる。55分の方だとして、この電車が『鶴舞』を出るのは19時21分。：：あつ、これだけでもう、19時20分の犯行後に乗るのは無理だとわかります」

権藤は、こんなことにつき合うのを早くやめたいという気持ちもあり、そう断じた。

「いや、アリバイ崩しは地道な努力が大切なんだ。いちおう、地下鉄とのつながりを見ておこう」

「は、はい……。この21分の電車に乗るとすれば……」
権藤はそう言いながら、今度は地下鉄の方の時刻表に目を移した。

「鶴舞線、鶴舞線と……、これだな。えーと、19時23分『鶴舞』着では間に合わないわけですから、18分着の地下鉄ということになりますね。だとすると……『大

須観音』発は19時14分。うむ、まだ被害者は生きていた時間です」

ほら、すぐ結論は出るのだ。これで綾瀬もあきらめるだろう。

権藤はそう思いながら、時刻表から顔を上げた。

と、綾瀬は「じゃあ……」と言った。

■鶴舞線 赤池・豊田方面■
19時台 (東向き)

：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
大須観音	..	09	14	19	24	29	34	40	..
上前	..	11	16	21	26	31	36	42	..
鶴	..	13	18	23	28	33	38	44	..
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：

「この『鶴舞』からではなく、中央線に乗るとすれば
……？」

「……えっ？ ええ、中央線で『鶴舞』の前の駅は

『かなやま金山』ですが、地下鉄を『かみまえづ上前津』で降りて乗り継

げば行けます。それだと……」

直接行って乗れないものが、一度クッションを置いて乗れるわけがない。

そうは思ったが、綾瀬を早くあきらめさせるために、

権藤は、今度は中央線と地下鉄名城線の時刻表を見くらべた。

「さっきの電車が『金山』を出るのは
 : : 19時18分。で、これに間に合う地
 下鉄は : : 『金山』着19時17分。金山
 総合駅のJRと地下鉄のホームは多少
 離れていますから、1分しか乗り換え
 時間がないというのはかなり無理があ

■名城線 名古屋港・新瑞橋方面■
 19時台 (南向き)

：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
上前津	..	05	09	13	17	20	24	28	31	35	38
金山	..	09	13	17	21	24	27	32	35	39	43
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：

ります。でも、そこは目をつむったとして……、この電車が『上前津』を出るのは13分。だとすると、それに乗るためには……じつは、この『上前津』も名城線と鶴舞線のホームが離れていてかなり無理があるんです。……鶴舞線の方は11分着。『大須観音』を出るのは、19時09分。つまり、さっきのより、さらに一本前の電車になるわけです」

うん、これで完璧だ。けっきよく、無駄な努力など

しない方がいいのだ。

権藤がそう思っていると、綾瀬はなにかに気づいたように、ハツとした顔をした。

「権藤君、今君がチェックしたのは、もしかしたら、平日のダイヤではないかね？」

「……え？ ええ」

「事件があったのは、確か土曜日じゃなかったか。ほら、この前、志水さんもそう言っていた。土曜日は、

休日ダイヤだろう」

しまった！　土曜日にも働かされることが多いので、
つい平日だという感覚だった。

「もう一度、休日ダイヤでチェックし直してみよう」
休日なら、電車の本数はさらに少なくなるだろう。

こんなこと、やっても無駄にちがいない。

そう思い、そつとため息をつきながら、権藤は、ふ
たたび全国時刻表の方を開いた。

「オツケー。こんなところでいいだろう。ちよつと休憩を入れて、水着の撮影に移ろう」

山田のひとことで、スタジオ全体の緊張が解けた。

三人でのカットのあと、一人ずつのカットを撮り、その順番が最後になったミミは、ステージ上で大きくため息をついた。

山田にカメラを向けられているうちは、文字通り我

を忘れていた感じだ。最初こそ、緊張もあつたし、――たとえコスプレ趣味で撮られ慣れているとはいえ――多少の照れもあつた。そんな緊張や照れが、山田に言葉をかけられ、見つめられ、シャッターを切られていくうちに、いつしか消えていってしまった。いや、むりやりはぎ取られてしまった感じだった。

いつの間にか、自分がここへ来ている理由も、自分の正体さえもわからなくなっていた。コスプレで身に

つけていたはずの芝居がかった表情さえみごとに消され、「ひとりの女の子」として裸にされていた気がする。山田に言われたことは、なんでもできる気がした。したいと思っていた。言ってみれば、今の瞬間、自分は、山田に恋していたのかもしれない。

そんな自分自身に気づき、我に返ったことで、疲れが一気に襲ってきた感じだった。

「ミミ、今、めっちゃめっちゃかわいかったよ」

休憩と着替えのためにスタジオを出ていく他のメンバーを、まだステージに立ったままボーっと見ているとサツキがそう声をかけてきた。ミミは、またひとつため息をつきながらうなずいた。

「なんだか、あたし今、山田に催眠術にかけられてるみたいだった。たぶん、モデルって、何度もこういう経験をして、そこを通り越さないで、あの元美って人みたいなのプロにはなれないんだらうね」

彼らのあとを追いながらミミが言うと、サツキは「あ
たしも最初はそう思ったんだけど……」と、ちよつと
首を傾げた。

「あの人、仕事の面ではプロなんだろうけど、やっぱ
り最初の印象どおり、弱いところのある人かもしれな
い」

「ん？ どういうこと？」

「自分の撮影が終わったあと、山田を見ている彼女の

目が普通じゃなかったのよね。茉莉が山田に話しかけたりすると、どつか悔しそうに目をそらしたりもしたし」

「じゃ、あの人も……？」

「うん、たぶん、山田と関係があるんじゃないかな？」

「サツキ、見てただけでよくわかるね」

「ま、女のカン……ってやつ？」

サツキがそう言ったので、ミミは思わず笑ってしま

った。しかしお互い、その笑顔がちよつと複雑なものになっていった。「女のカン」が働いたのは、サツキもまた、撮影中、山田に対し、そんな感情を持ったからにちがいない。

そのあとミミとサツキは、「いかんなあ……」とでもいうように苦笑いを浮かべながら、二階への階段をのぼった。

「休日のダイヤで、20時前後に『多治見』に着くのはこの四本ですね」

ふたたびチェックし直したJRの時刻表を見ながら、権藤は言った。

「あれ？ 休みの日は、

セントラルライナーがいつもの時間より早いんだ。：

■ JR中央本線 上り ■				
	快速	普通	セントラル ライナー 21号	快速
名古屋	1908	1914	1930	1942
金山	1912	1918	1934	1946
金鶴	1915	1921	・・・	1949
千種	1918	1924	1938	1952
：	：	：	：	：
：	：	：	：	：
多治見	1942	1955	1957	2016

：そうか、平日と比べると、こっちの快速と順番が入れ替わるような形になってるわけですね」

「なるほど。それだとどうなるかね？」

「はあ、このセントラルライナーは、19時57分『多治見』着ですから、ぎりぎりCD機に飛び込むこととはできるとは思います。残念ながら『鶴舞』には停まらず通過するようです。『鶴舞』で乗り換えるとすると、乗れる電車はその前の55分の普通。これは、平日も休

日も走っている……つまり、さっきやったのと同じ電車です。だから、結果は同じでしょう」

権藤がそう言うと、綾瀬は首を振った。

「いや、対応する地下鉄の方も休日ダイヤに変わるわけだろう。もう一度調べてみよう。アリバイ崩しは、可能性をひとつずつぶしていくということになって
いる」

いったいどこで、そういうことに「なっている」ん

だ？　そもそも、「鶴舞」を出るのが19時21分なのだから、犯行後これに乗るのはどう考えても無理だろう。

そう思いながらも、権藤は、さつきと同じ作業を繰り返した。

「休日の鶴舞線で21分に間に合うのは：：19分『鶴舞』着ですか。これ

■鶴舞線 赤池・豊田方面■
19時台 (東向き)

：	：	：	：	：	：	：	：	：
大須親音	..	05	15	19	25	35	45	..
上前津	..	07	17	21	27	37	47	..
鶴舞	..	09	19	23	29	39	49	..
：	：	：	：	：	：	：	：	：

だと、『大須観音』発は、19時15分になります」

「ほら、さつきより1分縮まった」

「いや、しかし、いずれにしても犯行の前ですし……」

「じゃあ、そのセントラルライナーとやらに、さつき
みたいに『金山』から乗ると考えたら、どうなるか
ね？」

「はあ……」

どうせやっても無駄だと思いながら、権藤はまたふ

たたび、JRの時刻表と名城線の時刻表を見くらべた。

「セントラルライナー21号が『金山』を出るのは、19時34分。これに間に合う名城線は：：『金山』着19時31分。これが『上前津』を出るのが27分。と
 いうことは、鶴舞線は：：あつ！」

鶴舞線の休日時刻表を見たところで、

■名城線 名古屋港・新瑞橋方面■
 19時台 (南向き)

：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
上前津	..	07	11	15	19	23	27	31	31	35	39	..
金山	..	11	15	19	23	27	31	35	35	39	43	..
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：

権藤は大きな声をあげ、そしてこう言った。

「……惜しい！」

「ん？ ……どうしたのかね？」

「『上前津』着27分という電車があるんです。これだと、『大須観音』は25分発になる」

「うむ、犯行後になるわけだね。犯人が乗ることができきる」

「ええ、しかし問題は、この電車が『上前津』に着く

のと、そこから名城線の南向きの電車が出るのがまったく同じ時刻だということですよ」

「電車が到着してから発車するまで、それぞれの停車時間は重なっているわけだろう。その間に乗り換えることはできるんじゃないのか？」

「いえ、あの駅では無理です。さつきもちよつと言いましたけれど、『上前津』は、鶴舞線と名城線のホームが離れているんです。乗り換えるには、通路と階段

をけっこう歩かなければいけない。少なくとも2・3分はかかるかと……」

「そうか……」

綾瀬は、残念そうな顔でそう言った。

纈纈のアリバイを崩すぎりぎりのところまで来たのには驚いたが、これで、もう終わりだろう。

権藤はそう思った。

ところが綾瀬は、ふたたび路線図を見ながら、腕組

みして考え込んだ。

「なんだかちよつと、アクセントが足りない感じね」
メイクとヘアの直しがすんだところで、黒のビキニに着替えたサツキを立たせ、茉莉はそう言った。

体全体を点検するようなその視線に、サツキはブレ
ストフォームがばれるのではないかと一瞬ひやひやし
たが、どうやらその心配はなさそうだった。茉莉は、

ブラから顔を出す「胸」に注目しているわけではない。
「水着でアクセサリをそれ以上着けるのもおかしい
しね」

サツキはすでにゴールドのネックチェーンとブレス
レットを着けている。

「そうだ。いっそのこと、腕にタトウーでも入れちゃ
おうか？」

「タトウーって……描くんですか？」

まさか本当に入れ墨するはずはないと思い、サツキがきくと、茉莉は「シールよ」と答えた。そして、メーキャップスペースの隅に置いてあった自分のシヨルダーバッグの中をゴそゴそとかきまわしはじめた。

「いつもタトウシールとかを持ってるんですか？」
「ううん、作るの」

茉莉の答えに、サツキは、すぐ横にいるドット柄のビキニのミミと顔を見合わせた。

すると、茉莉は、バッグの中からCDケースと印刷用の用紙：：：とかシートのようなものを取りだした。

「ちよつと、パソコン貸してね」

打ち合わせテーブルで笠置と話し込んでいた山田に、そう声をかけると、茉莉はそのCDとシートを持って壁際のサーバーのところまで行った。

ミミはどうやらその言葉に興味を持ったらしい。サ

バーのディスプレイの前に座った茉莉に、水着姿のまま近寄り、それをのぞき込んだ。

そこでサツキはちよっと迷った。こんな格好で他のメンバーのそばに行くのが、なんとなく恥ずかしい気がしたからだ。

見ると、すでに着替えもメイクも終えた元美は、テーブルの隅でなにかの雑誌を読みながら纈纈が入れてくれたコーヒーを飲んでいた。着ているオレンジのビ

キニの上には、肩から大きなポンチョのようなものを羽織っている。

それでサツキも、メイクルームを見まわし、壁に同じものが何着か掛かっているのを見つけた。

元美と同じようにポンチョを羽織り、さらにミミの分も持ってサーバーのマウスを操る茉莉に近づくと、ミミが言った。

「なるほど、CD-Rに入れてある画像のライブラリ

ーから選んで、それをシール印刷用のシートにプリントするのね」

「うん、こうすれば、その時の服とかに合わせて、即席のアクセントパッチやタトウシールが作れるですよ」

サツキがのぞき込むと、ディスプレイには、小さな赤いバラの絵が表示されていた。

と、横に置かれたインクジェットプリンターが動き

出し、茉莉がセットしたらしいさっきのシートが吸い込まれていった。

印刷が終わると、茉莉はそのシートをとり、手にした鋏でバラの絵を器用に切り抜いた。

「腕を出して」

その言葉にサツキが左の腕を差し出すと、茉莉はそのシールを二の腕あたりに貼った。

「ほらね」

無光沢のその表面は、サツキの肌ともなじみ、確かに赤いバラのタトウーに見えた。

バラを自分のトレードマークとして愛用の単車用ヘルメットなどにも描いているサツキは、それが気に入り、また、茉莉のそんな工夫にも感心して大ききうなずいた。

と、そこで、山田が瀬瀬を呼んだ。

「瀬瀬、ちよつと来てくれ」

瀬瀬が近づくと、山田は、笠置が話しながら描いていたらしいラフスケッチを示して言った。

「今、笠置さんと相談して決めたんだが、最終日に撮る予定のポスター、白バックと黒バックの二種類作ることにした。で、Bスタの方のホリゾントを黒く塗ろうと思うんだ」

「バック紙を使うんじゃないくて、ホリゾントそのものをですか？」

「ああ、悪いけど、このあと、その作業をやってくれ
るか」

「はい」

あまり気の進まない作業なのかもしれない。纈纈は、
どこかしかたないという感じをにじませながらうなず
いた。

「さて、じゃあ、はじめようか」

山田がそう言って席を立ち、それを合図にするよう

に、全員が立ち上がって出口のドアへと目をやった時だった。

そのドアが、ノックされた。

「……はい」

山田が言うと、ドアがおずおずと開き、そこから、厚手のトレーナーの上からサロペットを着てビン底めがねをかけた女が顔を出した。

「あの……、こちらでアシスタントのアルバイトを募

集してるって聞いたもんですから……」

女の言った言葉に、サツキとミミは思わず顔を見合
わせた。

その格好がひどく田舎臭かったのでひと目ではわか
らなかったが、その声は、まちがいなくリエだったの
だ。

路線図を見つめたまま黙り込んでしまった綾瀬の脇

で、権藤は手持ちぶさたに立っていた。

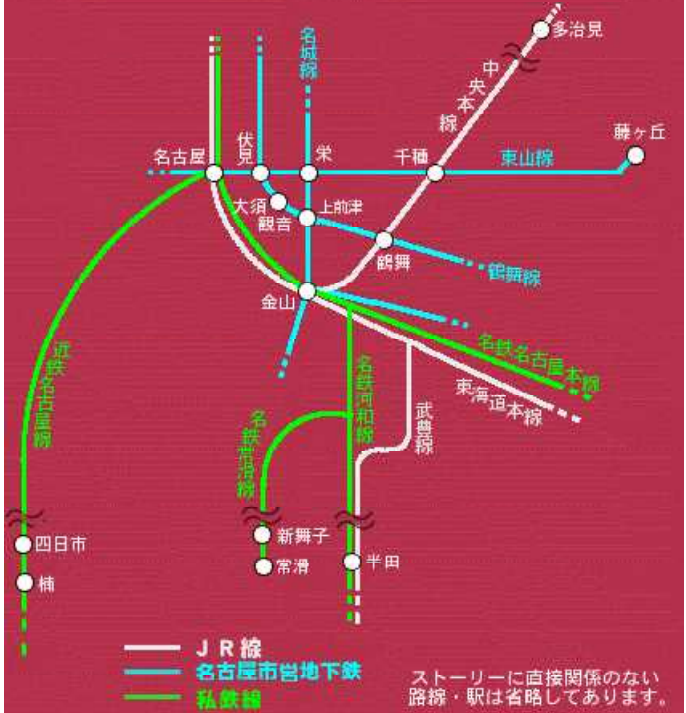
……もう、帰ってもいいということだろうか？

そう思っ、さつきから声をかけようとしているの
だが、落胆しているらしい綾瀬が、どこか気の毒な気
もしているのだ。アリバイを崩せる寸前まで行って、
行きづまったのだから、しかたないだろう。

と、綾瀬が、落胆とはほど遠い声で言った。

「私がさつきからずっと気になっているのは……」

関係路線図



「は？ ……」

「この、『鶴舞』の次の『千種』ちくさという駅……」

「『千種』がどうかしましたか？」

「ここにも地下鉄が通っている」

「え、ええ、東山線が……」

「たとえば、『大須観音』から『上前津』まで来て、さつきみたいになの『金山』方面に行くのではなく、逆方向の『栄』まで行けば、東山線に乗り換えられる。千種でJRに乗れるわけだ」

今度は、東山線か……。でも、それでは乗り換えがさらにひとクッション増えて、時間をロスするばかり

だろう。

権藤は、綾瀬に同情したことを悔やんだ。

「ちよつとやってみよう」

そう言われ、心の中でため息をつきつつ、今度は東山線の時刻表と中央線の時刻表を見くらべた。

「えーと、セントラルライナーが『千

■東山線 藤ヶ丘方面■
19時台 (東向き)

：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
伏見	..	08	12	16	20	24	28	32	37	42
柴	..	10	14	18	22	26	30	34	39	44
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
千種	..	13	17	21	25	29	33	37	42	47
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：

種』駅を出るのは19時38分。これに間に合う東山線は：：ちょうど1分前の37分に地下鉄『千種』駅に着く電車がありま
す。これが『栄』を出るのは34分。これに乗れる名城線というと：：」

今度は、名城線北向きの時刻表だった。

「：：『栄』着：：あつ、やっぱり同じ34分だ。これだと『上前津』発は31分で

■名城線 ナゴヤドーム・砂田橋方面■
19時台 (北向き)

： 上前津	..	： 07	： 11	： 15	： 19	： 23	： 27	： 31	： 35	： 39	： 43	..
： 栄	..	： 10	： 14	： 18	： 22	： 26	： 30	： 34	： 38	： 42	： 46	..
： ：		：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	

すから、『上前津』着27分の鶴舞線、つまり『大須観音』を25分に出るさっきの電車から乗り換えられると
いうことになります。ただ……」

今度もぎりぎりの綱渡りだ。

「『栄』駅は『上前津』ほど複雑な構造を
していませんから、猛ダッシュで階段を駆け上がれば
できないことはないかもしれませんが、乗降の時は
いつも階段が混みます。やはり降りる電車と乗る
電車が同時刻とい

うのは無理があるかと……」

権藤は、綾瀬のひっこさに閉口する気持ちと、自身残念に思う気持ちの両方を抱きながら、そう言った。

「なんで来たのよ？」

Aスタジオで撮影前の段取りが進むのを見ていると、サツキが他の人の目を気にしながら近寄り、小声

できいてきた。

「公平ちゃんもいなくなつて、ヒマだったし」

目を合わせないようにしながらリエが答えると、黒のビキニの上にポンチョを羽織ったサツキは、またちらりとこちらを見て言った。

「それにしても、思いきりダサイ格好ね」

「カメラマン志望の女の子ってセンをねらったんだけど、ちよつとリアルすぎ？」

サツキにはああ答えたが、今回の事件の謎を解くため、リエは、自らも容疑者たちと接触する必要を感じ、こんな扮装でやってきたのだ。いきなり来訪したアルバイト志望者に山田は驚いたようだが、リエが山田の経歴データを読んで知っていた出身校である写真専門学校の名をあげ、そこの学生だと名のと、「ちやうど忙しい時だから……」と、見学兼手伝いをしてくれということになった。

「じゃあ、また三人のカットからはじめようか」

山田に呼ばれ、サツキが、ミミや元美というもう一人のモデルとともにステージに移動したところで、山田は、纒纒にも声をかけた。

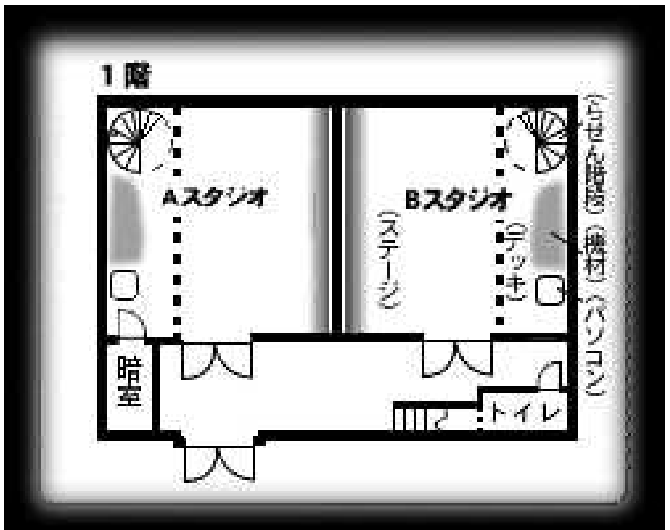
「あとは俺一人でいいから、さつき頼んだこと、彼女にも協力してもらってやってくれ」

それにうなずいた纒纒は、リエに「いっしょに来て」と言った。

サツキたちがカメラの前でどんな顔をするのか見てみたい気持ちもあったのだが、リエがあとに従うと、Aスタジオを出た瀨瀨は、ロビーを通りBスタジオの方のドアを開けた。

Bスタジオの中に入ると、そこはどうやら、Aスタジオと左右対称に造られているようだった。Aスタジオではステージにあたるライトのせいで逆に見にくかった内部の構造が、よくわかった。

ステージと反対側の壁からは、ちょうど普通の建物の天井くらいの高さで——上方から撮影するような時に使うのだろう——デスクが張り出し、部屋の奥側には、そこにのぼる螺旋階段があった。デスクの下には



さまざまな撮影機材らしいものが置かれ、また、デジタル撮影用のスタジオらしくパソコンやプリンターのつたラックがあり、その下にケーブルがとぐろを巻いていた。

リエがそんなスタジオ内部を観察していると、纒纒は、撮影機材の奥からセメントでも混ぜるような平たくて大きい鉄製の器と、先にローラーがついたモップのようなもの——どうやら、ローラーブラシらしい——

―を二本持ち出した。

そして、その器の中に、どろどろした黒い液体を流し込んだ。ペンキの類のようだ。

「これを、どこかに塗るんですか？」

リエが類推してきくと、瀬瀬は「ああ」とうなずいた。

「山田先生が、ホリゾントを黒に変えたいって言うから」

「ホリゾント？ この撮影用のステージみたいなのをそう呼ぶんですか？」

瀬瀬が、ステージ全体に目を走らせながら言ったので、リエはそう問い返した。

「うん、山田先生の言ったのはそういう意味。まあ、ホリゾントっていう言葉は、正確には、あそこの曲面になってる部分を表すんですけどね」

瀬瀬はそう言いながら、撮影ステージの奥を指さし

た。その床と壁面の間には角がなく、
確かに曲面でつ
ながっている。

「もともと、演劇の世界
から来たドイツ語らしい。

英語で言えばホライズン
かな」

「ホライズン？ : : 地

平線とか水平線とかいう



意味の？」

「ああ。ほら、芝居の舞台で、大平原とか海とか奥行きのある場面を表さないといけない時があるだろ。そういう場合、あれに似た装置で床と壁面の区別をつかなくする。あとは照明で広がりをつくるんだ。写真でも、全身を写したポートレートとかで、同じような絵は見たことがあるだろ」

「ああ、人が立ってる床と背景がつながって、区別が

つかないような……」

「そう。そんな奥行きを出すために、写真スタジオはもともとああいう造りになっているところが多いんだ。君、写真学校の生徒だっていうのに、なんにも知らないんだね」

「え、ええ。あんまり授業きいてないんで……」

リエはそうごまかしてから、あらためてステージを見渡し、言った。

「それにしても、今からここを、ぜんぶ塗るんですか？」

その作業よりはモデルの方がずっと楽な気がして、リエは、サツキとミミをちよつと恨めしく思った。

「そもそも根本的のところから、考え直した方がいいのかもしれない」

路線図を見つめ、ふたたび長考していた綾瀬がぽつ

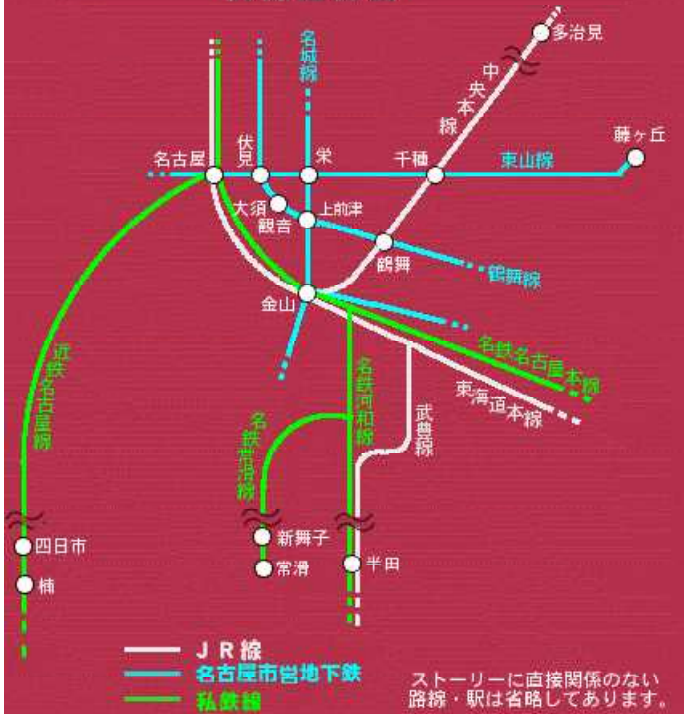
りと言った。

どうやら、やっと、この「アリバイ崩しゲーム」をあきらめる気になったらしい。

権藤は、その言葉をそう理解したのだが、それはやはり甘かったようだ。

「ここまで、最初の鶴舞線を『大須観音』から『鶴舞』や『上前津』の方向に乗るものとして話を進めてきたわけだが、『大須観音』から逆方向に乗るといふこと

関係路線図



も考えられ
 る。そうすれ
 ば、『大須観
 音』のすぐ次
 が、東山線も
 通っている
 『伏見』駅な
 んだから」

またなにを言い出すのかと思い、ため息をつきながら、権藤も路線図に目をやった。しかしそこで、綾瀬の言うのもまんざら悪いアイデアではないという気がした。

なんだか中央線から離れていくような気がして除外していたが、鶴舞線は「大須観音」付近で大きく北へカーブを切り、「伏見」では東山線と直交する。こちらへ行ってもたしかに遠回りにはならないだろう。

そう思った権藤は、ふたたび地下鉄
東山線の時刻表を見た。

「さっきの『千種』でセントラルライ
ナーに間に合う電車が、栄の手前の『伏
見』を発車するのが19時32分。で、こ
れに乗ることかできる鶴舞線は……」

そう言いながら、今度は鶴舞線北向
きの時刻表を指で追った。そして、「あ

■東山線 藤ヶ丘方面■
19時台 (東向き)

：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
伏見	08	12	16	20	24	28	32	37	42	：	：	：
栄	10	14	18	22	26	30	34	39	44	：	：	：
千種	13	17	21	25	29	33	37	42	47	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：

っ！」と大声を出していた。

「どうした？」

「1分前の、31分『伏見』着つて
 いうのがあるんです。この電車の

『大須観音』発は……29分だっ！」

「19時29分。ふむ。19時20分に殺
 人を犯してからマンションを出て、

地下鉄駅に行ったとしても、じゅうぶんに間に合う時

■鶴舞線 上小田井・犬山方面■
 19時台 (北向き)

：	：	：	：	：	：	：
大須	..	09	19	29	39	..
観音	..	11	21	31	41	..
伏見		：	：	：	：	
：		：	：	：	：	

間だ」

「……え、ええ。9分間あれば」

権藤の答える声が思わず興奮したものになった。

綾瀬の方は、そんな権藤の興奮に巻き込まれまいとでもいうように——じつは、権藤以上に興奮しているにちがいないのだが——、冷静を装った声できいてきた。

「『伏見』と『千種』での乗り換え時間が、どちらも

1分しかないようだが、その点は、無理はないかね？」

「は、はい。『伏見』は、鶴舞線のホームと東山線のホームが十文字に重なっていますから、上がる階段さえまちがえなければ、鶴舞線からすぐに東山線のホームに出られるはずです。『千種』の方は、地下鉄からJRに乗り換えるわけですから、自動改札を二度通らなければいけません。が、地下鉄の改札を出てすぐの地下道にJRの改札がある。しかも、そこを入ると目の

前が階段で、上がれば、そのまま中央線のホームです。途中ちよつと急ぐ必要はあるでしょうが、1分あればじゅうぶんに行けると思います」

言いながら、権藤は感動を覚えていた。当初、平日の時刻表を見ながら考えていたのと比べ、移動時間をなんと15分も短縮してしまったのだ。その15分間に犯行時刻が含まれるのだから、意味は重大だ。

と、綾瀬が、まるで判決を下すように言った。

「うむ、これでアリバイは崩れた。犯人はやはり瀬瀬だ」

「瀬瀬さん、ここはもう長いんですか？」

ローラーブラシで（先刻瀬瀬が教えてくれた正確な意味での）ホリゾントあたりを塗りながら、リエはきいた。

「いや、二ヶ月前に雇ってもらったんだ」

「だけど、その前からカメラマンはやっていたんですよね？」

「ああ、フリーのね。でも、ある事情で食いつめちやうって困ってたところを山田先生が拾ってくれた」

おそらく瀨瀨は、死んだ麗子がからむ例の「痴漢事件」で仕事がなくなっただろう。そういうところまで追いつめられていたのなら、なおさら、麗子を恨んでいたはずだ。殺しの動機としてはじゆうぶんな気が

した。

「じゃあ、山田先生とは、以前からお知り合いだったんですか？」

「狭い業界だから、名前くらいはきいたことがあったよ。名古屋に何千人もプロのカメラマンがいるわけじゃないしね。だけど、会ったのは、二ヶ月前、ある人に紹介してもらったのがはじめて。その人も山田先生も、僕にとっては大恩人ってとこだな。ここは大きい

仕事も多いし、山田先生が手が回らない時は、僕にも撮らせてくれるしね。仕事がなくて腐ってた時にくらべたら、ずっと充実してるよ。もちろん、スタジオの設備も最高だし」

「ほんとに立派なスタジオですよね」

「うん、スタジオ持ちのカメラマンが多い名古屋でも、あの若さで、これだけの個人スタジオを持ってる人は、そんなにはいないだろうね」

「へえ、名古屋は、スタジオを持つてるカメラマンが多いんですか？」

「うん、レンタルスタジオがたくさんある東京なんかだと、むしろ自分のスタジオを持ってないカメラマンの方が多いんだけど、名古屋は、スタジオ持ちじゃないと、一人前のカメラマンとは認めてもらえないところがあるんだ。ブツ撮りも多いしね」

「……ブツ撮り？」

「この地方は製造業が多いだろ。東京本社メーカーでも、工場はこつちに置いてるところが多い。東京みたいに流通中心じゃないから、人物を使ったイメージ写真なんかより、製品カタログとかのカタイ写真が圧倒的に多いんだ。で、そんな写真は、メーカーから新製品を預かって撮るわけだから、自分のスタジオじゃないと信用されない」

なるほど、ビジネスの面では「堅実」だと言われる

名古屋らしい話だと思った。

「山田先生にしても、名古屋には珍しく派手な仕事が多いとはいえ、じつは、そういう地味な撮影でスタジオを維持してるところもあるんだから」

瀬瀬はそう言ったあと、塗り終わった壁面を見上げた。

「さて、これで、やっと半分終わったな。あとは床だけだ」

この作業をしながら瀬瀬が語ったところによると、写真スタジオのステージは、汚れると、こうして塗り替えることは多いのだそう。しかし、それは白いペンをキを使う場合がほとんどで、こんなふうに、ステージそのものを白以外の色で塗ることは珍しいという。黒にしる他の色にしる、色バックを使うような時は、バック紙と呼ばれる大きな紙を垂らして背景にし、それをそのまま床にも延ばしてホリゾントをつくるのが

普通だという話だった。「今度のポスターは、大判の駅貼りだし、山田先生もリキが入ってるんだらう」と、瀨瀨は言っていた。

そのあとさらに1時間くらいをかけて床の半分くらいまでを塗ったところで、Aスタジオで撮影していた面々が入ってきた。どうやら、今日の分は終わったようだ。

ビキニ姿のミミがこちらに近づいてこようとしたの

で、リエは思わず叫んでいた。

「そこ、まだペンキが乾いてないんだから、踏まないで！」

それを笑って見ていた山田が、纒纒に向かつて言った。

「俺はちよつと用事があつて出掛けるが、二人で今夜中に仕上げといてくれ。明日はロケだから、一日おけば完全に乾くだろう」

そして、リエの方に顔を向けた。

「どうやら君は働き者のようだし、明日のロケもアシスタントとしてつき合ってくれよ」

そう言い残して出て行く山田につづき、サツキやミミもすました顔でこう言った。

「お先くっ」

サロペットのあちこちが黒く汚れ、さらにダサくなったりエは、ローラーブラシを床に這わせながら思っ

た。

くそーっ、あいつら、呪ってやる。

「それにしても、リエは遅すぎないか」

動物園の熊よろしく、クイーンズオフィスの中を行ったり来たりしていた権藤が言った。

「もうそろそろ終わって、こっちに向かってるんじゃない。纒纒に殺されてなければ、だけど」

半日のモデル稼業がよほどこたえたのだろう。ソファにぐったりともたれかかったサツキが、そんな権藤をからかうように言った。

と、パソコンのキーボードの上にうつぷすようにしていたミミも、だるそうな感じでつぶけた。

「なんか、公平ちゃんって、リエのことだとやけに心配するよね」

「公平ちゃんって呼ぶな！ ……そ、そんなことはな

いさ」

いつもの抗議のあと、権藤は、あわててそれを否定した。

リエが纈纈といっしよだと聞いて心配する気持ちは確かにある。でも、今日、権藤がリエの戻りを心待ちしているのは、けっしてそれだけではないのだ。

昼間、綾瀬といっしよに探り当てた成果を、権藤はまだ、サツキやミミに話していなかった。誰より先に

リエに聞いてほしいと思ったからだ。

なんと言っても、あれだけ鉄壁に見えた瀨瀨のアリバイを崩したのだ。

リエはきつと驚くにちがいない。

そんな顔を見てみたいと権藤は思っていた。

と――

「ただいま」

汚れたサロペット姿のリエが戻ってきた。

権藤がその姿に驚いていると、リエは、サツキと同じように、ソファに身を投げ出した。

「もお、二人ともなによ。人がつらい仕事やってるっていうのに、さっさと帰ってきて」

「そっちこそ。モデルがどんなに疲れる仕事か、わかってないでしょ」

リエとサツキのそんな言い争いが、それ以上つづく前に、権藤はあわてて呼びかけた。

「リエ」

「なあに、公平ちゃん」

いつもならつけ加える抗議も飛ばし、権藤はつづけ
た。

「あの殺しの犯人は、おそらく瀨瀨だ。今日、アリバ
イが崩れた」

「……えっ？」

やはり、リエは驚いたようだ。いや、リエばかりで

なく、サツキやミミも、一瞬にしてこちらを注目した。

「19時20分以降に『大須観音』を出て、20時前に『多治見』に着けるルートを見つけたんだ」

その時、ミミの座るデスクからキーボードをつづけざまに叩く音が聞こえ、権藤は一瞬それに気をとられたが、「どんなルートなの？」と聞き返してきたリエに向かい、自慢げに口を開いた。

「それは……」

「ふーん、『伏見』と『千種』経由でセントラルライナー21号つてのに乗ればいいわけね」

権藤より一瞬早くミミが言った。

「そう……えっ？　ミミ、なんでそれを……？」

「……ん？　ネットの路線検索、到着時間指定でやってみただけだよ」

ミミは、いともあっけなくそう言った。

べつに自分の考えが否定されたわけではないのだ

が、権藤には、今日一日すべてが徒労だったように思えた。

今、綾瀬の心をとらえているらしい時刻表ミステリーのロマンも、このIT時代には、もろくも崩れ去っていく運命なのだろう。

file-204

惨^{さん}夢^むの連鎖

または 春のビーチは恋には早い

すり切れたトレーナーとジーンズ、汚れたスニーカー、
もこもこした感じのブルゾン、そしてビン底メガ

ネ。

通勤客が行き交う中、そんな格好で立つリエに、サツキとミミは冷たい視線を投げかけてきた。

「もつと離れててよ。こっちまでダサく見えるでしょ」
「そうよそうよ、おんなじレベルの女だと思われたら、たまりませんわ」

こちらの二人は、オシャレなミニスカートにロングブーツ、襟にファーをあしらったコートなどを着てい

る。

「なによお、それ。あんたたちだってニセ女のくせに」
リエがにらみ返すと、サツキが「失礼な人ね。なにせ、あたしたち……」と言い、そのあと、ミミといっしよに気取ったポーズで声を揃えた。

「……モデルだし」

「ふん……っだ！」

サツキやミミのそんな「いじわる」にさらにふくれ

たあと、リエはちよつと気になって時計を見た。

「……それにしても、そろそろ8時まわるよ。ほんとにここでいいんだよね」

「うん、8時に駅の正面入口って言ってたけど」

ミミは、背伸びするように金山総合駅のコンコースを見た。

「ふあゝあ、眠い。どうしてあたしたちって、こんなひどい勤務体系なわけ？ 交通課にいた頃が懐かし

い」

サツキは、さつきの気取りなど忘れたようにあくびしながら、正面の「アスナル金山」という商業施設を眺めている。

名古屋の「副都心」という位置づけである金山は、この総合駅に集中する鉄道路線以外にも、バスなど南部方面からの交通網が集まっている。ラッシュが始まるこの時間、駅舎を足早に出入りする通勤客たちで、

三人のまわりも次第にあわただしくなってきた。

と、そこでミミが言った。

「あっ、あの人……」

その声に、リエとサツキがコンコースの方を見やると、左側にある名鉄（名古屋鉄道）の改札口方向から、蓑浦元美がやってくるのが見えた。元美は今日も目立たない感じのジーンズとジャケット姿だったが、まわりの女性より背が高いぶん、やはりそれなりには目に

ついた。

ミミが大きく手を振ったので、元美もこちらに気がついたらようだ。「おはよう」と言いながら近づいてきた。

「おはようございませう」

朝の8時なのだから、今日は、このあいさつも世間からずれているわけではない。

「みんなは、まだ？」

リエたち三人の顔を見回しながら、元美がきいた。

「ええ」

サツキが答えると、元美は「山田先生、また遅れてくるんだろうな」と、独り言のようにつぶやいた。

「……あつ、瀬瀬さん」

名鉄の向かい側、コンコースの右手にあるJRの通路を、瀬瀬が出てくるのが見えた。多治見から中央線で来るのだから、こちらになるわけだ。

「ふー、間に合ったみたいだね」

駆け足で近づいた瀬瀬は、照れたようにそう言った。と、ちようどそこへ、すぐ横にある地下鉄駅の昇降口から茉莉が出てきた。

「おはよう。：：：どうやら、今日もいちばん遅いのは山田先生か」

全員の顔を確認するようにしてから、茉莉もまた、元美と同じようなことを言った。

そんな茉莉の言葉を聞きとめたサツキが首を傾げた。

「ということは、今日は笠置さんはいらっしゃらないんですか？」

「あの人は家がちょうど途中だから、山田先生が拾ってくるんだと思うわ」

けっきょく集合時間から15分ほど遅れ、ワンボックスタイプの大きなバンが歩道前に到着した。「シヤチ

・フォト・スタジオ」の前に停まっていた車だ。サン
グラスをかけ運転しているのは山田だが、後部の座席
には、茉莉の言葉どおり笠置が乗っていた。

「おはよう。全員揃ってるな」

降りてきた山田は、遅れてきたことを詫びる様子も
なくそう言い、すぐに「瀨瀨、頼む」とつづけて、自
分は後部座席のドアをあけた。

「はい」

代わりに瀬瀬が運転席に乗り込んだ。

他のメンバーが山田につづいて後部ドアをくぐるのを見て、リエはどうしようか迷ったが、「撮影アシスタント」という自分の立場を考え、瀬瀬の隣の助手席のドアを開けた。

全員が乗ったところで、瀬瀬が確認するように振り向いた。

「まず、師崎もろやまきまで行けばいいんですよね」

「うん、たのみます」

笠置がうなずくと、向き直った瀨瀨はギヤを入れ、車を発進させた。

師崎は、知多半島の先端。名古屋市高速から知多半島道路に乗って終点の豊丘インターまで行くことになる。1時間半はかかるだろう。

ルームミラーをのぞき、リエが後部席をうかがうと、山田と笠置の男二人は最後部の座席に体をあずけてい

た。サングラス姿の山田はよくわからないが、笠置は目を閉じている。どうやら二人とも、足りなかった睡眠をここで補おうというつもりらしい。

その前の二列の座席では、サツキとミミも含めた「女」たちが二人ずつ並んでおしゃべりしていた。

「地下鉄で来たってことは、茉莉さんのお宅って、市内なんですかね？」

事件現場のマンションなのだから当然知っているのだが、ミミはとぼけてきいた。

「うん。名古屋の家は大須」

「……えっ、名古屋の家？」

今度は茉莉の言葉の意味が理解できず聞き返すと、茉莉は「そっちは、言ってみれば、私の名古屋オフィスみたいなものなのよ」と答えた。

「……ん？ どういう、ことですか？」

「自宅……っていうか実家も名古屋からそんなに遠いわけじゃないんだけど、今日みたいに撮影が早い時間だと、もろにラッシュの時間帯にぶつかっちゃってね。来るの大変なの。それで、モデル事務所のそばに部屋を借りてるわけ」

死んだ楡島麗子が1LDKの部屋に住んでいたのに、それより年配で業界経験の長い茉莉が狭いワンルームなのは不思議だと思っていたが、そういう事情な

ら納得がいった。

「撮影がある日の前日とかは、たいてい名古屋の方に泊まるのね。もつとも今日は、どっちにしようか迷ったんだけど。ロケ地は実家の近くなんだし、あつちで拾ってもらってもいいかなって」

「あつ、知多半島なんですか？」

「うん、常滑^{とこなめ}。何代もつづいてる造り酒屋の娘なの。

この歳まで独身だから親がうるさくってね。この頃、

だんだん名古屋の家にいることの方が多くなってる」
茉莉は、そう言っつて肩をすくめた。

前の席でも、サツキと元美が同じような会話を交わ
していた。

「元美さんは、名鉄沿線に住んでるの？」

「ううん、三重県。四日市のちよつと向ここの楠くすって
いう町」

「あつ、じゃあ、近鉄なんだ」

近畿日本鉄道名古屋線で名古屋に出て、そこで名鉄に乗り換え金山まで来たわけだ。

「その楠っていうところが実家なの？」

「ううん、実家は同じ三重県でも、もつとずつと向こう。和歌山県に近い方。短大が四日市だったから、その時から今のところでひとり暮らししてるの。在学中から名古屋でモデルをはじめて、卒業後、出てこよう

かとも思ったんだけどね。まあ、そんなに時間がかか
るわけでもないし、そのまま住みつづけてるの。もち
ろん部屋代は、今のところの方が名古屋よりずっと安
いし」

モデルという仕事に似合わず、元美が地道な堅実家
であることは確かなようだった。

「おはよう、クイーン諸君。元気にやっ取るかね？」

がらんとしたクイーンズオフィスに、妙に上機嫌な綾瀬の声が響いた。

「あつ、はい」

昨夜ミミから教えてもらったインターネットの路線検索サイトで遊んでいた権藤は、あわてて返事をした。

「今日は、メンバー全員、内偵に出っていて私しかおりません」

「ん？ ……リエもか？」

「ええ、彼女……というか、彼も、撮影アシスタントとして連中の中にもぐり込みまして……」

「なんだ……」

綾瀬は、どこかがっかりした声音で言った。おそろしく綾瀬も、昨日のアリバイ崩しをリエにほめてもらいたかったにちがいない。

しかし、すぐ気を取り直したようで「それなら、君は手がすいているわけだね」とつづけた。

「ええ、それは……」

また悪い予感を感じ、権藤は言葉の途中で微妙に軌道修正した。

「し、しかし、いろいろとやることも……」

でも、もう遅かった。

「じつは、昨日あれから、路線図を見てさらに考えたんだが……」

「は、はあ……」

「地下鉄の鶴舞線は、名鉄の犬山線や豊田線と相互乗り入れしてるじゃないか」

「……ええ、それが……？」

「つまり、『犬山』や『豊田』へ直接行けるわけだ。

で、『犬山』からは名鉄広見線が出ている。これに乗ると岐阜県の『可児』に行ける。『可児』には昨日君が言っていたJR太多線が通っている。つまり、このルートでも『多治見』に行けるということだ」

「し、しかし、それは……」

とんでもない大回りであることはまちがいなかった。どうやら綾瀬は、昨日の「思わぬ成果」にすっかりいい気持ちになって、もっと試したがつているようだ。

「このルートも検討してみる価値はあると思う」

いや、ない！ ぜったいに！

「さらに『豊田』の側には、駅はちよつと離れている

ものの、愛知環状鉄道の『新豊田』駅がある。そして、この線の北の終点は、中央本線の『高蔵寺』こうぞうじだ。つまり、このルートを使っても『多治見』に着ける」

なんで、30分で行ける「高蔵寺」まで、2時間近くもかかるコースをとる必要があるのか！

「……」

権藤はすっかり言葉を失っていた。

と、綾瀬が言った。

「とにかく、来てくれたまえ。二人でじっくり検討してみよう」

「寒〜っ！」

キヤミソールとショートパンツ姿のミミが、すぼめた裸の肩をさらに縮こまらせた。

「歯の根が……合わ……ないって……、このこと……なのね」

チューブトップのサツキが、まさに歯をガチガチぶつけながら言った。

薄いミニワンピースの元美だけは——カメラが向けられていない時はさすがに寒そうな顔をするもの——
——なんとか笑顔をつくっていた。

三人の後ろでは、漁から帰ったばかりの漁船が大漁旗をはためかせている。

「だめだ。そっちの二人、顔が夏になってない！」

カメラを向ける山田は、イライラした声でそう叫んだ。

知多半島先端の師崎漁港。釣り客は多いものの、サマーリゾート地ではないこの港は——いわば知多半島の象徴として——、簡単な撮影だけですます予定だったらしい。ところが、モデルがなかなかいい表情ができないせいで30分近くも長引いていた。

渥美半島と志摩半島に包まれ、三河湾と伊勢湾を分

ける知多半島は、いわば内海に突き出た半島である。太平洋にまともに接しているわけではないから、ふだんは波も穏やかだ。しかし、その先端ともなれば、海風をさえぎるものはなにもない。桜



さえ咲かないこの季節では——真冬ほどではないにしろ——、風は素肌に突き刺さるほど冷たいのだ。

それなのに、山田の要求は、新人モデルといえど容赦なかった。

「モデルなら、鳥肌なんか立てるな！」

——とまで言うのである。

「二人とも、早くちゃんと決めないと、ますます寒くなるばかりよ」

三人分のコートを持って見ている茉莉も、それがモデルの仕事とばかり、助け船を出してくれる様子はない。

「まだ撮らなきゃいけないところはいっぱいあるんだ。

ここであんまり時間はかけられないんだから……」

笠置は、ただただ時計ばかりを気にしていた。

レフ板を持って三人のモデルたちに向けているリエは——風に抗してそれを固定しているのは大変だった

が——、そんなサツキやミミを、ニヤニヤ笑って見ていた。なんと言つてもこちらは、厚手のトレーナーと、さらにブルゾンまで着ているのである。

ふふ、今朝のいじわるの報いだ。ざまあみろ。

そう思いながら、ふと視線をそらすと、ちよつと離れた埠頭に立った瀬瀬が、こちらに背を向け、しきりと漁船が並ぶあたりの中空を目で追っていた。露出を計り撮影準備をしたあと、レフ板をリエに任せた瀬瀬

は、今は特にやることもないのだろう。

∴∴それにしても、なにしてるんだらう？

と、瀨瀨は突然、手にしていたカメラを構え、速い勢いで体を回転させながら、レンズを横移動させた。

その間、何度かシャツターも切ったようだった。

そんな瀨瀨にさらに首を傾げていると、そこで――
「まあ、しかたないな。こんなところか。∴∴オーケ

ー」

ちよつとあきらめ気味の山田の声が飛んだ。

その声を耳にするや、瀬瀬はこちらに駆けてきて、
機材の撤収作業にかかった。

サツキやミミは、まるでひったくるようにコートを
受け取ってそれを羽織りながらバンの中に駆け込ん
だ。メイクしているからわからないが、おそらく唇は
紫色になっているにちがいない。

瀬瀬とともに、カメラを収めたバッグやたたんだ三

脚などをバンのハッチにしまっている時、リエはきいた。

「さつき、何を撮ってたんですか？」

「あつ、見られちゃった？」

瀬瀬は、ちよつとぼつの悪そうな顔で言い、こうつづけた。

「コシアカツバメがいたんだ」

「えっ？　　：　　：　　ツバメ？」

「ああ、普通のツバメとはちがうけど、そんなに珍しい種類じゃないよ。ただ、この時期にもう渡ってきてるなんて、さすがに知多半島の先っぽだなと思って」

「カメラをあんなに速く動かしたのは、ツバメだからなんですな」

「うん。だけど、たぶんまともには撮れてないな。飛んでるツバメを撮るのって、ほんとにむずかしいんだ」

「鳥を撮るのが趣味なんですか？」

「うくん、……っていうより、鳥専門のカメラマンを
めざしてて、それじゃあ食っていけないから広告写真
もやってる……っていう方が正解かな」

「あつ、そうなんですね。じゃあ、これまでもずいぶ
ん？」

「うん、これまでの作品、今、スタジオに置いてある
から、今度見せてあげるよ」

「ええ、ぜひ」

そんな話をしながらハッチを閉め、助手席に乗り込むと、後部席のサツキとミミは、コートを着たまま、茉莉が用意してきたらしいポットのココアを両手で握りしめ、まだ震えていた。

「うゝむ、やはり、どうやってみても、昨日のルート以上には時間は縮まらんようだね」

綾瀬のその言葉を聞いて、権藤はあきれかえった。

そんなことは、地図を見ただけでわかるだろう。そもそも移動距離が、昨日の三倍にも四倍にも伸びているのだ。

すでに付箋でいっぱいの時刻表を見やり、権藤は、今朝から繰り返している言葉をふたたび口にした。

「ですから、インターネットで検索すれば……」

「また、君はそういうことを言う。私だって、年齢のわりにはパソコンを使う方だ。コンピュータを認め

ないほど石頭じゃない。しかし、この前、志水一課長もこぼしておったよ。『最近の若い刑事は、すぐ楽をしようとする。汗をかかずして本当の捜査などできるわけがないのに』とね」

いや、それは、汗をかく方向が違うだろう。

権藤はそう思ったが、もはや説得は無理だと感じ、ちがう逃げ道をさがした。

「もう昼もまわりましたし、そろそろ、食事の時間で

は……？」

「うむ、そうだね。じゃあ、君はどこかで食事してき
たまえ。その間に、私は他のルートを考えておこう」

どうやら、午後からも、この無為な試練はつづくよ
うだ。

権藤はそう思い、あきらめ顔で署長室を出た。

そして、階段を三階から一階まで降りてきたところ
で、ハツとして廊下の角に身を隠した。

今しがた刑事課から出てきた男の顔に見覚えがあったからだ。

山久保鉄馬。この前、例の「痴漢現行犯」で捕らえた男だ。おそらくまた、任意の取り調べで出頭していたにちがいない。

山久保が捜査手法を問題にしている以上、署内で顔を見られない方がいい。

そう考え、権藤が物陰からうかがっていると、山久

保は、玄関ロビーのソファで待っていた背広姿の恰幅いい男に歩み寄った。男の胸にひまわりのバッジらしいものが見えたところを見ると、どうやらあれが鬼頭という弁護士なのだろう。

それにしても、けっこう多忙な弁護士らしいのに、いちいち任意の出頭に付き添ったりするのだろうか？

権藤が首を傾げていると、二人はひとことふたこと言葉を交わしたあと、いっしょに出て行った。

山久保が簡単に釈放されてしまった悔しさもあり、二人がどんな話をしているのか知りたい気もした権藤は、大きな体をちぢめるようにしてあとを追っていた。

師崎港での撮影を終えたあと、一行は、南知多の観光スポット、内海^{うつみ}海岸や南知多ビーチランドなどをまわった。

といっても、観光気分などはまるでなく、時間との

競争という感じで、撮っては次に移動するというのが実際のところだった。もともと強行スケジュールである上に、新人モデル二人が、寒さのせいではなかなかない表情ができないのが、その最大の原因だった。

ビーチランドでイルカのショーを見ているのを撮った時など、サツキとミミは「もつと楽しそうな顔をしろ！」と、山田からさんざん怒鳴られ、最後には——まるで本物の女の子のように——泣きべそさえかい

た。

そのあと、

バンは知多

半島の西海

岸沿いに北上し、途中にあつた——オフシーズンで閑散とした——レストランで短い昼食をとり、今は常滑市へと向かっていた。



いくら人の行き交う地下街とはいえ、縦も横も常人の何割増しかの体格ではまぎれるのがむずかしい。権藤は、鬼頭と山久保の二人からかなり距離をとって尾行していた。そのせいで、栄地下街に入っただけ、いったん行方を見失ってしまった。

しかし、きよろきよろしながらさがしていると、あるガラス張りの喫茶店に、鬼頭の顔が見えた。

鬼頭たちはその店のいちばん奥の席にいた。幸い、

顔を知られている山久保の方は、こちらに背を向けて座っている。その上、すぐ手前のテーブルが空いていた。

権藤は一瞬迷ったが、店に入ると、その席に近づいた。狭い店舗面積をめいっぱい効率的に使うためだろう。小さなガラステーブルと椅子とのすき間も狭く、二人に気取られずに大きな体を入れるのに苦労したが、権藤はなんとか、山久保と背中合わせの席に着く

ことができた。

ウェイトレスが来てコーヒーを頼んだところで、背後から鬼頭らしい声が聞こえた。

「ともかく、余分なことにはしゃべってないでしょうね」「ええ、もちろん。先生に教えていただいたとおりに対応をしています」

山久保が押し殺した声で答えた。

「しかし、何度も言いますが、君も本当につまらない

ことをしてくれたものです」

「面目ありません。こんなことで先生のお手を煩わすことになろうとは、思ってもいませんでした」

「それも、もとはといえ、君の性癖の問題でしょう」

「それを言われると……」

その会話に権藤はちよつと首を傾げた。どうやら鬼頭は、山久保の嫌疑が冤罪などではないことを承知の上で弁護人になっているようだ。

「よりにもよって、痴漢というのはいちばんまずい。それくらい、君だってわかっているでしょう。へたをすれば、それに関連づけて、以前の出来事をほじくり返されないとも限りません」

ふと気づくと、会話とともに、なにかがカチカチいう音が聞こえる。それが気になり、権藤はそれとなく背後に目をやった。と、キャップをしたままのペンを持つ鬼頭の腕が見えた。どうも、それでガラステーブル

ルを叩いているようだ。

もしかすると、こんなふうにはペンを手にして神経質に話すのは、法廷で身についた鬼頭の癖なのかもしれない。

「まあ、今回のことが他に波及しないように、供述にはじゅうぶん注意してください」

「ええ、わかっています。しかし、今のところ、やつらが以前のこと気づいているようすはないようで

す。それに関する事は一切きかれていませんし」

：：ん？

山久保の言葉に、権藤はふたたび首を傾げた。

刑事課は、以前の被害届をもとに山久保を追及しているのではないのか？　：：それとも、別の話なのだろうか？

「いや、いずれにしても用心するに越したことはない」
「ええ、それは重々。しかし、今、用心しなければな

らないのは、むしろ先生の方なのでは？」

「……ん？ ……ど、どういう意味ですか？」

「うちとは関わりのない先生のお仕事で、うちが巻き添えを食うのは困るということです。なんだか、周囲できな臭い話も聞こえてきますし」

「き、君はいつたい、何が言いたい……？」

「そりゃあ、当社の顧問弁護士をお任せしている先生です。法務担当課長としては、身辺くらいは、いつも

調べさせてもらっていますよ」

「……え？」

話の展開はよくのみこめなかったが、会話が攻守と
ころをかえたのは、権藤にも伝わってきた。

「先生が、当社にしてくださったのと同様のサービス
を、他社にも提供してるということは以前から知って
いましたし」

「それは……」

「いや、それはかまわないんです。それは、先生なりの経営努力なのでしようから。しかし、当社には関係ない件からであろうと、ほころびが出て、そのからくりがあからさまになるのは困る。そうなれば、当社にも甚大な被害が及ぶことになりますから」

「いや、そんなことはけっして……」

「じゃあ、なぜ、殺人などということが起こるのでしよう？」

山久保の言葉に権藤はぎよつとしたが、それ以上に息を詰めるような気配が鬼頭から伝わってきた。

「いずれにしても、なぜ、あの男とあの女が顔を合わせるというような、危ういことになったのか？ 私に

はそれがわかりません」

「き、君はそんなことまで……」

「それとも、それが先生のご意向だったとか。わざわざ女と会わせて、殺すように仕向けたということでは

ようか？ あのだ：：：瀨瀨という男に」

：：えっ!?

いきなり飛び出したその名に、権藤は面くらい、思
わず振り向いていた。

その時——

「き、君は、私を脅すつもりなのかね」

そう言いながら、鬼頭が山久保に向け、持っていた
ペンを突きつけた。

そして権藤は、山久保の頭越しに——つまり正面から——そのペンを見てしまった。

……あ……つ。

とたん、ガラステーブルが倒れ、コーヒークップが割れる音とともに、権藤の体が……椅子から……崩れ落ちた。

常滑は、最近では、中部国際空港のある町として知

られているが、もともと醸造業と窯業のさかんな町だ。海岸沿いの道を走っていくと、右手に、銀色のタンクや複雑に絡み合ったパイプが見えた。どうやら酒造メーカーらしい。その近代的な工場の裏手にまわると、昔ながらの酒蔵が並ぶ一帯がある。その酒蔵をバックに、また、一・二カット撮ることになった。

「ここは、ソニー創業者二人のうち、片一方の実家なのよ」

撮影の合間に、茉莉が言った。

「へえ。あつ、もしかすると、茉莉さんの実家もこのあたりなんですか？」

やはり寒さに震えながらも、その黒壁の酒蔵を見上げながらミミがきいた。

「ううん。うちは同じ酒屋でもここほど大きくないわよ。もう少し北の常滑港のそば」

茉莉は、そう答えた。

「……お客様、お客様、どうされました？」

ウエイトレスの声に権藤はやつと正気を取り戻した。

「……あつ、その……ちよ、ちよつと、貧血で」

強度の先端恐怖症のせいだなどと言っても信じてはもらえないだろうと思つた権藤は、体に似合わない言い訳をしながら、周囲をきよろきよろと見渡した。

しかし、その時にはもう、鬼頭と山久保の姿はどこにもなかった。

酒蔵の前での撮影を終えると、撮影隊一行はふたたび車に乗り、茉莉の言った常滑港の近くまで行った。

中部国際空港の人工島を横目で見つつ、バンは小高い丘に登った。そこには、巨大な登り窯などが連なる「やきもの散歩道」という散策コースがあり、観光地とも

なっている。

「やきもの」といっても常滑は、「瀬戸物」で有名な名古屋北東部の瀬戸とはちがい、昔から土管など大物の陶製品を作ってきた土地だ。今も、便器や建材で全国的に有名なセラミックメーカーの大工場があり、敷地内に建てられた「世界のタイル博物館」なども、その散策コースに組み入れられている。

そんな散策路の何か所かで、例によって真夏を装っ

た撮影が行われた。野外での撮影は、サツキとミミのせいでやはり時間がかかったが、その博物館内や、途中にある江戸時代の廻船問屋「瀧田屋」を保存した資料館では、室内でもあり予定より短時間で終わった。寒い思いをしないで済んだ二人もホッとした顔をしていた。

しかし、そのあと、バンに乗り込んだところで、二人はまた「えーっ！」と震え上がった。笠置から、次

の目的地、新舞子^{しんまいこ}では、水着撮影をされると言われたからだ。

それにしても、やつらはいったいなんの話をしていたんだろう……？

卒倒から醒めたばかりの靄^{もや}のかかった頭で、先刻の鬼頭たちの会話の意味を考えながら署長室に戻ってくると、綾瀬が手ぐすね引いて待っていた。

「さて、じゃあ、始めましょうか」

綾瀬のデスクには、中部地方全体の鉄道路線図が広げられている。

まったく、あんな話を聞いたところで気を失ってしまうし、そのあとはまたこれか……。今日はさんざんな日だ。

権藤はそう思った。

「新舞子」という地名は、海水浴場として有名な神戸の舞子海岸からとられたものだ。本家同様、こちらの「舞子」も、明治から戦後に至るまで「大都市に最も近い海水浴場」として夏場は賑わった。しかし、名古屋港を中心とする中京工業地帯の範囲内であり、高度成長時代には海が汚れ、しかも砂浜が埋め立てられてしまったことで、その役割を終えたかに見えた。

ところが平成に入り、出島のように造られた埋め立

て地に、新たに人工ビーチが造成され、マリンスポーツ施設なども建設された。公害対策などで伊勢湾の水が浄化されたこととも相まって、近年また、「名古屋に最も近いビーチ」として甦り、観光客が増えているのだ。

「天気ももったし、多少遅れてることを除けば、ラツキーだったと言うべきかな」

前もって連絡していたのだらう。海岸に面した施設

内のレストハウスが、夏場のようにパラソルつきの丸テーブルを砂浜に並べてくれていた。その椅子に腰掛けて笠置が言った。

「ああ、春にしては陽射しも強いし、コントラストを多少強めにするだけで、夏のビーチに見えるだろう」

撮影の時以外はずっとしているサングラスを持ち上げ、海岸を見ながら山田が答えた。

そんな二人の横で、纈纈とともに撮影の準備をして

いたリエは、今はサツキたちに同情する気になってい
た。いくら陽があるといっても、撮られる人間にとつ
て、現実の時間は早春だ。厚手のダウンコートを着て
いる山田とちがい、サツキとミミ、それに元美は、こ
の冷たい外気の中で水着にならなければいけないの
だ。

と、そこへ、施設内の更衣室で着替えたその三人の
モデルたちが出てきた。三人とも上から毛布を羽織っ

ているのだが、裸の脚がむき出しで、やはりがたがたと震えている。

「さて、じゃあ、それを脱いで、ここに座ってくれ」

山田がまた、そんなサツキたちの事情などおかまいなしに言った。

しぶしぶといった感じで毛布を茉莉に渡した三人は、むき出しの肩をすぼめ、なんだかおそろおそろという表情で、ビニールを格子状に張ったパイプ椅子に

腰を下ろした。

「……キヤツ！」

とたん、ミミがそう叫んで立ち上がった。ビキニの太股に触れたアルミパイプが冷たかったのだ。

「おいおい、真夏のビーチギャルがそれはないだろう」
笠置が、からかいとも嫌味ともつかない口調で言った。プロ意識の低い新人モデルを使ったことを、本心では悔やんでいるにちがいない。

ミミもそれを感じ取ったらしく、我慢するよう目をつむりながら、ふたたび椅子に座った。そこへレストハウスのボーイが、ブルーやオレンジのトロピカルドリンクを運んできた。

「そっちの二人は、それを持ってくれ」

山田の要求に、サツキとミミは気の進まない顔をしたが、しかたなく、そのグラスを手にとった。

山田はカメラの三脚の高さを調節しながら、遠景に

海を入れるような角度で三人をねらった。

二・三枚撮ったところで、ふたたび山田が言った。

「ちよつと、それを飲んでみてくれ」

その言葉にぞつとした顔をしながら、二人はストロ―に口をつけた。

「くわえるだけじゃなく、実際に飲んで！」

さらにそう言われストロ―を吸った二人は思わず肩を震わせた。

「だめだ！　暑い太陽の下で冷たいものを飲むシズル感がまるで出てない」

「シズル感」という言葉はよくわからなかったが、見ているリエにも、それは無理な注文だと思えた。

「顔も体もこわばってる。もっと力を抜けよ」

元美が山田の注文になんとか応えているのに対し、サツキとミミは、ビキニから伸びた手足がどうしても縮こまってしまおうようだ。

と、業を煮やしたらしい笠置が、脅すように言った。
「ちゃんとやってくれよ。浜辺じゃあ感じが出ないんだったら海に出てもいいんだぜ。時間に余裕があれば、そのつもりもあつたんだから。山田ちゃんは、近くのマリーナにモーターボートを持ってるっていうしさ」
その言葉に、サツキとミミは、さらに身震いした。

山田は今ひとつ気に入らないようだったが、新舞子

での撮影もな
んとか終わり、
そのあと一行
は、半島を横

切る形で、三河湾側のつけ根にあたる半田まで行った。
ここが、今日最後の撮影地ということだった。

ここにはやはり、酢やポン酢のメーカーとして有名な企業の本社があり、「酢の里」と名づけられた展示



施設がある。製造業の多い名古屋近辺は、近年、「産業観光」という観光政策が推進されている。この知多半島に限らず、こうした企業の建てる産業博物館は多いのだ。

江戸時代から使われていたという運河がそのまま残され、周辺に十棟以上におよぶ巨大な黒壁の醸造蔵――その内部は、実際には近代的な醸造工場なのだが――が並ぶ「酢の里」一帯での撮影を終えた頃、空はち

ようど夕焼けのあかね色に変わっていた。

ロケーション撮影は、日が沈めばそれで終了だ。笠置は、日没までになんとか予定を消化できたことで胸をなで下ろしたようだった。

「お疲れ様。さて、じゃあ帰ろうか」

瀬瀬とリエが機材の撤収を終え、全員がバンに乗り込んだところで笠置が言った。

と、元美が「私は電車で帰った方が早いと思うから」

と言い出した。

すると茉莉も、「私も、せつかくここまで来てるんだから、今日はこのまま実家に帰るわ」と言った。

「あつ、じゃあ、もう一度常滑まで送っていきましょか。距離は近いけど、知多半島を横断する電車があ
るわけじゃないし」

瀬瀬が気を使って言うと、それに山田が答えた。

「俺がタクシーで送ってくよ。茉莉と折り入って話し

たいこともあるし」

そんな山田の言葉に、元美がどこか複雑な表情をしたのにリエは気づいた。なんだかさみしそうな、そして悔しそうな顔を一瞬したあと、まるで今の言葉が聞こえていなかったように「JRでも名鉄でもいいから、いちばん近い駅で降ろしてください」と言葉をつづけたのだ。

と、山田も、それを気にする様子もなく言った。

「瀬瀬、悪いけど、笠置さんたちを名古屋まで送って、車をスタジオに戻しといてくれ」

「……はい。でも、先生は？」

「俺は、電車でもタクシーでも、適当に帰るから」

けつきよく、すぐ近くのJR半田駅で、元美と、そしてそこからタクシーに乗るといふ山田と茉莉が降り、リエたち三人と笠置、瀬瀬が、そのままバンで名古屋に帰ることになった。

「……くしゅん！」

バンが知多半島道路の半田常滑インターに向かうまでの間、ミミはさかんにくしゅみした。

「風邪ひいちゃったみたいだね」

ハンドルを握りながら、瀬瀬が言った。

「う、うん……」

ティツシュでしきりに鼻を拭いているミミに代わっ

て、サツキが言葉を継いだ。

「そりゃ、あれだけ寒い思いをすればね。あたしもまだ寒気がしてるもん」

「山田先生、カメラ持つと厳しいからな。先生にくらべたら、僕なんて、どうしようもなく甘いと思うよ。」

先生を見てると、ときどき、被写体を本当にモノとしか見てないんじゃないかと思う時がある」

瀨瀨の言葉に、サツキがうなずいた。

「そういう冷たいところに、撮られる側の女は、逆に
まいつちやうのね、きつと」

妙に実感のこもったその言い方に、リエは思わず苦笑したが、一方で、おそらくサツキもさっきの元美の表情を見ていたのだらうと感じた。茉莉と元美の間には——そしておそらくは、死んだ楡島麗子との間にも——、山田をめぐる女同士の微妙な関係があるにちがいない。

そう思いながら、ルームミラーをのぞくと、最後部の席に座っている笠置が、しきりに振り返り、リアウインドウからすでに暗くなっている道路を見ていた。

そして、車が知多半島道路に乗るところでこう言った。

「このまま帰るのもつまらんし、名古屋に入ったら、どこかで一杯飲もうか？」

「……というわけで、今、栄のカラオケ屋さんにいるの。ミミは風邪気味だし、ほんとのところ、三人ともくたくたなんだけど、この際、笠置と瀬瀬のことを探るいい機会かなと思って」

「……ああ、わかった」

カラオケ店の廊下の隅で携帯電話をかけながら、リエは権藤の返事のトーンにちよつと首を傾げた。

「なんか、公平ちゃんも疲れてるみたいね」

「……公平ちゃんって……呼ぶな」

いつもの言葉も、どこか精彩に欠ける感じだ。

「どうかしたの？」

「……ん？ ああ、名古屋から多治見まで行くのに、

長野まわりとか北陸まわりとか、果ては琵琶湖一周コースなんてルートまで持ち出してくるんだから……」

「えっ、どういうこと？」

「いや、こっちの話だ。とにかく、今夜はもつと遅く

なりそうだってことだな。なにかあつたらこつちから連絡する」

そう言って切れた携帯にさらに首を傾げながら、その時刻表示を見ると、デジタルの数字は「21:30」を示していた。すでに3時間近くも笠置につき合わされていることになる。

名古屋市高速を降りたあと、リエとサツキとミミ、それに瀨瀨の四人は、笠置に誘われるまま炉端焼屋で

食事し、そのあと、やはり半ば強引にカラオケに連れてこられていた。

リエたちは——今日一日、事件の内偵ということではさほどの進展もなく——、なんとか二人から手がかりになることを引き出したという思いがあつてのとだ。瀨瀨の方は——このあととも運転しなければならぬので酒も飲めず、本当のところ気が進まないのだろうが——、立場上、代理店のディレクターには逆え

ないということだろう。

カラオケルームに戻ると、ミミがアニメソングをフリつきで歌い終わるところだった。一人だけできあがっている感じの笠置が、それにオーバーに拍手した。

「……イエーイ、ミミちゃん、すっごくかわいいなあ。

その風邪気味のハスキーボイスがまたたまらない」

そして次には、携帯電話をポケットにしまいながら席に着くりエをめざとく見つけ、からかってくる。

「なんだ、リエちゃん、あやしいぞ。カレに電話か？」

「そんな。カレなんていませんよ」

「ふふふ、純情ぶって見せても、このおじさんの目はごまかせないぞ。じつは、リエちゃんも、こっちの二人に負けないくらい美人だろう。わざわざそんなメガネをかけてブスに見せてるのは、やきもちやきのカレへの義理立てと見た」

「そ、そんなんじゃないですよお」

「それとも、その変装は、山田ちゃんの噂をいろいろ聞いて、毒牙にかけられないための虫よけってことなのかな？」

酔いのせいもあるのだろう。笠置は、話をそんな方向へ発展させた。と、その言葉をすかさずとらえ、サツキが探りを入れた。

「へえ、山田先生って、そんなにプレイボーイなの？」
すると笠置は、なぜか皮肉な笑いを浮かべた。

「ふふ、まったく罪な男だ。自分に思いを寄せせる人間が目の前にいるのを知ってて、あんなふう to 他の女を平気で誘うんだからな。『折り入って話がある』だと。よく言うよ」

笠置も、先刻の元美の表情に気づいたにちがいない。いや、もしかすると、もっと具体的なことを知った上で、の言葉かもしれなかった。

と、そこで、自分のボスで恩人でもある山田がそん

なふうに言われるのは面白くないのだろう。瀬瀬が止めにいった。

「笠置さん、酒の席だとはいえ、憶測でものを言うのはよくないですよ」

「いや、憶測なんかじゃないさ。僕はさつき、しっかりと見てたんだから。山田ちゃんと茉莉ちゃんの乗ったタクシーがホテルに入るのを」

「えっ？」

リエとサツキとミミは、思わず問い返すような視線を向けていた。

「あの二人が半田駅前に乗ったタクシーは、ずっと、僕らが乗ったバンの後ろを走ってたんだ。ま、常滑へ行く方向なんだから、それはわかる。ところが、インターの少し前にあったラブホテルにすっと消えた」

笠置が車の後ろを気にしていたのは、それを見ていたのだから。

リエがそう思っていると、笠置はさらにこうつづけた。

「麗子ちゃんの事件で、二人とも警察に疑われているのはわかっているだろうに、よくやるよ、まったく」「あつ、それって、この前の殺人事件のことですか？」
ミミが、カマトトぶった口調できくと、そこでまた
瀬瀬があわてて笠置を諫めた。

「笠置さん、言葉が過ぎますよ」

と、笠置は、そんな瀬瀬の顔を見て、「ふふ、あんなだつて、その件に関しては他人事じゃないだろう」と言った。

「……えっ、な、なんのことですか？」

「僕は知ってるんだぜ。あんたと麗子ちゃんの間、どんな関係があつたのか」

「……そ、それは、今回の事件とは関係ないことですよ」

瀬瀬は、明らかに動揺しているように見えた。

「それはどうか？　一年前の痴漢事件とやらが、あんたの言うとおりに冤罪だったとしてもだ。いや、もし冤罪だったならなおさら、あんたは、麗子ちゃんを恨んでたはずだ。警察がお宅のスタジオまで聞き込みに来たというのは、山田ちゃんより、むしろあんたを疑ったのことにゃないのかな」

「いや、だから……」

「それに、僕は、あんたの秘密も見てるんだぜ。あんた、この前の事件があった日、麗子ちゃんのマンションの近くにいただろう」

「……えっ!？」

笠置の話の思わぬ展開に、リエたちはまた声をあげていた。

「僕もちょうどあの日、大須にあるクライアントのところにオリエンに行ってたんだ。それが思ったより長

引いて、7時からの打合せぎりぎりの時間になった。なんとか間に合うように会社に戻ろうと、タクシーをさがしてた時、あんたを見かけた。あんたは、思いつめた表情で大須観音の方に歩いていった。麗子ちゃんが殺されたっていうのは、ちようどそのあとだ」

「い、いや、それは……」

瀬瀬は、それだけ言って絶句した。その表情だけで、笠置の言ったことがけっして出まかせでないことはわ

かった。

「……まあ、仕事仲間だから、警察に話したりはしてないけどな」

笠置がそう言ったあとも、纈纈は、カラオケのリスト本ののったテーブルの上に落とした目を落ち着きなく泳がせつづけた。

笠置ばかりでなく、リエたちからも問いつめるまなざしが向けられているのがわかっているのだろう。当

然、弁明をしたいと思っっているにちがいない。しかし、どう口火を切ったらいいか迷っているという感じだった。

そんなふうには瀬瀬が黙り込んでしまったせいで、言い出した笠置も含めた全員が、なんだかこの場にいたまれないような雰囲気になっていた。

「あの……」

瀬瀬はそこで一度なにか言いかけ、しかし、やはり

口をつぐんだ。

そしてまた、しばらく沈黙したあと、突然、なにかをあきらめるような表情になり、まったく別のことを口にした。

「山田先生からは送っていくように言われましたけど、僕は、終電前に車と機材をスタジオまで戻さなければいけません。申し訳ないですけど、お先に失礼させてもらっていいですか？」

「……あ、ああ」

その息詰まるような雰囲気が耐えられなかったのかもしれない。笠置は、ちよつとあ然とした顔をしながらもそれにうなずいた。

と、瀨瀨はすぐに席を立ち、他のメンバーと目を合わせないように会釈だけし、部屋を出て行ってしまった。

「……あいつ、どうしたっていうんだ。それとも、ほ

んとにあいつが……」

瀨瀨の出で行ったドアをぼかんと見ていた笠置が、戸惑いの声音で言った。

リエはしばらく考えていたが、やがて席を立った。

「……あたしも、手伝いに行きます」

バンを停めた地下駐車場で、リエはやっと瀨瀨に追いついた。

スニーカーの足音に気づいたのだらう。振り向いた
瀬瀬は、困ったような顔をした。

それは、あんなふうには逃げるように出てきたことへの
ぼつの悪さとも思え、追ってきてほしくはなかつたとい
う意味にもとれた。

「一人で機材をスタジオに運ぶの、大変だと思って」
リエが言うと、瀬瀬は少し考えたあと、なにも言わ
ずにうなずいた。

それでリエはまた、今日一日そうしていたように、
纈纈の乗った運転席の隣に乗り込んだ。

駐車場から車を出したあとも、纈纈はしばらく無言
で運転しつづけた。

リエは、先刻、笠置が言い出したことの真相を確か
めたいと思いつつながら、どう切り出したらいいか迷って
いた。

と、纈纈の方から、つぶやくように口を開いた。

「それにしても、僕は、とことん運のない人間だと思うよ」

「……えっ？」

「僕のまわりで、ものごとが、人から誤解される方向にばかり動いていく。どう弁解しても、信じてはもらえない感じがして……」

「そう思い、あの場から逃げてきたと言いたいのだろう。」

「……どういう、ことですか？」

リエが聞き返すと、広小路通りを東に向けてハンド
ルを切りながら、纈纈は、またぽつりぽつりと語り始
めた。

「笠置さんが言ってたように、僕は、一年前、死んだ
楡島麗子という女に痴漢にまちがわれたんだ。そのせ
いで、ひどい目にあつた……」

リエが知らないと思ったからだろう。纈纈はまず、

その経緯から話した。あまり深く立ち入らず概略だけの説明だったが、その言葉の端々に悔しさがにじんでいるようにリエには感じられた。

「……だけど、『痴漢冤罪に抗議する会』ってところの仲間やその弁護士のおかげで裁判では無罪を勝ち取ることができた。おまけに、その弁護士の先生の紹介で山田先生のところで働けるようにもなったんだ。だから、あのことは、悪い夢だとも思っ忘れてよう

と決めた。世間の誤解はなかなか解けそうにないけど、少なくとも僕自身がそれに負けてはいけないってね：

：

」

瀬瀬はそう言ったあと、顔を曇らせた。

「ところが、二週間ほど前、スタジオであの女と再会したんだ。あの女がモデルをしているのは知ってたから、いずれ顔を合わせることがあるかもしれないとは思っていた。でも、その機会が、あんなに早く来ると

は思っただけでなかった。山田先生が彼女を撮っているのを見ながら、僕はひどく動揺した」

瀬瀬は、そこで、フロントウインドウから見える夜の街をにらみつけるようにして、語調を変えた。

「あの女はその時、僕に気づいて一瞬気まずそうな顔をした。でも、そのあと、まるで知らないともいえないようなそぶりを通したんだ」

「……そ、それは、瀬瀬さんも腹が立ったでしょうね」

リエは、半ば、その時の纈纈の気持ちを探し、半ばかまをかけるように言葉を添えた。

「ああ、そりゃあね。でも、問題はそんなことじゃない」

「……？」

「なんだかおかしいと思わないか？」

「おかしい……？」

「裁判であれだけの証言をしたんだ。あの女は、今で

も僕が痴漢をしたと思っっているんだろう。そう信じ込んでいるのなら、今さらそれを詫びろとは言わない。でも、もしそうなら、もう少し別の反応のしかたをするんじゃないのか。痴漢だと信じている僕に再会して、おびえるなり拒否するなり……。それなのに彼女は、僕の前で、すました顔をしてモデルの仕事をやり通した。それが仕事だからと言ってしまえばそれまでだけれど、女の反応としては、なんだか不自然だと思わな

いか？」

瀬瀬は、どうやら「女」であるリエにきいてきたようだ。

そんな時、本物の女性がどんなふうを感じるものかよくわからなかったのでリエはあいまいにうなずくしかなかった。

「それで、僕は考えたんだ。もしかしたら、あの女は、僕が痴漢などしていないことを承知の上で、僕を陥れ

るようなウソをついたんじゃないのかって。そして、もしそうなら、なぜそんなことをしたのかを知りたいと思った。だから、僕はあの日、彼女の家までそれを確かめにいったんだ。茉莉さんが同じマンションだというのを小耳に挟んだから、茉莉さんからその場所を聞き出してね」

瀬瀬は、目の前を過ぎていく夜の街を見すえながら話を つづけた。

「正直言えば、もしあの女が、納得できない理由……たとえば『言い出した手前、引っ込みがつかなくなつたから』とか言つたとしたら、僕はなにをしていたかわからないと思う。もしかしたら実際にあの女に手をかけていたかもしれない。でも、あのマンションの前まで行って、そんなことを思っている自分自身が怖くなつた。それに、感情に走つてそんなことをしてしまえば、せつかくのやり直せるチャンスがふいになると

も思った。だからけつきよくは、そのまま帰ってきたんだ。翌朝、あの女が殺されたというニュースを見て、僕は、気が晴れたというより、むしろ、自分の思いが現実になってしまったことを恐ろしいと感じた。それに、不可解なことが不可解なままになってしまったことに残念な気さえしたんだ」

「それなら、それを、警察に言えば……」

リエが言うと、瀨瀨はかすかに首を振った。

「警察には、不信感しかないから……。前で懲りてい
るんだ。それに、そんなことを正直に言ったら、逆に
疑われるだけだとも思う。たとえ判決がどうであろう
と、警察は僕のことを前科のある人間と同等に見てい
るはずだ。いや、それどころか、送検したのに無罪に
なつて恥をかかされたとも思つてるかもしれない。
今度はきつと、むりやりにでも身に覚えのない殺人犯
にされるんだ。そんなことは……。もうこりごりだ」

瀨瀨は、最後の言葉を吐き捨てるように言った。

事件のあった日のその時刻、偶然に現場のマンション近くまで行ったという点ではできすぎた話だという気もしたが、その痛々しいほどの表情には、作為の気配を読みとることができなかつた。

「なんだか、あいつのせいでしらけちやつたな。もう一軒寄って飲み直そうか？」

カラオケ店を出たところで、笠置がまた言った。

サツキはそれとなく腕時計に目をやった。時刻はすでに午後10時半近くになっている。

これ以上、酔っている笠置を相手に探りを入れても、たいしたことは出てこないような気がする。

そう思ってミミを見やると、ミミも同じように思っているらしく、ちよつとうなずいたあと笠置に返事した。

「あたし、風邪気味だし、もうそろそろ帰って寝ないと」

「そうかあ……」

笠置はどこか不満そうだ。

「あの、明日もポスター撮影があるわけでしょ。あんまり夜更かしするとお肌にもよくないし……」

重ねて言ったサツキの言葉に、笠置は「あつ、それは心配いらないよ」と言葉を重ねた。

「今回のポスター、大判っていったって、アップで撮るわけじゃない。多少、肌が荒れてたってわかりやしないさ」

「でも……」

どこか粘着気質のただっ子のようなところのある笠置の扱いに二人が困っていると、そこで笠置が、突然、「あれっ……？」と言った。

「……鬼頭先生だ」

ちようど前を通りかかった高級クラブから出てきた数人の男たちが、タクシーに乗る恰幅のよい紳士を見送っていた。男たちはさかんに礼を言いながら頭を下げている。

「うむ。勝訴して、依頼人から接待を受けてたつてとこかな」

「鬼頭：：って、あの痴漢冤罪裁判の弁護士？」

笠置の言葉から最近聞いたばかりのその名に思い当

たり、サツキが聞き返えすと、笠置は「そうか。最近
はそっちの方で有名なんだ」と言った。

「お知り合いなんですか？」

ミミがきくと、笠置は「ああ」とうなずき、つづけ
た。

「といつても、まあ、僕が担当してるクライアントの
顧問弁護士ってことなんだけどさ。六・七年前だった
かな。その企業が広告に使った写真を他社に無断盗用

されたことがあつてさ。そのもめ事の時に世話になつたんだ」

この時点ではサツキもミミも、今日の昼間、権藤がきいた鬼頭と山久保の会話をまだ伝えられてはいなかった。しかし、まだごねている笠置をやつとのことです。タクシーに乗せ、クイーンズオフィスに戻ったところでその話を聞き、事件の背後に登場したこの人物の意味に首を傾げることになった。

「シヤチ・フォト・スタジオ」の前にバンを停め、撮影機材を運び込もうとバックハッチを開けたところで、纈纈が言った。

「どうやら、先生のが先に帰ってるみたいだ」

その視線に気づいてリエが見上げると、上の階の窓に明かりが灯っていた。

「機材を持ったままうろろしてたなんて、あとで怒

られちゃうかな」

「べつに瀬瀬さんのせいじゃないですよ。笠置さんにむりやり誘われたんですから」

「まあ、そうなんだけどさ。とにかく、早く運んじやおう」

瀬瀬はそう言うと三脚などの機材を抱えスタジオに入った。先刻の話は忘れてほしいとでも思っているのだろう。瀬瀬は、あえてそうしているという感じで、

快活そうに振る舞っている。瀨瀨につづいて機材を運びながら、リエはなんだか後ろめたいような感じを抱いていた。

立場上、リエは、先刻の瀨瀨の供述を捜査本部に報告しないわけにはいかない。しかし、それを知らせれば、本部は——瀨瀨自身が言っていたように——まちがいなく彼を最有力な容疑者と見なすだろう。重要参考人として勾留され、厳しい取り調べを受けることに

なるにちがいない。

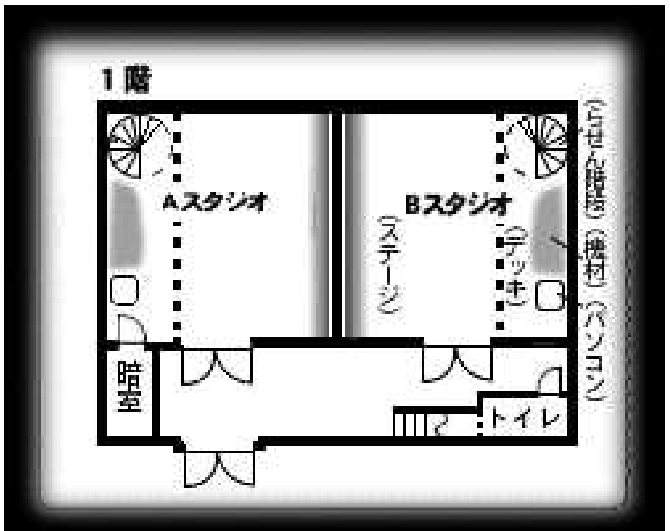
唯一の反証だったアリバイもすでに崩れているのだ。いや、それどころか、現場近くにいたことがわかった以上、綱渡りのように電車を乗り継いで、わざわざ多治見で出金したというその行為は、意図的なアリバイ工作と見られるはずだ。逆に、疑いを深めることにしかならないだろう。おそらく瀬瀬は、一年前の「痴漢事件」とはくらべものにならないほどの詰問にさら

されることになる。

リエは、纒纒をそんな窮地に陥れることに後ろめたさを感じているのだ。なんだか自分が、この見るからに実直そうな男をだまし討ちしている非道な人間に思えてくる。ことに先刻、彼の口から痛切な「警察への不信」を聞かされているだけに、よけいにそう感じるのかもしれない。

二人で運んだおかげで、二度ほど往復しただけで機

材はすべてAスタジオの
デッキの下に運び終わっ
た。そこで纈纈は、スタ
ジオのすみにあるドアの
鍵を開け、自分のもので
あるらしいカメラバッグ
も含め、カメラの類をそ
の中に運びはじめた。



「ここは、カメラ倉庫なんですか？」

その小部屋をのぞき込みながらリエはきいた。

奥の壁には二階からの配水管かなにかのダクトが通り、その側にはたたんだ段ボールや梱包用のエアクッション——よく「プチプチ」などと呼ばれるやつだ——なども置かれているが、その手前のスチール棚には、カメラや高そうな機材が並べられている。

と、瀨瀨は、苦笑するといった顔で答えた。

「いや、いちおう暗室なんだけどね」

よく見ると、棚の対面にあるシンクのついた台には、たしかに現像機らしい機械が据えられていた。

「どこのスタジオもカラーフィルムは現像所に出すから、カメラマン自身が現像するのはモノクロだけ。その上、このスタジオの場合、モノクロもデジタル処理してるから、今はほとんど使ってない。それで、実質的には倉庫になってるんだ。僕のカメラや私物も置か

せてもらってる」

「あっ、じゃあ、今朝言ってた鳥の写真も、ここにあらんですか？」

「えっ？ うん、そうだけど……」

「見せてもらってもいいですか？」

リエはそう言っていた。自分が感じている纒纒の間性を確認するには、その写真を見ればわかるような気がしたからだ。

「でも、時間はだいじよぶなの？」

瀬瀬は、突然のリエの申し出にちよつと困惑したように言った。

腕時計を見ると、針は午後10時45分を指していた。

終電までには、まだじゆうぶん余裕がある。

「ええ、あたしはいいですけど、瀬瀬さんは多治見まで帰らなければいけませんもんね」

「いや、僕の方もまだだいじょうぶだけど」

瀬瀬は困惑の中にも、どこかうれしそうな表情でそう言った。やはり、自分の作品を見てもらいたのはたしかなのだ。

ひとつうなずくと、瀬瀬は暗室の棚の上から箱を取り出し、現像機の横に置かれたライトテーブルを点けた。そして、箱の中のポジフィルムをそこに並べはじめた。おそらくこれまでの代表作なのだろう。一枚ずつ、スライド用のフレームにマウントされている。

「どうぞ」

瀬瀬は照れたように言つて、リエに写真用のルーペを手渡した。そして、なぜか、ダクトのある奥の壁際まで後ずさり、さらに、両腕を上げて頭の上で組むような格好をした。おそらく例の「痴漢事件」以来、「女性の体に触れる」ということがトラウマになつていて、こんな狭い部屋では、自然にそれを避けようとするにちがいなかつた。

そのことにもまた、なんだか痛ましいような感情を抱きながら、リエはルーペをあて、ライトテーブルのポジをのぞき込んだ。

「……うわあ」

思わず声が出た。

毛づくろいする鳥、木の実をついばむ鳥、翼を広げ飛び立つ鳥、楽しげに恋を語り合う鳥、巣の中の子にエサを与える鳥……どの写真もきれいだっただが、ただ

きれいというだけでなく、そんな生の営みに対する慈しみに満ちている感じがした。

なにより、その鳥たちに向かうまなざしが優しいのだ。

それは、今日、瀨瀨自身が山田のことを評して言った「被写体をモノとしてしか見ていない」というのは対極にある写真のように、リエには思えた。

次々にループをあて瀨瀨の作品を見ながら、リエは、

今しがた瀨瀨に対して感じていた後ろめたさも、さらには事件のことさえ忘れていた。

「……どう？」

瀨瀨にそう声をかけられた時も、その感想を軽々しく言葉にしてしまえば、逆に作品を陳腐にしてしまうような気がして、何も言えなかつた。

瀨瀨が出してくれた作品をすべて見終わり、大きなため息をついた後も、なかなかいい言葉が出てこなか

った。それで焦りながら感じたままを口にした。

「……すごくすてきです。どの写真も、フィルムの中で、鳥が生きてる」

リエ自身はどうしようもなく稚拙な感想だなど思っただが、瀬瀬は、その言葉に、この上なくうれしそうな顔をした。

「ありがとう」

……こんな優しい写真を撮る男が、殺人はもちろん、

痴漢だってやるとは思えない。

心証で捕らえるのはよくないと思いつつ、リエは、
瀨瀨の顔を見ながらそう感じた。

「じゃあ、帰ろうか」

そう言いながらポジをかたづけける瀨瀨の手元を見
て、リエは、何気なくきいた。

「あの：：プロのカメラマンって、どうしてネガじゃ
なくポジを使うんですか？」

その言葉に、瀬瀬は、今度はあきれたような表情をして「君、写真学校に通ってるのに、ほんとになにも知らないんだね」と言った。

「焼き付けや印刷する時、その方が正確な発色をするからだろ。ポジって言ったところを見ると、もしかして、リバーサルフィルムって言い方も知らなかったりして」

「えっ、いえ、そんなことは……」

リエはそうごまかしながら、ポジファイルムのことを言うのであるらしいその用語がまた気になった。

「でも、リバーサルって……リバーズの名詞形ですよ。逆転とか反転とかいう意味の。反転って言うなら、むしろネガの方だろうって気がするけど」

リエが言うと、瀬瀬は「ふふ」と笑った。

「考えてみればそうだよ。たぶん、長いモノクロ写真の歴史の中でずっとネガが基準になってきたから、

反転しない方を、その逆っていう意味でリバーサルって言うんじゃないかな」

そんな会話を交わしながら暗室とスタジオの灯りを消し、ロビーまで出たところで、瀨瀨は階段を見上げた。

「先生に、ひとこと、声をかけてった方がいいかな？」
「もう、いいんじゃないですか。夜も遅いし」

リエがそう答えたのにうなずき、瀨瀨は玄関のガラ

スドアを開けて表に出た。そこで、ふたたび階上を見上げて言った。

「あつ、先生、もう寝ちやったみたいだ」

見ると、先刻点いていた窓の明かりが消えていた。

それにうなずき、視線を降ろしたところで、リエは「あつ、そうじゃなくて、どこかに出掛けられたみたいですよ」と言った。

先刻、来た時にはあったもう一台の車——4WDの

方が駐車場から消えていた。

「あれ？　ほんとだ。僕らが暗室にいる間に食事にも出たのかな？」

ガラスドアの戸締まりをしていた瀨瀨は、そう言うつて首を傾げた。

その時だった。リエの携帯電話が鳴った。

電話を取り出して見ると、着信は「クイーンズオフイス」からだ。

：：11時をまわってるのに、まだ誰かいるんだ。
そう思いながら電話に出た。

「はい」

そして、次の瞬間、リエは思わず大きな声をあげて
いた。

「：：えーっ！」

その声に、瀬瀬がこちらを見た。

驚きがあまりに大きかったせいで、リエは一瞬、瀬

瀬と視線を合わせ、うろたえた。しかし、頭をめぐるせ、あわてて平生を装った。

「……わかったわ。詳しくはあとで」

そう言って電話を切ったところで、問いかけるように見てくる瀬瀬に答えた。

「……ううん。なんでもないの」

今聞かされたことがいくら驚くべき事実だったとしても——そして、ある意味、瀬瀬への嫌疑をいくぶん

かは軽くする事件の進展だったとしても――、この時点でリエの口から伝えるのは、やはり不自然だろう。

なにしろ、今、電話の向こうで権藤はこう言ったのだ。

「蓑浦元美というモデルが、殺されたそうだ」

file-205

謀意の底流

または **ミステイレイン**は相合い傘で

「うかがったところによると、皆さんは昨日、被害者の
蓑浦さんとずっといっしょにおられたとか」

翌日、午前10時すぎ。

いつもならゆったりしたスペースのある「シヤチ・フオト・スタジオ」二階の事務所は、十数人の人間が入り息苦しいほどだった。いや、息苦しいのは人数のせいばかりでもない。対面するふたつのグループの間で交わされる、お互いに探り合うような視線のせいでもあるのだ。

「お仕事中申しわけありませんが、順番にお話をお聞

かせいただけいたらと思ひまして」

今入ってきた六人の男たちを代表するように、志水がつづけた。

「ええ。どのみち、彼女がいなくなつたことで撮影は延期せざるを得ませんから……」

こちらにも、待っていた七人を代表して、山田が答えた。

本来、今日はポスターの撮影をすることになつてい

た。それで予定どおり10時に、死んだ蓑浦元美を除く昨日のメンバーが集まった。そこに志水たち捜査員が現れたというわけだ。

リエの見たところ、元美の死の知らせは、朝の時点ですでに茉莉に——おそらくモデル事務所を通し——伝わっていたようだ。そして、その口から山田と笠置にも告げられたらしい。三人は、警察の来訪にもさほど動揺している様子はなかった。直前までなにも聞か

されていたなかつたらしい瀬瀬だけが――警察への警戒心もあるのだらう――、一人落ち着きなく目を泳がせていた。

「ご協力、感謝します」

志水はうなずいて、そこで、目の前のメンバーの顔をゆつくりと見わたした。

志水の後ろには四人の刑事たち、それに、どうしたわけか権藤もついてきていた。

刑事のうち一人は広小路署の人間で、もう一人は捜査本部に配属された県警の刑事。この二人はリエにも見覚えがある。しかし、あとの二人はまったく知らない人物だ。おそらくは三重県警の刑事なのだろう。

元美は三重県楠町くすの自宅で殺されたということだ。

同じ事務所のモデルが殺害された二つの事件に関連性が深いと見て、二県警の合同捜査になったにちがいない。

「ではまず、そちらのお嬢さん方三人から始めましようか」

志水はそう言って、リエたちの方を指さした。

「どうやら、他の連中を聴取するにあたり、リエたちから事前知識を得ておこうと考えたようだ。」

そのまま二階の事務所を借りて行われた「事情聴取」で——リエたちクイーンズ存在に三重県警の刑事た

ちは驚いたようだが――、志水はまず、事件の詳細を
教えてくれた。

ことの経緯はこうだった――

昨夜22時少し過ぎ、三重県警楠警察署に、ボイスチ
エンジャーを通したらしい声で「今、女を殺した」と
電話があつた。その声が告げたアパートに署員が急行
すると、蓑浦元美が自室の居間で胸を刺されて死んで
いた。

もちろん犯人は逃走したあとで、指紋など特定できる痕跡は残っていないなかった。凶器は、もともと元美の部屋の台所にあっただと思われる文化包丁。それがみぞおちから心臓に向かって深く刺さったままだった。

麗子の事件同様、部屋に荒らされた様子はなく、殺害以前に暴行を受けた様子もない。強盗やレイプ目的の犯行ではないと推測された。

死後硬直がほとんど進んでいなかったことから考え

て、死亡推定時刻は、おそらくは電話があつた直前の22時頃だと思われる。20時過ぎに隣室の主婦が元美の帰宅を目撃しており、少なくとも、それ以降であることはまちがいない。

ドアの鍵はかかつておらず、犯行後、犯人はそこから部屋を出たと考えられるが、アパート周辺は夜間の人通りが乏しく、目撃者は現れていない。

例の通告電話は番号通知拒否されていたた

め、着信記録から発信番号をすぐ特定できた。しかしこれも、ヤミ売買されたいわゆる「飛ばし」の携帯で、名義上の所有者はその携帯電話を見たことすらなかった。通話のあとは電源が切られ、所在を逆探知することもできない。ちなみに、元美の部屋の電話の通話記録を調べたところ、22時少し前に、この携帯からの着信が記録されていた。つまり犯人は、部屋に来る前に、元美に訪問の意を伝えたものと思われる。

現在わかっている範囲では、地元で元美に怨恨を抱くような人物は見つかっていない。四日市市内に短大時代の友人が数人いるが最近は交流がなく、また楠町でも近所づきあいなどはほとんどない。

つまり、犯人の特定はもとより、犯行前後の足取りすらつかめていないのが現状だった。

それで、仕事関係、ことに先の麗子殺しと同一犯という線が最も有力視されているわけだ。

「君たちがJR半田駅でガイシャと別れたのは、何時頃だったんだ？」

事件の説明のあと、リエたちが昨日の撮影行の一部始終を話し、それが終わったところで志水がきいた。

「あの時点で時計を見たわけじゃないから、はっきりとはわかりませんが……」

リエが、サツキとミミの顔を見て確かめるように言

うと、ミミが「あっ、そうだ」と立ち上がった。

「どうしたの？」

「半田駅に行った時、ちょうど日が沈むところだったでしょ」

ミミはそう言って、壁際のサーバーの前に座り、マウスを握った。どうやらインターネットエクスプローラーを立ち上げたようだ。

「……あっ、そうか。日没時間ね」

「うん。ええと……」

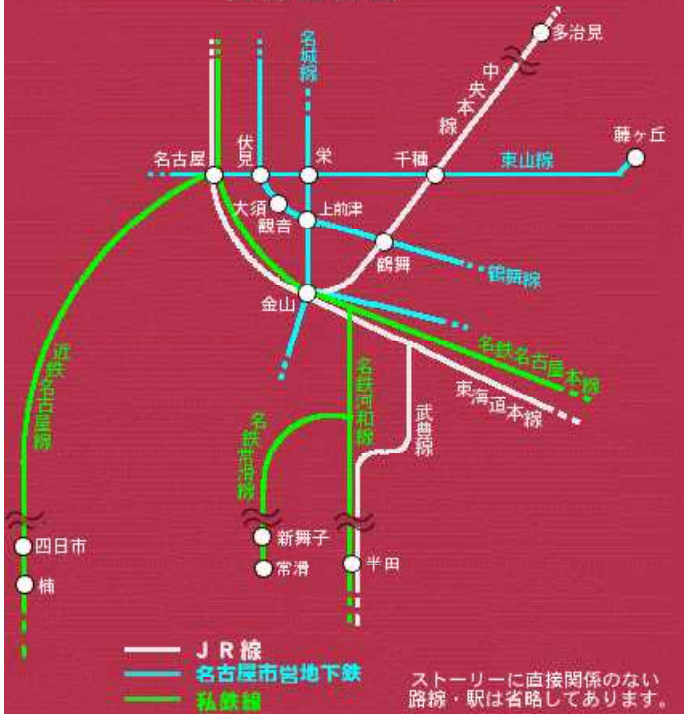
ミミはすぐに、日本各地の日の出日の入り時刻をまとめたサイトを探り当てたらしい。

「昨日の……愛知県の日没と……、これね……18時03分。うん、だいたい18時ね」

「ふむ……」

ミミの手際の良さを感心したように見ていた志水は、うなずいたあとつづけた。

関係路線図



「『半田』か
 らJRで『名
 古屋』駅まで
 来て、そこか
 ら近鉄の特急
 か急行で『四
 日市』へ。そ
 こで普通に乗

り換えて『楠』まで五駅。2時間弱ってどこか。20時頃帰宅ということは、ガイシヤはおそらくどこへも寄り道せずに帰ったわけだ」

そこでまたミミが、ディスプレイを見ながらつぶけた。今度は、例の路線検索サイトを調べたようだ。

「『半田』を18時04分発のJR武豊線たけとよ区間快速に乗ると、『名古屋』着が18時47分。ホームが離れてて大変だけど走って乗り換えたとして、乗れる近鉄は18時50

分発の急行になる。それが『四日市』に着くのが19時23分。そのあとの普通が27分『四日市』発で『楠』駅着が19時39分。『名古屋』で乗り換えを急がなかったとしたら、急行も普通も、その一本あとになるから、『楠』に着くのは19時57分。元美のアパートが駅からどのくらい離れてるのか知らないけど、20時過ぎっていうなら、たぶんこっちなね」

そして、さらにこうもつけ加えた。

「JR『半田』駅からちよつと歩けば、名鉄の『知多半田』駅があつて、ここからも名鉄河和線こうわで『名古屋』に出られるけど、乗れる近鉄はけつきよくいっしょみたい」

今度は、志水ばかりか、他の刑事たちもポカンとミミを見ていた。今のは通常のインターネットでの検索だが、ミミが時折、県警のコンピューターをハッキングして、志水の手取給与額まで知っていることが

わかったら、きつともつと驚くにちがない。

「：：うむ、それはともかく」

しばらくしてから、気を取り直すように志水が言った。

「とりあえず、死亡推定時刻のアリバイということになるわけだが、君たちの話によると、笠置と瀬瀬はどちらも君たちとずっといっしょにいたのだから、今回の蓑浦元美殺しについては実行犯たり得ないということ

とだな」

その言葉に三人がうなずくと、志水はふたたび「うむ」と言い、「それじゃあ、その二人は後まわしにして、山田隆と添沢茉莉からいこうか」とつづけた。

昨日元美といっしょにいた——そして前の麗子殺しの容疑者でもある——四人が、今日このスタジオに揃っていることを通告した関係で、志水から同行を許さ

れた権藤だったが、その四人の事情聴取に同席するのはやはり気が引けた。特に、三重県警の刑事たちに「この男は捜査員でもないのにどうしてここにいるのだ」という顔をされ、けっきょくりエたちとともに部屋を出た。

階下に降りると、「A」と大書きされた両開きのスタジオドアが、バネの留めの位置まで大きく開いていて、その中で、山田、笠置、瀬瀬、茉莉の四人が所在

なげに聴取の順番を待っているのが見えた。

それを見たりエが、「公平ちゃん」とささやいた。

「公平ちゃんって呼ぶな！」

そう言うのを無視して、リエはあることを耳打ちしてきた。

言われたことの意味がわからず、権藤がいぶかしげな顔を見ると、リエはいたずらっぽく笑って、片方の耳たぶを指さした。そこにいつもつけているイヤリン

グが見あたららない。どうやら、片一方——発信機の方——を二階に置いてきたようだ。

それで納得した権藤は、Aスタジオに入り、リエから頼まれたとおりのことを山田に告げた。

「まだ彼女たちからききたいことがあるので、ちよつと隣のスタジオをお借りします」

権藤のことを捜査本部の刑事だと思っているのだから。山田は「ええ、どうぞ」とうなずいた。

ちようどそこへ、刑事の一人が山田を呼びに来た。

権藤とクイーンズの面々がBスタジオに入ったところで、三重県警の刑事による山田への聴取が始まった。

「昨日、半田で解散したあとのあなたの行動を、順を追ってお聞かせ願えますか」

一昨日、瀬瀬とリエが黒く塗った撮影ステージの隅に立ったまま、権藤は携帯電話型トランシーバー、リ

エたちはイヤリング型のそれから聞こえてくる山田の
声に耳を傾けた。

「私はあれから、半田駅前のタクシー乗り場でタクシ
ーを拾って、添沢茉莉を実家まで送っていきました。

そのあと、やはりタクシーでこのスタジオまで帰って
きたわけです」

「その間、どこにも寄らずに？」

「いや、半田を出て少ししたところで、ちよつと……」

「お食事でも？」

「いえ、まだ六時をまわったばかりでしたし、その時点ではそんなに空腹だったわけでもないですから」

「では、どこへ？」

「つまり：：まあ、私と茉莉とは、彼女がモデルだった時代からそういう関係にありまして」

「そういう関係：：とは？」

「そこまで詳しく話さなければいけませんか？」

「いえ、……つまり、そういう関係だったわけですね」
刑事が納得したという感じで言うと、山田がつづけ
た。

「ええ。それで、二人で途中にあったホテルに」

「はあ、なるほど、そういう関係を……。それは、な
んというホテルでしょう？」

「名前までは覚えてませんが、知多半島道路の半田常
滑インター近くにあるラブホテルです」

「ふむ、で、そのホテルには何時から何時まで？」

「ホテルに入ったのが、タクシーに乗ってから15分後くらい。それから、2時間半くらいそこにいたと思います」

「つまり、だいたい18時15分から20時45分くらいまでということですね」

「ええ、たぶん」

「そのホテルを出たあとは、どうなさいました？」

「彼女を送って、常滑まで行きました」

「ちよつと待ってください。お二人はホテルでタクシ
ーを降りたわけですよ。すると、そこでまたタクシ
ーを拾ったということですか？」

「いや、あのあたりは人家もほとんどないようなところ
ですからタクシーなんていませんよ。呼んだんです。
じつは降りる前に、運転手に携帯の番号を聞いておい
た。あとでまた呼ぶからと」

「タクシー会社の配車センターに電話するとかではなく？」

「ええ、会社を通すよりその方が早いでしょ。運転手にしても、あのあたりでそんなに客がいるわけでもないから、また乗ることがわかっていれば、すぐ来られるところで待機していてくれるでしょうし」

「なるほど。同じタクシーで常滑まで行ったと。で、常滑に着いたのは何時頃ですか？」

「ホテルのあるところから常滑の近くまでは、信号のない有料道路が通っていますから、そんなにかかったわけじゃない。15分くらいで着きました。だから、9時前後だったと思います」

「21時常滑着：：と。そこであなたは、添沢さんの実家に寄ったんですか」

「まさか。彼女と結婚の約束をしてるわけでもないし、彼女の両親と会っても誤解されるだけでしょ」

「はあ、そういうものですか。じゃあ、そこで添沢さんだけがタクシーを降りたわけですね」

「ええ」

「そのあと、あなたは？」

「同じタクシーで、そのままここへ帰ってきました」

「ほお、そのホテルから常滑まで行って、その上、名古屋の藤が丘まで。ずいぶん距離がありますね。高かったでしょう」

「道路の料金を合わせても、三万はいきませんでしたよ」

「時間もずいぶんかかったでしょうし」

「夜は知多半島道路もすいているから、そんなには。でも、1時間くらいはかかったと思います。そうだ。

帰ってきてすぐテレビをつけたら、もう、10時のニュース番組が始まってました」

「22時ねえ……」

刑事が、ため息をつくようにそう言った。それが、死亡推定時刻にぴったり重なったからだろう。元美が死んだ時刻、山田は楠から遠く離れた藤が丘にいたわけだ。

また、死亡推定時刻を広めに見たとしても、殺害が可能な20時から22時までの間、山田は必ず誰かといっしよにいたことになる。茉莉か、そのタクシーの運転手と。茉莉はこれから聴取すればわかるだろうし、運

転手の方も調べればすぐ裏づけはとれるはずだ。

さらに、その帰宅時刻は、リエと瀬瀬がスタジオ二階の窓に明かりを見た22時30分過ぎというのとも符合していた。

「先刻アシスタントの方からお聞きしたところによると、23時過ぎに、あなたは車に乗ってどこかに出られたようですね」

リエが語ったことにもとづいて刑事がそうきくと、

山田は「え、ええ」と言ったあと「コンビニに夜食を買いに行ったんですよ」とつぶけた。

山田への聴取は、そのあと、死んだ元美との関係に移った。刑事はあれこれかまを掛けるようなことをきいたが、山田は、単にカメラマンとモデルの関係に過ぎないと主張した。

「なんだか、今度の事件も、ネットになるのはアリバ

イみたいね」

山田への聴取を聞きながら、リエがそうつぶやいた。

「……ん？ どうして？」

ミミがきくと、リエは「あたしが気になってるのは、電話のこと」と言った。

「電話？」

「うん、あの、犯人だと思われる人物がかけてきたっていう……」

「ああ、『飛ばし』の携帯から……」

「そう。犯人にしてみれば、本当なら、逃走する時間を稼ぐために、死体の発見はなるべく遅い方がいいわけでしょう。それなのに、わざわざ警察に電話してきたのはなぜなのかってこと」

「ん？ ……なぜなの？」

「発見が遅くなれば、それだけ死亡推定時刻があいまいになる。犯人には、そうなってはまずい事情があつ

た。特に、その電話があったっていう22時より遅くなつては困るということだったんじゃないかしら」

「……あつ、もしかして、犯人は、その時刻にアリバイ工作をしていたってこと？」

「うん。たぶん、そうなんじゃないかな」

サツキの言葉に、リエはうなずいた。

それを聞いていた権藤も、あることに思い至った。

「そういう意味では、この前の事件も似てるな」

「うん。本来ならあいまいな方がいいはずの犯行時刻が、妙に狭い範囲に限定されてる感じでしょ。どっちの事件も、一見すると発作的な殺人に見えるけど、じつは、周到にアリバイづくりをした上での計画的な犯行なんじゃないかって気がするの」

そんな話をしているうちに、山田への聴取が終わり、次に茉莉が呼ばれた。

山田に対してされたのと同様の質問に対し、茉莉は最初、途中で立ち寄った場所をあいまいにしたまま話を進めようとした。女性としては、はっきり言うのが恥ずかしかったからにちがいない。

しかし、刑事からすでに山田に聞いていると告げられると、けっきよくは、半田から常滑までの行程について、山田とほぼ同じ内容の証言をした。茉莉の方は「ホテル・デ・ラ・チッタ」というラブホテルの名前

も覚えていた。「知多」をかけてイタリア語かスペイン語風にしたら、その語感が面白かったからだという。

そのあと刑事は、山田と別れたあとの茉莉の行動に話を移した。

「常滑でタクシーを降りたというのは、ご実家のすぐそばですか？」

「ええ。うちは造り酒屋で、表の店はその時間には閉まっていますから、裏手にまわる路地の入口のところま

で送ってもらいました」

「それで、あなたは、そのままお宅に入った？」

「はい」

「その時、ご家族の方はどうされてました？」

「その時刻ですといつも、両親も兄夫婦もそれぞれの部屋に引っ込んでいますので、私もそのまま自分の部屋に入って、直接、顔は合わせていません。私は仕事柄、時間が不規則ですし、実家に帰る時も、夜はそう

することが多いんです。それにもう、帰ったことをいちいち親に報告する歳でもありませんしね」

「じゃあ、昨夜はそのあとずっと、ご自分のお部屋で？」

「ええ、朝までどこにも出ておりません。入浴は、その……ホテルですましていましたし、一日中撮影で疲れていましたので、テレビを見ながら、いつもより早く寝てしまいました」

「まあ、たしかにお疲れだったことと思います」

つい言ってしまったらしい刑事の皮肉めいた言葉に、茉莉は沈黙した。

「……」

それで、刑事は話を変えろという感じできいた。

「先ほど山田さんにお聞きした時も気になったのですが、お二人は、夜のお食事はどうなさったんですか？」

「あつ……ああ。じつは、食事も、そのホテルで摂ったんです。あそこには、ルームサービス……というか、出前をとれるサービスがあつたものですから」

「なるほど。お腹も減つたでしょうし」

「……」

刑事はまた、言わずもがなのことを言ったようだ。

トランシーバーからも、気まずい雰囲気伝わってきた。

「……で、では、今朝は、ご実家から直接こちらへ来られたわけですね」

そうきいた刑事に、茉莉は不機嫌そうな声で答えた。

「今朝は6時過ぎに事務所の人間からの電話で起こされて、事件のことを聞かされました。それで驚いたんですが、仕事のことを考えると、まず、山田先生や笠置さんと善後策を相談する必要があると思いました。それで、いつもよりかなり早い時間に実家を出て、こ

「ここまで来たわけです」

「それじゃあ、今朝もご家族とは顔を合わせていない？」

「いえ、そんなことはありません。田舎の古い商家ですから、みんな朝は早いんです。朝食は、両親や兄夫婦といっしょに食べました。お疑いなら、家族に確かめていただいてもかまいません」

茉莉は、さらに無愛想な声でそう言った。

「山田の方は、そのあともタクシーの運転手といっしよにいたんだからアリバイは成立してるけど、茉莉の方は、21時に実家でタクシーを降りたあと、今朝まで誰にも見られていないのね」

茉莉の聴取が終わったところで、リエが言った。

「問題は、それ以降、犯行時刻の22時までに三重県の楠まで行けるかどうかよね」

リエがそうつぶけた時には、ミミはすでにスタジオの片隅にあるパソコンを立ち上げていた。

「……んくと、……『常滑』は名鉄常滑線の終点で、電車で移動するにはこれに乗るしかないわね。21時以降だと21時09分発の特急で、これが『名古屋』に着くのが21時42分。近鉄の方は41分の急行があるけど、これは無理だから、次の22時01分まで待たなきゃいけない。この急行だと『四日市』の三駅先の『塩浜』って

駅で普通と連絡してるけど、それに乗り換えても『楠』に着くのは22時45分。22時にはぜったい間に合わない。たとえば『常滑』を乗るのが一本前の20時50分だったとしても、乗り継いで『楠』に到着するのは22時26分。これでも無理ね」

「車で移動したとしたら？」

「それも、1時間で行くのは無理だと思うな」

今度は、道路に詳しいサツキが答えた。

「常滑から車でインターまで戻って知多半島道路にのる。そのあと、大府おおぶから名古屋市高速、千音寺せんのんじから東名ひがしめいはん阪道路と乗り継いで四日市インターまではずっと自動車専用道で行ける。



でも、どんなに飛ばしたとしても、それだけで1時間以上かかっちゃう。その上、四日市の市街を抜けて楠まで行かなきゃいけないわけだから、そこでも1時間近くかかる。21時に出ると、どう考えても、着くのは23時前後」

「それも無理か。けっきょく茉莉にもアリバイがあるってことね」

「だけど、なんだか、わざとらしくない？」

サツキがそう言つて首を傾げた。

「なにが？」

「ん？ そのホテルへ行つたつて話。山田と茉莉は撮影でよく顔を合わせてるわけでしょ。お互い独身だし、それこそ親に気兼ねする歳でもない。その上、このスタジオの二階は山田の自宅なんだし、茉莉の大須のマンションだつて使える。ふだん、そんな機会ならいくらでもあるつて気がするのよね。べつに、わざわざロ

ケ先でラブホテルに入らなくてもいいだろうって」

「まあ、時には環境を変えて……ってこともあるだろ。

それに、山田は芸術家だから、撮影で気持ちが高ぶって……とかいうことだってあるかもしれない」

権藤が言うと、ミミが「あたし、大人の世界ってよくわかんない」とカマトトぶった。

「たしかに、山田が茉莉を送っていったということ自体が不自然な感じするよね。まあ、最初から二人でホ

テルに行くつもりだったということなら、とりあえず納得はできるけど」

「それにしても、ホテルでまた同じタクシーを呼んだつていうのもなんか変でしょ」

「うん。ふつうなら、ラブホテルへ入る時と出る時に同じ運転手と顔を合わせたくはないよね」

そこでまた、権藤は言った。

「いや、そういうのを見せつけるのが趣味という奴だ

って、世の中にはいる」

と、ミミがまた「大人って複雑〜」と茶化した。

「同じ運転手に姿を見せて、わざわざアリバイづくりをしていたと思えなくもない」

「でしょ。たとえばホテルに入ると見せかけて、その間に殺しに行つて戻ってきたとか」

「あつ、それは無理でしょう。ホテルにいたのは18時15分から20時45分くらいの2時間半って言ってたよ。」

今確かめた所要時間から考えても、とても知多と楠の間を、その時間で往復はできない。ホテルはインターのそばだといっても、車だと往復4時間近くかかっちゃうわけだし、電車はちょうど路線と路線の間の場所で『半田』側にも『常滑』側にも駅に行くのに時間がかかるから、なおさら無理ね。それに、20時45分に知多のホテルにいたってことは、どっちにしても、楠にいられる時間は元美が帰宅した20時より前になる」

「そうか……」

「考えられることがあるとすれば、そのホテルに第三の人物がいたってことかな」

「……えっ？」

リエが言い出したことの意味がわからず、他の三人がその顔を見た。

「その場合は、山田と茉莉の共犯ってことになるんだけど、他にも第三の共犯者がいた。その人物がホテル

で待っていて、どちらかとすり替わった」

「ああ、それで山田か茉莉になりすまして、そのあとのアリバイづくりをしたってことか……」

権藤は相づちを打ちながらも、どこか腑に落ちない感じがした。と、やはりリエはこうつぶけた。

「でも、そんな未知の共犯者を想定すること自体が意味のないことよね」

「ん？ どうして？」

「だって、共犯者がいるなら、アリバイづくりのためにそんな面倒なすり替わりなんてしなくても、その人が殺しに行けばすむことだから」

「あ、そうか」

四人がそんな会話を交わしている最中から、笠置への聴取が始まっていた。

しかし笠置には、サツキたちといっしょにいたとい

うたしかなアリバイがあり、昨夜の行動については型どおりの質問に終始した。むしろ時間が割かれたのは、そんな三重県警の刑事からの質問より、第一の殺人を担当してきた愛知県警の刑事からのものだった。昨夜、あのカラオケ店で笠置が語った大須で瀬瀬を目撃したことについての質問だったのだ。

それをききながら、リエはまた胸が痛んだ。

昨夜スタジオに戻る途中、瀬瀬がしゃべったことは、

すでに昨夜のうちに捜査本部に報告済みだった。だから、おそらく本部は——少なくとも第一の殺人については——瀨瀨への疑いを強めたはずだ。聴取では、そのことを厳しく問いつめるにちがいない。場合によっては、そのまま身柄を拘束することもあり得るだろう。

結果、瀨瀨が自分を信用して話してくれたのを、裏切るような形になってしまふ。

それがつらかった。

ところが、笠置に代わって瀨瀨への聴取が始まっても、刑事たちが頭ごなしにきめつけて声を荒げるようなことはなかった。たしかに質問の中心は、第一の殺人当日の瀨瀨の行動についてだったが、刑事たちは淡々と事情を聞き、瀨瀨の方も――すでに笠置やリエがそのことを話していると思っただからだろう――どこかあきらめの混じった口調で、昨夜とほぼ同じことを話していた。

そして、本部への同行を求められるようなこともなく、聴取は終わった。

それにどこかでホツとしながらも、リエが首を傾げていると、スタジオのドアが開いた。

入ってきたのは、志水だった。

「これは、君のだろ」

志水は苦笑を浮かべながらそう言い、なにかをリエに差し出した。

手のひらにのっていたのは、例のイヤリング型トランシーバーだ。

リエの方も苦笑いしながらそれを受け取ると、そこで志水は「で、四人の供述を聞いてどう思ったかね？」ときいてきた。どうやら志水は、リエたちが盗聴しているのを承知の上で、それを聞かせたらしい。

「え、ええ……」

リエはさらにばつの悪い顔をしながらも、まず、い

ちばん気になっていることを口にした。

「あの：：瀨瀨を拘束しなかったというのは、最初の殺しについての彼の疑いは晴れたということでしょうか？」

「うむ、まだ完全に被疑者から外したというわけではないのだが、瀨瀨が楡島麗子を殺すのは、ほぼ無理だということがわかったんだ。あのマンシヨンの近くで瀨瀨を目撃したという人物が現れた」

「えっ？ それなら、なおさら……」

「いや、その人物というのが、他ならぬ平林愛なんだ」

「え、愛ちゃんが……？」

「ああ、ピザを届けにマンションに入る直前に、今の
纈纈の供述どおり、電柱の陰に立っている纈纈を見た
と言っている。なんだか気味の悪い人だなと思ったか
ら顔も覚えていたんだそうだ。写真を見せて確かめた
が、まちがいないと断言した」

そこでミミが、首を傾げながら言った。

「……ん？　愛ちゃんが瀨瀨を目撃していると、どうして瀨瀨が犯人じゃないことになるわけ？」

志水に代わり、リエがそれに答えた。

「愛ちゃんは、そのあと、インターホンを通して麗子と話をしているわけでしょ。その麗子を殺すには、瀨瀨はどこかで愛ちゃんを追い越さなければいけないことになる。マンションの前には人がいたわけだし、エ

レベーターだつて使えない。だから、それは無理だつてこと」

「あつ、そうか」

「うむ。少なくとも19時20分の時点で、瀬瀬が麗子の部屋にいなかったことだけはたしかだ。平林愛が、わざわざ自分が不利になるような作り話をするとともに思えんし」

瀬瀬は自分のことを不運な男だと言っていたが、あ

る意味、最後の最後ではついていたのかもしれない。
愛の証言は、なにより確実なアリバイになるだろう。

リエがそう思っていると、志水が先を促すような顔
で見してきた。それでリエは、今四人で話していたこと
をまとめた。

「昨日の事件については、山田と茉莉がアリバイ工作
めいた不自然な動きをしている気はするんですけど、
でも、今の証言どおりだとすると犯行は無理ですね」

「ああ、タクシーの運転手やホテルの従業員、それに茉莉の家族から裏づけはとらなければならんが、おそらく二人ともアリバイは成立している。今回の三重県警の事件をうちの事件と結びつけて考えるのは、やはり無理があるのかもしれないな」

志水は浮かない顔でそう言った。

権藤が志水たちとともに本部の車に乗り込み、「シ

ヤチ・フォト・スタジオ」を後にしたのは、正午をだ
いぶまわった時刻だった。

しかし権藤は、少し走ったところで、その車を降ろ
してもらった。

事件の直後でもあり、モデルの一人が死んでしまっ
たこともあって、予定していたポスターの撮影は延期
されることになったらしい。モデルのサツキとミミ、
そしてたぶんアシスタントのリエも、特にやることが

ないのだから、今日はこのまま帰るということになるだろう。

それで、昼食がてら、「藤が丘」駅前の喫茶店で落ち合うことにしたのだ。

関係者に目撃されてはまずいと思い、表から見えないいちばん奥の席で待っていると、すぐにサツキとミミが、そして少し遅れてリエがやって来た。

「俺たちのやるべきことはやったんだし、ここからし

ばらくは本部に任せた方がいいだろうな」

リエが席に着いたところで、権藤はそう言った。三人が任務をはずれた余計な動きをしないようにと牽制したのだ。

と、案の定、リエがつづけた。

「でも、今度の事件についてはもう少し調べてみたいな。今日は、このあと暇なんだし、元美が殺された現場を見に行こうかと思うの」

「い、いや、うちの管轄ならまだしも、他県警の事件にまで首を突っ込むのは、やっぱりまずいんじゃないか」

権藤があわてて言うのと、その言葉を見無視するように、今度はサツキが言った。

「じゃあ、あたしは、なんだか影でちらついてる、鬼頭っていう弁護士をあたってみようかな」

「いや、それも、へたな動きをすればいろいろ問題が

……。なにせ、相手は弁護士なんだし……」

権藤がさらに困惑していると、昨日からの風邪で鼻をすすっていたミミだけは、元気のなさそうな声でつぶやいた。

「悪いけど、あたしはオフィスに戻るわ」

「うん、それがいい」

権藤は、大きくうなずいた。しかし、ミミはこうつぶけた。

「いろんなところをハッキングして、事件の背後関係を調べとくね」

「あつ、いや、そういう不法行為は……」

「じゃあ、夜、オフィスに集合ね」

いつものように権藤を無視して、リエがそうまとめた。

「君たち、だからそれは……」

権藤がそう言いかけた時、携帯電話が鳴った。

「……はい、権藤です」

「権藤君、新たな殺人事件が起きたそうだね」

「なんだかうれしそうに言うその声は、むろん綾瀬だ。」

「容疑者は知多半島にいて、現場は三重県だそうじゃないか。このアリバイは崩し甲斐がある。名鉄と近鉄の詳しい時刻表も取りそろえたから、また来てくれたまえ」

「い、いや、私は、ちよつと所用が……」

権藤はあわてて言っていた。また一日、時刻表と格闘させられるのはうんざりだ。今の張り切りようからみると、綾瀬は最後には、クアラルンプール経由の空路とか、そんなとんでもないルートを考え出すにちがいない。

「ふむ、犯人の足取りを洗うより、重要な用があるとでもいうのかね？」

不服そうな綾瀬の声に、権藤は、リエの顔を見なが

ら言った。

「え、ええ。まずは、昨夜の事件の現場を調べる方が先かと思ひまして」

「雨が落ちてきそうだな」

プラットホームでリエの隣に立った権藤が、空を見上げ、なぜか憂鬱そうにつぶやいた。

「藤が丘」から地下鉄で「名古屋」まで行き、そこ

から近鉄特急に乗ってきっちり30分。「四日市」に着いた時には、空は厚い雲でおおわれていた。

かつては公害で名を馳せたこの街も、最近ではコンビナートの汚染防止対策が行き届き、逆に他の都市よりきれいな空気になっていると聞く。だから、この曇り空はけっしてスモッグのせいではないのだろう。

乗り換える普通電車を待ちながらそんな空を見上げたりエは、もう一度、頭の中で「常滑」から「楠」ま

での経路をたどってみた。

「常滑」から「名古屋」までが名鉄特急で30分強、そして、今乗ってきた近鉄特急が30分ちようどだから、それだけで1時間を超えてしまう。茉莉の実家から「常滑」駅まで移動する時間や「名古屋」で名鉄の駅から近鉄の駅に移る時間、さらに、それぞれの待ち時間を加えると、「四日市」までで1時間半くらいはかかることになる。そこに、これから乗る普通電車と「楠」

駅から元美のアパートまでの所要時間が加わるわけだ。

犯行時間に唯一目撃者がいない茉莉にしても、21時に常滑でタクシーを降りて22時に楠に着くことは困難なのだ。

実際に楠の町と元美のアパートを見れば、そのアリのバイの謎が解けそうな気がしてここまで来たのだが、この時点でもうリエは、例の四人の中に、元美殺しの

犯人を見つけるのは無理なのではないかと思いはじめた。
いた。

やはり、麗子殺しとは別の事件と考えた方がいいの
だろうか？

そう思っているところへ、普通電車が滑り込んでき
た。

キャリアアウーマン風のタイトなスーツを着、メタル

フレームのメガネをかけたサツキは、革製のソファに座って、所在なげに室内を見やった。鬼頭の秘書に通されたその応接室は、弁護士事務所というより、大企業のもののような立派な什器でまとめられたいた。

と、ドアがノックされ、恰幅のいい男が入ってきた。これまた、弁護士というより企業幹部といった感じだが、昨夜、街で見かけているので、サツキにはすぐに鬼頭だとわかった。

「いや、お待たせしてしまいましたね」

「いえ、こちらこそ、突然押しかけてしまつて申しわけありません。中日本テレビの北川サツキと申します」

こんな時、いつも使う名刺を差し出すと、鬼頭はそれを受け取りながら言った。

「ふつうは、お約束なしのお客様にはお会いしないのですが、痴漢冤罪問題について番組で取り上げていただけるといってお話なので……」

懇懃いんぎんな言葉づかいだが、アポなしで訪れたサツキへの抗議を抜け目なくまぎれ込ませている。

「ええ、夕方のローカルニュースの時間に特集を組もうと思ひまして、事前取材ということ、まずは、その道の権威である鬼頭先生のお話をうかがおうと思つたわけです」

「いや、権威というほどでもありませんが……」

「あの、いきなり失礼なことを言つて申しわけありま

せんが、このご立派な事務所から見るところ、先生は、
いわゆる市民派弁護士というのとはずいぶん印象がち
がいますよね」

「ふふ、あなたもやはり、そうした偏見をお持ちなん
だ。まあ、女性にはありがちなことですけどね」

「偏見……？」

「弁護士というと弱い市民の味方だと、そうお考えな
のでしょ」

「いえ、そんなことは……。ただ、痴漢冤罪救済の市民運動に関わってらっしゃるといいうイメージとギャップがあったものですから」

「いや、弁護士に対するそうしたイメージがまちがっていると言っているわけではありません。権力者の不正に抗して市民を守るのが弁護士の第一の役割だし、私もそうありたいと思っている。でも、問題はその弱者とか市民とかいうもののとらえかたにあると思うん

です。あまりに通俗的で図式的すぎはしまいかと」

「図式的？」

「ええ。大企業は悪で勤労者や消費者は善だとか、あるいは、男はいつも加害者で女は被害者だとか、ね。

たしかにそう考える方がわかりやすいし、話としてはすつきりする。でも、そうした図式的な決めつけが、逆にとんでもない差別や社会的軋轢あつれきをつくり出ししているんじゃないかという気がするんです。たとえば痴漢

冤罪事件というのは、いわばそうした世間の偏見による逆差別がその基礎にあるのではないかと」

「なるほど、つねづねそうした疑問をお持ちだったの
で、企業の民事専門だった先生が、市民運動に関わつ
たと？」

「ええ。私なりに、弁護士として社会に貢献したいと
考えまして。もちろん最大の問題は、冤罪を仕立てる
警察にあるのですし、それ以前に、痴漢自体は卑劣な

行為だ。しかし、男は誰しもやましいことを考えるものだという世間の常識も問題だと思っんです」

鬼頭は、内ポケットに差したペンに手をかけながら、神経質そうにそう言った。

ちようど学校が退ける時間だからだろう。その普通電車に乗っていたのは、ほとんどが制服姿の高校生たちだった。「四日市」から短い間隔でつづくローカル

駅のひとつ「楠」でも、そんな高校生たちが何人か降りた。

その高校生たちに混じって改札口を通り、小さな駅舎から出ようとした時、権藤がなぜかおろおろと後ずさるような様子を見せた。

「ん？ どうしたの……？」

リエがきくと、権藤は青ざめた顔で「い、いや、傘が……」と言った。

一瞬、降りだした雨の中に傘なしで出ることをためらったのかと思ったのだが、駅の出口を見てそうでないことはすぐわかった。

いっしょに出てきた高校生たちが、いっせいに傘を開いたのだ。

先がとがって、その上、四方八方に骨が突き出たころもり傘は、先端恐怖症の権藤にとって苦手なもののひとつであるにちがいがなかった。先刻、「四日市」で

空を見上げて憂鬱そうにしたのも、たぶんそれが理由なのだろう。

傘をさした高校生たちが立ち去ったところでやっと、権藤は出口に近寄り、商店がまばらに見える典型的なローカル駅といった感じの駅前通りを見渡した。そして、なんだか複雑な表情でつぶやいた。

「俺たちも傘を買わなきゃな」

雨はそれほど激しいわけではないから傘は避けたい

が、リエがいつしよなのでそうもいかないということ
だろう。

「コンビニとかはないみたいだし、あのスーパーを見
てこよう」

そう言うと、駅舎のすぐ近くにあるスーパーマーケ
ットに向かって雨の中を走っていった。

リエもすぐあとを追おうとしたが、駅舎の壁に町の
案内図があるのに気がつき、その前に立って、元美の

アパートと駅との位置関係を把握した。

そのあと、リエがスーパーに近づいたところで、権藤が透明ビニール傘を手に店を出てきた。

「在庫切れで、残り一本しかなかった」

そう言いながら、権藤は、恐る恐るといふ感じで腕を突き出し傘を開いた。そして、その傘の骨の先が自分の方に向かないように用心しながら上にかざした。

けっして大きくはないビニール傘である。二人が入

ると、どうしてもはみ出してしまふ。特に巨漢の権藤とでは、なおさらだった。歩き出すと、権藤は、自身は半分以上傘から出るような形で、リエの方にさしかけてくれた。当然、権藤の頭や肩にこぬか雨が降り注いでいる。

リエは、権藤が濡れないようにと、出来る限り寄り添うようにした。しかし、歩いていると、歩幅のちがいもあり、どうしても離れがちになる。それでリエは、

権藤が傘を捧げ持つ腕に手をまわした。

と、権藤が「あっ」と、短く声をあげた。

「ん？ どうしたの？」

「い、いや、なんでも……」

権藤は、なぜか上ずった声で言ったあと、落ち着かない感じできよろきよるとまわりを見回した。

「あの地図で見たんだけど、こっちみたいよ」

権藤がどちらに行くべきか迷っているのだと思い、

リエが言うと、権藤は「あ、ああ」とうなずいた。

車の往来は多少あるものの、人影のない道を北に向かつて歩いている間、権藤はなぜか無言で、足取りもぎこちなかった。

：：やっぱり、傘の骨とかが気になって、緊張して
るのかな？

そう考えながら5分ほど行ったところで、前方に橋が見えた。先刻の地図によれば、楠町で二手に分かれ

て伊勢湾に注ぐ、鈴鹿川の派川の方に架かる橋だろう。本流はもう少し北を流れているはずだ。

その川に出る一本手前の道を下流方向に折れると、車二台がやっとすれ違える程度の道がつづいた。まわりは静かな住宅街だが、背の高いマンションなどはなく、ほとんどが瓦屋根の日本家屋だ。たしかにここでは、夜の人通りはないだろう。

そんな住宅に挟まれてアルミフェンスがあり、その

中に、平屋建ての五軒長屋らしいアパートが二棟、重なるように建っていた。建物としては古びてはいず、けっしてみすぼらしくはないのだが、街なかのマンションなどくらべるとやはり質素な感じは否めない。派手な業界にいても、麗子や茉莉とはちがう元美の控えめな性格をよく表している気がした。

メモしてきた住所を確かめると、元美の部屋は奥の棟らしい。

棟と棟の間には砂利の敷かれた空き地があり、住人たちの駐車場になっている。その横側のフェンスにも車の出入口らしい切れ目があり、アパートのすぐ裏にある堤防の道へとつながっていた。ひとつ傘に入ったリエと権藤は、まばらに停まった車の脇を通り奥の棟に向かった。

元美の部屋は、その一番端だった。

ドアの前に立って、リエは言った。

「どうやら、検証も全部終わったみたいね」

現場保全のために見張りの警官くらいは残っているかと思っただが、周囲には誰もいない。ということ
は、ドアは鍵が閉じられ、誰も入れなくなっていると
いうことだ。警官であるリエと権藤にはそれがよくわ
かり、わざわざノックしたりノブに手をかけたりはし
なかつた。

主を亡くしたそのドアや、脇に置かれた洗濯機が、

細かい雨の中、ただもの悲しさを漂わせている。

これではなんの手がかりもつかめないだろうという
思いもあり、リエの気持ちも、そんな雰囲気の中に沈
んでいった。

と、その時、すぐ近くで子どもたちの声がした。

「……じゃあ、今夜は、おばあちゃんとお泊まり
なのね」

声の方を見ると、隣の部屋のドアが開き、そこから、

小学生らしい女の子が飛び出してきた。

「これっ、傘さしなさい。雨降ってるでしょ」

その女の子を追うように出てきた母親らしい女が、手に持った黄色いこうもり傘を差し出しながら呼び止めた。もう一方の手には、自分の傘とボストンバッグを持っている。

いったん走りかけた女の子が戻ってきてその傘を受け取ったところで、女はドアを閉め、キーを差し込ん

だ。

そして、そこでリエと権藤に気づいた。

リエが会釈すると、女はいぶかしげな表情のまま、小さくうなずいた。

「あの……」

リエが近づくと、傘を持った権藤もあわててそれにつづいた。

鍵をかけ終わり顔を上げた女は、相変わらず不審げ

な表情で眺めてくる。

たぶん彼女が、元美の帰宅を目撃したという「隣室の主婦」なのだろうと思ったりエは、とっさの思いつきで言った。

「じつは、あたしたち、亡くなった蓑浦元美さんの友人なんですけど、お通夜とかは、こちらでやるんじゃないのでしょうか？」

「ああ……」

主婦は、納得したという顔でうなずいた。

「熊野から出てこられたご両親が、今日、ご遺体を引き取られたそうですから、お通夜もお葬式も、あちらでやられるんだと思いますけど……」

司法解剖がすんだ遺体が、警察から両親に渡されたということだろう。

「ご実家の方に連絡をとられれば、予定を教えてください」と思いますよ」

主婦は自室のドアの前の庇を出て、自らも傘をさしながらそうつけくわえた。なんだか、早く話を切り上げたいという表情だ。

そう感じたりエは、なんとか会話をつづけようと「おでかけですか？」ときいた。

「ええ、ゆうべあんな事件があつたばかりで、ここにいるのもなんだか気味が悪いでしょ。今夜は主人の実家に泊めてもらうことにしたんです」

隣で殺人があつたのだ。そう思うのも無理はない。子どもが学校から帰るのを待って、さっそく、この場を離れようということだろう。

「あの、もしお急ぎでなければ、元美さんの最近の様子でもお聞かせいただけたらと思うんですけれど」

行こうとする主婦を押しとどめようと、リエが言う
と、主婦はちよつといらついた表情をした。

「お隣といつても、休みの日に時々、あの子が遊んで

もらってたくらいで、そんなにおつき合いがあったわけでもありませんし……」

「あ、あの、元美さんの最後の姿を見たのは奥様だつて、ニュースで聞いたものですから」

リエが言ったちよつと強引な言葉に、主婦は「そんなこと言っていましたか？」と、露骨に嫌そうな顔をした。しかし、あきらめ顔でこうつぶけた。

「もう、ゆうべから、警察にはじまって新聞記者やテ

レビの人に、同じこと何度もきかれて、いい加減うんざりしてるんですよ。こっちはただ、帰ってきた蓑浦さんとあいさつしたっただけです。夕食のあと、生ゴミを出しにドアを開けたら、ちようど蓑浦さんがドアの鍵を開けてるところだった。私が『お帰りなさい』って言って、蓑浦さんが『こんばんは』って。それだけで、私も蓑浦さんもそのまま部屋に入りました。蓑浦さんにべつにおかしな様子はなかったし、連れがい

たわけでもないです。そのあとも、お隣から大きな物音は聞こえませんでしたし、誰かが訪ねてきたかどうかどうかも気づきませんでした。警察の人が来るまで、私と主人は、ずっと奥の居間でテレビを見ていましたから」

もう何度もしゃべったからなのだろう。こちらが細かくきく前に、主婦は一気に言った。やはり、こんな話は早く終えたいという感じだ。

「ねえ、ママ、まだあ？」

母親を待っている女の子も、そう言いながら、セーターの袖を引っ張っている。

「でも、たとえば、見ていたテレビがコマースヤルになつて、台所やトイレに立った時、元美さんの声が聞こえたとかもなかったですか？」

リエがくいさがると、主婦はきつぱりと「いいえ」と答えた。

と、その時、リエの言葉を耳に挟んだらしい女の子

が言った。

「私、ゆうべ、トイレで元美お姉ちゃんの声、きいたよ」

「……えっ？」

リエたちばかりでなく、主婦も驚いたように女の子の顔を見た。

「ほんとに……？」

「うん、寝る前におしっこしに行った時、隣のドアが

開く音がして、元美お姉ちゃんの声がした」

その言葉に、リエはアパートの壁を見やった。たしかに、トイレらしい小さな窓が、元美の部屋の側についている。

「それは、何時頃？」

権藤がきくと、女の子は、その顔を見上げ、大きな体にたじろいだように首を振った。

それで、リエは、母親の方にきいた。

「ゆうべ、お嬢さんは何時頃寝たんでしよう？」

「小学生ですから9時には寝ろって言うんですけど、私たちがテレビを見てるもんですから、けっきょくいつもぐずぐずして……。ゆうべも、9時からのバラエティ番組を最後まで見てました」

「というと、終わったのは、10時5分前くらいですよ
ね」

「ええ、たぶん」

警察に通告電話があったのが10時少し過ぎというところだから、寝る前に女の子が聞いたのは、まちがいない、元美が死ぬ直前の声なのだろう。ドアを開けたのは、その時誰かが——おそらくは犯人が——訪ねてきたからにちがいない。

「その時、元美お姉ちゃんは、なんて言ったの？」

「『えーっ！』って。びっくりしたみたいな声だった」

ドアを開け、犯人と対面した元美は驚愕したのだから

う。とすると、そこですぐに殺人があったのだろうか。リエはいったんそう考えてから、それが間違いなのに気がついた。元美は麗子のように玄関で殺されたのではない。死体は居間にあったというし、凶器は台所にあった文化包丁なのだ。つまり、元美は犯人を部屋に上げたわけだ。

それで、女の子に確かめた。

「びっくりしたっていうのは、なにか、怖がってるみ

たいな声？」

と、女の子は大きく首を振った。

「ううん、そんなことないよ。『えーっ！』って言ったあと、元美お姉ちゃん、笑い出したもん」

「……え、笑った？」

「うん、大きな声で。だから私、よっぽどおもしろいお客さんが来たんだなって思った」

リエは、直前に自分が想像した場面と元美が笑った

という事実のちぐはぐさに首を傾げた。

「これが、私および『痴漢冤罪に抗議する会』が関わった判例をまとめたものです。取材の参考になさってください」

鬼頭は、そう言いながら、A4のプリントの束をテーブルに置いた。

サツキは、それを手にとって繰りながら言った。

「なんだか伏せ字が多いですね。痴漢被害を訴えた女性性は、年齢だけで、名前も住所も職業も消されている」

「ええ、もちろん公判では明らかにされているのですが、こういった事犯は、慎重に扱わないと新たな人権侵害にも発展する。外部にお渡しする資料には記さないのが通例になっています」

「それだけでなく、痴漢にまちがわれた被告側も書いてないものが多い」

「ええ、それだけ世間の偏見が厳しいということですよ。たとえ無実だといえど、世間に向けて声高に叫べる人ばかりではない。そんなことをすれば、『実際はやつたんだらう』という根も葉もない噂が一人歩きする危険もありますからね。名前が記されているのは、そのリスクを承知の上で社会に訴えていこうという勇氣ある方々です。取材は、そうした方に限らせていただくというのが会の方針でもあります」

サツキは、そこに「瀨瀨」の文字をさがしたが、見あたらなかつた。今、鬼頭が言ったように、本人が公表したくないということだろうか。そう考え、判例にもざっと目を通したが、やはり、瀨瀨と麗子の事例らしいものは見あたらない。

これはおかしい気がした。瀨瀨は無罪判決を勝ち取ったのだ。名前は出さないにしても、鬼頭にとっても『抗議する会』にとっても、積極的に公表したい成果

のはずだ。

そう思ったサツキは、思い切ってかまをかけてみた。

「ちよつと小耳に挟んだんですが、モデルがカメラマンを訴えた事件があったとか」

と、その言葉に、鬼頭の口元がぴくりと動いた。しかし、鬼頭はこう言った。

「さあ、私は存じ上げませんが」

鬼頭は、明らかに、瀨瀨と麗子の事件を隠したがっ

ているようだ。

サツキはそう感じたが、その木で鼻をくくったような言い方に、それ以上の探りを入れる手だてが見つからない。

そこで、考えた末、いつもの手に出ることにした。

ちよつと上目づかいに鬼頭を見ながら、ソファの腰を移動させ座り直す。ミニスカートからさらに太腿が出るようにしたのだ。

これまでの経験から言っても、これで、たいていの男は多少ガードが緩むはずだ。

そのうえで、これまでとはちがう甘えた口調で言うてみる。

「でも、女の方が訴えなければ、痴漢は犯罪として成立しないわけでしょ。人まちがいで訴えるということはあるかもしれないけれど、もしそうでないとしたら、どうして女はそんなことを言い出すのかしら？」

しかし、鬼頭は、先刻ちらりと見せた動揺すら微塵^{みじん}も感じさせず、こんな言葉を返してきた。

「それは、むしろ、あなたの方がよくわかっているのでは？」

その口調は、どこか冷淡ですらある。

……ん？

サツキは、ふつうの男とはちがうその反応にちよつと口をとがらせた。

：：あたしの魅力に心を動かされないなんて、この男、どうかしている。

まあ、そう思うところがナルシスト、サツキたる所以だが——そして、そうした意味では鬼頭の言葉は当を得ているのかもしれないが——、いずれにしても、痴漢冤罪事件の弁護士らしく、そちら方面のガードが堅いことはたしかなようだ。

打つ手を失い、サツキが迷っている時だった。

部屋のドアがノックされた。

「……なにかね？」

鬼頭が言うと、ドアから秘書が顔を出した。

「名都建設の山久保さんからお電話です。お客様だからとおことわりしたのですが、どうしても至急お話し
たいことがあるからと」

その名前にサツキはハツとしたが、鬼頭の側も多少
うろたえたように見えた。サツキの顔と秘書の顔の間

で目を泳がせた。

「……う、うむ、わかった。出るからまわしてくれ」

どこか迷いながらそう答え、サツキに「ちよつと失礼」と言っつてソファを立った。そして、サイドボードの電話のところまで移動した。

「もしもし、鬼頭です」

電話に出た鬼頭は、少しの間、山久保鉄馬と思われ
る相手の言葉を聞いていたが、やがてこう答えた。

「わかりました。今夜、腹を割ってお話ししましょう。お互い裸になって、ね。……ええ、そうです。8時に、例の場所で……」

「隣の部屋のトイレでも聞こえるような笑い声って、訪ねてきた人に微笑み返すっていうのとはぜんぜんちがうよね。あの子の言ったニュアンスだと、いったん驚いたあと、大笑いしたみたいだし。それって、いつ

たい、どういうシチュエーションなんだろう？」

雨が細かな波紋を重ねる川面を見やりながら、リエが言った。

元美のアパートを離れたあと、周囲を見てまわろうということになり、権藤とリエは、すぐ裏手を流れる鈴鹿川派川の堤防の道に出た。そして、どちらから言うでもなく、川の流れにしたがって歩いていった。

真冬ほどではないにしても、そば降る雨は冷たい。

ましてや、川幅が広がる河口近くだ。時折吹く風もさえぎるものはない。

少し先にある橋越しにさらに向こうを見透かせば、川面がそのまま海面につづき、それが、雲のたれ込める灰色の空と区別がつかない感じで広がっている。そんな色のない風景が、よけいに寒々しさを感じさせた。

「……ねえ、聞いてる？」

権藤が返事をしなかったからだろう。リエがこちら

を見上げ、問い直してきた。

無彩色の背景の中で、その明るい肌色や唇のコーラルピンクだけがやけに鮮やかだった。

「……あ、ああ。どっちにしても、客は、まったく知らない人間じゃなかったってことだろうな」

権藤はそう答えながらも、自分の体がまた緊張していくのを感じていた。

緊張の理由は、この寒さのせいでも、また、苦手な

こうもり傘のせいでもない。いや、傘のせいではあるのだろうが、少なくとも、先端恐怖症とは関係なかった。

歩き出すと同時に、リエは、また腕に手をまわしてきた。

そば降る雨の中、ひとつ傘に寄り添う男と女。

そんなシチュエーションが、権藤を否応なく緊張させているのだ。

：：女が自分の方から腕を組んでくるというのは、
どういうつもりなのだろうか？　なにかを期待している
のだろうか？

つい、そんなふうに考えてしまう。

そして、そう考えている自分に気づいたところで、
いつものように、リエは本物の女ではないのだという
ことを思い出す。

と、今度は、男同士で寄り添って相合い傘をしてい

るのだということに、また、奇妙な緊張感が募る。

最前から、そんなことのくり返しだった。

「そうだよね。時間から考えて、その人が犯人にちがいないだろうから、犯人はやっぱり、顔見知りということになる。それにしても、犯人を見ておかしそうに笑うっていうのがわからないなあ。あの大人しそうな元美ともイメージ合わないし……」

リエはそう言いながら立ち止まり、そこで左右を見

やった。堤防の両側に——つまり、川の側にも、人家が並ぶ側にも——小さな階段がついていた。

このまま真っ直ぐ行っても、元美のアパートから離れていくばかりだと思ったのだろう。リエは、権藤に視線で示してから、人家の側に降りる階段に近づいた。

コンクリート製の階段は狭く、また雨に濡れて滑りやすそうでもあった。そのせいか、リエは、さらに権藤に体を寄せ、腕にしがみつくようにしてきた。

権藤は、ますます体をこわばらせ、階段を下りきつたあとも、無言で歩いた。

ふと気がつくのと、真っ黒な板壁の建物がまわりを取り囲む奇妙な場所に出た。どの建物も時代がかり、敷地も高さも並みの家よりずっと大きい。

なんだろうと思って見まわしていると、リエがつぶやいた。

「……ん？ ……デ・ジャ・ヴ？」

「えっ、なに？」

「……あ、ううん。……こんな感じ、前に夢で見たよ
うな……なんか、そんな感じがして……」

言葉どおりどこか夢見るようなまなざしで言うリエ
に、権藤は困惑した。

……ずっと腕を組んだままだし、リエは今、このシ
チュエーションに、なにかロマンチックなものを感じ
ているんだろか？　もしかして……、たとえば相合い

傘で肩を抱かれるとか、そんなことを期待しているんじゃないだろうか……？

けつきよく、事件についてのそれ以上の情報も得られず、また、別の方でも決心をつけかねたまま、権藤はリエとともに楠の町を後にした。そして、近鉄電車に乗って名古屋に戻ったところで、クイーンズオフィスに連絡を入れた。

これから帰ると伝えると、ミミからはこんな返事が返ってきた。

「今日一日、いろんなサーバーにもぐり込んで、けっこう成果があつたよ」

今朝の風邪っ気も吹き飛んだような弾んだ声音からも、なにかを探り当てたらしいことはわかった。

「そうそう。ボスから何度も連絡が入った。『権藤君はまだかね』って。なんか、一人で時刻表と格闘して、

そうとう煮詰まってるみたい。『まだしばらくはいるから、戻ったらすぐに知らせてくれ』ってさ」

その言葉を聞いて、権藤は、オフィスに戻るのをためらった。名古屋に戻っていることを知られれば、また呼びつけられそうだ。ネットの音声回線がつながったオフィスでは、居留守も使いにくいだろう。

それで、こう提案した。

「今夜の打ち合わせ、みずえママの店でやらないか？」

「そうね、楠も醸造業がさかんだからね。鈴鹿川の伏流水が豊富で、水もいって言うし。たしか、創業二百何十年って大きな酒造会社があるはずよ」

リエが楠で感じたことを話すと、みずえはすかさずそう言った。

女装スナック「トランシー」。

栄の裏道、飲食店ビルの並ぶ武平町ぶへいちやう通り沿いにある

とはいえ、店の性格上、混むのは深夜だ。開店したばかりのこの時間では、客はまだ、カウンターのリエと権藤しかいなかった。

「うん、要するにその酒造会社の真ん中に出ちやっただってことみたい。一瞬、デ・ジャ・ヴなんて思ったけど、なんのことはない。ずらっと並んだ酒蔵が、昨日見た常滑や半田の蔵に似てたってだけなのよね」

ビールのグラスをもてあそびながら言うリエの言葉

に、隣に座った権藤が「なんだ……」とつぶやいた。

「……ん？　なに？」

リエが見やると、権藤はなぜか——まだ、ほとんど飲んではいないはずなのに——赤い顔をして、「いや、なんでも」と言った。それでリエは、ふたたびみずえに向き直り、話をつづけた。

「だけど、雰囲気っていうか、風景そのものがすごく似てたのよ。蔵もやたら大きくて。そりゃ、醸造蔵な

んで、どこでもおんなじようなもんだろうけど、前に旅行して見た他の地方の酒蔵は、ちよつとちがった気がするの」

「まあ、知多も伊勢も同じ赤みそ文化圏だから」

「えっ？　赤みそ……？」

「うん、食文化史とかに出てくる地域分類で、そういうのがあるのよ」

みずえは、クイーンズの「女装の先生」だ。クイーン

ンズを立ち上げた時から、メイクや女声の出し方をはじめ「女に見せる技術」をさまざまに教えてもらっている。しかし、じつは、趣味が高じてこんな仕事を始める前、実際に学校の先生をやっていたという人でもある。それも、歴史教師だったらしい。だから——ふだんは女装客たちと馬鹿話ばかりしているが——、こういう話題になるとやたらと蘊蓄うんちくめくのである。

「リエちゃんは、名古屋出身だから、お味噌汁って言

「つたら、もちろん赤だしでしょ」

「うん、白みそって、なんか頼りなくって。赤だしの中でも、特に八丁味噌ね」

「ふふ、あの苦いくらいアクが強くてくどい味が好きなわけね。公平ちゃんは、関東出身だから苦手だよね」

「え、ええ。名古屋じゃあ、どの店入っても赤だしだから、最近はずっかり慣れましたけどね」

「米麴こうじをいつさい使わずに、純粹に大豆だけで発酵させた赤みそを食べるのって、全国でも東海地方だけなのね。旧国名で言えば、尾張、三河、美濃、伊勢。要するに伊勢湾と三河湾を囲む場所ね。お醤油も、ふつうのじゃなくて、いわゆる『たまり』を使ってきた地域ね。このエリアの醸造技術や食文化はだいたいおんなじものだって言われてる。その中でも、江戸後期から醸造業の中心になったのが、今リエちゃんと言っ

た八丁味噌の産地、三河の岡崎あたりから始まって、知多半島の北半分と北伊勢なの。まあ、場所によって、お味噌が得意だったり、お酢が得意だったり、お酒が得意だったりっていうことはあるけどね。そう考えると、知多と楠で蔵の造りや雰囲気と同じなのは、あたりまえかもしれないわね」

「ふうん……」

リエが感心していると、みずえは「歴史クラブの生

徒たちを連れて、あのあたりをフィールドワークして歩いた頃が懐かしいわ」と言った。

と、そこへ、ミミがやってきた。

「とんでもないことがわかったよ」

そう言いながら、さっそく、持ってきたノートパソコンをカウンターの上で開く。

「サツキは……？」

パソコンが立ち上がるまでの間にリエがきくと、ミ

ミは「さつき、いったん帰ってきたけど、すぐに男物に着替えて出てったよ」と言った。

「男物に？」

「うん、変装なんだって」

「……は？」

「鬼頭にも山久保にも女姿を見られてるからってさ。それに、女の子じゃ入れないところに行くらしいし」

「……？」

リエと権藤はさらに首を傾げた。

額ににじみはじめた汗を手の甲で拭いながら、山久保は、自分たちの話が誰かに聞かれるのではないかと気になって、オレンジのランプだけが灯る室内を見まわした。

山久保と鬼頭の他には、男が二人。一人は、階段状に造られた木のベンチのいちばん上でこの場の主よろ

しくあぐらをかいている中年男。あと一人は、山久保たちからそんなに離れていない席に座る妙に手足が細長い若い男だ。どちらも山久保たち同様、全裸で座った腰のあたりにタオルを掛け、百度以上の室温にやせ我慢しながら目をつむっている。小声で話すこちらの話など聞いてはいないだろうし、やがて暑さに耐えられず出て行くだろうから、話全体を聞かれることはない。サウナというのは、意外に密談にはぴったりの場

所なのだ。

とはいえ、それはこちらと同じ。長話はできない。

そう思った山久保は、やはり鼻の頭に汗の粒をにじませはじめた鬼頭に目を戻し、さっそく口を開いた。

「まあ、前の件は、うちとは関わりないことでしたから看過することもできました。でも、今回の件はそうはいかないでしょう」

「いや、しかし、死んだ女とおたくに直接の関係があ

「つたわけではないのですから」

「それにしても、あの女の過去がほじくり出されれば
……」

「あの手の事犯は、被害者の名前が表に出ることはないし、記録も少ないんです。今回の事件からあの事件にたどり着くのは、じつは簡単ではないと思いますよ。もう二年前のことですしね」

「今日はまず、死んだ蓑浦元美のことを調べようと思
ったのね」

ノートパソコンを操りながら、ミミが言った。

「それで、手始めに新聞社サイトの三重県版とかをさ
かのぼって検索してみた。でも、その名前ではヒット
しなかった。で、いろいろ苦労して、三重県の役所関
係のサーバーにもぐり込んでみたの。そしたら、津地
方裁判所の裁判記録に元美の名前が見つかった」

「……裁判？」

「うん。じつは二年前、彼女は痴漢事件の被害者としてある男を告訴してるのね」

「えっ、痴漢……!？」

ミミが表示した判決文らしい画面をのぞき込みながら、リエは、驚いたように聞き返した。

「うん。被告の男は木原浩二。桑名に住む当時五十三歳の建設会社社長。この男が、たまたま、あるビルの

エレベーターの中で元美と二人きりになった。そこで、痴漢行為におよんだっていうのが罪状。木原本人はずっと無罪を主張しつつけてたんだけど、判決は、執行猶予つきの有罪だった。元美の着衣が破れてたのと、一階でドアが開いた時、木原が元美のことを壁に押さえつけるようにしてたのを目撃されたの。それが決め手になった。もちろん、元美自身が痴漢されたと言いき張ったことが大きいんだけどね」

「瀨瀨と麗子の事件によく似てるわね。もしかして：
：冤罪？」

「その点はなんとも言えない。でも、元美の体に外傷
や木原の体液が残ったとかいう決定的な物証はなに
もないのね。つまり、元美が自分で服を破ってウソを
いたという可能性もないわけじゃない。壁に押さえつ
けてたのだから、エレベーターの中で元美が暴れるか
なにかして、それを止めようとしたとも考えられる。

実際、弁護側はそう主張したわけだし」

「しかし、その状況だと、ふつうは女の言ってる方を信じるよな」

権藤が相づちを打つように言った。

「うん。だから、判決もそうなったわけ」

「木原は控訴しなかったの？」

「いったんはしたようだけど、途中で取り下げた。遺族がね」

「……えっ？」

「じつは、木原自身が、控訴審が始まる前に自殺してしまっただの。裁判で悩んでたこともあるようだけど、事件以来、仕事が来なくなっただけで会社の経営が立ちゆかなくなっただけというのが原因らしい」

「あの事件は、すでに被告も死んでるんです。おたくとつながりがあったあの男が死んで、その上今度は女

も死んだ。むしろ、事件とおたくの会社を結びつける輪が、またひとつ消えたと考えるもいいんじゃないでしょうか」

鬼頭は、あくまで、なんのこともないというふうにつづけた。自分の方に責任がおよんでこないよう、論点をすり替えようとしているにちがいない。弁護士らしい姑息な手だ。

そう思った山久保は、皮肉な口調で言った。

「うちとあの事件のつながりを詮索されるとしたら、そんなことではないでしょう。もつと強いセンがあるんじゃないでしょうか？」

「……ん？」

「とぼけないでくださいよ。先生ご自身のことですよ」

「もしかして、その裁判で、木原を弁護したのは：

……？」

リエがきくと、思ったとおりミミはうなずいた。

「うん、鬼頭だったの。もつともそれは、そんなに不思議なことじゃないよね。そもそも痴漢冤罪事件を多く担当してる弁護士なんだし、例の『抗議する会』もこの裁判を支援してたみたいだから」

「しかし、同じ事務所のモデルが冤罪の疑われる痴漢事件に関わってて、最近になって相次いで殺された。

その上、被告側の弁護人はどっちも鬼頭だったとなる

と、単なる偶然とは言えない気もするな」

「うん。でも、それだけじゃあ、鬼頭とふたつの殺人事件の関係は見えないわね。まさか、弁護士が告訴人二人を恨んで殺したとも思えないし」

「まあ、それはそうだな」

リエと権藤の会話を聞いていたミミが、そこで、「ただね」と言った。

「鬼頭と二年前の痴漢事件の関係はそれだけじゃない

の」

「ん？　　どういうこと？」

見ると、ミミは、ノートパソコンのタッチパネルに指を走らせ、今度はどこかの会社のホームページを表した。

「木原の会社は、三重県北部で土木関係の公共事業の下請けをしてたのね。で、ほとんどの仕事は、このゼネコンから受注してた」

リエと権藤がのぞき込むと、そこには「名都建設株式会社」という社名があった。

「名都建設って……もしかして、あの山久保の会社？」
「うん、そう。鬼頭が顧問弁護士をしてる」

「うちが最も心配しているのは、捜査が先生の周辺におよぶことです。なにしろ、ことがことだけに警察はあれこれ調べるでしょう。二年前の事件にも気づくか

もしれない。そうなれば当然、先生のつながりを通して、あの事件とうちとの関わりも詮索される。先生とうちとは、いわば一蓮托生……」

山久保はそこまで言いかけて口をつぐんだ。上段の席であぐらをかいていた中年男が立ち上がったからだ。

その男が脇を通ってサウナ室の外に出て行くのを待って、つづきをしゃべろうとすると、それより先に、

鬼頭が口を開いた。

「い、いや、警察というのは、想像以上にセクシヨナリズムの強い組織です。軽犯罪と強行犯事件では、それぞれ扱う部署がちがう。たとえ私が痴漢事件の弁護士と御社の顧問を同時に務めていたとしても、それをつなげて考えられる捜査官なんて、まずいません。ましてや、それ以上のことを考えられる想像力のあるやつなんてね」

「元請け会社の顧問弁護士が、木原の痴漢裁判の弁護士をつとめてた。これって、なんか妙だと思わない？」

ミミの言葉に、リエは考えながらうなずき、権藤は首を傾げた。

「そうかな？　そもそも、木原に鬼頭弁護士を紹介したのがこの名都建設だったと考えればなんの不思議もない。痴漢を疑われて困ってる下請会社の社長に、そ

の筋には強い自分のところの顧問弁護士を紹介した。ありそうな話だと思っけどな」

と、その権藤の言葉に、今度はリエが首を傾げた。

「それはどうかな？ それだけ下請けの面倒を見てくれる会社が、事件後、発注を切ってしまうわけ？」

「あつ、そうか。でも、それは、有罪判決が出たから、世間体もあってやむなくということじゃあないのか」

「ところが、そうじゃないみたいなの」

ミミがそれを否定した。

「木原の会社は、事件後すぐに経営難に陥ってる。判決後じゃなくて、係争中から名都建設は木原のところ
に仕事を出さなくなったみたいなのね」

「つまり、事件を理由に木原のところを切り捨てたつてことか」

「うん」

「にもかかわらず、顧問弁護士の鬼頭は木原の弁護人

になった」

「そう。『痴漢冤罪に抗議する会』が仲介したんだとしても、なんとなくちぐはぐな感じがするでしょ」

「そんなに楽観していいんでしょうか？」

「いや、べつに楽観してるわけではないですが……」

あえて平然とした顔を装っているような鬼頭に目をやり、山久保は少々いらつきながらつぶけた。

「たしかに先生のおっしやるとおり、警察は、しよせん役人でしかない。それぞれ目の前の担当事件だけを見ていて、それが余分な方向に拡大するのを本能的に避けるものです。それに、いざとなれば、圧力のおかげようもある。しかし、うちがなにより腐心しているのは、警察以上に、あのハエのような連中のことです」

「ハエ……？」

「ええ。やつらは、ここぞとねらいを定めたら、じつ

は警察よりしつこい。この社会で勝ち組になれなかつたことを恨んで、民主主義だとか社会正義だとか、わけのわからんことを振りかざしてくる。中には、本気でそれを信じているやつまでいるからたちが悪い。そして最後には、世論などというさらにわけのわからんものを動員してくるんです。ことに、今回のようなスキャンダラスなことがからんでくると、やつらに、格好のエサを与えることになりかねません」

「なんかもつと奥がある気がして、あたし、名都建設の周辺を調べてみたのね。そしたら……」

「なにか出てきたの？」

「うん。じつは三年前、三重県のある市の河川改修工事を名都建設が受注してるの。それが、工事完了後、役所ぐるみの談合による不正落札だったんじゃないかって疑惑が持ち上がった。NPOのオンブズマン組織

が監査を請求して、市議会とかにも働きかけはじめてたの。どうやら、その団体は、内部告発による確実な証拠をつかんだらしいのね。市議会の会期に合わせて、それを公表する記者会見まで予定された。ところが、その直前になって、記者会見が中止されてるの」

「もしかして……」

リエがまた、考えながら言った。

「その時期が、二年前の痴漢事件と重なるってこと？」

「そう」

「……えっ？　　どういうことだ？」

話の展開が読めなかったようで、権藤がきいた。

「いや、ですから、そのハエとやらに格好の材料を与えないためにも、断ち切るべきものは、早めに断ち切った方がいいと……」

「おや、そのおっしやりよう……今回の件は、やはり

先生のご指示だったと、そう思ってたさしつかえないわけですね」

山久保が言うと、鬼頭は「い、いや」とあわてて否定した。

「仮にも弁護士たる身。私自身がそんなことを指示することは断じてありません」

山久保は、それがどこまで信用できるのか疑わしいと思った。

表では正義漢ぶるこの男が、影では——殺人ではないにしても——まったく裏腹のことをしているのを、山久保自身がよく知っていた。

「つまり、木原の事件は、単なる痴漢冤罪なんて話じゃない、やなくて、名都建設の謀略かもしれない……ってことね」

リエの言葉にうなずき、ミミがつづけた。

「その河川改修を受注したのは名都建設だけど、現場で仕切ってたのは、どうやら下請けの木原の会社だったみたい。当然、入札額の積算段階から関わってたはずで、その過程で市の担当者から予定入札額が漏れたことや、名都建設が他のゼネコンと談合したことを知ってしまったんじゃないかな」

「そうか。その内部告発者というのが木原だったってことか」

権藤にも、やっとながりが理解できたようだ。

「うん、たぶん。自分の意思なのかオンブズマン組織に口説かれたからなのかはわからないけど、木原は不正を告発する決心をした。ところが、その矢先、畏にはめられてしまった」

「痴漢犯としてつかまって社会的信用を失ったことで、その告発も不発に終わったってわけね」

「うん、要するにそういうことなんだけど、もつと実

際的に告発が不可能になったみたい。だって、木原が痴漢容疑で逮捕されたのは、オンブズマン組織が記者会見を開くとアナウンスしてた日の前日なんだから。

当日、木原はまだ警察に拘束されたままだった」

「なるほど、主役を失って、告発の記者会見は中止されたってことか」

「その上、オンブズマンとしても、そんな人物を表に出すわけにはいかなかった。それで、決定打を欠い

たまま、不正疑惑は疑惑のまままで終わってしまった。
名都建設の思うつぼってわけね」

「つまり、木原が内部告発するらしいという情報をつかんだ名都建設が、先手を打って痴漢犯に仕立て上げた。しかも、その事件を利用して発注も止めてしまった。木原を社会的にも経済的にも葬り去って制裁したってことか。それで、追い込まれた木原は自殺してしまっただから、もし本当だとすれば、なんて汚い会

社なんだ」

権藤が納得と憤怒の声をあげると、そこでリエはちよつと考えるようにして言った。

「うん。でも、痴漢事件という謀略を具体的に提案して実行した中心人物は、たぶん鬼頭でしょうね」

「うん。あたしもそうだと思う。なんせ、自分の専門分野なんだしね」

ミミも、それに同意した。

山久保と鬼頭は、すでにサウナの中で十分以上話していた。太った鬼頭も、ぶよぶよした肌から出る汗をすべて出してしまったようで、肩で息をしている。この状況に耐えるのももう限界だった。

「先生、そろそろお互い、腹のさぐり合いはやめにしませんか」

山久保はたまらずにそう言った。

「先生が、いわば二重の意味で手がけた事件の被害者役が相次いであんな目にあつた。どちらか一方だけだつたら、他に考えようもあるけれど、もう、先生の関与を疑うなという方が無理でしょう。少なくとも、お心当たりはおありになるはずだ。正直におっしゃっていただけないですか」

さらにそう迫つた山久保に、鬼頭は——この我慢大会に肉体的にも耐えかねたのだらう——どこかあきら

めたような顔をした。

「わかりました。言いませう。まあ、今日はそのつもりで来たのだし」

「ちよ、ちよっと待ってくれよ」

先走り気味のリエとミミの会話に、権藤があわてて割って入った。

「今の話はおかしいんじゃないか。だって、鬼頭は木

原の弁護人になつてゐるんだぜ。もし、鬼頭が木原を陥れるために罫にはめたんだとしたら、なんでまた、わざわざその弁護をする？ やつてることが矛盾してないか」

「それはね、こういうことよ」

リエは、まるで出来の悪い生徒を諭す教師のような口調で言った。

「当時、木原が置かれていた状況を考えてみて。木原

は、ずっと取引きしてきた元請会社を裏切って、不正を告発する決意をしたのよ。そこに突然、身に覚えのない痴漢容疑が降って湧いた。しかも、告発を翌日に控えてね。当然、自分の動きが察知されて、はめられたんだと思うでしょ。名都建設を疑うはずよ。警察の取り調べや法廷でそれを口走ることにはじゅうぶんあり得る。まあ、木原がそう言い出したところで、たぶん、苦し紛れの言い訳だとしか思われないでしょうけ

ど、それにしても、名都建設の不正が表沙汰になる可能性は高い」

「……あっ、そうか。そんな木原の口を封じるには、弁護人になってしまるのがいちばんってことか」

「うん。少なくとも、他の弁護士が出てきて背景を探りはじめるようなことは防げる。木原をうまく誘導すれば、そのオンブズマン組織との接触を断つこともできるわけだしね」

「なるほど……」

「ただ、わからないのは、鬼頭と今回の元美殺しが具体的はどうつながるのかってことね」

ミミが言うと、リエはうなずいてからつぶけた。

「それと、もうひとつ。なぜ、その痴漢事件から二年もたった今になって、元美が殺されたのかってこと」

「じつは、一連の仕掛けに関わった人間の中に、警察

に内通した者がいたらしい」

「……えっ!？」

「それで警察が動き出しているという情報をつかんだんです。警察上層部から出てきた話だから、信用性は高いと思う」

鬼頭の言葉に山久保はしばらく絶句していたが、やがて言った。

「だから、先生は、その裏切り者を肅正した……と」

「いや、まちがってもらっては困ります。私は、ただそれを、彼女たちのリーダーをしている人間に話しただけです」

「……ふふ、なるほど。いつもと同じというわけですね。先生は、ただ情報を伝えるだけ。あとはすべて、先生の意を察して、そのリーダーとやらが仕切ってくれる」

「いや、だから……」

鬼頭は、そこでちよつと口ごもつてからつづけた。

「私は、殺すとまでは思っていなかった。これは本当です」

鬼頭が口走ったその言葉が気になり、山久保はふたたびサウナ室の中を見やった。

と、先刻までは首をうなだれていた若い男と目が合った。

「……ん？」

あせったように目をそらしたその男の顔を、山久保は思わず見つめていた。

汗を流していても毛穴が目立たない肌。目鼻立ちもすつきりした細面の美男子。その顔には、どこか記憶に引っかかるものがある。

そう思っていると、鬼頭も顔を上げ、その男の方を不思議そうに見ていた。

山久保はその男を気にしながら言葉を選び、つづけ

た。

「……まあ、たしかに、危ういことになる前に、危険因子を排除しておくことは重要でしょう。あの時、われわれがしたようにね。しかし、それがやぶへびになつては元も子もないでしょう。そこは、先生の方でうまくコントロールしていただかないと」

「ええ、それは重々」

「先刻、先生は、警察は背後の事情まではわからない

だろうとおっしやった。しかし、本当にそんなに安心
していいのでしょうか。私自身、どうも最近、身
辺が探られているような気がしてなりません。たとえ
ば昨日、栄地下街の喫茶店で突然卒倒した大男。あれ
は、おそらく、あの時の……」

そこまで言ったところで、山久保の頭にあるイメー
ジが浮かんだ。そして、あわてて例の若い男の方を見
た。

…えっ!?

と、そこで、その男がすっと立ち上がり、出口へと向かった。

…あの男…いや、女…、いや、男は…。

少々混乱しながらも、山久保は、さらに危険が身に迫るのを感じた。

「なるほど、やっぱり想像した通りだったのね」

いつもとちがう革ジャン革ジャケットという男姿で「トランシー」に現れたサツキの話聞き、リエとミミ、そして権藤は大きくなずいた。

その後、三人が推理した内容をサツキにも伝えたところで、リエは言った。

「たぶん、鬼頭が最後に言った言葉は嘘じゃないんでしようね。麗子や元美を殺したのは、そのリーダーという人物で、鬼頭本人ではない。少なくとも、ゆうべ、

元美の殺害時刻に鬼頭が栄にいたことは、サツキとミミが見ているわけだし」

「その鬼頭の下で動いているリーダーって、誰なんだろう？」

「例の四人のうちの誰か？」

「うん。動機は最初考えたのとちがうにしても、麗子や元美に近い人間ということでは、とりあえず、そこから考えていっていいんじゃないかしら」

「今のところ、例の四人の中で鬼頭とのつながりがはつきりしているのは……？」

「瀨瀨と笠置。瀨瀨は自分自身の裁判の弁護士だったわけだし、笠置はゆうべ、自分で知り合いだって言うてたし」

「でも、瀨瀨ははずしてもいいんじゃないかな。瀨瀨が鬼頭と知り合ったのは一年前のはずでしょ。二年前の元美の事件には関われない。それにだいいち、瀨瀨

自身が痴漢裁判の被告になっちゃったわけだから。まさか、自分自身に痴漢冤罪を仕掛けたわけではないしね」
「ちよつと待ってくれよ」

そこで、権藤が議論を止めた。

「瀬瀬の関わった痴漢事件も、元美の事件と同じような裏があるってことか？」

「さっきの鬼頭と山久保の話の流れだと、そう考えていいんじゃない」

「でも、どんな？」

「そこらへんは、もう一度背景を洗ってみた方がいいわね。だけど、どっちにしても、瀨瀨はリーダーになり得ない」

「とすると、リーダー、つまりふたつの殺人事件の犯人は、笠置？」

「なんかちがう気がするな。笠置には、どっちの事件にも、かなりはつきりしたアリバイがあるし」

話がそこまで進んだところで、ミミが突然、「あーっ、そうだ。ひとつ大事なことを忘れてた」と大きな声をあげた。

「……なに？」

「じつはね、今日、いろんな裁判記録を調べてる時、もう一人、『ニューセンチュリー・モデルクラブ』のモデルが関わってる痴漢事件を見つけたの」

「……え？」

他の三人がミミの顔を見ると、ミミはまた、ノートパソコンに裁判記録を表示してから言った。

「四年前の事件なんだけどね、その痴漢被害者が、モデル時代の添沢茉莉だった」

「……えーっ！」

三人がさらに驚きの声をあげる中、ミミは、その概略を説明した。

「名鉄常滑線の電車で痴漢されたって訴えてるの。被

告は東海市在住のスポーツ用品店店主。裁判は、纈纈の場合と同じように、証拠不十分ということで無罪になつてる。おまけに、弁護士は鬼頭だった。というより、これが、鬼頭が痴漢冤罪裁判に本格的に関わりだした最初の事件だったみたい」

「ということとは：：つまり、茉莉と鬼頭も、少なくとも面識はあるわけじゃない。法廷で証人尋問とかもあつたでしょうし」

「その事件も、詳しく調べてみる必要があるわね」

リエはそう言ったあと、「その痴漢を疑われた男の家って、東海市って言ったよね」とミミに確認した。

「うん」

「知多半島のつけ根か。その男から話を聞くためにも、明日、もう一度知多半島に行こうかな？　山田と茉莉のアリバイも現地で検証してみたいし」

と、そこで急に、カウンターのの中のみずえが身を乗

り出した。

「あつ、あたしもついてっちやおうかな。さつき、あんな話したら、久しぶりに郷土史のフィールドワークとかしたくなっっちゃった」

「あのね、ママ、あたしは観光に行くわけじゃないんだから」

「だいじょうぶよ。リエちゃんの邪魔はしないから。どうせ、昼間は暇なんだし、いっしょに行こ」

「だからさあ……」

リエが、急にその気になってしまったみずえを思いとどまらせようとしていると、なにか考えていたサツキが独り言のように言った。

「それにしても、鬼頭が言ってた警察上層部って誰なんだろ？　けつきよく、その人が余分なこと言ったせいで、麗子と元美は殺されちゃったわけでしょ」

「あっ、もしかして……」

ミミがつぶやいた。

その言葉に、みずえ以外の全員がハツとした顔をしたら。もちろん、みんなある人物を思い出したからだ。

と、その時——、権藤の携帯が鳴った。

「……はい、権藤です。……いえ、今やっと名古屋に戻ってきたばかりです。……今夜はもう……、はい。

……えっ、明日ですか？ 明日は……」

権藤はそう答えながら、リエの顔を見やり思いつい

たようにつづけた。

「……あつ、明日もやはり、出掛けることになりました。……ええ。じつは知多半島へ。山田と茉莉のアリバイの検証に……」

それは前にも見た光景だった。しかし、その結論は、前とはちがうものになった。

「……えつ、それは……。……しかし、……はあ、……
……まあ、そうですが、なにかとお忙しいのではないか

と……。ええ。……はい、……わかりました」

権藤は、最後の言葉をしぶしぶという感じで言い、
携帯を切った。

そして、こう告げた。

「明日は特にスケジュールもないから、あの人もいっ
しよに行くってさ。署の車を用意させるから、それを
使えって」

file-206

邪計の短絡

または
ダブルデートでラブホテル

「ほおら、よう見とりやあせ。潮が引いてくで」

全面ガラス張りの手前につけられたカウンターに肘

をつき、外を見ているミミの横で、七十年配の老人が言った。

その言葉どおり、先刻まで海に見えた場所の水があつという間に後退し、黒っぽい泥の地面が現れた。港湾施設やガスボンベなどが建つ埋め立て地を背景にして、広大な湿地が広がっていく。

「すぐに、シギやチドリがようさん（たくさん）集まってくるわ」

名古屋市の西を流れる庄内川と新川が合流し、名古屋港に注ぐ河口近く。そこに建てられた野鳥観察施設にミミはいた。

「あの泥ん中には、カニとかキヤア貝とかゴキヤアゴカイとか、エサになるもんがうじやうじやおるで、日本でも有数の渡り鳥の飛来地ひりやあちになつとるんだわな」

ミミを挟んで先刻の老人とは反対側に立つ老人が、自慢げに言った。

「まあ、名古屋の人間なんぞ田舎もんでどうしようもにやあが、この干潟を守り通したことだけは、ほめたつてもええ。日本中に、いや、世界中に誇れることだとわしは思つとる」

今やミミの目の前にその全貌を表した湿地の名は、
藤前干潟。
ふじまえ

ここ十年来、ニュースなどでもたびたび報じられてきたから、ミミも——実際に来たのは初めてでも——

その経緯はよく知っていた。

十五年ほど前、市は、既存のゴミ処理施設の処理能力が限界に達したとして、この干潟を埋め立て新しい処理場を造る計画を立てた。それに対し、野鳥の会をはじめとする自然保護団体が反対の声をあげた。市民をも巻き込んだ地道な反対運動が永年つづいた結果、一九九九年、けつきよく市は計画を全面撤回せざるを得なくなった。その後、二〇〇二年にはラムサール条

約にも登録され、この豊かな干潟は、永遠に「開発」の手から守られることになったのだ。

「……あっ、あれがそう？」

昨日とは打って変わった春らしい陽光の中、たくさんの白い点が干潟に滑降したのを見つけ、ミミが指さすと、二人の老人は「おお、そうだぎやあ、そうだぎやあ」と満足そうに言い、備えつけの望遠鏡の使い方などを熱心に教えてくれはじめた。

休日には毎週、野鳥の会が主催する探鳥会などがあり、子どもたちを含めた多くの市民が集まるという話だが、ウィークデイの今日は、リタイアした老人しかないのだ。

教えられたとおり望遠鏡をのぞいてみると、数分もしないうちに、干潟の表面は、大小の鳥たちでいっぱいになった。

「わー、すごい」

泥の中にくちばしをつっこみ、エサをついばむ鳥たちの様子を見てみると、思わず夢中になり、ミミはしばらく、ここに来た本来の目的を忘れていた。

と、老人の一人が、また声をかけてきた。

「あんたみてやあな若きやあ子がひとりで来やあすのは珍しいと、さつきから思っと思ったんだが、誰かに聞いて来やあたのきや？」

「えっ？　：：あつ、そうです。あたし、モデルやつ

てるんですけど、鳥が好きだって言ったら、あるカメラマンが薦めてくれて」

「ああ、モデルさんきやあ。やっぱりな」

「やっぱりな……だと。わかりもせんくせによう言うわ」

「いや、このスタイルのよさとかわいらしさ見て、わたしは最初からそうじゃにゆあかと思つとたんだ」

モデルという言葉に、老人たちはさらに気をひかれ

たらしい。二人とも、バードウォッチングそっちのけで、ボダイウオツチングをはじめた。年をとつても、男は男である。

「……で、その、カメラマンたらしいのは、なんて人でやあ？」

「また、知ったかぶりきや。カメラマンの名前なんか、聞いたってわからせんだらう」

「いや、鳥好きのカメラマンなら、何人も知つとるで」

「あつ、はい。瀬瀬義信さんっていう人ですけど」

「瀬瀬……？ どっかで聞いたことあるなあ」

「あつ、……ほら、あの、渥美のサンクチュアリの運動やっと思った人でいやあきや？」

「……ああ、そうだぎやあ。若きやあのに、熱心な人だった」

「サンク……チュアリ……？」

ミミがきくと、老人の一人がちよつと浮かぬ表情

になった。

「渥美半島の三河湾側に、ここよりずっと小せやあが、やっぱり渡りの飛来地んなつとる場所があつたんだ。そこに、自動車の塗装工場造るいう話が持ち上がった。だもんで、鳥好きたちが集まって、行政に働きかけて中止させようとしたんだぎやあ。あの人は、その中心になつとつた」

「ああ、そういやあ、わしも、あの人に頼まれて何枚

か署名集めたわ。でも、けつきよく、あれは押し切られてまったんでにやあきや？」

「今は、干潟がつぶされて造成が進んどるわ。けつきよく、あの人を離れてまったことが痛手だったんだ。そのせいで反対運動が立ち消えになってまったんだでね」

事情を知っているらしい方の老人が、苦々しげに言った。

「しかし、なんでまた、あの人は、途中で放り出して
まっただでやあ？」

「というより、できんようになってまっただで。ま
あ、男には、人に言えんようなこともいろいろあるで
ね……」

事情通の老人は、ミミの顔をちらりと見ながら口を
にごした。

その「不名誉な事情」を、纈纈の知り合いらしいミ

ミには聞かせない方がいいと思つたからにちがいない。しかし、そう思っているということは、その後の正確な事情は知らず、誤解したままだということでもあつた。

「私、おたくらマスコミのことは、あんまり信用できませんのです」

三重県桑名市。揖斐^{いび}川沿いの古い家の仏間で、未亡

人は小さな肩をさらに落として言った。

「裁判の結果を気に病んでやとか、経営に行きづまった借金苦のせいやとか、主人の自殺を、よくある話にしてしまつて……」

名古屋の通勤圏であるにもかかわらず、木曾、長良、揖斐の三つの川を越えたとたん、イントネーションが関西風になるから不思議だ。

「はい。視聴者や読者にわかりやすく報道しようとする

るあまり、ひとことでかたづけしてしまう傾向はあります。でも、それに疑問を持ったからこそ、奥様のお話をじっくりお聞きしたいと思っておじやましたわけですよ」

木原の未亡人と対面して正座したサツキは、そう言っただ。

またテレビ局の人間になりすまし、二年前の裁判を再検証する番組をつくるための事前取材だと言って上

がり込んだのだ。

「たしかに判決はひどいものやったし、会社がやっていけんようになったのも事実です。でも、主人が死んだのはそんなことが理由やありません。裁判の方は、控訴して闘いつづけるつもりやったし、会社のこととは、あんな事件がある前から、仕事がなくなる覚悟はしてたんやから」

「仕事がなくなる覚悟……というのは、もしかして、

例の不正の内部告発を決意なさった時点ということですか？」

サツキがそう言うのと、未亡人はちよつと驚いた顔をした。

「……それを、ご存知なんですか？」

「ええ。いちおう、調べられる限りは調べましたから」

「……そうですか、わかりました。そこまでご存知ならお話しします。……主人は、悔しかったんやと思ひ

ます。悔しくて悔しくて、でも、その悔しさを晴らすには、もう死ぬしか方法がないと思ったんやと思います
す」

「悔しかった……？」

「ええ、自分が信じたものに次々に裏切られて」

「どういう……ことでしょう？」

「主人は誠実な人やった。自分の仕事は、世のため人のためになると思って働いてきた人です。それは、ず

つとお世話になってきた名都建設さんを信じるということやった。やからこそ、名都さんのやり方が信じられんようになったって、あんなに悩んだんです。口をつぐむこともできたのに、その方が名都さんのためにもなるんや言うて、市民運動の人に話したんです。その時でも、あの方が立派やったのは、市民運動の人に世間に公表するのを少し待ってくれと頼んだことです」

「告発するのを延ばした……？　なぜですか？」

「それをすれば、たぶん会社はつぶれるやろうとあの人は思っとった。やから、つぶれた後の従業員たちの再就職先まで手配した上で発表しようとしたんです。その時間がほしかったということですよ」

「じゃあ、倒産の準備までして告発を考えたと……？」

「そういう人なんです。名都さんを裏切る以上、もう、仕事を辞める覚悟もしていたんです。やから、経営難が自殺の原因やなんてことは、ありえませぬ。でも、

そんなあの人の誠意が、あんな事件を招いてしまったんやろうと思います」

「もしかして……告発を延ばしている間に、名都建設にかぎつけられたということですか？」

「ええ、今思うと、従業員の再就職を頼んだ先の誰かが、名都さんに義理立てしたんやないかと……」

「相談した同業者が密告した……と？」

「……やと思います。もちろん、直後にはそこまでわ

からんかったんやけど……。あんな事件に巻き込まれたことは主人にとつても私にとつても青天の霹靂せいいてんへきれきやつたし、だいいち、名都さんがそこまでするやなんて、想像もしてませんでした。まさか、痴漢やなんて……」

「でも、ご主人は、その後、名都建設の謀略であることに気づかれた……？」

「はい。最初、主人は、あの女に心の病があつて、自分はその巻き込まれたんやと思つたようです。エレ

ベーターの中で突然暴れ出したということですから。ところが、警察の取り調べが終わって家に帰ってきた頃、あの方が『もしかしたら……』と言い出した。自分分は、名都さんにはめられたんやないかと」

「じゃあ、なぜそれを裁判で言わなかったんですか？」

「弁護士の先生に止められたんです」

「つまり……鬼頭弁護士に？」

「ええ」

想像どおりだったとはいえ、未亡人がはつきりうなずくのを見て、サツキは愕然とした。

「そんな荒唐無稽なことを言い出せば、裁判官の心証を悪くするだけだ。たとえ事実だとしても、裁判を有利に運ぶためには、そのことには触れない方がいいと。その市民運動の人たちとも、しばらくは会わない方がいいとおっしゃったんです」

「ご主人は、それに素直に従ったということですか」

「はい。鬼頭先生は親身になってやってくださっていい。少なくとも、あの時はそう見えた。やから、主人は先生を信じたんです。それに、痴漢犯人にされて周囲から白い目を向けられていた私たちにとって、頼れるのは、弁護士の先生しかありませんでしたから。その上、一審で有罪判決が出たあとも、鬼頭先生は控訴を薦めてくださったんです。そんな先生を疑うやなんて、考えてもみませんでした」

「……と、おっしゃるところを見ると、その後、ご主人は鬼頭弁護士の思惑に気づかれたと？」

「ええ。その頃、ある新聞が痴漢冤罪事件のことを取り上げて、そこに鬼頭先生のこと紹介されていた。

そのプロフィールに、『痴漢冤罪事件の他、建設会社など多くの大手企業の顧問弁護士をも務める』って書いてあったんです。それで、まさかそんなことはないやろうと思いつつながら、念のために、先生の裁判履歴と

かを調べてみた」

「そしたら、名都建設の顧問弁護士であることがわかったというわけですか」

「そうです。主人はそうとうショックを受けてました。

信じてすがってた人に裏切られたんやから」

「それで絶望して、自ら命を絶たれた？」

「いえ、それもちよつとちがいます。主人は、秘かに弁護士を代えて、控訴審で身の潔白を証明しようとし

たんです。それで、例の市民団体の人に相談した。名都建設や鬼頭先生のたくらみも含めてすべてを話し、新しい弁護士を紹介してくれと。でも……」

「今度は取り合ってもらえなかった？」

「ええ。一度有罪判決の出た痴漢犯が、その犯罪をごまかすために、自分たちの組織を利用しようとしているととられたようです。それで、万策尽きた主人は、自殺してでも耳目を集めて訴えようと思いつめてしま

った。けつきよくは、それも、警察やマスコミからは黙殺されましたけど。それが、主人の死の真相です」

その商店街には、ほとんど人影がなかった。

買い物客はもちろんだが、店舗も半分以上がシャツターを下ろしている。かといって、商店街の定休日な どでないことは、そのシャツターに錆が浮き、ほこりが積もっていることでわかった。ところどころ開いて

いる店もあるにはあるが、店頭到店員の姿はない。かつては色とりどりに自己主張していたにちがいない各店の看板も、色褪せ、すべてセピアの中に沈んでいた。全体が、まるでゴーストタウンのようなのだ。

そんな店名さえ読みづらい看板を頼りに探し当てたスポーツ用品店も、やはりシャツターを下ろし、もう何ヶ月も、いや、何年も開けられた形跡がなかった。シャツターの横のモルタル壁には、前々回のワールド

カップへのスポーツメーカーの協賛ポスターが破れ残り、もの悲しさを誘う。

「どうやら、ずいぶん前に店じまいしちゃったみたいだな」

その前に立って、権藤がぽつりと言った。

「うん」

本来の機能を果たせなくなった町の中で、自らの肉体の機能までもが低下していくような感覚を覚え、リ

エも力無くうなずいた。

「あそこに誰かいるみたいだ。きいてみよう」

権藤の言葉にそちらを見やると、数軒離れたはず向かいにある婦人衣料の店の中で人が動くのが見えた。

近づくると、店の両側にどこか薄汚れた感じのショーウィンドウがあり、どう見てもオシヤレとは言えない中高年向けのワンピースなどが飾られている。間の通路から奥をのぞくと、レジの置かれた台の向こうに一

人、そして、そのそばの椅子に一人、ともに五十年配の男が座ってなにか話していた。レジの男は、この店の店主だろうが、椅子の男は客ではなさそうだ。近所の店の店主が、自分の店をほったらかして油を売っているという感じだった。

「すみません」

入りながら権藤が声をかけると、二人の男は、緊張の感のない顔をこちらに向けた。

「……ああ、いらっしやい」

レジの男が答えた。珍しく店に入ってきた客に、驚いているふうさえ見られる。

「あの……、ちよっとおたずねしたいんですけど？」

「なんだったかね？」

どうやら自分の店の客ではないと思ったのだろう。

前の言葉に少しはあった声の張りさえなくなっている。

「あそこのスポーツ用品店は、今は、やっていないんですか？」

「ああ、もうとつくの昔に店閉めてまったわ」

「そうなんですか……」

「なんか、欲しかったんかね？」

「あつ……いえ、その……柔道着を、揃えたかったもんですから」

きかれた権藤は、とつさに、自分の得意分野が頭に

浮かんだようだ。

「そうか、そりやだめだわ。……子供用のバットやグローブなら、あっちのおもちや屋にもあるけどなあ」
椅子の男がそう言った。そして、リエの方をちらりと見てからこうつぶけた。

「子どもさんに、柔道習わせたいってことかね」

どうやら、リエと権藤を夫婦だと勘違いしたようだ。
リエはそれに驚いたが、権藤はそれ以上に顔を赤ら

め、口の中で「あ、いえ……」と言った。

しかし、その言葉が耳に入らなかつたらしく、レジの男の方が言葉を重ねた。

「旦那さんの方はともかく、奥さんは若こ見えるね。

とても、柔道習わせるほどのお子さんがおるようには
思えんわ」

「で、ですから……、そういうことでは……」

権藤はさらに言い訳しようとしたが、そこでリエは、

話を本来の目的に戻そうと頭をめぐらせた。

「え、ええ。息子はまだ三歳になったばかりですから、あたしは早いつて言ったんですけどね。でも、主人つたら、男の子ができたら、自分と同じ柔道をやらせるのが夢だったらしいんです」

「……へ？」

権藤が驚いた顔を向けた。それにかまわず、リエはつづけた。

「それで、幼児向けの柔道着をさがしに、主人も子ども頃に買ったっていうあのお店に来てみたんですけど……。残念ね、あなた」

その「あなた」という言葉に、権藤はさらにおたおたした。

「あのお店、とつてもいいご主人だったって言ってたでしょ。ね、あなた」

意図を伝えようと、さらにわざとらしいほどの言い

方で「あなた」を重ねると、やっとそれに気づいたらしく、権藤は口をぱくぱくさせながら裏返った声で答えた。

「……あ、ああ。あのご主人は、い、いろいろ、親切に教えてくれたし……」

と、それに納得したように、レジの男が言った。

「たしかになあ。あの人は、ほんとに世話好きだったでなあ。地域の少年リーグとかも熱心に面倒見とった

し、長いこと、商店街の役員もやとつた」

「そうそう、あのスーパー反対運動の時も、先頭に立つとつたもんなあ」

「ま、あんな事件さえなければ、あの店もあれだけ客が減ることはなかった。夜逃げ同然にいなくなることもなかったろうに。あの人が頑張つとつてくれたら、この商店街も、スーパーに客をこっさり持っていかれるようなことにはならんかった気がするわなあ」

レジの男は、深いため息をついた。

「あれが、問題の大手スーパーね」

知多半島道路のインターに向かう途中、窓外に見える大きな駐車場と建物を指さし、助手席のリエが言った。

「二キロと離れていない場所に郊外型の大スーパーが建って、車で買い物に行くようになった住民の足が商

店街から遠のく。まあ、日本中の町で起こったことな
んでしようけどね」

「……あ、ああ」

ハンドルを握る権藤は、いちおう相づちを打ったも
の、どこか気もそぞろだ。先刻、リエと夫婦に間違
われ、しかも、リエから「あなた」などと呼ばれたこ
との動揺がまだつづいていた。

「でも、この町では、一時は地場の商店を守れという

運動が盛り上がって、スーパー進出反対の世論ができかかっていた。ところが、その運動の中心メンバーが痴漢犯としてつかまってしまった。それで世論が離れ、運動は急速にしぼんでいった：：ってことか。昨日聞いた木原って人の話とそっくりね。サツキとミミの報告を聞かないと断定はできないけど、どうやら、事件の背景についての昨日の推理はまちがってなさそう」

「：：ああ」

権藤は、リエの方をちらりと見ながらまたうなずいた。しかし、その言葉の半分も頭に入ってはいない。

緩い上り下りのつづく道の両側には、やわらかな春の光に包まれた自然の景色がけっこう残っている。サイドウインドウを過ぎるそんな光景をバックに、ソフトフォーカスがかったようなリエの横顔は、たしかに美人の若妻に見える。白いフリースと、ピンクのオفشヨルダーセーターも、そんな雰囲気に似合っている。

た。

：：うらかな春の一日、こんなきれいな奥さんと夫婦でドライブか：：いいな。

そう妄想したところで、いつものようにリエの正体に思い至り、権藤はかすかに首を振った。

：：いや、よくない。俺は、なに考えてるんだ。

しかし、今日、権藤の妄想がすぐ醒めてしまうのは、いつもの戸惑いだけが理由ではなかった。これは、リ

エと二人きりのドライブではなく、他に「邪魔者」がいるからだ。

「……ふむ、今のがその溜め池ですな」

後部座席で、窓の外を見ながら綾瀬が言った。

「ええ、そう。大きな川のない知多には、溜め池が多いのね」

綾瀬の隣に座ったみずえが答える。

「戦国時代の有力大名のほとんどが尾張や三河から出

たのを見てもわかるように、この地方はお米のたくさん穫れる豊かな土地だったのね。でも、その中で、知多半島だけが例外だった。半島全体が丘陵地で平らな土地が少ないし、水の便も悪い。田んぼがつかれないから、お米もあんまりできなかつたの。そのぶん、窯業とか醸造業とかの手工業が発達したってわけ」

「なるほどなるほど。みずえさんは、本当によくご存知ですなあ」

綾瀬とみずえは、じつは今日が初対面だったのだが、すっかり意気投合してしまったようだ。警察署長という身分でありながら、女装スナックのママと簡単に意気投合してしまう、その偏見とこだわりのなさにはちよつと感心したが、こだわりのないのは、それだけではない。

綾瀬は、いっしょについて来た目的も、昨日までのアライバイ崩しへの情熱もすっかり忘れたように、先刻

から、みずえの「郷土史講義」に夢中になっている。どうやら、その関心は、時刻表ロマンから歴史ロマンに移ったらしい。

……まったく、のんきなもんだ。

あきれた思いと苦々しい思いが相半ばしながら、権藤がルームミラーを見やると、リエも、かすかにため息をつきながら後部座席の綾瀬を見てつぶやいた。

「殺人事件の直接の原因がなんだったのかって推理も、

たぶん当たってるんでしょね」

そんな、それぞれにどこかちぐはぐな思いを抱く二組のカップル——まあ、正確には男四人なのだが——を乗せ、車は知多半島道路に入った。

……こいつら、なんのつもりだ？

赤いトレンチコートを翻し揖斐川の堤防の道を歩くサツキは、先刻から自分のまわりにまとわりつくよう

に行ったり来たりしている数台のバイクを見やった。

木原家を出た直後から、バイクが後を尾けてくるのには気づいていた。

それが、歩くにしたがって、河川敷からさらに一台二台と湧き出すように現れ、いつの間にか五台ほどになつた。

最初こそ、ゆっくりと背後を蛇行しながらついてきていたが、そのうち、一台がスピードを上げサツキの

脇を追い越した。そして、十数メートル先でUターンすると、ふたたびサツキの体をかすめるように背後に戻った。と、それを合図にするように、他のバイクも次々にその動きを真似しだした。明らかに、サツキをからかっている——あるいは挑発している——といった感じだ。サツキを川側に押しやるように走って来るところを見ると、人家側の降り道に逃げないようにしているということかもしれない。

河口方向から上流に向かって歩いていくサツキの右手前方には、揖斐川の川面が広がり、木曾川との境を分ける中州、長島から国道23号の橋が架かっている。その橋げたの向こうでは、さらに中州が川を分け、その右手側には巨大な河口堰がある。そちらが長良川だ。中部山岳地帯から土砂と養分をたっぷり含んで下り、合流して伊勢湾に注ぐこの三本の大河が、広大な濃尾平野の穀倉地帯を造ったわけである。

その揖斐川と長良川の合流点付近まで行けば、桑名城趾や七里の渡し跡があり、桑名の街区も近い。おそらくやつらは、それ以前に仕掛けてくるのだらう。

サツキは、表面上は彼らの挑発を無視するように歩きながら、そう考えた。

最初こそ、たちのよくない地元の暴走族かなにかだろうと思ったが、どうやらそうではなさそうだ。ライダーのほとんどが、ふつうのパンツではなく、派手な

色のニツカボツカを履いている。

と、いつの間に現れたのか、今度は、サツキの横を黒い塗装のバンが追い抜いた。そして、しばらく行つた地点で川側に向けてハンドルを切り、道をふさぐように斜めに停まった。

車体のところどころに大きな傷やセメントの汚れがあるところを見ると、これもどうやら、レジャー用の車ではない。横腹には社名らしきものが書かれている

が、わざわざその上にガムテープが貼られ隠されている。ただ、この隠蔽工作をやった人間は、神経が行き届いているとは言い難いようで、最後の二文字の下の部分のはみ出していた。その文字のはねなどの特徴から、おそらくは「土木」という文字だろうとサツキはあたりをつけた。

彼らはたぶん、全員が「〇〇土木」という会社の従業員なのだ。

そう思っていると、サツキの脇を行き来していたバイクが、次第に距離をつめてきた。どうやら行く手をふさぐバンのところに追い込もうとしているようだ。

それがわかっていながら、サツキは平然とした顔で歩き、自らその「罨」の中に入っていた。

バンのそばまで行き足を止めると、案の定、五台のバイクがバンの後尾からサツキの背後へと半円形に並び停車した。フルフェイスのヘルメットとニツカボツ

カというライダーたちに、逃げ道をふさぐように囲まれたわけだ。

川を背に向きを変え、そんな彼らを見てみると、バ
ンからもニツカボツカの男が二人降り立った。

その一人、どうやらリーダーらしき男の顔を見やり
ながらサツキは言った。

「……ふーん、なるほどね。この『工事』の発注元は、
名都建設ってことね。二年前、木原さんを名都建設に

売ったのもおたくの会社ってわけか」

と、その男はにやついた顔でサツキを見ながら口を開いた。

「木原のところに訪ねてきたやつは、男でも女でもかまわないからやれと言われたが、まさかこんなハクイスケだとはな」

「ふふ、おたくたちの発注元は、あたしが、男で来るか女で来るかわかんなかったのね、きつと」

「ん？　なにわけのわからんこと言ってるんだ。しかしまあ、あんたみたいな女なら、こっちは楽しみがひとつ増えるってもんだ。なにしろこいつら、彼女いない歴二十何年ってやつばかりだ。みんなもう、あんたを見て、股間を膨らませてるぜ」

「あーら、失礼ね。そのへんの女といっしょにしないでよ。こう見えてもあたし、モデルだし」

サツキは、かけていたメタルフレームのメガネを外

し、それをスーツの胸ポケットにしまいながらポーズをつくった。

「女に免疫のない男が、いきなりモデルなんかとつきあうと、高くつくわよ」

「上等だ。あの橋の下にでも運んで、全員でやっちなえ」

男が言うと、バンから降りたもう一人の男と、バイクの一人が降りて近づいてきた。

そして、両側からサツキの腕をつかんだ。

抵抗することもなく腕をとられたサツキは、そこでバイクの方の男に向かって言った。

「馬鹿ね。そんなヘルメットなんてしてたら、キスもできないじゃない」

すると男は、片方の手をヘルメットのあごにかけ、その下からにたついた顔を出してみせた。

その瞬間、サツキの膝がトレンチコートの前を割つ

て飛び出し、男の股間を直撃した。

「うっ！」

力の緩んだ男の腕から自分の腕を振りほどくと、サツキは間髪入れず、腹にも一発拳を入れた。そして、腹と股間を押さえしりもちをつく男の手から落ちたフルフェイスのヘルメットが地面に着く前に、それをつかんでいた。

そのまま、かがんだ体を回転するように延ばし、へ

ルメットを振り上げる。もう片一方の男の顔面をめがけてスイングしたのだ。そちらの男は、もんどり打つて倒れ、おまけに、堤防の斜面を転がり草の生い茂る河原まで落ちていった。

「……！」

一瞬にして二人の男を伸のしてしまったサツキに、まわりの男たちは驚き、たじろいだようだ。

「だから言ったでしょ。モデルに手を出したりすると、

高くつくって」

バイクを降り、あわてて身構える男たちの方に一歩踏み出すと、男たちが後ずさった。

「なにしてるんだ。さっさとやっちなまえ」

バンから降りたリーダーらしい男の声に、四人の男たちがいっせいに襲いかかった。

瞬間、サツキのブーツが目にもとまらぬ速さで浮き上がった。その先が右端の男のあごに炸裂する。同時

に左手に持ったヘルメットが、また空を切り、いちばん左の男のヘルメットを直撃した。そして、その体のひねりを利用する形で、右手の拳は左から二人目の男の腹にめり込んでいた。右から二番目の男は——サツキが手をかけるまでもなく——、身をかわしたサツキのせいで目標を失って堤防の縁でバランスを崩していった。

よたつく四人の男たちをしり目に、サツキは持って

いたヘルメットをかぶり、バイクの一台に近づいた。

「久しぶりに、オフロードでも楽しもうかしら」

そう言ってバイクにまたがりエンジンを吹かしはじめたサツキを、男たちは茫然と見ていた。またがったせいでトレンチコートの前が割れ、さらに、タイトなミニスカートがまくれ上がって太腿が露わになっていく。男たちは、今しがたやられた体の痛み以上に、どうしてもそこに目が吸いつけられてしまうようだ。

一瞬後、サツキのブーツのヒールがギアペダルを何度か蹴った。その瞬間、バイクも堤防の縁を蹴り、川に向かって飛び出していた。

四角いブロックで固められた堤防の斜面に一度バウンドしたあと、サツキの乗ったバイクは、先刻落ちて失神している男の上を飛び越して砂地の河原にみごとに着地した。

「……な、なにしてる。早く追え！」

リーダーの声とともに、四人の男はあわててバイクにまたがった。

そのうちのひとりは、今のサツキの真似をして堤防から飛び出した。しかし、斜面に一度バウンドしたところ、バイクが横滑りし、弾き飛ばされ、コンクリートの上にたたきつけられた。

河原まで滑り落ちて横転したバイクの車輪はまだ回っていて壊れてはいないようだが、体をよじって痛が

っている男はもう動けないだろう。

それを見届けたサツキは、河原を川下に向かって走り出した。

残りの三台のバイクは——先刻の男と同じ愚は犯し
たくなかったようで——堤防の上をサツキと並行して
走ってきた。

こちらは地盤が石ころや砂地だから、舗装された堤
防の道路の方が当然速い。サツキを追い越した三台は、

やがて、河原の土が盛り上がって堤防との高低差があまりないとところを見つけ、相次いで河原に飛び降りた。サツキの前方から迫ってくる形だ。

サツキは、三台の正面に向かって走りながら、片手をハンドルから離し、肩にかけていたシヨルダーバッグを取った。そのストラップを、ハンドル中央のメーターに巻きつけるように手早く固定する。そして次に、今度はトレンチコートから片袖を抜いた。

その時には、すでに三台が間近に迫っていた。

そこでサドルから腰を上げたサツキは、川の水面方向に急激に車体を振った。正面から来た三台も、それを追うように方向を変えた。

その瞬間、サツキの体から赤いトレンチコートが離れ、宙を舞った。カーブを切りながら、もう片袖も抜いたのだ。

そのトレンチコートが一台のライダーに真正面から

襲いかかり、フルヘルメットの顔にまわりついた。

サツキはさらに方向を変えてUターンし、あとの二台もそれを追って体勢を立て直したが、トレンチコートに視界を奪われたライダーは、そのまま突っ走り水面にダイブした。

走りながら背後の水音を聞き、サツキはつぶやいた。

「あくあ、あのコート高かったのに。予算の無駄遣いだって、また公平ちゃんに怒られちゃうわ」

そのあとサツキは、河原の草むらや石原やぬかるみを巧みに走り回った。高いヒールのブーツを履きながらも、アブソバーの伸縮に脚や腰のバネを巧みに同調させ、まるでロデオの荒馬乗りのようなライディングをするサツキに、追う二台は翻弄されていた。

走りながら見ると、先刻、最初に殴られ堤防から落ちた男が立ち上がり、そこにあつたバイクにまたがった。おまけに、堤防の上のバンの男から、鉄パイプを

受け取っている。

「……ふふ、もう鬼ごっこにも飽きたて、次はチャンバラごっこってわけね」

サツキはそう言いながら、あえて、鉄パイプを片手にこちらに向かって走ってくるバイクへと向きを変えた。

後ろの二台との距離を測りながら、そのバイクに近づいていくと、男が鉄パイプを振り上げた。

すれちがいざま、男がそれをスイングするのを見計らって、サツキは思いきり体を横に倒した。地面すれすれのところでスリップしながらバイクはカーブを切り、一瞬後には立ち直っていた。

鉄パイプを空振りすることになった男の方がバランスを崩し、スリップしながら転倒した。そして、男の手から離れた鉄パイプが空を切り、あとを追っていた。一台のバイクの前輪を直撃した。鉄パイプがスポーク

の間に食い込んだようで、前輪にブレーキが掛かり、バイクは乗っていた男とともに前転しながら宙を舞った。

河原のぬかるみに墜落したこのバイクはもう動けそうもなかったが、鉄パイプで襲いかかった方の男は、ふたたびバイクにまたがり、もう一台とともにサツキを追ってきた。

サツキは、先刻、男たちが河原に降りてきた地点ま

で来ると、そこを利用して、ふたたび堤防の上にジャンプした。

追う二台も、バランスを崩しながらもかろうじてジャンプに成功したようだ。

今度は、堤防の道路を下流に向かってトップギアで疾走した。河口まで二キロあまり。フルスロットルで走ったせいで、先刻訪ねた木原家付近もあっという間に駆け抜け、一分もしないうちに終点が見えてきた。

そこで道は、ほぼ直角に右に曲がるのだが、正面にさしたる車止めはない。その向こうは伊勢湾だ。

サツキは、追ってくる二台のバイクをバックミラーにとらえながら、その寸前までスピードを落とすことなく突っ走った。

そして、堤防の端ぎりぎりのところで、前輪のブレーキをめいっぱいかけた。

惰性で後輪が持ち上がり、バイクはつんのめるよう

に海へ……と見えた瞬間、サツキは強烈に体をひねっていた。前輪の着地点を支点にして、車体が百八十度回転した。その瞬間、スロットルグリップをめいっぱいひねり、後輪の回転数を最大限に上げた。そのせいで、後輪がふたたび着地した時には、バイクは、これまでとは正反対の方向に向かい、全速で飛び出した。一瞬にして向きを変え、間を通り抜けたサツキに、追ってきた二台は驚いたように急ブレーキをかけた。

一台が距離を誤り、横滑りしながら、サツキの代わりに伊勢湾に落下した。

それでも一台はなんとか持ちこたえ、Uターンして追ってきた。

「もう。しつこい男って、きらいよ」

猛烈な風切り音の中、サツキはそうつぶやき、今度は上流方向に全力疾走していた。

見ると、前方から、例の黒いバンが近づいて来た。

目の前で次々に仲間がやられてしまったせいで、運転するリーダーの男も意地になっっているにちがいない。サツキにねらいを定めるといわんばかりに、猛スピードで迫ってくる。このまま行けば、双方あわて二百キロ以上のスピードで正面衝突することになる。

それはわかっていたが、サツキの方も、スピードを緩めようとしなかった。

その距離が、二百メートル、百メートル、五十メー

トル：：と、瞬く間に狭まり、もはや衝突は避けられないという瞬間、サツキは、後輪のブレーキをホツピングさせ、同時にスタンディングライドした体重を後ろに引いた。

まるで馬がいなくなきように、バイクの前輪が高く上がった。そして、それが下りかかる時には、ぶつかってきたバンのフロントウインドウからグリルまでの傾斜と、バイクの前後輪が、ぴったりとかみ合った。

一瞬後、サツキのバイクはそこをよじ登り、バンのルーフを越えてジャンプしていた。

晴れ渡った空と揖斐川を背景に、中空を飛んでいる最中、あとを追っていた最後のバイクとバンが衝突する音が聞こえた。

道路の上にみごとにソフトランディングして、猛り狂うエンジンを鎮めた時には、バンとの距離はすでに五十メートル近く開いていた。

道路に片足をつき振り返ると、バンのドアが開き、リーダーの男がよろよろと降り立った。

そこで、サツキは大きな声で言った。

「ちようどいいいから、このバイク借りてくわね。桑名駅に置いとくから、あとで取りに行つて」

すると、リーダーの男は、それにこつくりとうなずいた……いや、そうではなく……そのままさらに頭こつぱを垂れ……路上に、崩れ落ちた。

「……というわけで、やつらがなりふりかまわず襲ってきたところを見ても、どうやら、あたしたちが向いてる方向はまちがいじゃないみたいね」

桑名駅からかけてきたサツキの電話に、リエは「うん」と返事した。

「さつき、ミミからも連絡があっただけど、他の二件の痴漢事件も思ったとおりの裏がありそうよ。あとは背

後に見えてきた企業と鬼頭のつながりを調べれば、はつきりすると思うわ」

携帯電話にそう答えるリエの後ろでは、まったくちがう次元の会話が続いていた。

「……つまり、城下町名古屋という大消費地が近くにあったこともあって、知多の醸造業は飛躍的に発展したわけね。江戸時代の中期になると、その勢いで、もつと大きなマーケット、江戸に向けて、お味噌やお酒

をたくさん送り出すようにもなったの」

「ちよつと待つてくださいよ。さつき、みずえさんは、赤みそを食べるのは東海地方だけだと言いませんでしたか？」

女装姿のみずえの方がずっと若く見えるが、じつは世代が同じということもあるのだろう。妙に馬が合うようで、綾瀬とみずえの歴史談義はさらに弾んでいた。

「うん、そうなんだけどね。実際には江戸にも赤みそ

の需要はたくさんあったの。なんせ、徳川家なんて、元は三河の地侍だからね。江戸城内ではみんな赤だしを食べていたらしいの」

「ああ、そうか」

「それに、三河から徳川家にくつついて行った御用商人とかも、江戸の町にはたくさんいたわけだしね」

リエがそんな話に思わず気をとられそうになっていると、電話の向こうでサツキがきいた。

「じゃあ、ミミは、もうオフィスに戻ってそれを調べてるのね」

「あっ、ううん。その前に、笠置の会社に寄るって言うってた」

おそらくはクリエーターとの打合せに使うのだろう。栄にある広宣堂名古屋支社の一階ロビーは、半分ほどがティールラウンジになっていた。

そのソファのひとつで待っていると、上の階から笠置がやってきた。

「お忙しそうなのに、突然来ちゃって、ごめんなさい」
ミミが言うと、笠置は「いいよいいよ。ミミちゃん
みたいなかわいい子なら、僕はいつでも大歓迎さ」と
言いながら腰掛けた。

「で、なに？　なにか相談？」

「あっ、いえ。それもあるんですけど、一度、笠置さ

んにちやんと謝っておこうと思って」

「謝るって、なにを？」

「この前のロケでは、さんざんご迷惑かけちゃったから」

「ああ、そんなこと気にしてたの？　初めての仕事だったんだし、しようがないよ。ミミちゃんを選んだのは、もともと僕なんだしさ」

「でも、あのあと、昨日も今日も、撮影がストップし

たままだし」

「それは、元美ちゃんがあんなことになっちゃったからだろ。警察の調べもひとつとおわり終わったみたいだし、明日には再開できるんじゃないかな。山田ちゃんのスケジュール次第だけど」

「あつ、じゃあ、元美さんの代わりは……？」

「ああ、それは僕にちよつと考えがあつてさ。どつちにしても、決まったら、茉莉ちゃんを通して今日中に

連絡するよ」

そこでミミは、甘えたような上目づかいを向け、言った。

「よかった」

「ん？ なにが？」

「あたし、笠置さんに嫌われて、もうお仕事来ないのかと思ってた」

「そんなことあるわけないだろ。ミミちゃんくらいか

わいけりやあ、これからいくらでも仕事を頼むよ」

「ほんとですかあ。あたし、モデルのお仕事、まだはじめたばかりだけど、もつといっぱいやりたいんです。将来的には、テレビのお仕事とかもしてみたいし」

ミミは、そう言いながら、祈るように胸の前で手を組み、テーブルにのりだしてみた。

「笠置さん、ミミの力になってくださいね」

と、なぜか、笠置は逆に身を引くようにした。

「い、いや、僕の関わる仕事でミミちゃんのことを推薦するくらいはできるけど、僕にそんな力があるわけじゃないから」

：：あれ？

ミミは、そんな笠置の態度にちよつと違和感を感じながらつづけた。

「でも、お仕事もらうには、代理店のディレクターさんにかわいがってもらうのが大事だって聞いたから：

：。あたし、笠置さんの言うことなら、どんなことでもきいてもいいなって：：そう思ってるんですう」

「だ、だからさ、東京本社の一線ディレクターならともかく、名古屋支社の一介のアートディレクターには、できることなんて限られてるんだよ」

笠置はさらに、尻込みするように身をそらし、言った。

自分の方から誘いをかける女の子には、すぐにのっ

てきそうな軽い男：：という笠置に対する先入観は、間違っているのかもしれない。

ミミはそう感じ、ちよつと困惑した。どうやら、この作戦は軌道修正する必要があるそうだ。

それで、ちよつと強引だと思ったが——いちおうは会話の流れに合わせ——、今日最初に探りを入れようと思っていたことに話題を振った。

「だけど、死んだ楡島麗子さんのことは、笠置さん、

ずいぶんかわいがってたって噂、聞きましたよ」

「えーっ！ いったい誰がそんなことを……？」

「なんだか、必至になって麗子さんのことを口説いてたって」

「……もう、まいったなあ。うちの会社にそういうことを言いふらしてるやつがいるんだな、きっと。麗子ちゃんの事件のあと、警察にも、そのこと、さんざんツッコまれたし」

「あつ、じゃあ、やっぱり……」

「いや、それは誤解なんだって。たしかにあの事件の前、麗子ちゃんと会って、話し込んだのは事実だけど、あれは、まあ、アドバイスというか、意見してたってことだから」

「意見……？」

「ああ、つまり……あんまり山田ちゃんには深入りするなって」

「えっ、山田先生に？」

「うん。麗子ちゃんが山田ちゃんに入れ上げてるって噂を聞いたからさ」

「それはつまり、山田先生がプレイボーイだからってことですか？」

「う、うん。まあ、そういう……ことだけど」

笠置は、なぜか、目を泳がせながらそう言った。

そこにさらに深い意味がありそうな気がして、ミミ

はきいてみた。

「お仕事はずいぶんいっしょにやってるみたいだし、ふだんは仲よさそうに見えるけど、笠置さん、ほんとは、山田先生のこと、きらいなんですか？」

「い、いや、きらいとか：：そんなことじゃあ：：」

笠置はさらにうろたえた様子でそう口にしたあと、それをごまかすともいいうように、微妙に話をそらした。

「……まあ、うちの会社には、山田ちゃんのこと、ないがしろにはできない事情もあってさ」

「……ん？　　どういう意味ですか？」

「うん。ふつう、広告代理店とカメラマンの関係って、いうのは、代理店から仕事を出すってことなんだけど、山田ちゃんの場合は特別で、逆の流れもあるから」

「……？」

ミミが首を傾げると、笠置はさらに詳しくその事情

を説明しはじめた。

「山田ちゃんは、ああ見えてなかなかやり手で、カタログ撮影とかの仕事は直で受けてるクライアントをいっぱい持ってるんだ。それも、けっこうな大企業が多くてさ。で、そんな会社が媒体広告……あつ、つまり、テレビとか雑誌とか新聞とかの広告を出すような時は、山田ちゃんがうちに仲介してくれたりするんだ。だから、山田ちゃんは、うちにとってはお得意筋でも

あるってこと」

：：なんだか、さっきの質問の答えにはなっていない話だな。

そう思って、ミミが浮かない顔をしていると、それを気にしたのだろう。笠置はさらに筋違いな言葉を重ねた。

「山田ちゃんがそんな優良クライアントを持つてるのは、もしかしたら、鬼頭先生：：ほら、この前の夜、

街で見かけた：：あの弁護士のコネなんじゃないかとにらんでるんだけどね、僕は」

「：：えっ！　山田先生も、鬼頭弁護士と知り合いなんでしょうか？」

ミミは驚いて言った。

「うん。この前話した、僕のクライアントが原告になった写真の盗用事件。その写真を撮ったカメラマンっていうのが山田ちゃんなんだ。山田ちゃんは、鬼頭先

生に頼まれて原著作権者として法廷にも立ってる。僕なんかよりずっと親しくなって、今もつき合いがあるはずだからさ。抜け目なく、鬼頭先生のクライアントを紹介してもらってるんだと思うよ。じゃなかったら、一人であんなスタジオ建てられないもんな」

ミミが驚いたのは、今日探りを入れてみようと思っ
たもうひとつの話が、笠置の口から問わず語りに飛び
出してきたからでもあった。さらに――

「そうそう、その写真のモデルが茉莉ちゃんで、彼女も肖像権者として証言してるはずだ。だから、鬼頭先生のことはよく知ってるよ。たしか半年くらい前にも、鬼頭先生から、弁護士仲間のゴルフコンペに誘われたとか言ってたし。ま、要するに、元モデルが、コンペの彩りとして呼ばれたってことなんだろうけどね」

さらに茫然としているミミの顔を見て、先刻の自分の動揺をうまく糊塗ことできたとも思ったのだろう。笠

置は、余裕を取り戻した声でそう結んだ。

「へえ、山田も茉莉も鬼頭とつながりがあったってことか」

ミミからの電話の内容を伝えると、ハンドルを握る権藤も驚きの声をあげた。

「うん。それにね、瀬瀬が建設反対運動をしてた自動車塗装会社も、さっきの大手スーパーも、やっぱり鬼

頭が顧問弁護士をやってるらしいの。オフィスに戻って、それぞれの会社のサーバーをハッキングしたら、簡単にわかったって」

「ふむ、ふたつの殺人事件の背後で、登場人物のすべてが繋がってしまったって感じだな」

「要するに、鬼頭は自分が顧問弁護士をつとめる企業の意を汲んで、事業の障害になっている市民運動のキーマンを痴漢犯に仕立てることを企んだ。それで、以

前の裁判で知り合った山田か茉莉か、もしかしたら笠置を通して、ニューセンチュリー・モデルクラブのモデルを操り、痴漢事件をでっち上げた……ってことね。順番から言うと、最初は、四年前のスポーツ用品店の店主がはめられた事件だから、被害者を演じた茉莉が、鬼頭から直接頼まれたのかもしれないけど」

「あつ、もしかして……」

「なに？」

「その事件が、鬼頭がその手の裁判に取り組んだ最初だつて言つてたよな。ということとは、それ以降、鬼頭が痴漢冤罪の救済運動に熱心に関わつたのは、その時の自分の悪事をカモフラージュするためだつたつてことか」

「うん、たぶんそうね。他にも痴漢冤罪事件を数多く扱うことで、民事専門だつた自分が急にそんな裁判に関わつた唐突さをごまかそうとした。で、それがうま

くいつて味をしめたんでしようね。その後もときどき、同じ手を使って、クライアント企業のための謀略を仕組んだ。二年前の元美と木原の事件、そして、一年前の麗子と瀨瀨の事件ね。まあ、無実の被告の罪を晴らすために奮闘しつづける弁護士が、じつは被告を罠にはめてる張本人だなんて、誰も思わないでしょうしね」

「うむ、そして、最近になってそんな仕掛けがばれる危険を感じた鬼頭は、手駒として動いていた人間にそ

れとなく口封じを命じた。で、ふたつの殺人が起こった」

「問題はそれが笠置と山田と茉莉のうち、誰なのかってことなんだけど、鬼頭の犯罪にはつきりした証拠があるわけじゃないから、今の段階では、彼を締め上げて聞き出すわけにはいかない。あとは、三人のうち、誰かのアリバイを崩すしかないわけね。特に元美殺しについては、山田と茉莉の当日夜の行動をはつきりさ

せたい」

車がちょうど知多半島道路を降りるのを見ながら、リエは、今日これからの行動の目的を確認するように言った。

「で、まずは、どこから行く？」

権藤にきかれ、リエは「半田駅前のタクシー会社」と答えた。

「二人が乗ったタクシーの運転手からってわけだな」

と、そこで、後部座席の綾瀬が声をかけてきた。

「権藤君、まずは半田の『酔の里』というところへ行きたい。そこへ寄ってくれたまえ」

「……えっ？」

リエと権藤は、顔を見合わせた。

——と、こう書くと綾瀬の言葉はいかにも唐突だが、じつは、ここまで車内で交わされていたのは、リエと権藤の会話だけではなかった。同時進行して、みずえ

と綾瀬の会話もつづいていた。今度はそちらだけを拾ってみると――

「……知多半島から江戸に送られたのは、お味噌以上に酒が多かったのね。じつは、気候や水の関係で、当時、関東にはいいお酒の産地がなかったの。それで、江戸の人たちが飲むお酒は、もっぱら西から船で運ばれていた。いちばん有名なのは、兵庫の灘産のお酒ね」

「ああ、『灘の生一本』ですな」

「ええ。ほら、江戸時代の海運の話で、菱垣廻船と樽ひがき
廻船っていうのを聞いたことがあるでしょ」
たる

「そう言えば、学生時代、受験勉強でやった覚えがある」

「大坂を拠点にして、瀬戸内から太平洋岸の海運を支配したふたつの廻船問屋仲間ね。そのうち、樽廻船の方は、名前からも想像できるように、灘のお酒を運ぶことで大きくなったのね。それくらい、お酒は大量に

江戸に送られてたわけ。ところがね、よく調べてみると、どうも、江戸で灘酒の名で売られてたお酒の半分近く、もしかすると半分以上は、知多や伊勢産だったって話があるのよ」

「ほお、偽ブランドだったわけだ」

「まあ、そう言っちゃえばそのとおりね。特に、庶民向けに売られてた『灘の生一本』は、たいてい知多産だったらしいの。要するに、値段が安かったのね。関

西より江戸に近いから運賃が安かったこともあるんだけど、もっと大きな理由は、大きな酒蔵に大きな酒樽をずらっと並べて、大量に仕込んでたからなんだって。つまり、この地方は、江戸時代から大量生産の工業地帯だったってわけ」

「なるほど。なににも、戦後の自動車から始まったわけでもないんですな」

「そうなの。でね、大量生産っていうことで、もつと

面白いのは、江戸時代の終わり頃になって急激に大量生産が進んだお酢の話」

「……酢……ですか？」

「ええ。たとえば、江戸前寿司は、じつは知多半島で考え出されたとかね」

「ほう、それはどういうことでしょうか？」

「うん。半田の『酢の里』に行くと、それがよくわかるわ」

と、こんな会話があって、綾瀬の『酔の里』というところへ行きたい」という言葉が出てきたわけだ。

「……まあ、山田と茉莉が半田駅で別れる前に撮影した場所だし、駅からも近いから、そこから始めてもいいかな」

リエは、ちよつとあきれながらも、運転する権藤に答えた。

江戸時代の酢造りの様子を再現したジオラマや当時の道具などを並べた部屋にも、甘酸っぱい匂いが濃厚に漂ってくる。

博物館「酢の里」は、こうした展示室と、実際に酢の製造をしている現在の工場の見学コースが交互に組み込まれ、新旧の醸造工程が比較できるようになっていた。

一昨日は運河沿いに蔵の並ぶ外景の撮影だけだった

が、今日はみずえと綾瀬に引っ張られる格好で、リエと権藤も内部を見てまわっていた。

「……江戸時代、半田の酢造りは、言ってみれば廃棄物のリサイクルから始まったのね」

「えっ、リサイクル？」

「ええ。大量のお酒を造ってるから、酒粕さけかすも大量に出る。そのままじゃあ、粕漬けの材料か肥料くらいにしかならない。大部分は棄てるしかなかったのね。それ

を再利用できないかということ考えた人がいたわけ。で、再発酵させて粕酢かすずを造った」

知多の醸造業についてのみずえの「講義」が続いていた。

リエや権藤にしてみれば、聞き込みの前にちよつと寄るだけのつもりだったのだが、みずえの話に綾瀬はやたらと興味を持ち、そのぶん、展示ひとつひとつをゆっくり見てまわることになった。

「ほう、粕酢：：リサイクルだから、安い酢ができたわけですか」

「ええ。でもね、じつは江戸時代、酢の需要ってそんなに多くなかったのね。もちろん当時間も米酢はあったけど、高すぎて、酢そのものが日本では一般的な食材じゃなかったわけ。お鮓すしは、まだ、なれ鮓ばかりで酢飯を使ったものはなかったし」

「なれ鮓：：というと、ふな鮓みたいな」

「そう。魚のはらわたを取ってそこにご飯をつめるとか、バッテラみたいに箱の中に魚とご飯をつめて、米そのものを発酵させてたわけね。生ものをいわば腐らせるんだから、腕のある人がつくらないと食中毒とかにもなりやすいし、手間もかかる。都会の人にとって、お鮓は高級珍味って類の料理だった。当然、偉い人しか食べられなくて、庶民に手の届くようなものじゃなかったわけ。で、知多の酒造問屋たちは、そこに目を

つけた」

「なるほど、粕酢で酢飯をつくってしまえばいいと」

「そう。さいわい江戸湾、今の東京湾では新鮮な魚が
いっぱい捕れる。生の魚と酢飯を合わせれば、手軽に
お鮓ができるだろうし、粕酢の需要もつくり出せるだ
ろうって考えたわけね。江戸でも同じことを考えてる
板前さんたちがいて、いわば、その合同プロジェクト
として粕酢造りが本格化した。それが江戸前寿司の始

まりなのよ」

「廃物利用の安い粕酢があつて、はじめて、今のお寿司ができたというわけですな」

「そういうこと。江戸のお寿司屋さんには、最初は、振り分け屋台を背負って売り歩いたみたいね。町角で店を出して、お寿司を握ったわけ。今の時代で言えば、ファストフードだったの。高級珍味が手軽に食べられるっていうんで、江戸の庶民の間でこれがあつという

間に大ヒットした。そこで、知多では、今度は酢の大量生産が始まった。ほとんど独占状態で江戸に送られたってわけ」

「なるほど、なるほど」

みずえの話に、綾瀬はしきりに感心している。

たしかに、話自体は面白いと思ったが、リエは時間が気になった。

「ねえ、この人たちにつき合ってたら、聞き込み、今

日中に終わりそうにないよ」

「そうだな」

権藤も同じように思っていたらしく、顔をしかめてうなずいた。

けつきよく、「酔の里」見学に一時間以上を費やしてしまい、半田駅前に着いた時には、時計は昼近くを指していた。それで、タクシー会社を訪ねる前に食事

することになった。

先刻の話に影響されたのだろう。綾瀬はしきりに寿司を食べたがったが、駅前に寿司屋はなく、こんなロ―カル駅にありがちな昔ながらの食堂で、天ぷら定食や鰻丼を食べた。

「……さて、次は常滑ですか。この『やきもの散歩道』というところも面白そうですね」

綾瀬は、その店に置いてあった観光パンフを開き、

そんなことを言っている。事件のことなど、もうすっかり頭から消え去っているにちがいない。

「ちよ、ちよっと待ってくださいよ。やらなきやいけないことがあるんですから」

権藤はあせってそう言い、綾瀬を促して店を出た。

タクシー会社の営業所は、駅前通りのはずれにあつた。

事務所に入り、来訪の意図を伝えると、所長らしき

人物は「刑事さんなら、ついさつき、来たけどな」といぶかしげな顔をした。どうやら、捜査本部の刑事たちも——昨日の山田と茉莉の供述を受け——、今日、裏づけにまわっているようだ。

権藤が「じつは、それとは別に特命で動いている者です」と言っても、所長はまだ不審げな顔をしている。考えてみれば、この四人の組み合わせでは——ワンピースに派手な帽子のみずえまでいるのだから——、警

察に見えないだけでなく、あやしげでさえあるだろう。それでも、権藤が警察手帳を見せると、所長は隣の車庫で車体を磨いている運転手の方を指さした。

「その二人を乗せたちゆうのは、あの人だで。好きに聞いてちょ」

それで、権藤とリエは、車庫への通用口を出て運転手に近づいた。綾瀬とみずえは、事務所内に貼ってあった観光ポスターを指さし、なにか話していた。

ワックス掛けを終えて車庫から車を出そうとしていた四十代らしい運転手は、声をかけた権藤に、所長同様、不機嫌そうに言った。

「えっ、またあの話きやあ。もう、ええ加減にしてほしいわ。おかげで、今日はぜんぜん仕事になれませんがね。殺人事件かなんか知らんけど、このへんでは見かけん美人と美男子のカップル乗せたっただけで、なんでこんないじめられなканの」

「いえ、ですから、ご迷惑にならない程度に、ちよつとだけお話を聞かせていただけたらと思ひまして」

「こつちは、客乗せてなんぼだでね。朝からそんな話ばかりさせられて、とつくに、えらい迷惑だがね」

「そこをなんとか」

通りに面した車庫の前で、権藤がそんな押し問答をしていると、横からリエが声をかけた。

「あの、じゃあ、こういうのはどうでしょう？ おと

とい、その二人を乗せたのと同じように、私たちを常滑まで乗せてくれませんか。その途中でお話をお聞きしたいんですけど。もちろん、代金はお払います」

「ん？　：：まあ、お客さんってことなら文句はないけど」

運転手は、ちよつとにんまりしながらそう答えた。

どうやらリエは、運転手からスムーズに話を聞き出すためと、綾瀬たちと別行動をとるための、両方をね

らって提案したようだ。

権藤はそう納得し、さっそく、乗ってきた車のキーをまだ事務所内にいる綾瀬に渡しに行った。

事情を話すと、意外にも——というべきか、やはりというべきか——、綾瀬はすぐに承諾し、「うむ、みずえさんの話をゆっくり聞きながら、ドライブしましょう」と御機嫌そうに言った。

先刻、綾瀬が言っていた常滑の「やきもの散歩道」

で落ち合うことを約し、タクシーのところまで戻ると、リエがこう言い出した。

「どうせなら、あたしたち二人で、山田と茉莉が乗った時と同じようにやってみない」

そこで、駅前のタクシー乗り場まで行き、乗り込むところからはじめることになった。

そこまでタクシーで運んでもらって、いったん降り、ふたたび乗り込もうとすると、運転手がシート越しに

振り返りながら言った。

「いや、そうじゃなかったなあ。男の方が奥に乗った
と思うでね」

権藤は、こんな時はレディファーストが常識だと思
い——まあ、実際は「レディ」ではないのだが——、
リエに先を譲ったのだが、どうやらその時は、山田の
方がさっさと乗り込んだらしい。

それで、運転手の言葉に従い、権藤が奥に乗り、そ

のあとリエが乗った。

「こんな感じでしたか？」

ドアが閉まったところで権藤がきくと、運転手は、ルームミラー越しにこちらを見た。

「ま、あの男はすらっと細くて、あんたみたいにかい図体しとらんかったから、感じはだいたいぶ違うけど、順番としてはそういうことだわな」

「そこで、運転手さんは行き先をきいたわけですね」

「いんや、僕がきく前に、男の方が『この人を常滑に送って、そのあと名古屋まで行ってくれ』って言ったんだわ。それ聞いて僕は、正直、しめしめと思ったんだがね」

運転手は、そう言いながら車を発進させた。

「そんな長距離のお客は、まあ、1ヶ月にいつぺん、あるかないかだでね」

「それで、常滑までは、この道を行っただすね」

四つ辻に来たところで運転手がハンドルを切るのを見て、権藤は確認した。

「ああ、走りながら、常滑のどの辺へ行けばいいかきいたら、女の方が港のそばだって言ったんだわ。そこまでだと、北と南、ふたルート考えられる。でも、北側のこっちの道を行った方が、途中、信号のない有料道路になつとるで早い。で、それでもいいかと確かめてから、こっちの道を走ったんだわ」

「なるほど。で、途中、二人の様子はどんな感じでした？ なにか話しかけられましたか？」

「いや、僕に話しかけるっちゅうより、二人で話したつたわな。男の方が一生懸命口説いとる感じだった」

「：：口説いた？」

「ああ、『今日はまだ早いんだからいいだろ』とか、『たまには、こういうところのホテルもいいじゃないか』とか」

「その時、二人は、どんな体勢で話してたんですか？」
リエがきいた。

「ミラーでちらっと見たら、男が女の肩を抱いて、耳に口寄せとった」

と、そこで、リエがこちらを向いた。

「公平ちゃん、やってみて」

「……えっ！」

権藤は、呼び名に対するいつもの抗議も忘れ、リエ

の顔を見返した。

「……そ、そんなことに、意味があるのか？」

「せっかくだからやってみて、運転手さんに確かめてもらおうよ」

権藤は動揺したが、リエが平然とした顔で言うので、そつとその肩に腕をのせた。

「こんな感じでしたか？」

リエの問いに、運転手は「いんや、もつとしっかり

抱いとる感じだったわな」と答えた。

リエが促すまなざしで見してきた。

それで権藤は、どきまぎしながらリエの肩をつかみ、抱きかかえるようにした。

心臓の鼓動が、やたら速くなっていた。

昨日、相合い傘をしながら想像したりはしたが、実際にリエの肩を抱くのはこれが初めてだった。

細いリエの体は、権藤の腕の中にすっぽり包み込ま

れていた。ことに、権藤の大きな手のひらには、その肩は薄く、か細く感じられた。

：：お、男なのに、なんでこんな肩、してるんだ。

権藤は、そのことが恨めしいような気さえした。

そんな権藤の緊張をよそに、リエは冷静な声で運転手にきいた。

「耳に口を寄せてたっておっしやいましたよね。だとすると、小声で話してたんでしょ。それなのに、話の

内容が聞こえたんですか」

「いや、それが、不思議なことにはけっこうできやあ声で話しとって、はっきり聞こえたんだわ。だもんで、気が揉めたわ」

「気を揉んだ……？」

「そりゃ、名古屋まで行くつもりが、すぐに降りるところになるかもわからんのだでね」

運転手にしてみれば、二人の関係より、走行距離の

方が気になったということだろう。

権藤は、腕の中のリエの体にまだどぎまぎしながらも、そう思った。

「それで、茉莉……いえ、女の方は、どんな反応をしてたんですか？」

「『なんで急にそんなこと言い出すのよ』とか『今日は疲れてるからいやよ』とか、気のない返事をしとつたわ」

「それも、はっきり聞こえたわけですね」

「ああ、この人^{たあ}ん達は、恥ずかしげもなく、ようこなこと話すなと思って、逆にこっちが恥ずかしなつたわ。男も、女がことわつとるのに、しつこく口説いとるし」

その言葉を聞いて、リエが、独り言のようにつぶやいた。

「なんか、山田のクールな感じからは、想像つかない

なあ……」

「でも、けつきよく、女の方が折れてまってるね。『もう、しようがないわねえ』とか言ってる」

「それで、運転手さんがホテルへ連れて行ったということですか？」

「いや、僕が連れて行ったというより、男の方が言っただわ。『半田常滑インターの近くにホテルがあるから、そこへ行ってくれ』って」

「へえ、山田の方から言った……」

「僕も当然、あそこにラブホテルがあるのは知つとつたけどね」

「まあ、そういうカップルを送ることも多いでしょうからね」

「いんや、どこかホテルへ行ってくれとかいう二人連れのお客さんはようおるけど、それまで、あそこに連れてったことはないなあ」

「えっ、どうしてですか？」

「あそこは、昔の言い方でいうと、モーターっていうんかね。ドライブの途中で寄るようなところで、一部屋ごとに車庫がくつついとる。そこからそのまま部屋に入る造りになつとるんだわな。タクシーで乗り付けると、逆に入りにくい感じだでね」

運転手の言うことはなんとなくわかったが、そんなホテルを使ったことがない権藤にはもうひとつ実感が

湧かなかった。

「まあ、どっちにしても、僕にしてみれば、がっかりだわな。長距離のはずのお客が、せいぜい千円くらいのところで降りることになってまったんだで。ところが、ホテルに着く前に、男の方が、あとでまた呼ぶから、携帯の番号を教えてくださいと言いだした。最初に言ったとおり、常滑まわりで名古屋まで行ってもらいたいからと」

「それで、番号を教えたわけですね」

「ああ、これ、渡したんだわ」

運転手は、そう言って、ダッシュボードから名刺の
ようなものをとり、片手で渡してよこした。

そこには、たしかに、運転手の名前と「090」で
始まる携帯の番号が印刷されていた。

「会社にはないしよなんだけど、お得意になってくれ
そうなお客さんには、いつも、それ渡しとるんだわ。

この番号で呼んでもらえば、お迎え料金はいりませんからって」

会社の配車センターを通されれば他の運転手にまわされることも多いわけだから、上がりを増やすためには、こうして個人的な得意客をつくっておく必要があるのだろう。

権藤がそう思っていると、運転手が「ほら、あのホテルだわ」と言った。

見ると、道の前方に知多半島道路の半田常滑インタ―まで一キロという標識が立っていて、ちようどその向かい側に、南欧風に飾り立てた建物があった。

「反対車線側なんですね」

リエがきくと、運転手は「ああ」とうなずき、「寄つてくかね？」ときいた。

「ええ、いちおう」

リエがそう答えるのを聞いて、権藤はまたどきまぎ

した。

まさか、ホテルに入るという意味ではないだろうが、先刻からリエの肩を抱いたままという状況とも相まって、平静ではいられない。

と、運転手は、ホテルの前をいったん通り過ぎてから、車をUターンさせた。そして、路肩から少し引込んで立っその建物の、車の出入口らしい場所の手前で停車した。

「ここで、男が料金をいったん清算して、女の肩を抱いたまま降りたんだわ」

「あたし達も一度降りてみたいから、待っててもらえますか？」

リエがそう言うと、運転手はうなずき、ドアの開閉レバーを引いた。

そこで権藤はちよつと躊躇ちゆうちよした。運転手が今、「女の肩を抱いたまま」と言ったからだ。

このまま、リエの肩を抱いて降りるべきなのだろうか？

それを迷ったのだ。

ところが、ドアが開くと、リエはさっさと一人で降りてしまった。

肩を抱いた格好のままシートに取り残された権藤は、ちらりと振り返った運転手と目が合い、顔を赤らめ、あわててリエのあとを追った。

ゆるやかな起伏のところどころに農業用水や溜め池があり畑が散在する光景に、一軒だけ建ったそのラブホテルは、全体が二階建ての高さしかなく、その分、敷地は広いようだった。道路に面した白っぽい壁のあちこちに出窓やベランダのようなものがあって、それが建物全体を南欧風に見せているが、どうやらこれは実用的なものでなく、単なる装飾にすぎないようだ。ラブホテルらしく、実際には、部屋に窓はないのだら

う。

街なかのラブホテルと大きくちがうのは、道に面した場所に、歩いて入る玄関がついていないことだった。また、建物の中央一階部分をくりぬいた感じの車の出入口にも、ラブホテルによく見かけるビラビラと垂れ下がった目隠しはない。

その入口の上に大きく掲げられた「HOTEL D
E L A C H I T T A」という看板を見上げている

と、リエがその途中まで入り、中をのぞき込むようにした。

「……なるほど、こういう構造なのね」

その声につられ、権藤も、リエに近づいて中を見た。

と、そのトンネルのような通路の向こうには、また、青天井の空間があった。やはり南欧の建物によくある中庭パテオのような造りなのだ。つまり、その中庭を、二階建ての建物が口の字型に囲んでいるわけである。

中庭に面した建物の二階部分にも、表と同じ出窓の
ような装飾があるが、これもやはり、窓としての機能
は果たしていないらしい。この二階に、実際にカップ
ル達が使う個室があるのだらう。一階は、少しずつ間
を空けて車が一台ずつ入れる車庫が口を開けていた。

車庫と車庫の間の壁には、夜になると中に灯りがと
もるらしいプラスチック製の看板がつけられ、そこに
室内の写真や宿泊代——「ご休憩」という文字も見え

るが——が表示されている。その看板の上の部分に大きな文字で「N a p o l i」とか「C a n n e s」とか「N i c e」とか書かれているところを見ると、各部屋には、南欧の避暑地の名がつけられているようだ。

まだ午後の早い時間だからだろう。どの車庫にも車は入っておらず、その奥に二階の部屋に通じるらしい階段が見えた。中庭で車の中から表示を選んで車庫に入れば、そのまま誰にも見られず、部屋に上がれるわ

けだ。

「たしかにこの造りだと、自家用車向きで、タクシーで乗りつけるのは向いてないな」

権藤が言うと、リエは「うん」とうなずいたあと、つづけた。

「山田と茉莉が入ったのは、どの部屋なのかしら。できたら、中も見てみたいなあ」

その言葉に権藤はまたドキリとしたが、リエはさほ

どこだわってはいないようで、そう言っただけで、そのままタクシーへと戻った。

「携帯電話で呼ばれて、8時45分頃、運転手さんはまたここへ来たわけですよ。その時は、男と女はどういう順番で乗ったんですか？」

運転手が開けたドアに、首を突っ込むようにしてリエがきくと、運転手は、「前と同じで、やっぱり男が奥だったなあ」と言った。

その言葉どおり、権藤、リエの順で乗り込んでいると、運転手がさらにつけ加えた。

「まあ、女が先に降りるつもりだったから、駅でもここでも、そういう順番に乗ったんでにやあかな」

「なるほど」

シートに腰を落ち着かせ、権藤がそれに納得していると、運転手は車を発進させ、道路に出るとすぐにUターンし、ふたたび常滑方面へと向かった。

知多半島道路のインターが見えたところで、リエが
きいた。

「ホテルを出たあとの二人の様子はどんな感じでした？」

と、運転手は、これまでになく感情のこもった声で
こう答えた。

「驚いたのは、それだけ」

「……えっ？」

「若い女の人の前でこんなこと言うのはなんだけども、あの男、あんな華奢な体で、あっちの方はたいしたもんなんだわ、きつと」

「……え？　　どういふことですか？」

「ホテルから出てきたら、女の態度ががらっと変わつとるんだわ。あんなにすげなくしとつたのが、もうメロメロになつとつた」

「……メロメロ？」

「乗ってきたとたんにも、男にしなだれかかって、甘えるわ甘えるわ。ベッドの上で、よっぱどいい目みたんだわな、あれは」

「しなだれかかるって、こんな感じですか？」

リエはそう言いながら、権藤に体をあずけてきた。

そのせいで、権藤はまた緊張し、体を堅くした。

と、運転手は、ルームミラーをちらりと見て言った。

「いや、そんなもんでにやあて。男の腕に抱きつくよ

うにして、思いっきり顔を寄せて、もう、いつときも離れたくにやあつて感じだったわ」

「……こうですか？」

リエはさらに体を押しつけるようにもたれかかり、ほおずりするように肩に頭を乗せてきた。その息が首筋にかかり、権藤は思わず体が震えるのを感じた。

その上、こちらの腕を抱きかかえるようにしてきたせいで、リエのフリースがめくれ、下に着たニットの

胸のふくらみが肘のあたりに押しつけられていた。その弾力に——それがじつは、例のブレストフォームだと知っているにもかかわらず——権藤はどぎまぎした。

「男の方が細いぶん、それよりもっと女の体が斜めになったとったが、まあ、そんなもんだな。そんなもって、前とは逆に、女の方がさかんに口説いとった」

「口説く……って、なにをですか？」

「女はどうも、常滑で別れるのがいやになっとなつたみたいなんだわ。『このまま名古屋まで連れてって』とか、『明日はまた、朝からいっしょなんだから、あなたのために泊めてよ』とか、そんなことを言っとなつた」

「それも、はっきりと聞こえたんですか？」

「ああ、あんまりひそひそ話すつちゆう感じてはなかつたわな。女が男にもたれとるから、真後ろから甘えた鼻声が聞こえてきて、正直言つて、こつちもちよつ

と興奮してまったがね」

権藤もまた、今、自分の体が興奮しているのを感じていた。

：：お、俺はいつたい、なにを：：感じてるんだ。

そんな自分自身をごまかそうと窓外に目をやると、前方に、常滑に続く有料道路の料金所が見えた。たしか、中部国際空港にアクセスする道路として、開港と同時に整備されたものだ。掲げられた料金表には、普

通乗用車が二百円となっているから、道程がさほど長いわけでもないのだろう。

そんなどうでもいいことを考え、権藤が必至に気を紛らせていると、窓を開けて料金を払っていた運転手に、またリエがきいた。権藤の心の動揺などまるで気づいていないらしい、冷静な声音だ。

「そんな女に対して、男の方はどんな反応をしてたんですか？」

有料道路上にふたたび車を走らせながら、運転手が答えた。

「それが、こっちはこっちで、さっきまでとは逆に妙に冷たい返事ばかりするんだわ。『今日はこのまま、大人しく帰れよ』とか『俺はもう疲れたから』とか。

この有料道路に入った頃には、そんな返事をするのさえうつとうしいという感じになった。まあ、ことさえすめば女の甘えが面倒になる、男の本性っていつ

たところじゃにやあきや」

思ったとおり、信号で止まることもないその有料道路は、あつという間に終点、常滑に達してしまった。

道がふたたび一般道になるあたりで、リエが「女が降りるまで、ずっとそんな感じだったんですか？」ときいた。

と、運転手は、いったん「ああ」とうなずいたあと、「そーいやあ……」と言った。

「有料道路を出たあたりで、男が『彼女が降りたあと、ここへ行ってくれ』と言って、名刺をくれたわ」

「名刺……？」

リエが聞き返すと、ちようどそこで前の信号が赤になり、停車した運転手は、最前、自分の名刺を出したあたりのダッシュボードをがさごそやりはじめた。

「……ああ、あったわ。これだがね」

そう言って差し出された名刺を受け取る時、リエの

体が少し離れたので、権藤は思わずため息をついた。

しかしリエは、すぐにまた権藤にもたれかかってくる。たぶん、権藤にもその名刺が見えるようにということなのだろうが。

名刺は、山田がふだん使っているものらしく、「photographer 山田隆」という名前があり、

その下に「shachi photo studio」の文字とともに、住所、電話番号、Eメールアドレス

などが記されていた。

「なんで名刺なんかくれるのかと思っとなら、『途中で寝てしまいかもしれないから、着いたら起こしてくれ』と言った。まあ、そもそも寝てくつもりだったんだわな。まだ女が降りる前から、準備のいいことだなと思ったわ」

「ふーん」

権藤に体をあずけたまま、リエはそこでなにか考え

込んでいたが、常滑の市内を走っていた運転手がほどなく停車すると、あわててまわりを見回した。

「ここだがね、女が降りたのは」

「また、ここで待っていてくれますか？」

リエは、運転手にそう言ってタクシーを降りると、もう一度周囲に視線をめぐらせた。

タクシーが停まったのは、旧道らしい道に沿った酒

蔵の前だった。さっきの半田の酢蔵や、昨日の楠の酒蔵とくらべると規模は小さかったが、やはり周囲を黒い板壁で囲んだ同じような造りの蔵だ。

その蔵の角から裏手につながる細い道があるのを見つければ、これが茉莉の言っていた路地なのだろうとリエは思った。

そこでやっと、権藤が大きな体をタクシーから運び出した。

それで、いったんはその路地を入ろうかと思ったのだが、茉莉の家族に話を聞くななら、店に行った方がいいだろうと思い直し、振り向いた。

路地とは反対側に、蔵に連なる商家造りの家屋があり、軒下には時代物らしい「添沢酒店」の木看板が掛かっていた。ただ、店の表は、さすがに格子窓やくぐり戸でなく、アルミサッシのガラス戸がはめ込まれている。

そちらに近づき、ガラス戸越しに店の中が見えたところ、ついてきた権藤が、なぜか腕をつかみ、リエを押しとどめた。

「まずい。今は、入っていかない方がいい」

その言葉に店の中をのぞくと、背広姿の二人の男が、酒屋の前掛け姿の年配の男と若い男、そして、割烹着姿の年配の女と話し込んでいた。

話しながら手帳になにか書き留めている背広姿の男

達を見て、リエにも、権藤が止めた理由がわかった。

男の一人はリエもよく顔を知っている広小路署の刑事、そしてもう一人は、昨日、例の「事情聴取」で顔を合わせた三重県警の刑事だったのだ。

リエたちクイズに内偵を依頼してくる志水はまだしも、現場の刑事たちは、リエたちが捜査に加わっていることをけっして快く思っていない。ましてや、本来の任務からはずれた「聞き込み」などをやっ

るとなれば、なおさらだ。それこそ、署長の綾瀬が行でもしていれば文句は言えないだろうが、このまま二人で入っていつても、体よくつまみ出されるのがオチである。

リエもそれを納得し、権藤にうなずいたあと、二人の刑事の目から身を隠すように、ふたたびタクシーの停まっている方に戻った。

と、例の路地の入口あたりに人影が見え、話し声が

聞こえてきた。

「今、お店に来てるのが、今朝言つてた刑事さんたち？」

「うん、そうなの。私は面倒くさいから、うちの人やお義父さんたちに任せて、おつかいに行かなきゃって逃げ出しちゃった」

どうやら、茉莉の兄嫁らしい。近所の主婦と話しているのだろう。

それがわかり、リエと権藤は、扉の閉まった蔵の入口あたりに身を潜め、耳をそばだてた。

「それにしても、茉莉ちゃんも困ったもんねえ。殺人事件に巻き込まれてるんでしょ。あんな派手な商売やってるから、そんなことになるんだわ」

「まあ、あの人は、ずっとこの町で暮らしてる私なんかとちがって都会人だから、考え方が自由というか：

」

「ほんと。お父さんやお母さん、ちやつかりあんたに押しつけて、好きなことやって。この頃じゃあ、ほとんど帰って来ないんでしょ」

「ええ、名古屋にも部屋を借りてるから」

「まあ、あんたにしてみれば、嫌味な小姑と顔合わせなくてすむぶん、その方がいいんでしようけどね」

「正直言っちゃうと、そうなんですけどね。妹っていつでも、むこうのが年上だし。なにかとやりにくくて」

「で、たまに帰ってくると、殺人事件だもん。親不孝よね。で、どうなの？ 犯人じゃないかって疑われて、アリバイ調べられてるんでしょ」

「ええ、どうもそういうことみたい。でも、事件があったっていうおとといの夜は、たしかに帰ってきてましたから。じつは九時頃、私、茉莉さんが裏口から入ってきて、離れの部屋に入るの見たんです。ちようど、乾かずに干したままになってた洗濯物を取り込みに、

母屋の物干しに出た時だったから」

「ふうん、でも、そのあと、抜け出したかもしれないじゃない」

「それもないんじゃないかな。離れの電気はすぐ消えたけど、窓からテレビの灯りがちらちら見えてたもん。

私たち夫婦が寝た十時半頃には、まだテレビがついたままだった。うちは朝が早いから、次の日、まだ暗いうちに起きて洗面所の窓から見た時には、それがもう

消えてたの。夜中に消したんだと思うわ」

「あんたも、なんやかや言っつて、小姑が気になるんだ。大変ねえ」

「そんなわけでもないけど……」

そこで、二人はちよつと笑い合い、兄嫁の方が「こんなところで油打ってるの、お義母さんに見られたらいやだから」と言い残し、買い物籠を提げて路地を出、店とは反対方向へ立ち去った。

「どうやらあの夜、茉莉が家に帰ったのはまちがいないみたいね」

リエはそう言いながら、路地に近づき、中をのぞき込むようにした。

と、兄嫁と話していたらしい主婦が、路地を挟んだ隣の家の勝手口に入って行くところだった。

「その裏口とやらを、見てみましょ」

権藤にそう言い、リエは先に立って、その路地を入

った。

蔵はけっこう奥行きがあるようで、黒板壁が十数メートル続き、その先でやつと、生け垣に変わった。生け垣は丈が一メートル五十センチほどしかなかったので、その上から添沢家の庭が見えた。生け垣の途中に木戸がある。それが、兄嫁の言っていた「裏口」らしい。

「そうか。あの離れが、茉莉の部屋なのね」

蔵の裏手から庭を挟んで、地所のいちばん奥手の角に他とくらべていかにも新しい洋風の家屋が建っている。木戸からそんなに離れていない位置に入口のドアがあり、中はせいぜい六畳二間といったところか。窓の配置からいって、キッチンや風呂場などもないようだから、単に茉莉の私室としてだけ使われているのだろう。兄の結婚と同時に造築されたのかもしれない。

「母屋の物干しっていうのは、あれか」

木戸のそばまで来たところで、権藤がそう言って指さした。見ると、たしかに母屋の二階に物干しが張り出している。手前の蔵の分の距離もあり、木戸や離れのドアに近いわけではないが、それでも十メートルは離れていない。上から見下ろしているのだから、木戸から人が入ってきたのを見誤ることはないだろう。夜だといえど、姿形はわかったにちがいない。

「うーん、いよいよアリバイ成立かあ」

リエはそうつぶやきながら、さらに路地の先に歩いた。

ちようど離れの角の位置で、生け垣は添沢家の敷地を回り込むように続いていた。

路地を挟んだ隣家の高い塀も、ちようどそこで途切れていた。

そこを抜けると、視野が急に広がった。

両家のすぐ裏に建物はなく、三メートルほどの幅で

雑草の生えるスペースが、並びの家の裏手を貫いていく。そしてその向こうには五・六メートルほどの幅の川があった。

左右を見ると、一方は川幅が狭くなっていたが、反対側は急速に広がり、それがすぐ海へとつながっていた。

「あれっ、また、デ・ジャ・ヴ？」

リエがつぶやくと、そばに立った権藤もそちらを見

て、「ああ、きのうの……」と言った。

天候もちがったし、流れの大きさもちがうのだが、川が海に注ぐその風景は、昨日、楠で見た鈴鹿川派川の景色と、どこか似たものがあつた。

さらにちがう点をさがすとすれば、沖に空港島が見えることと、海に出る手前あたりが舟だまりになっていて、小さな漁船やボートが何隻も繫留されていることくらいか。

その景色になにか引つかかるものを感じながらも、リエは権藤とともに路地を戻った。

タクシーの運転手は、どうやら、先日の山田同様、二人がこのあと名古屋まで行ってくれと言うことを期待していたようで、リエが『やきもの散歩道』の入口まで」というと、がっかりした顔をした。

そこまでは5分とかからなかったが、その間にも、

リエは運転手に、茉莉と別れたあとの山田の様子をきいた。

「名刺をくれた時に言ったとおり、あの男は、女を降ろしたあと、すぐに寝てまったみてやあだ。途中、二・三度声をかけたんだが、返事もなかった。まあ、こっちは、行き先が名古屋でもはずれの藤が丘だったで距離が稼げる。気持ちはずんどったから、相手がしやべらんのは、かえって面倒がなくてうれしくくりや

あだったけどな」

「でも、名古屋の道はそんなに慣れていないでしょ。

住所だけで細かい場所もわかったんですか？」

「ああ、それは心配いらん。この車、いちおうカーナビがついとるで。名刺に書いてあった電話番号打ち込んだら、最後まできちんと連れてつてくれたわ」

「降りる時はどうでした？」

「あれは、写真かなんかのスタジオきや。あの建物の

前まで行って、『着きましたよ』って声をかけたら、
今度はすぐ起きた。でも、寝起きだったせいか、料金
払ったあと、ぶすつとしたまま、すぐあの建物の中に
入ってったわ。ま、上がりがよけりやあ、そんなこと
は気にもならん」

運転手は、最後にそう言った。

綾瀬たちと落ち合う場所を、「やきもの散歩道」と

しか決めていかなかったのは失敗だった。

散策路のコースは、細かくまわれれば二キロ近くある。その途中に、いくつもの見所のスポットが配置されている。綾瀬たちがどこにいるのかわからないので、リエと権藤は、それをひとつひとつ見てまわることになったのだ。決められた順路の反対側からさかのぼる形で探していき、行き会うのに、けっきよく一時間近くを費やしてしまった。

この前、室内での撮影をした「廻船問屋 瀧田屋」の中に二人はいた。江戸時代の大商家を修復したそこは、主屋、土蔵、離れ、水琴窟のある庭など、当時の暮らしぶりがわかる建物そのものが見ものになっていくわけだが、それ以外にも、船道具や、弁財船を復元した模型など、廻船に関する資料が数多く展示されていた。

リエと権藤が到着した時、また、綾瀬を相手にした

みずえの「歴史講義」が始まっていた。

「……江戸時代の後半になると、知多半島から江戸に、醸造品とかやきものが大量に送られるようになった。

最初の頃は、やっぱり菱垣廻船や樽廻船に頼ってたみたいね。でも、それだけ荷物が多くなると、どう考えても地元で自前の船を持って運んだ方が安上がりなわけでしょ。それで、江戸時代の終わり百年くらいの間、知多半島全体で、海運業が猛烈な勢いで発展する

の。たいした産業のなかった半島の南部にもその波がおよんで、廻船問屋が数多く誕生する。貧しい農民から船乗り転職する人たちもたくさん出てくるの。そのうち、知多の物産だけでなく、瀬戸内から上方、江戸まで、他の地方の貨物も運ぶようになって、幕末頃には、大坂の二大廻船を凌駕するくらいの勢いになったみたい」

「ほう。しかし、知多には、海運をするのに有利な点

でもあったわけですか？」

「御三家である尾張藩が保護したとか、いろいろ理由はああるけど、大きいのは、対岸の伊勢の大湊おおみなとに、戦国時代の九鬼水軍くきからつながる造船の技術があったことね」

「ああ、なるほど。大型船を作る技術があったと」

「それで面白いのはね、この常滑あたりだとまだ、大型船が入れる港があるんだけど、南の方は海に山が迫

つてて、いい港がないのね。だから、持ち船は伊勢の四日市とか白子しろことか津や鳥羽なんかしるこに置いたまま、あつちを母港にしてるの。船乗りたちはこつちに住んで、出航の時になると、手こぎの小舟で向こうに渡つてたらしいの」

他のことを考えながら、聞くともなしに聞いていたリエは、ふと、その言葉が気になった。

「……ママ、今、なんて言った？」

「……えっ、なに？」

「手こぎの小舟で渡ったって言ったよねえ」

「……え？ ええ」

「知多から伊勢までって、そんなに簡単に渡れたの？」

「そりゃ、伊勢湾は内海で、たいした波もないからね。」

黒潮は、紀伊半島に邪魔されて、遙か彼方を流れてるわけだし」

「でも、手こぎだとすると、ずいぶん時間がかかった

んでしょ」

「うーん、ちよつとした帆も張って風も利用したんだろうし、はっきりとはわからないけど……。そうだ。

もすこし北側だけど、東海道の宮宿みやから桑名宿は、有名な七里の渡しで渡ってたわけよね。七里の渡しもやっぱり、小さな帆と、あとは手こぎで運航してたらしいけど、行程はだいたい4時間半くらいだったっていうわよ」

その言葉に、リエは、ちようど壁に貼ってあった伊勢湾の地図を見た。

宮宿と言え、金山の南、熱田神宮のある熱田だ。

江戸時代には名古屋港がなく、海岸線はもつと奥まっていたから、熱田から桑名まで海路で行けたわけだ。

その航路が七里、つまり二十八キロだった。

そう考えながら視線を少し下に降ろすと、常滑と楠がほぼ同じくらい緯度で並んでいた。しかも、よく

見ると、知多側も伊勢側も土地が張り出し、常滑と楠の間は伊勢湾で最も幅が狭くなっている。

リエは、地

図の欄外に印

刷された縮尺

に指をあて、それで常滑と楠の間を測ってみた。



その間、直線距離なら……十八キロ。

二十八キロを手こぎの舟で4時間半で行けるとしたら、十八キロを……たとえば……。

リエは、ハツとした表情で携帯電話を出し、クイーンズオフィスに電話した。

「ミミ、ちよつと調べてほしいことがあるの」

「どうかしたのか？」

車に乗って以来、ずっと黙り込んでいる助手席のリエを気にして、権藤はきいた。

「……えっ？ ううん」

リエはそう答えたが、まだ、なにかをしきりに考えている。

後部座席からは、相変わらず、みずえと綾瀬の歴史談義がきこえてくる。

「……知多半島を拠点とする廻船をまとめて尾州廻船びしゅう

って呼ぶんだけど、尾州廻船は、なかなか江戸湾に入
れてもらえなかったのね。江戸おもての取引を菱垣廻
船と樽廻船が独占してたから」

「じゃあ、どうしてたんですか？」

「神奈川の港を使ったの。ほら、横浜港って、幕末の
開国で、貧しい漁村がいきなり大きな港になったって
いう話があるでしょ。あれはいくらなんでもおかしい
のね。船着き場ができればそれで港ができるわけじゃ

ない。貨物を取引する問屋や、陸上の運搬システムがちゃんと整備されてて、はじめて港は機能するんだから。じつはね、江戸時代から横浜のすぐそばに尾州廻船の港があっただって。そこから江戸に商品を流通させるルートがあつた。だから横浜は、すぐ国際港になれたのね……」

：：うーむ。俺は、名古屋に帰り着くまで、ずっとこの話を聞いて行かなきゃいけないのか。

みずえの話に興味をそそられないでもなかつたが、綾瀬とみずえが醸し出しているどこか緊張感に欠ける雰囲気に巻き込まれそうな気がして、権藤は、ひとり心の中でごちた。

俺は、殺人事件の捜査に来たはずなのに……。

しかし、権藤が求めている緊張感というのは、じつはそんな事件に関わる緊張感だけではないのかもしれない。先刻、タクシーの中で、リエの肩を抱いたり、

甘えるように寄りかかられたりした、あのどぎまぎする
ような感覚が体の中でくすぶり、出口を求めている。
もう一度、あんな緊張感が味わいたいということなの
かもしれなかった。

…この二人、なんか邪魔なんだよな。

要するに権藤は、そう思っているのだ。

と、その時、リエの携帯電話が鳴った。

「…はい。…あ、ミミ。で、どうだった？ ……」

うん、……六人乗りの小型で二十六ノット？　キロに直すと？　……そうか、時速五十キロくらいは出るわけね。わかったわ。ありがと」

リエはそう言っつて、携帯を切った。

「なんの話だ？」

権藤がきくと、リエは――

「もう少し……待ってて」

――と答え、ふたたび考え込んでしまった。

：：：いったい、なにを待てっというんだ？

自分の世界に入り込んでしまったリエをちらりと見やり、権藤は、いろいろな意味で煮え切らないまま運転をつづけた。

車はすでに、常滑市街を出て有料道路を走っていた。ここを抜ければ、すぐに知多半島道路のインターだ。あとは、一路、名古屋に向かうだけだった。

道の後ろで太陽が沈みかけているところをみると、

今、午後6時前後だろう。邪魔な二人はいたものの、予定していたことはすべてすみ、その上で、リエはなにかをつかんだようだ。

：：まあ、これでよしとするか。

権藤は、そう考え、なんとか自分の気持ちを納得させようとした。

「：：いやあ、みずえさんのお話はじつに興味深い。

時間が許せば、もっと聞きたいものです」

後部座席では、綾瀬がそんなことを言っている。

どこかで休憩して話をつづけたいなどと、言い出さなければいいが……。

権藤がそう思っている時だった。

有料道路の終点にある脇道から、大きなトレーラーのような車が出てくるのが見えた。

アクセルペダルを緩め、エンジンブレーキをかけながら見ていると、出てきた運転車が道幅いっぱいにな

まわりして荷台を牽引していた。やはり、大型トレーラーのようだ。といっても、荷台にコンテナを積載しているわけではない。内輪差を考えてそれだけの大きさをしなければならぬ全長十数メートルはある平台の上には、コンクリートの円柱が寝かされ、何か所かを太いロープでとめられていた。

：：：なんだろう？ 電柱でも運んでいるのかな？

そう思って見ていると、やっとその最後尾が現れた。

柱はその荷台よりも長く、赤い布きれをぶら下げた先が後ろにはみ出していた。

最初、道に対して斜めを向いていた荷台が、運転車に引っ張られて次第に真っ直ぐになり、その後ろ姿をこちらに向けた。

……あつ……つ、……。

車体が急に横揺れし、スピードが増した気がして、

想念から醒めたりエは窓の外を見た。

「……あれっ？ インターの入口」

本来なら入らなければならぬはずのその表示が、
車窓を通り過ぎていく。

……？

不思議に思つて、運転席の権藤を見やった。

と、権藤は、なぜか天井を仰ぐようにヘッドパッド
に頭を預け、ポカンと口を開けている。しかも、よく

見ると、目を閉じているのだ。

……えっ！

なにかとんでもなく悪い予感に襲われ、リエはあわてて前方に目をやった。

と、三十メートルくらい先に大型トレーラーが走り、その荷台から、どうやら電柱らしいコンクリート柱がこちらに向かって突き出していた。しかも、その先が、まるで巨大な鉛筆のように……とがっていた。

「……あーっ！」

思わず、大声が出た。

「……ど、どうしたの？」

後部座席のみずえが、驚いてきいた。

「こ、公平ちゃんったら、こんなところで……先端恐怖症！」

リエは、そう言いながら、ふたたび権藤を見た。

失神した権藤は、ハンドルから両手を離し、しかも、

その体重のせいで徐々に椅子からずり落ちていた。車のスピードが上がっていくのは、アクセルペダルに足がかかったままだからにちがいない。

そう判断したところで、リエは恐怖に駆られ、また前方を見た。

トレーラーとの車間距離が、先刻より確実に縮まっている。

さらにまずいことに、百メートルほど前方の信号が、

たった今、赤に変わった。

それを受け、トレーラのブレーキランプも、数度点滅したあと、真っ赤に灯った。

「そ、そんなーっ！」

このままいけば、冗談ではなく、あの電柱の先が、こちらの車のフロントウインドウに突き刺さる。

「こ、公平ちゃん、起きてーっ！」

リエはその肩を揺すりながら叫んだが、権藤はびく

りともしない。

後部座席の二人は、「あー、あー」と声をあげるばかりで、ただおろおろしている。

とにかく、この危機を回避しなければ……。

そう思ったりエは、右手にめいっぱいの力を込め、サイドブレーキを引いた。ところが、権藤がアクセルを踏んでいるせいで、サイドブレーキはなかなか効いてくれない。車輪がきしみ音をあげ、多少速度が落ち

た感じはするが、それ以上に速度を落とす前のトレーラーに、どんどん近づいていく。

それでリエは、権藤の前に体全体を投げ出すようにして、左手をハンドルにかけた。今度は全身で振り返るようにハンドルの回す。

前方に突き出す電柱の先に触れるすんでのところ
で、車体は大きく左にカーブを切って、道路をそれた。

ところが、その曲がった先にもまた、危機が待って

いた。

目の前に、突然、オレンジ色の壁が立ちはだかったのだ。

「あーっ、ぶつかるーッ！」

リエは、思わず目をつむっていた。

しかし……、予想した衝撃もなければ、衝突音もな
いまま、車は、壁を通り抜けたかのように前へ進んで
いた。

そして、ここへ来てやっとサイドブレーキが利き始めたらしく……、ノッキングしながらスピードを落とす……、やがて、なにかにこつんとぶつかる感じがある……、エンストした。

恐る恐る目を開けたリエの目に映ったのは、コンクリートの壁だった。しかもそれが、車の前方だけでなく、両サイドの窓側にもあった。なにか、コンクリートの箱の中に入ってしまったようだ。

：：ん？

わけがわからず、振り返ってみると、リアウインドウのずっと向こうに、先刻ぶつかったはずのオレンジ色の壁が見えた。いや、オレンジ色と見えたのは夕陽のせいで、実際には白っぽい壁のようだ。

その壁の中央に、トンネルをくりぬいたような入口があるのを見つけ、リエはやっと、今の「壁抜け」の謎が解けた。偶然にも運よく、あの入口をくぐったに

ちがいない。そしてそのまま、この車庫のようなところに入って停車したわけだ。

そこまで理解したところで、リエは、不思議な感覚にとらわれた。

「……ん？　また……デ・ジャ・ヴ？」

コンクリートの車庫に四角く切り取られた光景——壁の出窓や、その手前の中庭らしい場所——には、たしかに見覚えがあった。

と、やはりきよとんとした表情で、後ろを見やつていたみずえが言った。

「ここって……ラブホ？」

ふたたびきよきよとその車庫内を見渡すと、前方のコーナーから二階へ続く階段と、そこに取り付けられた「Monte Carlo」というプラスチックプレートが目に入った。

どうやら、昼過ぎに見たあのラブホテル——の「モ

ンテカルロ」という部屋の車庫——に、入ってしまったらしい。

「うむ、ここはホテルなんですか」

やっと驚きから醒めたらしい綾瀬が言った。

「ええ、そうみたい。せつかくだから、休憩でもしていきましようか」

みずえが答えた。

「ああ、いいですね。お話のつづきも、ゆっくり聞き

たいし」

：：ええーっ！　この人たち、いつたいなに考えてるのお！

と、リエがそう思ったところで、運転席の権藤が「うん」と声をあげ、体をごそごそさせた。

：：あつ、あぶない！

意識が遠のく直前の光景を思い出し——そのせいで

また気を失いそうになりながら、必至に抗あらがって——
権藤は目を開けた。

：：ん？　：：あれ、どうやら助かったらしい。

自分がまだ運転席に座って——生きて——いるのに
気づき、権藤はそう思った。

と、両側の後部座席のドアの開く音がして、車体が
大きく揺れた。振り返ると、綾瀬とみずえが車を降り
るところだった。

「……ちよ、ちよつと待ってよ、ママ」

権藤の隣ではリエがあせつたように言いながら、二人のあとを追って助手席のドアを開けた。

「ほんとに、上にあがるの？」

「ええ。今の騒動で、なんだかぐったり疲れちゃったから。ご休憩、2時間……ね」

降り立ったりリエが、どこか困ったようにみずえと綾瀬の顔を見くらべるのを、権藤はわけがわからないま

ま見ていた。

「で、でも……、お店は……？」

「いいわよ。ユカちゃんに電話して、かわりに開けてもらおうから」

みずえはそう言いながら、にこにここと上機嫌そうに待っている綾瀬とともに、階段を上って行ってしまった。

……ユカというのは、前の事件で知り合って、今で

もときどきみずえの店を手伝っているチーママだな。

権藤はぼんやりとそう思い、状況をもっとちやんと把握しようと、自らもドアを開け、外に出た。

「……ここは、どこなんだ？」

声をかけると、あきれたように階段の方を見上げていたリエが、さらにあきれた顔でこちらを見た。

「例の、ラブホテルよ」

「……えっ？」

その言葉に、権藤は車庫の外の中庭に目をやった。

「：：ああ、そうか。山田と茉莉が入ったっていう：
：。それにしても、俺たち、なんでこんなところにいる
んだ？」

「誰のせいよ」

リエの語調に、どうやらそれは自分のせいらしいと
悟り、権藤はわけがわからないなりに顔を赤らめた。

その時だった。

「あれっ、お前、権藤じゃないか」

思わぬ方向から声がした。

「……え？」

見ると、車庫の入口あたりから背広姿の男が二人、こちらをのぞき込んでいる。

「……あっ、土橋さん」

男の一人は、広小路署の先輩刑事、土橋だった。

先刻、茉莉の実家で聞き込みしているのを見かけた

から、あのあと、このホテルに寄ったということだろう。

「お前、なにしてるんだ、こんなところで……」

土橋はそう言いながら、権藤と、そして車を挟んで助手席側に立つリエを見た。

「……ははーん、お前ら、じつはそういう関係だったのか」

その、好奇心とからかいと、そして多少の軽蔑……

というか気味悪さともいうものの混じった声音に、
権藤は焦った。

クイーンズの存在は署内でも秘密扱いになっている
が、事件の内偵に関わっているぶん、刑事課の連中は
それなりに知っている。もちろん、リエの正体も。

ということは、土橋は今、二重三重に誤解している
のだ。

「い、いえ、俺たちは、例の事件の捜査で……」

土橋に近づきながら権藤が言うと、土橋ともう一人の――三重県警の――刑事は、露骨に迷惑そうな顔をした。

それで、権藤はさらに、サラリーマンらしい言い訳を重ねた。

「あ、いや、実地見分をしたいという署長のお供をして……」

と、土橋が、今度はまたにやついた顔にかわり、言

った。

「ああ、やっぱりな。今、女といっしよにラブホの部屋に入ってた後ろ姿は、署長なんだ」

さらに誤解があらぬ方向に発展するのを食い止めようとして、権藤は焦った。

「い、いや、あの人は、女でなく男……」

そう言いかけてあわてて口をつぐんだ時には遅かった。

「ほお、おたくの署はほんとに変わってるな。オカマ部隊がいるだけじゃなく、署長までがそっちの趣味なんだ」

三重県警の刑事が言った。

「いや、ですから……あの……」

権藤がさらにおたおたしていると、近づいてきたりエが土橋に声をかけた。

「で、どうでした？」

「……え？　なにがだ？」

「山田と茉莉の供述の裏づけ捜査でしょ」

話をそらせ、ついでに聞き込みの結果を聞き出そうというつもりらしい。

「ホテルの従業員は、何か言っていました？」

「いや、たいしたことは出てこなかった」

土橋は、「お前らなんか教えてやるか」とでも言いたげな表情で答えた。

と、そこで、リエはなにかを考えるような表情をしたあと、こう言った。

「二人が使った部屋は、もう見たんですか？」

「えっ、いや、そこまでする必要はないだろう」

「二人がなにか工作したような手がかりが見つかるかもしれないよ」

「それは：：そうかもしれないが：：」

「ああ、男二人じゃあ、なんとなく入りにくかったり

して。それじゃあ、あたしたちが見てきて、あとでご報告しましょうか」

「……えっ？」

リエの言葉に、権藤は驚いてその顔を見た。土橋の方は、三重県警の刑事と顔を見合わせている。

「あたしたちだったら、客を装って調べてくることもできるし」

「それはそれで、まあ、ありがたいが……」

「じゃあ、ホテルの従業員から聞いたこと、教えてく
ださいよ」

「……うーむ、まあいいだろう」

どうやら、リエの作戦は成功したようだ。しかし、
そのあと、リエはほんとに二人で部屋に入ろうという
のだろうか……。

権藤がそう思っていると、土橋が、今聴取してきた
らしいことを話し始めた。

「このホテルは、通常、従業員とまったく顔を合わせずに利用できるシステムらしい。客が入ると、自動的に部屋のロックがかかる。外から入れないだけじゃない、そのままでは中からも出られない」

「中からも……？」

「ああ、それぞれの部屋に精算機があつて、そこに超過料金なんかを含めた代金を納めたところでやつとドアが解錠される。火事とかの非常事態でもないかぎり

は、途中で出入りできないということだ。しかも、ドアの開閉は、管理室のコンピュータに記録されている。山田と茉莉は、供述通り、18時15分頃部屋に入り、20時45分頃出ている。その間、出入りしたような記録はない」

「でも、従業員と顔を合わせないとすると、たとえば二人で入ったように見せかけて、一人しか入らないようなこともできますよね」

「ああ、その点も確かめたんだか、それはないようだ。

じつは、唯一、客が従業員と顔を合わせるシチュエーションがある。部屋から出前を頼んだ時だ」

そう言えば、茉莉がそんな供述をしていたなと権藤は思った。

「19時頃、管理室に女の方から：：つまり、茉莉から電話があって、二人分の出前を注文してきたんだそうだ。洋食の弁当のようなものらしいが、従業員が一キ

口ほど先のレストランに電話注文して、それが19時半頃届いた。そのあと、それを持って部屋まで行った。

そこで、バスローブ姿の男と女を目撃してるんだ」

「なるほど。コンピューターの記録と合わせて考えれば、二人がずっと部屋にいたことはまちがいないってことかあ」

「ああ、従業員から出てきた話はそれだけだ。じゃあ、俺たちのかわりに二人で部屋を見とていくれ。あそこ

の角の『バルセロナ』という部屋だそうだ。まあ、報告さえしてくれれば、部屋をどう利用しようと、俺はかまわんがね」

土橋がどこかにやついた笑いを浮かべてそう言うのを聞き、権藤はまた、おたおたとリエを見やった。

「サグラダ・ファミリアか……それで『バルセロナ』ってわけね」

大きなダブルベッドのヘッドボードが、あの有名な大聖堂を模したデザインだったのを見て、リエが言った。

このホテルのベッドは、おそらくどの部屋も、名づけられた土地にまつわるデザインがされているにちがいない。「ベニス」はゴンドラで、「カンヌ」は映画祭のトロフィーだったりするのだろうか。綾瀬とみずえが入った「モンテカルロ」は、ルーレットかフォー

ミュラーカー、それとも思いきりひねって、ベッド全体が巨大なケリーバッグになっているとか……。

権藤はそんなことを考えていた。いや、そんなことを考え、必至に気をまぎらそうとしていた。

権藤といえど、ラブホテルに入った経験くらいある。

しかしそれは、刑事課にいた時分、捜査で二・三度立ち入ったというだけなのだ。それ以前は、オリンピックク強化選手として柔道漬けの毎日だったから、女性と

デートする機会さえなかった。当然、こんな場所を利用したことはない。

だから、リエと二人きりでこんな部屋にいるという事実だけで、心穏やかではいられない。

その上、今日は、例のタクシーの中の出来事もあり、体の中に妙なうずきのようなものが残っている。

もし、事件の捜査だという認識がなかったら……いや、それがあつたとしても、リエがじつは男なのだと

いう認識さえなかつたら、とうの昔に、ベッドの上で四方固めに持ち込んでいる気がする。

権藤は、そんな自分の中の衝動を抑え、そのせいで、ベッド脇に突っ立ったまま、金縛りのような状態になっていた。

それに対し、リエは、すでに部屋のあちこちを見てまわっていた。

「まあ、たしかに入退室のシステムがちよつと変わった

てるけど、それを除けば、どこにでもあるラブホテルよね」

先刻入ってきた入口のドアあたりを確かめながら、リエがそう言った。

権藤には、その「どこにでもあるラブホテル」という表現が気になった。

もしかしてリエは、何度もこんなホテルを利用したことがあるのだろうか？

そう思ったのだ。そして――

その時の相手というのは、女なのか、それとも……
男なのか？

それがさらに気になった。

女ならまだ許せる気はするが、もし男だったなら……
……。

そんな場面を想像すると、なんだか胸が締めつけられるような気がした。

「うーん、出入りできるのは、どう見てもあのドアだけね」

洗面所あたりの壁などを調べながら、リエが言った。そして、そのあと、バスルームに入った。

「ここも、特に変わったところはないと」

中からそんな声が聞こえたあと、ドアから顔をのぞかせたりエは、権藤に向かってこうつぶけた。

「ねえ、ママとボスはどういいうつもりか知らないけど、

ご休憩2時間なんて言ってたし、どうせ部屋代払うんだから、あとでお風呂でも入っちゃおうか」

……えっ？

その言葉に、権藤は緊張した。

ひよっとしてこれは、いっしょに入ろうという誘いなのだろか？

つつい、そんなふうに考えてしまう。

と、バスルームから出てきたリエは、「なんか暖房

効きすぎてない？」と言い、羽織っていたフリースを脱いでソファの背もたれにかけた。

下に着ていたピンクのオフシヨルダーのセーターが、権藤にはなんだかまぶしいような気がした。

そのあとリエは、テーブルの上にあった出前用のメニューを手にとった。そのままソファに腰掛けるのかと思っていると、権藤に近寄り、なんとベッドの端に腰掛けた。

権藤が見下ろすと、リエは、そのメニューに目を通していた。

オフショルダーのセーターから、きれいな首筋や鎖骨がのぞいている。さつき、タクシーの中でそこを抱いていたぶん、権藤には、その細さが目で見る以上に実感できた。

実際、その肩は、男の理性を失わせるのにじゅうぶんなほど、か細いのだ。

こんな姿：：とても男には見えない。それは、俺にかぎらず誰が見てもそう思うだろう。こんな部屋で、こんな姿を目の前にして、俺が血迷ったとしても、誰もおかしいとは言わないにちがいない。

権藤は、心の中でそんな言い訳を考えたあと、次には、その言い訳すら否定した。

ん？　：：誰も？　俺はいつたい誰の目を気にしているというのだ。この部屋には、俺たち二人しかいな

いんだ。誰に見とがめられるというのだ。

そして、最後に、自分の中にかすかに残る抵抗感を
取り払おうとした。

リエの本当の性がどうであろうが、そんなことは関係ないじゃないか。俺は今、この、目の前のかわいい人を抱きしめたい。それは、今の俺の本心だ。それだけでじゅうぶんじゃないか。もしかすると、この人自身も、それを望んでいるのかもしれないのだし……。

権藤がそんなふうに見えるのを発展させながら見つめて
いると、リエも顔を上げ、潤んだ目で——少なくとも
権藤にはそう見えた——見返してきた。そして、その
魅惑的な唇がこう言った。

「じゃあ、そろそろ始めましょうか」

「……え？ あ、ああ」

その言葉に、権藤は一步前に踏みだし、両手を差し
出しながら体を屈めた。

「まず、山田か茉莉が元美殺しの犯人だとして、なぜこのホテルに入ったかということだけど……」

「……えっ？」

その言葉に、リエに抱きつこうとした体勢のまま、権藤は固まった。

「けつきよく、アリバイづくりのために時間をつぶしたという以上の意味はないと思うのね」

「あ……ああ」

今、リエが言った「そろそろ始めましょうか」という言葉が、先刻、車の中で言った「もう少し……待ってて」につながるものだという事に気づき、権藤は、今とっている体勢が不自然に見えないように、くるりと体を回転させ、リエの隣に腰を落とした。

「ここで2時間半を費やしたのも、出前を取ってわざわざ従業員に姿を見せたのも、それから、同じタクシ―を呼んだのも、すべて、元美の殺害時刻には間に合

わない時間まで、知多半島にいたという証言を残すた
めだった。そう考えていいと思うの」

「ああ……」

権藤は、今の心の動揺をリエに悟らせないよう、必
死に思考の方向を変えた。

「……実際、どの証言も、嘘ではなさそうだしな。22
時に楠に行けなかったことはたしかだろう」

と、リエがこう答えた。

「ええ。陸の上に行くかぎりはね」

「……ん？」

「電車や自動車を使えば、どうしても名古屋まわりになる。常滑から楠までの距離は七十キロから八十キロになるわけね。でも、さっき、ママの話聞いててや」と気がついたんだけど、常滑と楠の直線距離って、じつは十八キロしかないのよ」

「……えっ？」

「楠の酒蔵が、知多半島のにそっくりだと思った時点で気づくべきだったのよね。知多と伊勢は海を通してつながってたんだって」

「そうか：：海か」

「そう。たとえばモーターボートで行けば、30分もかからないみたいよ。ミミに調べてもらったんだけど、ごくふつうの小型ボートでも、最高時速五十キロくらいは出るらしい。ウエイクボードを引っ張るトーイン

グボートなんかだと、もっと高速なものもあるって。伊勢湾は波が静かだっていうし、21時過ぎに常滑を出れば、22時には楽に間に合うはずよ」

「ということは……茉莉か」

「ええ、実行犯は、彼女しか考えられない。ほら、茉莉の実家と元美のアパートには、共通点があるでしょ」

「共通点……？」

「どちらにも、すぐ裏に川がある。しかも、海からそん

なに離れていない。モーターボート以外の移動時間は、ほとんどかからなかったと思うの」

「そうだな。具体的には、茉莉はどう動いたのかな？」

「21時に実家の蔵の前でタクシーを降りる。あの路地と木戸を通っていったん、離れの自分の部屋に入る」

「ちよつと待ってくれよ。どうして部屋に入る必要があつたんだ？ 裏の川からだとしたら、直接行ってもかまわないだろう」

「それは、自分の部屋のテレビをつけておくという偽装工作をするためだと思うわ。茉莉は、あの兄嫁が、よく自分の部屋をうかがっているのを知ってたんじゃないかしら。だから、わざわざテレビをつけておいた。そして、頃合いを見計らって部屋を出る。ボートはあらかじめ用意して、川が海に出る手前にあつたあの舟だまりに繋いでおいたんでしようね。路地から裏に出て、川沿いに歩いて舟だまりからボートに乗った」

「そこまですを15分とみても、伊勢湾横断が30分だと、21時45分くらいには楠へ着けるわけだな」

「ええ。楠でボートを繋留したのは、あの、堤防に階段がついてたあたりなんでしようね、たぶん。川を少し上って、ボートを繋いだりして、元美のアパートに着くのが22時少し前。それが、あの女の子が元美の声を聞いた時間ね。元美が部屋に上げたのも、先輩モデルでスタイリストの茉莉なら納得できる。ところがそ

ここで、茉莉は元美を殺した」

「警察へ通告の電話をかけたのも、茉莉本人ってことか」

「ボイスチェンジャーを使って、女だということをおからなくしたんでしょうね。たぶん、電話したのは、ボートに戻ってからだと思う。その方が逆探知による場所の特定はされにくいし、そのあと携帯を伊勢湾に棄ててしまえば、ぜったいに足はつかない」

「そこから、またモーターボートで常滑に戻ったとして、23時前に実家に着く。夜中にテレビを消したことも、翌朝、家族とともに朝食を食べたこととも矛盾しない」

「まだ確実な証拠があるわけじゃないけど、少なくとも容疑者四人の中で、元美を殺すことができたのは、茉莉だけだということね」

リエはそう結論づけた。

それで権藤は、きいた。

「元美殺しはそうだとして、第一の殺人、麗子殺しはどうなんだ」

「それも、茉莉じゃないかと思う」

「どうして……？」

「これも、決定的な決め手があるわけじゃないんだけど、可能性を考えると茉莉しかいなくなるの」

「どうということだ」

「愛ちゃんに応答したインターホンの声が、本当に麗子自身だとしたら、麗子が殺されたのは19時20分過ぎ。その時点では、茉莉以外の三人はマンションの外にいたことがはっきりしてる。麗子殺害の可能性が高いのは、マンションの中にいた茉莉ということになるでしょう。まあ、マンションの入口に立っていた二人の目を盗んで、どうやって一階の自分の部屋まで戻ったのかって謎は残るけどね」

「インターホンの声が、麗子じゃなかったとしたら、
どうなる？」

「その場合は、死亡推定時刻が18時30分までさかのぼ
るわけだから、たしかに他の三人にも可能性はあるわ
ね。瀬瀬が愛ちゃんに目撃される前にマンションに忍
び込んでたとも考えられるし、19時から栄での打合せ
に出た山田や笠置にしても、移動時間は5分しかかか
らないわけだから無理なことじゃない。現に笠置自身

が、会議に間に合うぎりぎりまで大須にいたと言ってるわけだしね。でも、その場合も、ネックになるのはインターホンよね。19時20分に702号室のインターホンに伝えられる可能性は、やっぱり茉莉にしかない。その場合も、前と同じ謎は残るけどね。それにもうひとつ、より確実なこともある」

「確実……？」

「愛ちゃんの聞いたインターホンの声が女だったって

こと。玄関前で立ち話してた人たちも聞いてるわけだから、それはまちがいないと思うの。まあ、あたしたちみたい訓練すれば、男でも女の声が出せないわけじゃないけど、ふつうに考えれば、麗子のかわりにインターホンに応えたのは女だということになるですよ。そういう点でも、19時20分に702号室にいた可能性があるのは、茉莉しかない」

「なるほど」

権藤は感心してうなずいた。最前までの邪心は、とりあえず萎えていた。

「でも、問題は動機よね」

「ん？ 動機は、鬼頭がらみの痴漢冤罪隠しじゃないのか？」

「それはそうだと思うんだけど、あたしが言いたいの
は、もつと奥の動機」

「奥の動機……？」

「茉莉はなぜ鬼頭に協力したのかってこと。茉莉は、四年前の痴漢事件で被害者役を演じ、そのあと、後輩の元美と麗子にも同じことをさせたんだと思う。そして、その秘密を隠すために二人を殺した。でも、そうまでして鬼頭のために働く理由が見つからないのよね」

「それは、なにか見返りがあったんだらう」

「広告代理店の笠置や自分の写真スタジオを持ってる

山田なら、鬼頭のクライアントを紹介してもらおうという見返りも期待できるけど、モデルやスタイリストは直接クライアントと取引があるわけじゃないでしょ。そこまで鬼頭につくしても、たいしたメリットはない気がするのよね」

「じゃあ、考えられるのは……」

「男と女の関係……？」

「……あ、ああ。そういうことになるんじゃないか」

こんなシチュエーションでリエの口から発せられた「男と女の関係」という言葉に、権藤の心はまた多少波立ったが、もちろん今さら「力づく」もできず、ただうなずいた。

そんなこんなで、けつきよくは「推理談義」のみで何事もなく部屋を出た権藤とリエが、やはり「歴史談義」に終始したらしい綾瀬とみずえに合流し、ふたた

び名古屋に向かっている頃、名古屋市内某ホテルの一室では、そんな二組とは対照的な濃密な会話が交わされていった。

「……あ、先生。すごい。……すごく……よかった」
「……ふー、俺も……堪能したよ。お前は、いつまでたってもいい女だ」

「うくん……いじわる。『いつもでたっても』って：

：つまり、知り合った頃にくらべて、私が年をとった
って言いたいんでしょ」

「ふふ、それは邪推だよ。お前は、ますます女に磨き
がかかっている。それに、あの時の感度も、ますます
よくなっているしな」

「もう……」

「ふふ、ふくれるなよ。ほんとのことだろう。ことに、
悪事を企んでいる時のお前の体は、いつも以上に感じ

やすいようだ」

「なによ、その言い方……」

「だって、そうじゃないか。お前が残酷な女だということとは、俺がいちばんよく知っている。俺はよせと言ったのに、痴漢事件でもめた男と女を、わざわざまた会うように仕向けたり……。きっとお前は、二人の反応を見て楽しんでいたんだろう」

「あれはべつに、私が仕組んだわけじゃないわ。たま

たまよ」

「よく言うよ。それに、この前だつてそうだ。あの女を殺す前、俺に抱かれたお前の燃え方は、尋常じやなかつた」

「ほんとに、ひどい言い方ね。私は、先生のためだけを思つてやってるのに」

「それは、どうかかな？ お前には他にも恋人がいるよ
うだしな」

「もう、いじわるばっかり。私は先生だけのもの。知ってるでしょ」

「本当に信じていいのかな？」

「怒るわよ。これから私、先生に喜んでもらうために、もうひと働きしようと思ってるのに」

「もうひと働き……？」

「だから、もう一人の邪魔者を……」

「ふふ、それはまあ、さっきの燃え方を見ててもわか

つたさ」

「またあ……」

「ふふ……、しかし、気をつけるよ。なんだか、しきりと探りを入れてきている連中がいるようだ」

「ええ、それは、なんとなくわかってるわ」

「それに、最後の一人は、お前のことをいちばんよく知っている人間だ。返り討ちにあわんようにな」

「大丈夫よ。私が、そんなへまをすと思う？」

「ふふ、そうだな。それにしても、怖い女だ。俺も、いつ寝首をかかれるかわからんな」

「もう……知らないッ」

「……こら、こつちを向けよ。もう一度、かわいがつてやるから」

「……あ……ッ」

file-207

空漠の証人

または 勢ぞろい！ ビキニ娘

「おはよう」

「……あっ、おはようございます」

「藤が丘」の改札を出たところで呼び止められ、振り返ると纈纈だった。どうやら、同じ電車だったらしい。

例によって、ビン底メガネともこもこブルゾンの「ださい女の子」モードでやって来たりエは、少し待ち、並んで駅舎を出た。

「やっぱり、山田先生が直接連絡してくれたんだね」

「……え？」

いきなり言われ、意味がわからず聞き返すと、瀨瀨がつづけた。

「昨日一日、携帯も届かないようなところに行ってたから、先生からの留守電聞いたのが夜遅くだったんだ。それで、君には僕から電話すべきだったんじゃないかって、ちよつと気になってさ」

元美の事件の余波でスタジオが臨時休業になっていた昨日、瀨瀨はどこかへ出掛けていたらしい。そのせ

いで、リエに連絡が届いていないのではないかと心配していたということだ。

「……あ、いえ。あたしのところへは、笠置さんが電話をくださったんです」

「へえ、笠置さんから……？」

瀬瀬は、不可解そうに首を傾げた。

今日、撮影を再開するという連絡は、リエたちのところにも昨日のうちに入っていた。サツキとミミには

茉莉からだだったが、リエの携帯には、どういうわけか笠置からかかってきたのだ。

リエ自身もそれは不思議だったのだが、今の纒纒の言葉も気になり、きいてみた。

「昨日は、どこか遠くへ出かけたんですか？」

「遠くってほどでもないんだけどね。久しぶりに鳥の写真撮りに、山に入ってたんだ」

「へえ：：」

「じつは、例の痴漢騒動以来、裁判や生活のこともあって、なんとなく足が遠のいてたんだけど、やっとなんかもう一度本気で撮ってみようという気になってさ」

今朝の瀬瀬の表情がいつになく晴れやかな理由がわかり、リエは、にっこり笑ってうなずいた。

と、瀬瀬がこう言った。

「ま、そんな気になれたのは、君のおかげなんだけどね」

「……？」

「君が、僕の写真を見て、『鳥が生きてる』って言うてくれたから」

その言葉にリエはなんだか照れ、話を変えた。

「……あ、あの、撮影、10時スタートですよね」

「……え？　ああ、ちよつと急がないとな。先生がスタジオに降りてくる前に、段取りすませとかないと」

「準備はいつも、瀨瀨さんがやるんですか？」

「最終的には先生がチェックするんだけど、その日に使うカメラとかストロボとかを用意して、だいたいのもセッティングをするのは、僕の仕事なんだ」

そんな話をしながら「シャチ・フォト・スタジオ」に着くと、瀨瀨はそのままAスタジオのドアを開けた。

そしてそこで、驚いたように動きを止めた。

「……あつ、先生。……おはようございます」

すでに山田が、そこにいたかららしい。

リエが後ろからのぞくと、山田はカメラをつけた三脚をかつぎ、螺旋階段を上っていくところだった。

「……ああ、おはよう」

「機材、先生が出してくださったんですね」

ステージには、すでにストロボなどもセットされている。

「ああ、今日は、ふたつのスタジオを使って手の込んだ撮影をするんだ。いろいろな微調整も必要だろ。だか

ら、早めにとりかかった方がいいと思っただけ」

「すみません、気がきかなくて」

しきりに悪がっている瀨瀨に、撮影デッキの上に三脚を置いた山田は「いいさ」と笑い返した。そしてそこではじめて、リエに気づいたようだ。

「ああ、君もいたのか。じつはちよつと相談があるんだ。準備は後まわしにして、二階へ来てくれないか」

「……えっ!? あたしが、モデルを?」

両肘をついていた打ち合わせテーブルからのけぞるようにして、リエは聞き返した。

「ああ、昨日電話で、元美のかわりをどうしようか相談してたら、笠置さんがそう言い出したんだ」

対座した山田がつづけた。

キッチンスペースでコーヒーの準備をしていた瀨瀨も、なかば驚きの表情で、なかば面白そうに、こちら

を振り向いている。

「新しいモデルをさがす時間もないし、君ならちようどいいってな。『ああ見えてじつはモデルばりの美人だし、キャラクターとしても、あとの二人と妙にかみ合う』ってすっかりその気だった。まあ、茉莉に伝えたら、自分の事務所のモデルじゃないことがちよつと不満そうだったが……」

「でも……」

なぜ笠置が電話をくれたのか、その理由はわかったが、急な話に、リエは困惑した。

「笠置さん自身は、今日は定例の会議とかで来るのが遅れるらしい。それで俺が、説得の役目を仰せつかったってわけさ」

山田はそう言ったあと、突然立ち上ると、打ち合わせテーブルを回り込み、リエのすぐ脇まで近づいた。

「……？」

なんだろうと思ひ、上目づかいに見ると、山田はいきなりリエのあごの先を親指と人差し指でつまみ、その顔を持ち上げるように自分の方に向かせた。そして、もう一方の手で、リエのメガネをはずしてしまった。

「……！」

なんだか強引なそのやり方に、リエは多少むっとし、山田をにらみつけるように見上げていた。

しかし、そんな眼差しは、長くつづけていられなか

った。

至近距離から見下ろしてくる山田の端正な顔に、思わず見入ってしまったからだ。

といっても、その表情から、なにか山田の気持ち伝わってきたというわけではない。むしろその逆だった。

じっと凝視してくるその視線は、不気味なほど感情を感じさせない。そのくせ、こちらの心を不安にさせ

るような力がある。そんな視線で見られ——鑑賞され、
リエは、自分がいつも以上に「女」になっていくよう
な気がした。

「：：ふむ、さすがにアートディレクターの目はたし
かだな」

まるで品定めでもするように言う、その冷たい言葉
の響きにも、なぜか心がふるえ、一方で恨めしいよう
な気持ちにもなるのだ。

もし今、山田が口づけてきたら、自分は——山田の気持ちを抑えるために——すすんでそれに応えてしまいかもしれない。

そんな奇妙な感覚すら持った。

「あとの二人が来たら、さっそく着替えてくれ」

あごから手を離しながら言ったその言葉に、リエは、ため息をつくように、思わずうなずいていた。

なんだか、催眠術にでもかけられた気分だった。以

前、茉莉がサツキに言ったという山田のカリスマ性というのは、たぶんこういうことなのだろうと、リエは納得した。

「まさか、三人で水着ポスターを撮ることになるとはね」

Tバッグに近いボトムの横ひもを、腰骨あたりまで上げながら、サツキが言った。

「ほら、だから、あたしのぶんのブレストフォームも、つくつといて正解だったでしょ」

その「乳房」がちよつと露出しすぎているような気がして、ブラの縁を引っ張り上げながら、リエが応じた。

「ふーん、おんなじ赤でも、デザインはそれぞれちがうんだあ」

ミミは、自分の水着姿を姿見に映しながら、サツキ

やリエとくらべている。

三人とも赤のビキニなのだが、ミミのブラにはリボンの飾りなどがつき、挑発的なカットのサツキとは正反対のロマンチックなデザインだ。リエのものが、いわばいちばんオーソドックスなつくりだった。

それにしても……。

着替え室で水着を着けながらおしゃべりしてる自分たちを、ちよつと客観的に見て、リエは思った。

なんか、これって、フツーに女の子どうしのシーンだよ。こんなことがあたりまえにやれてるあたしたちって……いったい、なに？

リエがちよつとあきれていると、サツキがきいてきた。

「今日は、茉莉はまだ来てないのね」

それでリエは、先刻、瀬瀬とともにふたたび撮影準備に下りていった山田の言葉を伝えた。

「うん。なんでも、今日使う予定の水着を、ショップに借りに寄ってるんだって」

「えっ？　水着って……、これじゃないの？」

「どうも今日は、写真を二枚撮るらしいのね。で、二枚目の方に使う水着がまだ調達できてないとか」

「ふーん」

サツキはそう言いながら、ミミに代わって姿見の前に立った。

「……わっ！　セクシく。こんなの見たら、われながら興奮しちゃう」

うっとり眺めてポーズをとっているサツキに、リエはさらにあきれながら、その横に並んで自分も水着姿を確かめた。と、ドアを開けて出ていこうとしていたミミが振り返った。

「だけど、茉莉が来てないとすると、メイクとか、どうしたらいいのかな」

「そんなに遅くはならないはずだって、言ってたけどね」

「ま、あたしたちで、できるところまでやっつけばいいんじゃない」

「そうね」

というわけで、リエとサツキも着替え室を出た。

と、メーカーヤツプミラーの前に座ったミミが、ビューラーを手にまっつげをカールしながら、「そういえば

さ」と言った。

「ゆうべ、リエが言ってた、茉莉がモーターボートで伊勢湾を渡ったって話、ちよつと調べてみたんだけど、どうもおかしいのよね」

「……ん？　なにが？」

リエも、ミミの隣に座ってファンデーションを直しながら聞き返した。

「どうも、茉莉は小型船舶免許を持ってないみたいな

の」

「船舶免許？ どうしてわかったの？」

さらにリエの横に座ったサツキが、シャドーを入れながらきいた。

「免許取得を管轄してる国交省の外郭団体をハックしてみたんだ」

今度はマスカラしながら、ミミが答える。

横長のミラーの前で真っ赤なビキニの肩を並べメイ

クする姿は、やはり女の子どうしの軽いおしゃべりに見えたが、その内容は、ちよつとちがった。

「ここ何年間かの中部管区の一級・二級取得者や更新者の中に、茉莉の名前は見あたらなかったの」

「だけど、小型船舶免許って、たしか何段階もあるよね」

「最近、法律が変わって、一級と二級だけにまとめられたんじゃないかってつけ？」

「そう。いろんな限定区分はあるにしても、今は一級と二級しかない。でね、伊勢湾は、法律上は平水区域って分類だから、とりあえず二級を持ってれば航行はできるらしいけど、茉莉は、その二級も持ってないみたいなのよね」

「だけど、それは法律上の話で、無免許だって動かせないわけじゃないでしょ」

リエが言うと、ミミは浮かない顔でこうつぶけた。

「うん、それはそうなんだろうけど、夜間航行はよほど慣れてからじゃないと無理みたいなのね。茉莉が伊勢湾を往復したとしたら、21時以降でしょ。もうまわりは真っ暗だし、免許を持ってない茉莉に、ほんとにそれができたかどうか……」

「最近のモーターボートには、航海用のGPSとかがついてるんじゃない？」

船は専門外だといえ、やはりサツキは、スポーツ系

のマシン情報には強いようだ。

「うん、そういうのは多いみたいね」

「衛星使って地図上の位置がわかれば、素人でもなんとかなるんじゃないかな？」

「だけどね、たとえば自分のいる場所がわかったとしても、なんの目標物も見えない真っ暗な海の上で船を操るのって、簡単なことじゃないみたいなの。船の向いてる方向そのものがわからないし、その上、潮にも流

される。岸に近づいたら近づいたで、水路や潮目が読めない、座礁の可能性も高い。おまけに、伊勢湾は、名古屋港や四日市港があるでしょ。夜間も大型船やタンカーがさかんに行き来してるから、衝突事故の危険も大きいらしいのね。ふつうに考えると、免許を持ってない人間には無理みたい。ましてや、30分で目的地に着くことはできないんじゃないかな」

「……」

昨日の推理は、茉莉がモーターボートに乗れることが前提になっている。それが否定されれば、茉莉犯人説は根底から崩れるわけだ。

リエは、今の姿には似つかわしくないむずかしい顔で、考え込んだ。

「君い、捜査本部を馬鹿にしてもらっては困るなあ」
署長室のソファで権藤の話聞いた志水は、心外そ

うに言った。

「なんらかの船舶で伊勢湾を横断するという犯行経路は、当然ながら、われわれも検討したよ。その上で、却下されたんだ」

「で、でも、四人の容疑者のうちで、22時に楠に行ける可能性があるとしたら、茉莉がモーターボートで：

権藤がそう繰り返そうとすると、志水はそれを手で

制した。

「いや、だからこそ、船の使用は否定されたんだ。茉莉は船舶免許を持っていないどころか、船に乗ることが、いわば体質的にダメらしい」

「……えっ？」

「船恐怖症とでも言ったらいいのか、船に乗るだけで、極度の船酔い状態になる」

「……船酔い？」

「とうか、ひどいめまいと吐き気が出て、ほとんど立ってられない状態になるようだ」

「……どういふ、ことですか？」

「あれだけ海のそばで育っておかした話だが、けつしてでたらめではないらしい。どうも、幼い頃、父親の海釣りにつき合って、ちよつとした海難事故に遭ったらしいんだ。大けがをしたわけではないが、船が転覆して海に投げ出されたという。それがPTSD……心

的外傷ストレス障害というのか、まあ、要するにトラウマとして残った。体が船を拒否するようになってしまったということなんだ。家族だけでなく、主治医や友人などからも、それを裏付ける証言がとれた。そういう神経症的な障害をもつ人間がいることは、君にはよくわかるだろう」

志水という言葉に、権藤は顔を赤らめた。

「たとえば、高校の修学旅行で遊覧船に乗る旅程があ

つたらしいが、医者 of 診断書を提出して、彼女だけは
その間、旅館で待機していたという。仕事でも、船上
での撮影とかは事務所がことわっている。若い頃、モ
デルとしてそんな撮影をむりやりさせたら、救急車を
呼ぶような騒動になったからだという。少なくとも、
一人でモーターボートを操縦して伊勢湾を横断するな
どということとは、茉莉には到底無理だろう。まさか、
今回の犯行のために、高校時代から偽装工作をして準

備していたとも思えんしな」

「……」

そこまで裏がとれているなら、リエの推理は否定せざるをえないだろう。権藤がそう思つて黙り込んでいると、志水は「それよりも……」と言葉をつづけた。

「君たちは昨日、例のホテルの部屋に入ったというじゃないか」

土橋から話が伝わったのだらう。権藤は、なにか悪

いことでも見とがめられたように、どぎまぎした。

「……え？　は、はい。まあ……」

「で、どうだったね。なにか、あったかね？」

「い、いえ、そんな……、なにかあったなどということとは、断じて……」

権藤はそう言ったところで、自分が大きな勘違いをしたことに気づき、おたおたと目を泳がせた。

三人がおおよそのメイクを終えた頃、山田が「どうだ、準備はできたか？」と事務所に入ってきた。スタジオの方の用意がすんで呼びに来たのだらう。

なぜ纒纒でなく山田本人が呼びに来たのかと、ちよつと不思議に思いながらも、リエが「はい、でも……」と言いかけると、山田は「あれっ？」と首を傾げた。

「茉莉は、まだなのか？」

「ええ、とりあえず、メイクはあたしたちでやってみ

ましたけど……」

サツキの答えに、山田は渋い顔で「まったく、あいつ、なにしてるんだ」と言い、しかし、すぐに気を取り直したようで、打ち合わせテーブルを指し示した。

「ま、ちようどいいか。茉莉が来るまでに、今日の撮影の説明をしておこう。ここに座ってくれ」

水着姿のままですちらに行くのをリエがためらっていると、サツキがメイクルームの壁から、ポンチヨを

取ってくれた。

それを水着の上から羽織りながら三人がテーブルに着くと、そこで山田は、まず壁際のふたつのモニターのスイッチを入れた。

画面に、A・B両スタジオの様子が映った。どうやら両方とも、カメラはデスクの上に据えてあるらしく、撮影ステージの床面を斜め上方から撮っているようだ。Aは白、Bは黒の空間が広がっていた。ただ、A

の方は、画面中央上の位置に、大きな赤い玉が置かれていた。ライトを受けててかてか光つているところを見ると、表面はビニールかなにかのように見える。おそらくは、巨大なビーチボールだろう。

そう思っていると、Aの方の画面の縁に纈纈らしい人影が現れ、ボンベのようなものを使ってもうひとつビーチボールを膨らましはじめた。こちらは白だ。纈纈がまだこの作業をしているから、山田が呼びに来た

ということだろう。

と、そこで山田が、どこからかA3サイズの二枚のボードを取り出してきて、テーブルの上に並べた。

「笠置さんと俺で構図を決めて、デザイナーに作ってもらったんだ」

どうやら、ポスターの見本らしい。

「実際は、駅貼りの大判だから、これの何倍もの大きくなるんだがな」

見ると、横長にレイアウトされた二枚のポスターは、構図的にはまったく同じで、片方は白、もう一方は黒バックの、斜め上から俯瞰した絵が描かれていた。

それぞれの絵の真ん中上方には大きなビーチボールがある。その手前側に三人の水着女性がいて、一人は横座りし、あと二人は両側に寝そべっている。そして、三人ともがこちらを——つまり斜め上方を——見ている。三人の美女が、ビーチで太陽を見上げているとい

うイメージなのだろう。

その女たちのポーズも両方ともまったく一緒なのだが、水着の色だけがちがいで、中央に置かれたビーチボールの色と合わせてある。白バックの方が赤いビーチボールに赤いビキニ、黒バックの方は、それが白になっっているわけだ。

紙面の最下段には、四角く開いた窓のように、知多の観光スポットの写真がずらりと並べられていた。そ

して、その写真と女たちの間の空間に、それぞれ英文のキャッチフレーズが入っていた。白バックに赤の水着の方は「CHITTA is HOT!」、黒バックに白の水着の方は「CHITTA is COOL!」と書かれていた。よく見ると、下に並んだ写真もそれぞれちがっていて、「HOT!」の方はビーチやレジヤ―施設、「COOL!」の方は、博物館や史跡などのスポットになっている。二枚一組で、知多の魅力を

アピールしようというねらいだろう。サマーリゾートもカルチャーも：：というわけだ。

「見てもらえばわかるように、AスタジオとBスタジオで、水着だけ替えて、まったく同じ写真を撮る。まずAスタから始めるが、撮っている時の位置とポーズをしっかりと頭に入れておいて、Bスタでも再現してほしいんだ。もちろん俺たちもチェックはするが、君たちもそのつもりでやってもらわないと、うまくいかな

い。：：いいね？」

三日前、Bスタジオのステージを黒く塗らされた理由もわかり、リエがうなずくと、サツキとミミも同様にした。

「：：それにしても、茉莉はなにしてるんだ？」

山田はそこでちよつといらいらした様子で言い、そのあとまた三人の顔を見渡して、独り言のようにつぶやいた。

「：：まあ、顔のアップを撮るわけじゃないし、メイクに特に凝る必要もない。水着以外の装飾も必要ないしなあ：：」

そして、なにを思ったのか、ポケットから携帯電話をとりだし、かけ始めた。

「：：あつ、笠置さん？　まだ会議中？　話しててだ
いじょうぶかな？　：：ああ、：：それがじつは、茉莉
がいないんでまだ始められないんだ。：：そうなん

だ。例の追加分の水着、：：うん、白い方。そっちは品数がなくて一日しか借りれないとかで、今朝行くつてことになってたらしい。：：ああ、待ってるって時間が押しそうだから、先に始めちゃおうかと思うんだ。メイクとかは、今のままでもいけそうだし。でも、いちおう、アートディレクターの了解とってからと思つてさ。：：うん、だいじよぶだよな。：：わかった。じゃあ、先進めてるよ。：：あとどのくらいで来られ

る？ ……そうか、じゃあ、出る前に一度電話くれよ。それに合わせて進行するから」

そう言って電話を切ると、またリエたちの方に向き直り、「ってわけで、始めるか」と言った。

山田につづいて階下に降りていくと、瀨瀨が、Aスタジオの両開きのドアをバネの留めまで開け、そこから、今ふくらませ終わったらしい白のビーチボールを

運び出していた。Bスタジオに運ぶのだろう。

そう思ったリエは、纒纒の先回りをしてBスタジオのドアのところまで行き、そこを開けた。纒纒が両手いっぱいにはちよつと首を傾げたからだ。

「ありがとう」

そう笑いかけ、Bスタジオに入る纒纒を見送りながら、リエはちよつと首を傾げた。

そのビーチボールは想像したよりずっと大きい。さ

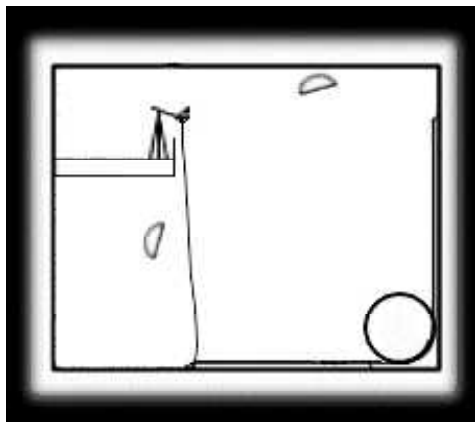
つき見せられた見本のデザインに描かれていたものよりも大きい気がした。

：：ふつうのビーチボールじゃ目立たないからにしても、あれだけ大きいと、逆にビーチボールに見えないんじゃないかな？

そんな心配をしながら、すでにAスタジオに入ってしまった山田やサツキたちのあとを追った。

Aスタジオに入ると、ライトの当たる白いステージ

の中央に、今見たのと同じ大きさの赤いビーチボールが置かれている。ステージを横から見て初めてわかったのだが、その位置はステージのいちばん奥、ホリゾントの上に、その曲面とぴったり合うようにセットされていた。つまり背面の壁ぎりぎりのところに置かれているわけだ。上のモニタ



ーで見た時には、ただ床の上に転がっているように見えたのだから、これがホリゾントの効果なのだろう。

「さて、じゃあ、水着になってステージに上がってくれ。履き物も脱いで裸足になって」

山田にそう言われ、上に羽織ったポンチョを脱ぎ、リエたち三人は撮影ステージに上がった。

そこで山田は、ステージの前に立ち、位置やポーズを指示し始めた。

リエは、ビーチボールのすぐそばに座らされ、サツキとミミは、その両側に八の字型に寝そべらされた。

さらに山田はあれこれ指示し、三人のポーズをきめていった。

上下左右から明るいうらみを浴び、ビキニ姿で床の上にじかに座って、リエは最初、どうしても緊張と照れを感じたが、てきぱきと、いわば事務的といってい感じて指示してくる山田に、いつしかそれを忘れ、

自分の肢体をきれいに見せることに意識を集中していた。

けつきよく、リエは片手を床について横座りするよ
うなポーズ、サツキは横向きに寝て両肘をつき頭を起
こしたポーズ、そしてミミは両手で頬杖をつき片足を
膝のところから跳ね上げるようなポーズで、山田はい
ちおうのオーケーを出した。

そのポーズが決まったあたりで、瀨瀨がBスタジオ

から戻って来た。

「ま、こんなところだろう。君も、位置を覚えといてくれ」

山田は纒纒にそう声をかけると、デスクの下の螺旋階段を二段跳びに昇った。

デスクの上に立つと、山田はその中央あたりに置かれた三脚に近づき、手すりから身を乗り出すようにした。どうも、カメラは三脚の真上に据えられているの

ではなく、そこからさらにこちらに向かってアームの
ようなものを延ばし、その先についたシューに固定し
ているらしい。たぶん、より俯瞰した感じを出すため、
デッキ上からせり出す形で撮っているのだ。

リエは目を凝らして、やっとそれがわかった。リエ
の位置からデッキの上が見にくいのは、その手前や天
井につけられたライトが、こちらに向かって強い光を
放っているからだ。

「視線をこっちへくれ」

そのライトの向こうの薄暗闇から、山田の声が響いた。

リエたちが、ちょうど斜め四十五度くらいのその方向を見ると、山田はさらに言った。

「つくり笑顔は必要ない。ビーチで寝そべっているリラックスした感じで笑ってくれ」

そう言われても、すぐにすんなりできるものではな

い。すでに三日ほどモデルを経験したサツキやミミですら苦勞しているようなのに、リエには、とても山田の要求に応えられそうになかった。

ストロボが何度かつづけざまに光る中、自分でも笑顔が引きつっているのがわかり、このぶんだと山田は——この前、知多での撮影がそうだったように——こちらができるまで粘って、撮影時間は長びくにちがいないと覚悟した。

と、そこで、山田がなにか短い言葉を発した。

表情のことを気にしていたリエは、自分が叱責されたのかと思い、びくりとしたが、どうやらそうではなかったようだ。

山田は、「纈纈！」と呼んだらしい。

「はい……？」

ちょうどデスクの下の位置にいた纈纈が前に出て、上を見上げた。

「このケーブルが映り込みそうだ」

上で山田が触ったからだろう。カメラ本体から垂れ
ているらしい一本の黒いケーブルが揺れた。その先、
床を這うケーブルを目でたどると壁際のパソコンラッ
クにつながっている。どうやらデジカメのデータを送
るためのものらしい。

「ちよつと奥へ引っ張って、床にガムテでとめてくれ
ないか」

あとでキャッチフレーズや観光地の写真をはめ込むスペースもとっておかなければならないから、フレームにはステージの手前いっぱいまでをおさめているのだろう。そのせいで、カメラから垂れ下がったケーブルが画面の下の縁にのぞいている。それを、もっとデツキの下側に引き込んでほしいと言っているのだ。

「はい」

纈纈はすかさずそう返事すると、すぐにガムテープ

を手に取った。山田の要求に即座に応えられるよう、交換レンズや頻繁に使う道具などは、撮影中、いつも自分のまわりに用意しているにちがいない。

リエが見ていると、瀨瀨は、目の前に真っ直ぐ垂れているケーブルにそっと手をかけ、二三步、慎重に後ずさりながらしやがんだ。必要以上に強く引つ張れば、せっかく位置決めしてあるカメラを振動させることになる。それに心を配った動きだということが、リエに

もわかった。

そこで纈纈は、ケーブルを床におさえ、その上から
ガムテープを貼った。

「オーケー」

さっきまで真下に垂れていたケーブルがデッキの下
に隠れたのを確認し、そう言うと、山田はふたたびカ
メラに向かった。

また何度もつづけてストロボが光り、そこで山田が

多少ポーズを変えさせたりした。そんなことが何度か繰り返され、十五分くらい経過した時だった。

「よし、こんなところか」

山田がそう言った。

もつと長丁場を予想していたリエは、それにちよつと呆氣にとられた。山田から厳しい言葉を投げかけられることもなかったのが、意外でもあった。

しかし、山田はそのまま、すたすたと螺旋階段を下

りてきた。本当にこのスタジオでの撮影は終了したというこもらしい。

それを見て、リエも、そしてサツキもミミも、自然に立ち上がっていた。座ったり寝たりという姿勢であっても、同じポーズをとりつづけるのはやはりつらい。体を伸ばしたいという欲求がなによりもまさった。

「もう、オーケーですか？」

下に降りた山田に、瀨瀨も意外そうにきいた。

「ああ。この手の引きの写真は、構図さえ決まれば早
いんだ。ちよつと見てみようか」

そう言うと山田は、デスクの下のパソコンラックの
前に立った。

ステージを下り、ポンチョを羽織ったりエたちも、
自然にそのまわりに集まる形になった。

山田はマウスを握って、しばらく操作していたが、
やがてパソコンの画面に、ずらりと同じような画像の

サムネールが表示された。どうやら、二階のサーバーに送られ保存された撮影画像のフォルダを呼び出したらしい。

山田が、そのうちの一枚をクリックすると、ディスプレイ上に、先刻見せられた見本と同じような構図の画像が映し出された。見本とちがうのは、中央の上方に配置されたビーチボールがやたら大きい感じがするのと、その前で座ったり寝そべったりしている女たち

が、描かれた絵ではなく、リエたち三人になっていることだ。

「あつ、なんかいい感じ」

「あたし、けっこうかわいい」

サツキとミミが口々に言うのを聞きながら、リエは、自分がそんなポスター然とした絵の中に入っていることが、なんだか不思議な気がした。ことに、赤のビキニ姿で横座りするその姿は、自分ではないように思え

た。

まあ、たしかに、「本来の自分」ではないのだが：
：。

と、その時、マウスを握る山田の上着のポケットで、
携帯電話らしい呼び出し音が鳴った。山田はすかさず
それを取り出し、耳に当てた。

「：：はい、山田ですが。：：ああ、笠置さん？」

どうやら笠置かららしい。先刻も——自分の事務所

であるにもかかわらず——山田は携帯で電話していた。ふだん、ロケなどで外出していることも多いから、笠置などとは、携帯で連絡し合うことがふつうになっているのだろう。

「……ああ、順調にいつてる。……、……ん？」

そこで山田は、不可解そうな顔をし、いったん携帯を耳から離して表示を見た。そして、ふたたび耳に当てると、こう言った。

「ごめん。なんか、電波の具合が悪いようだ。ちよつと待って」

そして、スタジオの入口まで行くと、片方のドアを開け、そこにもたれるようにして話し始めた。

「……もしもし。……ああ、大丈夫みたいだ。……うん、白バックの方はだいたい終わったんだが、今はまだAスタにいる。……なんだったら、今撮ったのを何枚かメールかファックスしようか？ ……えっ？ そ

うか。もう会社を出てるのか。今、どこ？ ……これ
から地下鉄に？ ……わかった。待ってるよ」

携帯を切った山田は、そのままの姿勢でこちらを見
ながら言った。

「笠置さん、もうじき到着するみたいだ。茉莉もまだ
来ないし、それまで、ちよつと上で休憩していよう」

その言葉に、他の全員がうなずき、ドアの方に歩き
かけたところで、山田は「そうだ」と言って、逆にパ

ソコンの方に近づいた。

「休憩の前に、Bスタの位置決めだけしておこう」
そう言いながら、またマウスを握る。

山田がなにを始めたのかわからず、他のメンバーが立ち止まって見ていると、山田はそれを説明するよう
にこうつぶけた。

「今の写真をプリントして、それと見くらべながらや
った方がいいだろう」

どうやら、画像を印刷しようということらしい。

ただ、上のサーバーとは勝手が違ったのか、山田はそれに多少手間取ったようだ。印刷設定の画面を妙に時間をかけていじっていた。パソコンラックの上段に置かれたプリンターが動き出したあとも、なんだか要領を得ない様子で、あちこちクリックしたりしている。

「……もう、プリント、始まってますよ」

瀬瀬がそう言い、ミミが業を煮やしたように近づこ

うとしたところで、やっと、紙を排出しているプリンターに気づいたようだ。

山田には珍しく、照れたような苦笑いを浮かべると、印刷が終わるのを待って、その紙をとった。そして、今の照れを隠すとしてもいうように、先頭に立って足早にAスタジオを出た。

全員がそれにつづき、ロビーをBスタジオの前まで行った時だった。

また、山田の携帯が鳴った。

自然に、全員がBスタジオのドアの前で立ち止まり、携帯を取り出した山田を囲むような形になった。

「はい。：：おお、茉莉か。なにしてるんだ、早く来いよ」

どうやら、茉莉かららしい。

「こっちはもう、一枚目を撮り終えちゃったぞ」

山田はそう言ったあと、電話を耳に押し当てたまま、

なぜか顔をしかめるようにした。

「：：いや、だから、それは君が遅いからだろう。：

：メイク？　引きの写真だからいいと思っただけのまま

やってる。：：いや、いくら大判ポスターだと言った

ってそこまでのディテールは：：。おい、そんなにカ

リカリするなよ。：：それに、こっちは、ちゃんと笠

置さんにもことわって進めてることだ。：：待てよ。

もう少し冷静に話そう。：：わかった。ちよつと待っ

ててくれ」

そこで山田は、携帯の送話口をおさえ、今印刷した写真を纈纈に差し出しながら言った。

「なんか、彼女のプライドを傷つけちゃったみたいだ。なんとかなだめるから、先に進めといってくれ」

苦笑いして写真を受け取った纈纈は、いったんリエたちの方を見てうなずいたあと、Bスタジオのドアを開けた。

リエたち三人がBスタに入り、纈纈がドアを閉めるまでの間も、山田の声が聞こえていた。

「……だから、そもそも、君がシヨップとちゃんと交渉しといてくれれば……：……いや、そんなつもりはないさ。君の仕事はいつも評価してるじゃないか。……ちよつと待てよ。話をそつちへもつてくのか……」

しかし、ドアが閉まると同時に、その声が途切れた。スタジオの密閉性が高いからだろう。だから、携帯の

電波も届きにくいわけだ。

今入ってきたドアを振り返りながら、リエがそう思っている、瀨瀨が「じゃあ、とりあえず、さっきの位置でポーズをとってみて」と言った。

それでリエたち三人は、またポンチョを脱いで、ステージに上がった。

不思議なことに、ステージが黒く変わっただけで、なんだか距離感が狂う。白いビーチボールを中心に、

先刻と同じように並んだつもりなのに、お互いの間隔が妙に狭く感じるのだ。

サツキもミミもそんな感覚を持ったらしく、ビーチボールやステージの縁を見くらべながら、なかなか位置が決まらないようだ。

三人がそんなことをしている間に、瀨瀨は螺旋階段を昇り、デッキに上がっていた。

「……うーん、ミミちゃん、もう少しこっちな。サ

ツキちゃんは、もうちよつと奥……」

手に持った写真と見くらべながら、あれこれ指示してくるのだが、やはり白バックの写真と黒バックのスタジオでは勝手が狂うらしく、なかなか納得がいかないようだ。

けつきよく、だいたいの位置が決まるまで、五分以上かかってしまった。

と、そこでやつと、山田が入ってきた。

「あつ、先生。どうでしたか？」

デッキの上から瀬瀬がきくと、山田は、大きなため息をつき、「まいったよ。なんとか納得させたけどな」とつぶやき、こうつぶけた。

「けつきよく、茉莉はなにより、元美のかわりに彼女を選んだことにへそを曲げたみたいだな。それで、ちよつとすねてみせたってことさ」

山田が、そう言いながらこちらを指したので、リエ

は、申し訳ないような気になった。それが気まずい顔になって出たのだろう。

山田は「いや、君は気にすることはないさ」と言った。

「俺と笠置さんのやり方が問題だったんだ。二人で頭越しに決めたからな。他のモデル使われちゃあ、彼女の事務所での立場もなくなるわけだし。……ま、とにかく、今、駅からこっちへ向かってるそうだ」

山田がそう言って話を区切ったので、瀬瀬が本題に戻すという感じで、「こんな感じでいいですか？」ときました。

と、山田は、その場でステージを一瞥し、「ああ、いいだろう」と答えた。

瀬瀬は、当然、山田がデッキの上まで見に来るものだと思っていたらしく、拍子抜けしたような顔をした。

しかし、山田の「いちおう、バミっといてくれ」と

いう言葉に、あわててデッキを下りてきた。

：：「バミル」というのは、芝居とかテレビスタジオとかで使う言葉で、たしか、役者の立ち位置とかに、テープで印をつけることだよね。

リエがそう思っていると、案の定、瀬瀬が白いビニールテープを手近づいてきた。

瀬瀬がその作業を終えたところで、全員がいったん、

二階の事務所に上がり、茉莉と笠置の到着を待つことになった。茉莉は「藤が丘」の駅から電話してきたようだし、笠置も、先刻の電話は地下鉄に乗る直前らしかったから、そろそろ「藤が丘」に着く頃だ。十分も待たなくても、二人とも到着するはずだった。

別に打合せをするわけでもないのだが、山田とリエたち三人は、手持ちぶさたに打ち合わせテーブルを囲んでいた。

水着の上にポンチヨを羽織っただけの姿で——つまり、腿のあたりから素脚をさらして——こんなところに座っているのは、どこか落ち着かない。しかし、茉莉が来れば、またすぐに次の水着に着替えなければならぬのだから、このまま待っていた方がいいだろう。リエだけでなく、サツキとミミもそう思っているようだった。

「誰か下で待っていないかいいですか？」

全員分のコーヒーの用意を調べ、それを運びながら
瀬瀬が言った。

「別にいいだろう。二人とも、スタジオに誰もいなか
つたら、勝手に上がってくるさ。それに……」

山田はそこで、モニターディスプレイの方を振り返
った。

「スタジオに入ってくれば、ここに映るわけだし」

A・B両スタジオのモニターは、先刻説明を受けた

時からつけっぱなしになっていたらしく、まるで白黒反転したように両方のステージを映していた。カメラの視野角はステージの横幅いっぱいまで広がっているようだから——ドア自体は映っていないもの——誰かが入ってくれば、たしかに画面に現れるはずだ。

Aスタジオには赤の、Bスタジオには白の大きなビ―チボールが映っている以外は、今、ステージ上はがらんとしている。色以外に両方のスタジオのちがいを

探すとするれば、Bスタジオの方には、先刻、瀬瀬が「バミった」目印があることくらいか。リエ、サツキ、ミミの三人がいた場所のそれぞれに、頭や足先の位置を示す小さく切ったテープが貼りつけられている。次に下に降りた時には、あそこに合わせて体を置けばいいわけだ。

リエがそう思っていると、山田が、先刻プリントした写真を、そのディスプレイの横に掲げ、見くらべ始

めた。A4サイズの写真と液晶ディスプレイでは縮尺がちがい、わかりにくい感じはするが、位置の比率はだいたい合っているようだ。

山田の動作につられて、そんなふうには、全員がモニターに注目している時だった。

突然、「A」の方のモニター画面に映った誰もいないステージが、大きく揺れた。つづく一瞬のうちに、画面は、まるで飛行機のきりもみ画像のように、スタ

ジオのあちこちを映し出すと、次には、なにかにぶつかるような衝撃を伝えた。そして、ほんの瞬間、ステージの床面を横向きに映したあと、画面はぷつんと切れた。

どう考えても、カメラが、デッキから落下して壊れた感じだ。

しかし、それ以上に、なにかの異常を、見ていた全員が感じたようだ。

とっさにはそれが整理できずに、みんな動きを止め、ポカンとした顔をした。

画面が途切れる寸前、そこには、なにかが映っていた。床に横たわる：：グリーンの：：春コート。：：それは、たしかに見覚えがあつた。

「：：今、誰か、倒れてなかつた？」

ミミのその声と同時に、山田が席を立ち、部屋を飛び出した。つづけて瀨瀨が、そして、リエたち三人も、

それにつづいた。

長い階段をバタバタとロビーまで下りると、先頭を切っていた山田が、Aスタジオのドアを引き開け、中に飛び込んだ。そのすぐ後ろに続いた瀬瀬は、ドアのところで一瞬体を硬直させ、叫んだ。

「茉莉さん！」

その声に、リエたちは、当の瀬瀬を押しよけるようにして中に入った。

ステージの床のほぼ中央に、仰向けに倒れている茉莉の姿が目飛び込んだ。そして、そのすぐ近くで、だらんと垂れ下げた両手を細かく震わせながら立っているのは：：笠置だった。

リエは、すぐにそばに駆け寄り、しやがんで、片手の指の甲側を茉莉の頸動脈にあてた。

そこに平常の体温は残っていたが、脈はなかった。

「：：死んでる」

リエの言葉に、全員が息を呑むのがわかった。

リエは、そんな全員を見渡した。

サツキとミミは、すでにリエのそばまで来て、冷静な顔で、横たわる茉莉の死体を見下ろしていたが、他の男三人は、茫然と立っていた。笠置は、まだ顔を歪ませてガタガタ震えているし、山田と瀬瀬は、未だドアのそばにたたずんでいた。

そこでリエは、山田が携帯電話をポケットに入れて

いるのを思い出した。

「山田先生、警察に電話を」

「あ、ああ」

山田はのろのろとした動作で携帯を出すと、三桁の電話番号をプッシュした。

けっして要領を得たものではないその電話を聞きながら、リエはふたたび、茉莉の死体を観察した。そして、体を折り曲げるようにしてのぞき込んできたサツ

キとミミに、言った。

「ここ、見て」

リエの指さす茉莉の首には、幅八ミリ程度のはつきりとした絞溝ができていた。

「：：絞殺」

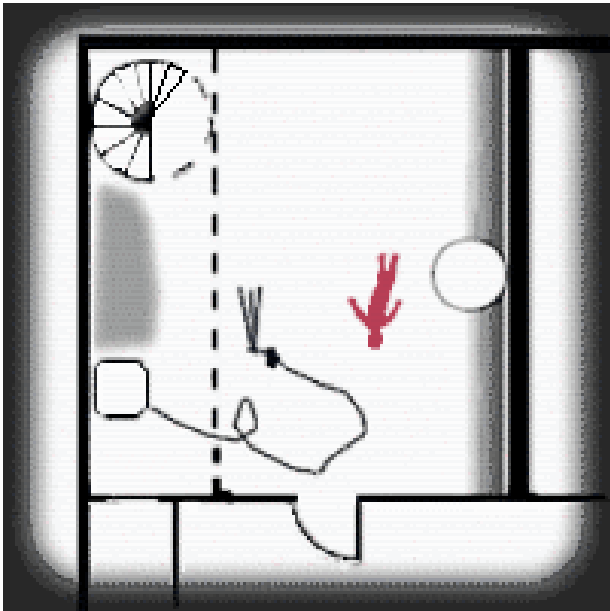
サツキはそうつぶやいたあと、きよろきよろと周囲を見まわし、「これね」と言った。

今度はサツキが指さした先を見ると、その床に、例

のカメラからつながるケーブルが曲線を描いて這って
いた。

地元名東署の警官が駆けつけるまでの十分間で、リ
エたちは——現場保全に注意しながら、そして、山田
たちに気取られないようにも注意しながら——、スタ
ジオ内を見てまわり、おおよその状況を把握していた。

茉莉の死体は、ステージ中央、ちょうどビーチボー



ルが置いてある前あたりに、ドアの方向に頭を向け仰

向けに倒れていた。

コートを着たままで、

そばには持ち物らし

い大きめのシヨルダ

ーバッグも落ちてい

る。いかにも、今、

外から入ってきたと

いう感じだ。

見るかぎりでは、首の絞溝以外の外傷はなく、絞殺による窒息死だと考えられた。

件のケーブルにつながったカメラと三脚が、デッキの手すりの真下より少し死体寄りのところに横たわっていた。カメラとケーブルをつなぐジャックは抜けておらず、にもかかわらず上のモニターが映らなくなっていたところから考えれば——外見からはわからないが——

—おそらく、カメラが落下によって壊れたのだろう。

片方がパソコンラックに固定されたケーブルは、ドアのそばから死体の頭の近くまでの床を這っている。

先刻、纒纒が固定したガムテープも、ケーブルに着いたまま、床からは剥がれていた。

ここから類推できることは、犯人がこのケーブルを使って、後ろから茉莉の首を絞めたということだ。カメラが落ちたのも、ガムテープが剥がれたのも、その

せいだと考えるのが最も合理的だろう。

そこまでを頭の中で整理したりエは、最後にもう一度、茉莉の死体の傍らにしやがみ込み、その顔を見た。

……ん？

体内から消え去りかけた酸素を求め、必死でぱくつかせたのであろうその唇から、口紅がほとんどはげ落ちていた。いや、それだけではなく、口周辺のファンデーションも、妙に薄くなっている感じがした。顔の

他の部分——おでこのファンデーションやアイメイク——がほとんど崩れていないのに対し、ここだけが化粧がはげているのだ。

：：：どうということだろうか？

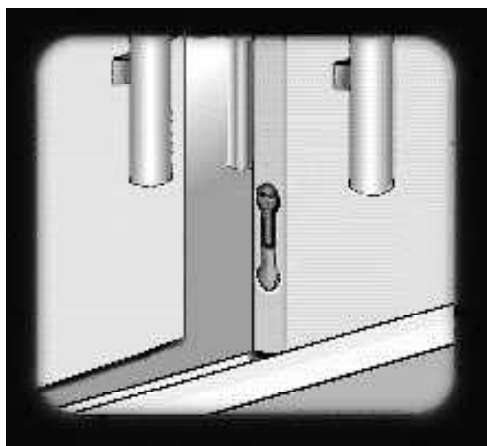
そう思って首を傾げているところに警官たちがやってきて、リエたちはそこで、現場から追い出されることになった。

しかし、部屋から出ようとした時、リエはそこでも

うひとつ、奇妙な発見をした。

両開きの出入口の、室内からいえば右側のドア。その側面の下方に目をやると、

そこに小さな鉄アレイ型の溝があり、その中で、鉄片が上側に上がっていたのだ。両開きのドアの戸締まりのため、片方のドアについているかん



ぬきのハンドルである。通常このハンドルが上がっている状態だと、ドア下面からかんぬきが出て、ドア枠にはまっているはずだ。

そう思って上を見ると、こちらにもある同形の溝の中でハンドルが下がっていた。つまり、こちらもドアの上面からかんぬきが出て、上のドア枠にはまりこんでいることになる。

そこでリエは——指紋をつけないように——羽織つ

ているポンチヨ越しにドアを押してみた。やはりドアは、びくりとも動かない。

先刻、死体を発見した時には、最初に入った山田が左——外からは右だが——のドアを開けたので、それにつられて、全員がそちらから入ったが、それ以前、撮影を終えてこのスタジオを出て行く時には、ドアは両方とも開いたはずだ。

：：そう、撮影前にも、瀬瀬がここからあのビーチ

ボールを運び出していた。片方だけしか開いていない状態では、あのビーチボールは、この出入口を通らな
いだろう。

まちがいなく、誰かが、このかんぬきをかけ、右の
ドアを固定したのだ。

いったい、いつ、誰が、なんの目的でそんなことを
したのか……？

ロビーに出ながら、リエは考え込んでしまった。

しかし、もちろん、今回の事件には、そんな小さな疑問より、もっと大きな謎が横たわっていた。

「ということは、つまり、君たちは、事件が起こる瞬間まで、殺人現場を見ていたということか？」

「ええ」

「しかもそこには、犯人はもとより、被害者の姿もなかった。一瞬にして、添沢茉莉は、死体になってスタ

ジオの真ん中に転がっていた……と？」

「はい、そういうことになります」

リエの答えに、志水は、口をへの字にして腕組みした。

名東署の警官に次いで刑事や鑑識課員たちが、そして、三十分もしないうちに、前のふたつの事件の合同捜査本部のメンバーも駆けつけ、現場検証が進んだ。

おおよそその検証が終わった時点で、関係者たちの事

情聴取に移り、例によって志水は、まずクイーンズたちの聴取から始めたというわけだ。

事件が本部に伝わった時、ちょうど志水のところに
行っていたらししい権藤も、ことに乗じてついてきて
いた。

今回はクイーンズたちが事件現場にいたことで、志水は、犯人はすぐに割り出せるものと思っていたようだ。あわよくば、この事件を契機に、一連の事件が一

気に解明されることを期待していたふしもある。

ところが、クイーンズたちの口から語られたことは、事件にさらなる謎をつけ加え、その奇妙さと難解さを際立たせたただけだった。

黙って考え込んでしまった志水を見て、なんだか申し訳ないような気持ちになったリエは、とりあえず、今、頭の中で整理がついている今回の事件の枠組みだけ——それもやはり、なんら解決の道すじを示すよう

なものではなかったが――を口にした。

「考えられる可能性はふたつだけだと思います。より常識的にいえば：：茉莉とともにスタジオに入った犯人は、撮影デッキに置かれたカメラの視野角の外を通ってデッキの真下に入った。そこで、ケーブルを使って手早く茉莉の首を絞め、ケーブルに引っ張られたカメラが落ちてくるまでの間に、突き飛ばすかなにかして、死体をステージ中央に移動させた」

「とすると……犯人は、笠置か」

「ええ」

「もうひとつの可能性というのは？」

「真犯人は、アリバイトリックの証人として、今度はあたしたちを選び、あたしたちの目の前で完全犯罪をやってみせた」

リエの顔をじっと見つめていた志水は——その立場と役割から言って、いわば当然なのだろう——、まず

は、常識の方を選んだ。

「よし、笠置を拘束して徹底的に締めあげるか」

file-208

虚実の交信

または嫉妬は恋のアリバイくずし？

「きやはッ、
かわいーっ！
ブラのカップがイチゴに
なってるう」

「見て見て、これ。上も下も、ほとんどビニール。エ
ツチーっ」

色とりどりのビキニを手にとつては、ミミとサツキ
がはしゃいでいる。

リエも、なんのつもりか、ハンガーラックの水着を
物色していたりする。

そんなショップの真ん中で、ひとり権藤だけが、大
きな体を必死で小さくしていた。女性水着の専門店な

んで、もちろん入ったのは初めてだ。

現場検証と事情聴取がおおかた終わった4時過ぎ、クイーンズのメンバーは「シャチ・フォト・スタジオ」を後にした。そのまま、クイーンズオフィスに帰って、一度、事件のことを整理してみようということになったのだ。しかし、地下鉄東山線で「栄」まで来たところで、リエが、大津通り沿いにあるこの店に寄りたいたいと言いだした。栄からオフィスまで歩くつもりなら、

その途中ではあるわけだし、事件の裏づけを取るのだ
ということだったので、権藤もうなずいた。

ところが、店に入ったとたん、クイーンズたちは、
午前中の殺人事件のことなどすっかり忘れたように、
水着に夢中になっている。

：：みんな、いったい、なに考えてるんだ？

：：：だいたい、まだ春先だというのに、なんでこん
なに水着ばっかりなんだ？

：：それにしても、こんなにたくさんのお水着、いつたい、誰が買うんだ？

：：世の中の女はみんな、給料の何割かを水着につぎ込んでるとでもいうのか？

権藤が店の雰囲気気圧されながら、さまざまな疑問を抱いていると、両手に一着ずつビキニのハンガーを持ったサツキとミミが近づいてきた。

「ねえ、公平ちゃん：：」

「公平ちゃんって、呼ぶな！」

権藤は、その甘え声に、いろいろの意味でおびえながら言った。

「これとこれ、買ってもいいでしょ。……備品として」
「び、備品って……、今度みたいなことでもないかぎり、水着なんて、仕事に使うことはないだろう」

「あら、夏になれば、プールやビーチで痴漢退治なんてことも、あるかもよ」

「そうそう。それにモデルクラブに登録したんだから、そっちの仕事だつて、また来るかもしれないし」

「な、なんで、それで備品なんだよ」

権藤が、中間管理職の苦労を味わっていると、なんとリエが、白い水着を持ってさっさとレジに向かった。サツキとミミは、ことわってくるだけまだましなのかもしれない。

権藤はそう思い、経費削減の使命に燃えて、あわて

てリエを追った。

「あの、すみません」

「いらっしやいませ。そちらをお求めですか？ 試着
なさいます？」

店員の言葉に、あせって止めに入ろうとすると、そ
こでリエが言った。

「これと同じ水着を、今朝、借りに来たスタイリスト
さんがいると思うんですけど……？」

それでやつと納得がいき、権藤は出かかった言葉を呑み込んだ。

「えっ、さあ……？ 私は覚えがありませんけど……」

店員はそう言うと、もう一人の従業員らしい女性に声をかけた。

「店長、この白のビキニ、今日、どこかに貸し出ししました？」

と、その店長だという女性も近づいてきた。

「あ、それは、あまり在庫がありませんから、貸し出しはおことわりしてるんですよ」

店長は、リエをスタイリストかなにかだと勘違いしたようだ。

「いえ、そういうことではなくて、今朝、添沢茉莉さんっていうスタイリストが、これを借りに来たと思うんですけど」

「添沢さんって、ニューセンチュリーのこと？」

「はい」

どうやら店長は、茉莉のことをよく知っているらしい。先刻からのやりとりを聞いていても、この店はきつと、撮影用の貸し出しとかの要請が多いにちがいない。さすが、専門店ではある。

「添沢さんには、たしかにその水着をお貸ししましたけど、それは、今朝じゃなくて、昨夜ですよ」

「……えっ？」

「そのブランドの白は人気があつて、品揃えをちゃんとしておきたいんです。だから、さつきみたいに、ふつうはおことわりするんです。でも、添沢さんにはいろいろお世話にもなってますから、一日だけならというお約束でオーケーしました。最初は、たしか一昨日使うつてお話だったと思います。でも、四日ほど前に延期になりそうだという連絡があつて……」

「えっ、四日前？」

リエは、それにちよつと驚いた顔をした。

「ええ、たしか最初のお約束の日の前々日でしたから、まちがいないと思います。で、昨日になって、撮影が今日に決まったという電話をいただいて、じゃあ、閉店の時間に取りに来てくださって……」

「……昨日の、閉店時間に渡した？」

「はい。今日一日お貸しするなら、その方がいいですよ。朝から使えるわけですし」

その言葉を聞いて、リエはさらに考え込んだ。

と、その時、「領収書お願いします」「あたしの方も」というサツキとミミの声が聞こえた。

権藤があわてて見やると、二人が、もう一人の店員にさっきの水着を渡していた。まったく、油断も隙もあつたものではない。

「今日殺された人に対してこんなこと言うのは、死者

に鞭打つって感じでいやだけど、どうやら、茉莉が元美殺しに関わってたことだけはまちがいないみたいね」

クイーンズオフィスに戻って全員がソファに着くと、リエはまず、そんな話から切り出した。

「いや、しかしそれは、モーターボートの使用が否定されたわけだし……」

そう言う権藤に対して、ひとつうなずいてから、リ

エはつづけた。

「うん、あたしももう、実行犯だと言うつもりはないけど、茉莉が無関係だとはやっぱり思えないの」

「どうして？」

サツキにきかれ、リエは「細かいことはいろいろあるんだけど……」と言ってから、こうつづけた。

「さつき、水着ショップの店長が言ったことから考えても、それはたしかだと思う」

「……ん？　　どういうこと？」

「おととい予定されてたポスターの撮影が今日に延期されたのは、前日に元美の事件があつたからだよね。」

ところが茉莉は、撮影の前々日に、あのシヨップに延期されそうだと連絡を入れてる」

「あつ、そうか。元美殺しの前日に、それが起こることかわかつてたつてことか」

「殺害計画を知っていた。おそらくはそれに加担して

いた……？」

「うん。麗子殺しのインターホンのことから考えても、茉莉はたぶん、第一、第二の殺人では、共犯者という立場だったと思うの」

そんなリエたち三人のやりとりを聞いていた権藤が、腕組みしながら言った。

「しかし、その茉莉も殺されてしまったわけだ。けっきよく、一連の痴漢冤罪事件の被害者役を演じたモデ

ルたちは、全員が消されたってことだな」

「そうね。そこから見ても、連続殺人の動機は、あたしたちの考えにまちがいないと思うんだけど……、でも、その犯人がいまいち、よくわからない」

「今日の事件に関しては、リエが言ってたように、常識的には笠置だよな」

その権藤の言葉に、サツキが反論した。

「でも、それも、かなり無理のある話よね。あのモニ

ターの画像は、ステージの横幅ほぼいっぱいまで映していた。ステージはドアぎりぎりまであるから、そのフレームに入らないようにデツキの下まで行くとしたら、壁にへばりつくようにして行かなきゃいけないでしょ」

「それは、そうとも言えないんじゃないかな」

今度はミミが、サツキに異を唱えた。どうやら権藤とミミは、笠置犯人説を採っているようだ。

「カメラは床面に対して四十五度くらいの位置から俯瞰してたわけでしょ。だとすると、遠近法で言えば、見かけの横幅がいちばん狭くなるのは、カメラからいちばん遠いホリゾントのあたりになる。フレームの横幅はそこに合わせるはずだから、手前側のドアからデッキあたりは、ステージの左右が多少フレームからはずれることにな



るんじゃない？　人ひとりくらいは通れる気がするけど」

「それにしても、笠置と茉莉がわざわざそこを通って入って来たっていう理由がわからない。だいいち、笠置も茉莉も、カメラがあつた位置からねらつてるなんて知らなかったわけだし」

「あのポスターのデザインを考えたのは笠置らしいから、カメラの位置や、どこまでがフレームに入るかつ

ていうことはわかってるんじゃないかな？　茉莉にし

ても、あの見本の絵は事前に見せられてると思うし」

「じゃあ、なぜ二人は、隠れるようにAスタに入ったわけ？」

「それは、まあ、なにか秘密の事情があつて……」

「それに、あの時、あたしたちが二階でモニターを見てるってことまで、二人にはわかってたってこと？」

もし二人になにかの事情があつたとしても、それを知

らなきや、そんなふうに入ってくる意味はないもんね」

「それは、そうだけど……」

ミミがそう言ったところで、権藤が口をはさんだ。

「笠置や茉莉が、君たちが考えてる時間より、もう少し前に来たとは考えられないか？」

「どうということ？」

「君たちが二階でモニターを見始める前、たとえば、Bスタジオで位置決めをしている時とかには、ロビー

にもAスタジオにも誰もいなかった。もちろん、誰かがモニターを見ていたわけでもないだろ」

「うーん、でも、『藤が丘』から電話してきたという茉莉はともかく、笠置が本当にその時間に来られたかどうか……。笠置が『栄』から地下鉄に乗る前に電話してきたのは、私たちがAスタを出るちよつと前だった。だから、Bスタにいる頃はまだ、地下鉄の中だと思っただけだ。笠置が嘘をついてなければって話だけど

ね」

「いや、だから、笠置は嘘をついているのさ。そもそも、今日の証言だって、矛盾した話ばかりだったじゃないか」

権藤の言葉に、リエをはじめ全員が、今日の笠置の言葉を思い出していた。

今日、リエたちに次いで行われた、山田、瀨瀨、笠

置への聴取を、四人はこの前同様、盗聴していた：：：というより、今回は、志水自身が例のイヤリングを預かり、聞かせてくれたのだ。

山田、纈纈については、ほとんどの時間、リエたちと行動を共にしていたこともあり、さほど厳しい尋問がされたわけではない。また実際、リエたちと認識の異なる供述も出てこなかった。しかし、最も疑わしい立場の笠置については、微に入り細に渡りその行動が

質ただされた。聴取が終わったあとも——志水が言っていたとおり——重要参考人として身柄を拘束されたようだ。

その笠置は、おおよそこんな供述をした。

「今朝は会社で定例の会議があつたので、撮影に遅れることは、事前に山田ちゃ：：いや、山田氏に伝えてありました。」

9時半から始まった会議が終わつたのは、10時半頃

だったと思います。それで、すぐに会社を出て『シャチ・フォト・スタジオ』に急ぎました。歩く時間と地下鉄の時間を入れても、到着まで40分はかかってないんじゃないでしょうか。ですから、着いたのは11時少し過ぎくらいです。

そうそう、途中、地下鉄に乗る前に山田氏に電話して、進行状況を聞き、今から行くと伝えました。彼がその電話でAスタジオにいると言っていたので、『シ

ヤチ・フォト』に着くと、すぐにAスタジオをのぞきました。

と、そのドアを開けたところで、中からガシヤンという大きな音がしたんです。なにかが落ちたような音です。その音に驚いて一瞬足を止めましたが、すぐに、なんだろうと中をのぞき込みました。すると、ステージの真ん中に、茉莉ちや：：添沢茉莉さんが倒れていました。仰向けで、反り返り気味に顔をこちらに向

けていましたから、すぐに茉莉さんだとわかりました。

その状況と音から、最初、僕は、天井のライトかなにかが落下して彼女に当たったんじゃないかと思いましたが。それで、あわてて駆け寄ったんです。

そばで見ると、彼女は目を剥いて身じろぎもしない状態でした。近くになにかが落ちている様子もありません。ふつうならそこで、揺り動かしたりもするんじゃないでしょうが、なにしろあんな事件がつづいていましたか

ら、その光景を見た瞬間、僕は、彼女は殺されたんだ
と思ったんです。

そう思ったとたん、恐ろしくなって、まるで金縛り
のような状態になっていました。たぶん、それから30
秒くらいしたところで、ドアが開いて、山田氏たちが
駆け込んできたんだと思います。

：：僕が見たのはそれだけです。

えっ？ 入った時、スタジオの中に他に誰かいなか

ったかですか？　それはないと思います。ステージの真ん中からは、デッキ上の奥の方とかを除けばスタジオ内すべてが見渡せます。いくら動転していても、誰かいれば気づくはずですよ。もちろん、僕と入れ替わりにドアを出ていったような人もいませんでした」

「……あの供述自体が、明らかに矛盾してるじゃないか。ドアを開けた時、なにかが落ちる音がした。でも、

中には誰もいなかった。落ちたのはカメラだと言いた
いんだろうが、じゃあ、そのカメラを落としたのは誰
なんだ？ 茉莉自身が、自分の首をケーブルで絞めて、
そのせいで落ちてきたとでも言うんだろうか。そこだ
け見ても、笠置の供述は嘘だとわかる」

権藤の言葉をそれまで黙って聞いていたリエが、き
き返した。

「じゃあ、笠置はどうやって茉莉を殺したと思うの？」

「おそらく笠置は、あの供述で時間をごまかしている。会社の会議を途中で抜けて、もう少し前に『藤が丘』に着いていたんだ。山田に電話してきたのも、じつは地下鉄を降りたあとだった。笠置と茉莉には、やはりなにか秘密があったんだろう。それで、事前に示し合わせて『藤が丘』駅あたりで落ち合った。そして『シヤチ・フォト』のそばまで来た二人は、物陰から中をうかがい、君たちがBスタジオに入るのを見計らって

Aスタジオに入り込んだんだ。それなら、そのあと、君たちが二階の事務所で見たモニターに二人の姿が映らなかったこととも矛盾しないだろ。その時にはすでに、モニターには映らないAスタジオのデスクの下にいたんだからな。そこで笠置は、ケーブルを使って茉莉の首を絞めた。当然、カメラは落下する。君たちが見たのは、その瞬間だったというわけだ」

権藤の推論は、いちおう筋が通っているように見え

る。しかし、そこにはいくつか論理の穴がある。リエがそう感じていると、どうやら笠置犯人説には反対らしいサツキが、それを指摘しだした。

「やっぱり、二人で忍び込むみたいにAスタに入る理由がわからない。もし秘密の話があったのなら、別のところで会えばいいわけだし、今の話だと、現に『藤が丘』で落ち合ってるわけだし」

「いや、それは……Aスタジオでないとまずいなにか

があつたということだろう。あるいは、笠置にとって、Aスタジオで茉莉を殺すことになんらかの意味があつた」

「それから、その、物陰から入るチャンスがうかがつてたつていうのも、どうかな？ あたしたちがAスタジオを出たあと、全員がすぐにBスタに入ったわけじゃないのよ。そのあと、山田がロビーで電話していた」

「だから、笠置と茉莉は、その山田がロビーから消え

るのを待っていた」

「だとすると変じゃない？ その時の山田の電話の相

手は、当の茉莉だったわけだし。しかもあの電話は、山田がかけたわけじゃない。茉莉の方からかかってきた。山田がいなくなるのを待ってる人間が、なんでそんな電話を、わざわざ自分の方からかけるかな？」

「いや、それは……」

サツキに言いこめられ、四苦八苦している権藤は、

次にはこう言った。

「その電話が本当に茉莉からだったかどうかは、山田以外、誰にもわからないわけだろ。実際はちがうところからかかってきた電話を、いかにも茉莉からのように芝居してみせたのかもしれないじゃないか」

「あれっ？　今度は山田が嘘つきって話？　さっきまでは、嘘つきは笠置だったんじゃないの？」

「いや、だから……」

サツキにそう言われ言い淀む権藤を見ながら、リエは、今の権藤の言葉にちよつと別のことを考えていた。と、そこでサツキが「それにね……」とつけ加えた。

「笠置と茉莉がカメラのフレームの外をすり抜けたのか、それとも事前にデツキの下に入っていたのか、どっちにしても、あたしが決定的に無理があると思うのは、死体が急にステージの真ん中に現れた点ね。カメラが壊れて映像が切れる寸前、一瞬だけ茉莉の死体が

映ったのは、みんなが見てる。その直前まで、ステーション上を映すモニターには誰も映っていなかったわけだから、カメラが落ちてる間に死体はそこに移動したということになるでしょ。それだけの短い時間の中で、どうやって死体をそこに置いたのかってこと？」

「だからそれは、首を絞めた後、デスクの下から突き飛ばして……」

「あのデスクの高さは、手すりを入れても床からせい

ぜい四メートルくらいかな。そこを物が落ちるのつて
1秒もかからないと思うのね。現に、あたしたちが見
てた映像も、そんなもんだつたし。その間に、首を絞
めた上に、本当にそんなことができるかな？」

「いや、できないことはないと思うが……」

「それに、まだ問題はある。デッキの下から茉莉が倒
れていた位置までは、だいたい三メートルくらいあつ
たのよ。それだけの長さを突き飛ばせるかな。それか

ら、たとえそれができたとしても、それ以上におかしい点もあるしね」

サツキはそこで、今度はリエの方を見た。

「リエも聴取の時、笠置が突き飛ばしたみたいなこと
言ってたけど、どう思う？」

そこでリエは、サツキの顔を見返し、その言いたいことがわかって苦笑しながらうなずいた。

「……たしかに、よく考えてみるとおかしいわね」

「でしょ」

「なにがだ？」

きいた権藤にはなく、サツキの方を向いたまま、
リエは答えた。

「死体の向きね」

「そう。後ろから首を絞めて、そのあと突き飛ばした
としたら、茉莉の体は、あのビーチボールの方に向か
ってつんのめるようにうつ伏せになるはずでしょ。と

ころが、死体は仰向けで、しかも、頭をドアの方に向けていた」

と、また、権藤が反論した。

「抱きかかえて投げたとしたら、できないことはないだろう」

「三メートルも？ そりゃ、公平ちゃんならできるかもしれないけど……」

「公平ちゃんって呼ぶな！」

「それに、そのことによつて、もうひと動作ふえるのよ。カメラの落ちる1秒間に、首を絞め、抱きかかえて、投げる……それは無理でしょう」

と、そこで、それまでずっと黙っていたミミが、なにか思いついたように言った。

「ね、こういうのはどう？」

「……なに？」

「笠置と茉莉がいたのが、デッキの下じゃなくて、デ

ツキの上だったとしたら？」

「……えっ？」

「デツキの下からあの螺旋階段を使って上に上がったとすれば、カメラには映らないよね。二人はそうやってデツキの上に行った。そこで、笠置が茉莉の首を絞めた。しかも、その時点ではカメラは落ちなかった」

「……え、落ちなかった？　どういうこと？」

「あのケーブルは、カメラからパソコンラックまで、

けっこうたるみがあったでしょ。だからこそ、山田に
言われて、纈纈が床にガムテープでとめてたのよね。
とはいえ、長々と床を這うというほどでもないから、
下で首を絞めるのに使えば、カメラを引っ張り落とす
ことになる。だけど、デッキの上でならカメラは落ち
ないし、あのたるみの分をうまく利用すれば、カメラ
を振動させずに茉莉の首を絞められると思うのね」

「……ん？　具体的に言うത്？」

「デツキの上に行つた笠置は、上からケーブルをめいつぱいたぐり寄せた。その時点で、床に貼りつけたガムテープも剥がれたんでしようね。で、そんなふうにするると、パソコンラックからデツキの下の縁までケーブルが斜めに張られる。そのぶん、下で使うより長さも稼げることになるでしょ。笠置は、カメラが動かないように注意しながら、そのケーブルのたるみ分を使って茉莉の首を絞めた。そのあと、死体を抱きかかえ

て、ステージに向かって投げ落とした」

「……えっ？　上から……投げた……？」

「うん。上からなら、三メートル離れたところにだつて投げられる。死体がドアの方に頭を向けた仰向きだったことも説明がつくし。で、カメラが落ちたのも、じつはその時だったんじゃないかな」

「……そうか。カメラは茉莉の死体といっしよに落ちたってことか」

「故意なのか偶然なのかはわからないけど、死体のどこかがカメラに引っかけたたたき落とすような形になったんだと思うの。どっちにしても、それなら、それまで映っていないなかった死体が、カメラの落下と同時にステージの真ん中に現れたことも説明できるでしょ」

「なるほど、そういうことか」

権藤が感心したように言った。

「たしかに、状況の説明はつくわね」

サツキもうなずいた。

「うん、面白い」

リエもそう言った。が、そのあと「だけど」とつけ加えた。

「ひとつだけ、納得できないことがある」

「なに？」

「茉莉の死体は、首を絞めた痕以外、ほとんど傷はな

いようだったでしょ。詳しくは検案調書とかを見なければわからないにしても、二階と同じくらいの高さから投げ落とされて、その痕跡がまったく残らないってことがあるかな？ 死体といったって、死んだばかりなんだし、骨折とか、少なくともアザとか内出血とかができる気がするんだけど」

「それは、そうかもしれないけど……」

ミミはそう言ったあと、すぐまたなにか思いついた

ようだ。

「……そうだ。下にクッションのような物が置かれてたとしたら？」

「クッション？ あのスタジオに、そんなものがあった？」

「たとえば……あのビーチボールとか」

「ああ、なるほど」

リエはそう返事し、しかし、すぐに首を振った。

「でも、それは無理よ。三メートルくらいまでならたしかに投げられる気はするけど、あのビーチボールのところまでは、とても届かないと思うわ。もちろん、あらかじめビーチボールを落下位置に動かしてるような人影がモニターに映ってたわけでもないしね。それに、最期に一瞬映った茉莉は、まちがいなく床に倒れていた。ビーチボールの上ではなかったはずよ」

「……うーん、いい考えだと思ったんだけどなあ」

ミミがそう言いながらも、あきらめきれない表情でソファの背もたれに体をあずけた時だった。

「ピ・ポツ」

デスクの上のパソコンから音がした。

「……あつ、きた」

ミミがその音に表情を変え、立ち上がった。

「……なに？」

サツキがきくと、ミミはデスクに向かいながら答え

た。

「本部のサーバーをいちいちハックするのも面倒だから、あつちにハッキングソフトを送りこんどいたの」

「……どうということ？」

「捜査の報告書とか捜査会議の議事録とか、新しい情報が入ると、それが自動的にこつちに転送されてくる」

「おいおい、それはウイルスみたいなもんだろ。そんなもの仕掛けて、見つかったらどうするんだよ」

驚いた声で言う権藤を無視し、パソコンの前に座ったミミは、マウスを操りながら画面を見た。

「……あ、笠置の会社に裏を取りに行つた刑事の報告だ」

そして、その内容を拾い読みするようにつづけた。

「うーん、と……、どうやら、会社を出た時間に関しては、笠置の言ってることに嘘はないみたいね。……」

朝の会議が終わつたのは10時半頃。で、笠置は最後まで

でしつかり参加してみたい。……会議のあと、笠置と言葉を交わした社員も複数いるって」

「ということとは……、笠置が『藤が丘』に早く着いてたつていう公平ちゃんの推理は、根底から崩れるわけね。山田に電話したのも、供述どおり『栄』駅からだということになる。『栄』から『藤が丘』までだと地下鉄以上に速い移動手段は考えられないしね」

サツキにそう言われ、権藤は、ため息をつくように

うなずいた。

と、そこでまたミミの前のパソコンか「ピ・ポツ」と音を立てた。

「……あつ、今度は検案調書だ」

今日、現場には、鑑識課だけでなく監察医も同行していたから、死体検案と司法解剖も早々と終わったのだらう。

「えーつと……死亡推定時刻は、10時45分から発見時

の11時15分前後までの30分間。死因は絞死。……頸部に幅八ミリ程度の絞溝ができています以外は、上腕および下肢の表皮に軽い圧迫性の内出血がある程度で、その他外傷や骨折などは認められず……か」

「これで、デツキからの投げ捨て説も、ほぼない」

またサツキが言い、今度は、ミミがため息をついた。

「けつきよく、笠置の犯行は無理っぽい……ってことね」

「じゃあ、いつたい、誰が茉莉を殺したっていうんだ」
その権藤の言葉とともに全員が考え込んでしまい、しばらく沈黙の時間がつづいた。

「リエは、どう思うわけ？」

そんな沈黙を破ったのは、サツキの問いだった。

いつもなら、先頭に立って推理を展開するリエが、今日は、人の推理の難点を指摘しているだけで、積極

的に自分の考えを述べてはいない。それで、きいてきたのだろう。

「うーん、じつは、犯人の目星はついてるんだけどね」
リエが言うと、サツキはすかさず「えっ、誰なの？」
ときいた。

「……うん。ただ、今のところ、いろんな点で決め手に欠ける……っていうか、筋道が立ってないっていうか」

「いいから、聞かせてよ」

リエは、まだ考えがまとまらない段階でしゃべるのをためらったが、ひとつうなずいてから口を開いた。

「まず、今回の茉莉殺しが、前のふたつの事件と別の犯人によるものか、それとも同一犯なのかってことだけど、計画して実行したのは、やっぱり同一人物だつて気がするのよね」

「どうして？」

「なんだか、三つの事件、全部がおんなじニオイがするの」

「ニオイ……？」

リエはひとつうなずいたあと「前にも、ちよつとそんなこと言ったけど……」と前置きしてつづけた。

「三つの事件には、共通した特徴がある気がするの。どの事件も、犯行があつたと思われる時間がものすごく限定されてるでしょ。最初の麗子が殺された事件は、

愛ちゃんがピザを届けに来て部屋に行くまでの1分間弱。二番目の元美の事件は、隣の部屋の女の子が声を聞いた時から通報で警察が駆けつけるまでの10分間くらいかな。で、今日の茉莉の事件に至っては、あたしたちがカメラの落ちる映像を見てた1秒間くらいということになる。これって、やっぱり、一人の人間が神経質なくらいのアリバイ工作をやった結果じゃないのかなって」

「うん、それで……？」

「だとすると、犯人を特定するには、むしろ逆に考えた方がいいのかもしれないって気がしてるの」

「逆……というと？」

「それだけのアリバイ工作をやってる以上、三つの事件を通じて、いちばん確固たるアリバイがある人間が犯人なんじゃないかって」

非論理的なことを言っているなと思いつつ、リエは

つづけた。

「いちばん最初の事件で、まずアリバイが崩れて疑われたのは瀨瀨だったでしょ。その次にアリバイが弱いのは、ただ一人マンションの中にいた茉莉ね。二番目の事件は、モーターボートの問題はあるにしても、やっぱり茉莉のアリバイがいちばん希薄だということになる。で、今日の事件では、笠置だけが犯行時に一人でした。結果として、一度も名前が出てこないのは：

：

「……山田？」

「うん。どの事件でも、犯行があったと思われる時間、山田は、ほぼ完璧なアリバイがあるの」

「えつと……一番目の事件では笠置とともに打合せの会議に出ていた。二番目の事件では、知多から名古屋に向かうタクシーの中で運転手といっしょにいた。今日の事件では、あたしたちといっしょに事件現場のモ

ニターを見ていた。どれも、確実にアリバイを証言する人がいる」

「でしょ。論理的じゃないとは思うけど、これだけ同じような殺人がつづく、逆にそこがあやしい気がするの。で、犯人が山田だと考えると、動機になつていゝるはずの鬼頭との関係とか、共犯の役割を果たしたと思われる茉莉との関係とかは、わりとすんなり説明できるとね」

「優良企業とつながりの強い鬼頭に取り入れることで、クライアントを紹介してもらっていたのだらうし、長い間、男女の関係を持ってきた茉莉を意のままに操ることもできただらう……ってことね」

「うん」

「しかし、確実なアリバイがあるからこそ犯人だとい
うのは、いくらなんでも無茶なんじゃないか？」

権藤がそう言ったので、リエは苦笑しながらうなず

いた。そして、そのあと「ただね……」とつけ加えた。
「その犯行があつたと思われる時間が、まるで瞬間と
いっていいほど限定されていることが、やっぱり気にな
るの。もしかしたらそれは、つくられた犯行時刻な
んじゃないかって」

「つくられたって……つまり、実際の犯行時刻とはべ
つに……ってことか？」

権藤が、驚いた顔できいた。

「ええ。実際の犯行時刻に偽のアリバイをつくるってアリバイ工作じゃなくて、確実なアリバイがある時間に偽の犯行時刻をつくってみせた」

「要するに、犯行時刻をずらした……と？」

「うん。少なくとも、一番目の事件と今日の事件に関しては、そういうことじゃないかって気がするの。二番目の事件だけは、少しだけニオイがちがうんだけどね」

「とうとうと？」

「元美殺しで時間が10分間に限定される理由は、隣の部屋の女の子がたまたまおしっこに行つて、トイレで元美の声を聞いたからでしょ。偶然の結果、そうなつたわけで、これは犯人が意図的に工作できるようなことじゃないから」

「いや、それを言うなら、一番目の事件だってそうだろう。ピザの宅配は偶然なわけだし……」

「ううん、麗子殺しは、じつはそんな工作ができるのよ」

「どういうこと？」

「愛ちゃんが務めているピザ店は、注文から30分ぴつたりで届けるっていう時間厳守が売り物になってる。

注文したのが麗子自身でなく、犯人か、それとも、その意を受けた人物なら、うまくやれば、犯行時刻を擬装することができるとして」

「……あつ、そつか。ピザの宅配に来た人が、インターホンでオートロックを開けてもらって、そのあとすぐに部屋まで来ることはわかってるわけだから、インターホンの受け答えさえうまくできれば、それまで生きていたように見せかけることができる」

「つまり、それ以前に殺したんだとしても、そこで殺人が起こったように思わせることができるってことね」

「なるほど。しかも、その時刻もかなり正確にコントロールできるわけだ。ちょうど30分前にピザを注文すればいいんだからな。そして、その時刻にはアリバイをつくっておく……ってわけか」

サツキとミミと権藤の三人が口々に言ったことを、リエはもう一度、具体的にまとめた。

「山田はおそらく、18時30分から50分くらいまでの間に麗子の部屋を訪ね、麗子を殺したんだと思うの。そ

して自分はそのまま、19時からの打合せに向かった。そのあと、共犯者：：要するに茉莉だけど、彼女が18時50分頃、麗子を装ってピザの注文をした。そして、それが宅配される30分後の19時20分頃、702号室へ行ってインターホンに出た。それで、19時20分頃、犯行が起こったように見せることができるわけね。その時、山田の方は、すでに笠置の会社での打合せに参加してるから、アリバイは成立する」

「なるほど」

「ただ問題は、インターホンに出たあと、茉莉がどうやって一階の自分の部屋まで戻ったかってこと。けっきょく、その謎が解けないと、山田に犯行が可能なことも立証できないのね」

「二番目の元美殺しについてはどうなのかな？」

最初の事件についてのリエの推理に、またしばらく

全員が考えこんだあと、今度はミミがその沈黙を破つた。

「あの事件については、今日まで茉莉が犯人だと思つてたから、まだわからないことだらけなんだけど……」

「さつき、二番目の事件だけは、ちよつとニオイがちがうって言ったよね」

「うん、犯人が犯行時刻を限定してみせたわけじゃないってことね。ただ、まったく限定してないわけでも

ないのね。殺したあと、通告電話はかけてきてるんだから」

「あ、そうか……つまり、犯行時間の始まりは限定してないけど、シツポはきっちり限定してきた」

「うん。それは、この前も言ったように、発見が遅くなって、検死上の死亡推定時刻があいまいにならないようにってことだと思うの。で、この事件と、一番目三番目の事件とのちがいは、その死亡推定時刻と関係

してるんだと思う」

「……ん？」

「三つの事件とも発見が早いから、死亡推定時刻の範囲もずいぶん短いよね。いちばん長い最初の事件でも、一時間にはならないわけね。でも、一番目と三番目の事件では、アリバイを成立させるためには、それでもまだ長すぎたんだと思うの。だから、犯行時刻をさらに刻んで、実際の犯行時刻からずらす必要があった。

でも、二番目の事件では、検死上の死亡推定時刻の範囲だけでじゅうぶん足りたから、シツポだけ限定すればよかった」

「……ん？　　どういうこと？」

「一番目の事件と三番目の事件では、犯人は死亡推定時刻内に現場まで行ける場所にいた。だから、もう少し時間を刻む必要があった。ところが、二番目の事件は、死亡推定時刻の範囲ではぜったい行けないような

場所にいた。だから、その必要がなかったってこと」

「そうか。元美の死亡推定時刻には、山田は、タクシ
ーで藤が丘に着いた頃だもんね。楠にはぜったい行け
ない」

「じゃあ、その藤が丘にいた山田が、どうやって元美
を殺せたの？」

「それがわかんない」

「……なんだ」

第二の事件に仕掛けられた単純だが大きな謎の前に、全員がふたたび考え込んだ。

「今日の茉莉殺しは……」

今度沈黙を破ったのは、リエ自身だった。

「じつは、一番目の麗子殺しと同じ構造なんだと思うのね」

「……同じ構造？」

「うん。さつきミミが、茉莉はデツキの上で先に殺されたんじゃないかって言ったでしょ。デツキの上じゃないにしろ、彼女が殺されたのは、あたしたちが二階のモニターで死体を見た瞬間より前だったと思うの。それを、あたかもあの瞬間に殺されたように見せた」

「じゃあ、茉莉はやっぱり、あれより前に『シヤチ・フオト』に着いてたってこと？」

「ええ。もつと言え、じつは、茉莉は今日、朝から

ずっと『シヤチ・フォト』にいたんじゃないかと思う
の」

「……えっ!? 朝から、いた？」

全員が驚いたように、リエの顔を見た。

「ええ、山田は、茉莉が水着を借りに行って遅れるよ
うなことを言ってたけど、さっきの水着ショップの店
長の証言で、そうじゃないことははっきりしたでしょ。

茉莉には、今朝、そんなことをする必要はなかった。

だから、誰よりも早く『シヤチ・フォト』に来ていた。たぶん山田が呼んだんだと思う。それとも、ゆうべのうちから、山田のところに泊まっていたか」

「でも……、それならいったい、茉莉はどこにいたっていうの？」

「ある場所に閉じこめられていた」

「ある場所って……？」

「Aスタの隅から入れる暗室」

「……えっ？」

「あの暗室は、今はほとんど使われてなくてカメラ倉庫になってる。今朝、瀨瀨といっしょに『シヤチ・フト』に着いた時、山田はもうスタジオにいて、いつもなら瀨瀨が用意するはずのカメラや機材を、すべて自分で出して準備してたのね。あれは、瀨瀨に、暗室の中に入らせないようにするためだったと思うの。あの時点で、茉莉はすでに暗室の中にいた」

「つまり、その時には、茉莉はもう殺されて、暗室に転がされていたということ？」

サツキの言葉に、リエは「ううん、それはちがうと思う」と首を振った。

「それじゃあ、死亡推定時刻が合わなくなってしまう。山田がそんな面倒な細工をやったのは、あくまで茉莉がああ瞬間に殺されたと見せるためなんだから、実際の殺害が前にずれすぎるのはまずいでしょ。たぶん茉

莉は、暗室の中で身動きできない状態にされてたんだと思うの」

「生きたまままで？」

「うん。茉莉の死体の口紅がはげていたのに気がつかなかった？ よく見ると、口紅だけでなく、口のまわりのファンデーションもとれてた。あれはたぶん、口にガムテープを貼られていたんだと思うのね。あたしたちがAスタで撮影している最中に、大きな声を出さ

れれば、暗室の中に誰かいるのがいつぺんにぼれてしまうもんね。それだけじゃなく、中で暴れたりしないようにしつかり縛られていたんだと思う。検案調書にあつた上腕と下肢の圧迫による軽い内出血というのは、そのせいで起こったことじゃないかな？」

「身動きできないほど縛って、軽い内出血だけですか？」

権藤がきいた。

「それはね、茉莉の着ていた春コートの上に、さらにエアクッションを何重にも巻いて、その上から縛ったんだと思う」

「エアクッション？」

「ほら、よく梱包なんかを使う『プチプチ』っていう気泡が並んだシート」

「：：ああ」

「あの暗室の奥には、段ボールといっしょにあのシー

トがたくさん置いてあった。前に瀬瀬が言ってた、カタログ用に『ブツ撮り』する製品の荷造りとかに使うんでしょね。茉莉は、あのシートを体に巻かれ、その上からケーブルの類を使って奥のダクトに縛りつけられていた」

「君や瀬瀬が『シヤチ・フォト』に来る前に、山田はそれをすませていたということか」

「ええ。体に打撲のあととかなかったところを見ると、

山田はスタンガンかなにかで茉莉を気絶させたんだと思うわ。その上で今言ったようなことをやっておいた。そして、あたしたちが来たあと、茉莉は遅刻しているという芝居をした」

「でも、撮影が始まったあと、山田はほとんどあたしたちといっしょにいたでしょ。茉莉を殺したのはいつなの？」

ミミがきくと、リエより早くサツキが言った。

「あの、ロビーで茉莉から電話がかかってきた5分間しかないよね、そのチャンスは」

「うん、そうだと思う。あれ以外に、山田があたしたちの前から消えた時間はないから。冷静に考えてみると、あの時って、それより前に芝居がかった伏線があったのよね」

「ん？ どういうこと？」

「あの時、あたしたちが山田を置いてBスタに入った

のは、山田が瀬瀬に『先に進めといてくれ』と言ったからではあるんだけど、みんな、それになんの疑問も持たなかったでしょ。それは、その前に山田が、スタジオの中では電波状態が悪いみたいな伏線を張ってるからなのね」

「ああ、笠置から電話があつた時」

「……つまりあれは、芝居だったってこと？」

「うん、たぶんそうだと思う。だって、茉莉の死体が

発見されたあと、山田は、あたしに言われて110番
したでしょ。あの時は、ドアの閉まったスタジオ内か
らでも苦もなくつながった感じだった。たぶん、スタ
ジオ内は電話がつながりにくいというのは、折よくか
かってきた笠置からの電話を利用して山田が仕立てた
フィクションだったんだと思うの。自分一人がロビー
に残ることを、あたしたちに納得させるためにね」
「じゃあ、あのあと、あたしたちがBスタで位置決め

してる時、山田はAスタにとって返して、茉莉を殺したってこと？」

「うん。サツキも言ったように、チャンスはその時しかなかったはずだから」

リエが言うと、当のサツキが「ちよつと待って」と言った。

「それもおかしな話じゃない？　だって、さつき公平ちゃんにも言ったことだけど、その時かかってきた電

話は茉莉からだだったんだよ。暗室で縛られてる茉莉が、
どうやって電話するのよ」

「それは、やっぱりさつき公平ちゃんが答えたように、
他からかかってきた電話を、いかにも茉莉からかかっ
てきたように芝居してみせたんだと思う」

「そんなに都合よく、よそからの電話がかかってくる
わけ？」

「それはべつにむずかしいことじゃないと思うけどな。

秘かに誰かに頼んでおけばすむことだもん。たとえば、どこか街なかで遊んでる若い子をつかまえて、何時何分にここに電話してくれたら金をやるとか言えばいい」

「それにしても、あの場にはいない人間が、あんな絶妙のタイミングで電話するのは、かなりむずかしい気がするけど」

「Bスタへ移動する前、山田はちよつと変な動きをつ

づけたでしよ。あたしたちが行きかけたところで、写真をプリントしようと言い出してパソコンの前に戻ったり、そのプリントに妙に手間取ったり、かと思うと、プリントした写真を手に取って足早にロビーに出た。あれは、約束の電話がかかってくるタイミングを計っていたんだと思うの。あの電話は、あたしたちがロビーにいる時かかってくるのが最善だった。それ以前だと、あたしたちにBスタに行けと言い出しにくい

感じになるし、Bスタに入ったあとだといかにも山田が外に出て行くという印象を持たせてしまう。多少タイミングを外したとしてもなんとか言いくるめるつもりだったんだろうけど、まあ、予定どおり決まって、山田はホツとしたんじゃないかな。それに、あの電話には、もうひとつべつの意味もあつたわけだし」

「べつの意味って？」

「第一の事件で言えば、インターホンの役割を、あの

電話は担っていた」

リエの言葉に全員がちよつと考え込んだあと、サツキが「ああ」と言った。

「つまり、あたしたちに、あの時点で茉莉が生きて外にいたと信じ込ませた」

「そう。そのあとの映像トリックを、あたしたちに疑わせないためのものでもあったんだと思うの」

「映像トリックって？」

その言葉に興味を持ったらしいミミにひとつうなずき、リエは「うん。とりあえず順番にいくわね」とつぶけた。

「ロビーに一人残った山田は、電話をつづけるふりをしながら、Bスタのドアが閉まるのを待った。そして、ドアが完全に閉まったところで、Aスタにとって返した。そこで暗室に入って、茉莉の首を絞めたわけね」

「ちよっと待ってくれよ。山田は茉莉を暗室で殺した

のか？」

「ええ、縛ったまま首を絞める方が、暴れられることもないし確実にしょ。いったんは気を失っていたとしても、その時には茉莉の意識は戻ってたでしょうから、茉莉は、そこで初めて、永年つき合った恋人の本当の冷酷さを知ったんでしょうね」

リエの言葉に、その場を想像したのだろう。全員が顔をしかめた。

しかし、すぐにそんな思いから立ち直ったらしいサツキがきいた。

「でも、例のカメラのケーブルは、暗室の中までは届かないでしょ」

「べつに、それはかまわないのよ。あのケーブルでないと首が絞められないわけじゃないんだから」

「え？　：：あつ、そうか」

「死体のすぐそばにあのケーブルが這ってたから、あ

たしたちはあれが凶器だと思い込んでしまったわけだけ
ど、スタジオには他に、使っていないケーブルがたくさ
んあった。それを使えばすむことでしょ。さっき言っ
たように、茉莉を縛ったのもケーブルの類だったんだ
ろうしね。縄とか使えば、証拠が残るだろうから」
「つまり、カメラが落ちたのは、首を絞めたせいでは
なかったということ？」

「うん、最終的にはそう見えるように仕組んだんでし

ようけど、茉莉を殺した時点では、まだカメラは落ちていなかった。それに、落として壊すわけにはいかな
い事情があった。だって、まだ撮るものが残っていた
んだから」

「どういうこと？」

「茉莉を殺した山田は、その体から縛っていたケープ
ルやエアクッションを取り去り、口のガムテープも剥
がして、ステージの中央まで運んだ。そのあと、デッ

キの上のカメラを下へ降ろしてステージの上に寝かせ、死んだ茉莉の姿を映した」

「映したって……写真を写したってこと？」

ミミがそうきいてきたので、リエは、いよいよトリツクの核心部分に触れた。

「ううん、そうじゃなくて、動画をパソコン上に取り込んだの」

「へ？……どういう意味だ？」

今度は権藤がきいた。

「最近のパソコンは、ビデオ編集機能がついてるものが多いでしょ。ハードディスクに録画することもふつうになってるし。じつは、デスクの上のカメラの映像は、二階のモニターに送られると同時に、ずっとAスタのパソコンに取り込まれてたんじやないかな。だから、その直前の誰もいないスタジオの映像も記録されていた」

リエがそこまで言ったところで、ミミが「でも……」
と言いかけた。

「なに？」

「……うん。とりあえずつづけて。あとで説明する」

「うん……？」

どこか煮え切らない感じのミミの表情は気になった
が、リエはつづけた。

「茉莉の顔を映したあと、山田は、ふたたびカメラを

デッキの上に運んだ。今度は、カメラが落ちる映像を記録するためね」

「落ちる映像をあとから撮った……と？」

「うん。よりリアルにするために、デッキの真下あたりからケーブルを引っ張ったのかもしれないわね。そうやって落としたこと、うまい具合にカメラが壊れ、映像が切れた。もしかしたら、もう一度、床にたたきつけるかなにかして、カメラを壊したのかもしれない

けどね。そして、そのあと、パソコンでそこまでに撮った映像を手早く編集した」

「編集した……？」

「うん、パソコン用のビデオ編集ソフトって、わりと手軽に動画を切ったり張ったりできるんでしょ？」

「うん、それは……、そうだけど……」

リエにきかれ、ミミはまた、どこか煮え切らない顔を
をした。

と、権藤が先を聞きたいという感じで言った。

「つまり、そのあと君たちが二階で見たのは、そこで編集した動画だったということか」

「ええ。誰もいないスタジオの画像はそんなに長くはなかったはずだから、それを何度かコピーして長く延ばす。そのあとにカメラが落ちる画像をつけ加え、最後に茉莉が倒れている画像を一瞬だけくつつける。笠置からかかった電話の時刻から計算すれば、到着時刻

はわかるわけだから、それに合わせて動画の長さを調節したんでしようね。そのあと、そのビデオデータを再生して、何事もなかったようにBスタに入ってきた」と、サツキが「なるほどね」と言った。

「あの時、山田は、ちよつと茉莉の話をしたあと、位置決めもろくに確認せずに早く切り上げた感じだった。あれは、笠置が来る前に——つまり、ビデオが終わる前に、どうしても二階に行く必要があったからな

のね」

「そう。あたしたちに、誰もいないスタジオとカメラが落ちる映像を見せないといけなかったからね」

「あたしたちはそれを見て、ちやうど笠置が来たあの時に殺人があつたと思つた。でも本当は、その前から、Aスタには茉莉の死体が転がってたつてわけか」

と、そこで権藤が、なにか考えながら言つた。

「しかし、そうだとすると、ひとつおかしいことがあ

る」

「なに？」

「笠置がドアを開ける時に聞いたという、なにかが落ちる音：：あれは、いったい何だったんだ？」

「あれ？ さつきまで、公平ちゃんは笠置嘘つき説じやなかったっけ？」

「公平ちゃんって呼ぶな！ : : いや、犯人が山田だとしたら、笠置の供述は正しいと見ていいだろう。し

かし、山田が先にカメラを落としていたなら、笠置がその音をきくのはおかしいじゃないか」

「うん。あたしが引つかかっているのも、その点なのよね。それだけがまだ説明できない」

リエがそう言うと、そこで、むずかしい顔で考えていたミミが言った。

「ううん。それだけじゃないわ。残念だけど、今のリエの説明は、全部、成り立たない」

「……ん？」

今度は、全員がミミの顔を見やった。

「下のスタジオに置いてあるパソコンには、ビデオ機能なんてついてないの」

「……えっ!？」

「それどころか、カメラの動画の方の映像は、あのパソコンを通過してさえいない。録画したり編集したりなんて、そもそも無理なのよ」

「……どうということ？」

リエは、茫然としながら聞き返した。そこを否定されれば、今の推理はすべて崩壊する。

「あたし、今日、事件のあと現場で、あそこの配線とかを調べたのね。志水のおじさまに頼んで、パソコンの中ものぞかせてもらった。それでわかったことなんだけど……」

そこでミミはちよつと迷いながら、「どこから説明

すればわかりやすいかな……」とつぶやいた。そして、
「まずは、あのケーブルね」とつぶけた。

「あのデジカメについてたケーブルは特注品なの。スタジオをデジタル化した時に注文したんでしようね。

一本に見えるけど、じつは中に二本のケーブルが束ねられてる。パソコンなんかによく使うUSBケーブルっていうのと、もうひとつはコンポジットケーブル」

「コン……ポジット？　なんだ、それは？」

「まあ、よくある、ビデオデッキとテレビをつないでる、あのケーブルのことだと思っていいわ。ただし、音声はないから画像用だけだけどね」

「ああ、なるほど」

「ケーブルが二本あるのは、デジカメのアウトプットが二系統あるからなのね。ひとつは、高精細な静止画、要するにデジカメで撮った写真をファイルとして出力する方で、これがUSBに流れる。もうひとつはビデ

オカメラと同じような動画、つまりデジカメの後ろの液晶画面に映ってる絵を外部でモニターするためのものである。こっちがコンポジットを通るわけね。で、あのスタジオでは、ケーブルがパソコンラックのところまで行ったところで、その二本の線が別れる。USBの方、つまり静止画はパソコンにつながれて、これはLANを通してサーバーに送られる。ところが、コンポジットの方、つまり動画の方はパソコンにつながってない

のよ」

「どうして……？」

「あのスタジオのパソコンは、静止画像のファイルを送るLANのターミナル代わりとして使われてる程度なの。あとはせいぜい、撮った写真を現場でプリントして確認する、ポラロイド代わりってところかな。だから、さほど高機能のものじゃない。ノートパソコン用のカードスロットがついてるだけで、コンポジットの

入力端子があるビデオボードも入ってない。つまり、簡単に言っちゃうと、パソコン自体が動画を扱える仕様になってないのよ」

「：：で、その動画を送るコンポジットの方は、そこからどうなるの？」

「ずっとたどってみたけど、そのまま二階のモニターに直結してた。途中で、録画機や編集機の類はいつさい介在してない。いつか笠置も言ってたけど、あの二

階のモニターは、いわばカメラのファインダー画像をそのまま映してるだけなの。リアルタイムにね」

「……リアル……タイム」

リエは愕然とつぶやいていた。

「つまり、あたしたちが見た誰もいないステージも、カメラが落ちる時の様子も、突然床に倒れてた茉莉も、あの時、Aスタで、実際に起こってたことだってわけ？」

問いただすサツキに、ミミはうなずいた。

「うん、一秒の遅れもなく」

その言葉を聞きながら、リエは、いったん完成近くまでこぎつけたジグソーパズルが、最後の数ピースがはまらなかつたせいで、すべてばらばらになっていくような感覚に襲われた。

と、その時だった。

ミミの座ったデスクのパソコンが、また、「ピ・ポ

ッ」と鳴った。

「ん？　　：　：あつ、捜査会議に出される現場検証のまとめだ」

ミミが、パソコンの文字を追いながら言った。

捜査本部でも、今日一日の捜査の結果を持ち寄り、会議が始まろうとしているにちがいない。

リエが、未だ茫然としたままそう思っていると、画面上のレポートを拾い読みしていたミミが、「あつ！」

と声を立てた。

「……どうした？」

権藤がきくと、ミミは——おそらくリエの様子を気にしたのだろう——どこか言いにくそうに言った。

「本部は、山田の供述を受けて、山田の携帯の着信履歴も調べてるの。ロビーで受けたあの電話は、まちがいなく茉莉からだっただけらしい」

「……え、ほんと？」

聞き返したサツキにうなずいたあと、ミミはさらにつけ加えた。

「その上：：、死体のそばに落ちてたバッグには、茉莉の携帯電話が入ってた。そこにも山田宛の発信履歴があつた。時間的にもぴったり合うみたい。つまり、まちがいなく両方の携帯で交信されたことが：：確認された：：」

「例の電話は、やっぱり、茉莉がかけたということか

：
：
」

暗室で縛られていた人間が電話でできるわけもなく、それは、あの時点で茉莉が拘束を受けず——おそらくはスタジオ外に——いたことを示していた。

否定しがたい事実の前に、けつきよく、リエの推理は全面崩壊したと言つてよかつた。

クイーンズオフィスを、今日何度目かの沈黙が襲つた。

「リエ、なんだか意地になってないか？」

「藤が丘」駅から「シヤチ・フオト・スタジオ」に向かう道を並んで歩きながら、権藤が言った。

「……そうかもしれない」

リエ自身、それはよくわかっていた。

「あんまり無理するなよ」

やっと組み立てた論理が否定され、見えかけていた

事件の輪郭が、ふたたび春がすみの中に隠れてしまっ
た。

気落ちしながらも、昨夜ひと晩、論理の再構築を試
みたが、やはり、三つの事件とも、核心となるアリバ
イのトリックがわからない。そのせいで、けっきよく
ロジックが切れ、全体像として結びついていかないの
だ。

しかし、その周到で緻密だと思われるトリックの謎

を考えれば考えるほど、それを仕掛けた人物として、ひとりの人間に焦点が絞られていく。あの感情を感じさせないほど端正な顔つきの下にこそ、冷淡にして伶俐な頭脳がひそんでいるにちがいないと思えてくるのである。

この上は、もう一度、直接当たってみるしかないか……。

そう思い、今朝、「山田と会ってくる」と告げると、

権藤が「じゃあ、俺も行く」とついてきたのだ。

「だけど、公平ちゃんとあたしがいつしよに現れたら、山田はおかしいと思うでしょ」

「公平ちゃんって……ま、いいや。昨日、あんな事件があったから、『シヤチ・フオト』はまた臨時休業で山田しかいないんだろ。そこへ一人で乗り込んで対決するのは危険だろう。もし、リエの思っているとおりだとしたら、やつはもう、平然とした顔で女三人を殺し

てるんだぞ」

「べつに対決するつもりはないわよ。あたしは、謎を解くヒントを探りたいだけ。それに、あたしは、女じゃないしね」

リエがそう言うと、権藤は一瞬、虚をつかれたような顔をし、そのあと不服そうな顔になり、最後は真顔で言った。

「……いや、やっぱり、俺も行く」

ロビーに入ると、体の芯から冷えるような森閑とした静寂に包まれた。

山田は二階の私室か事務所にいるにちがいないと思
い、リエは権藤を従えていったん階段の方に行きかけ
たが、そこで思い直し、Aスタジオのドアに近づいた。
山田と会う前に、もう一度、昨日の事件現場を見てお
きたいと思ったからだ。

左右のドアの引き手に手をかけ引っ張ってみると、今日は、いつもどおり、両方のドアが開いた。

「……あ」

スタジオに入りかけ、そこに思いがけず山田がいたのを見つけ、リエは、昨日の朝の纈纈と同じように声をあげていた。

黒のタートルネックセーターとストラックスに痩身を包んだ山田は、立ったまま、デスクの下のパソコンラ

ツクに向かっていた。

「……お、おはようございます」

リエの言葉に振り向いた山田は、一瞬、いぶかしげな顔をしたあと、「やあ」と言った。いつも、トレーナーにブルゾンという姿で来ていたリエが、今日は、ミニのワンピースにテーラードジャケットという出で立ちだったせいかもしれない。

リエが近づいていくと、山田はどこかしらあせった

感じでパソコンに向き直った。それが気になり、ディスプレイを見ると、画面中ほどに表示されたウインドウで緑色のインジケータがなにかの経過を告げている。そして、リエがそばまで行ったところでそれが消え、今度は小さな確認ウインドウが出た。山田はそこに表示された「OK」ボタンをクリックした。

「アンインストールが終了しました」

ウインドウには、そう表示されていたようだ。

「なにかのソフトを整理したんですか？」

リエがきくと、山田は、どうということもないという感じで「ああ」と答えた。

「昨日、このマシンをいじった時、なんだか動作が鈍い気がしてさ。余分なソフトでも動いてるんじゃないかと思って、いらぬ物を棄ててたんだ」

その言葉は淀みがなく、そのことがまた、まるで用意していた言い訳のようにも聞こえた。

その行為に事件とのつながりがあるのかどうかもわからないまま、リエが漠然とそう感じていると、山田はそこで、リエにつづいて入ってきた権藤に目をやり、ふたたびいぶかしげな顔になった。

しかし、すぐにリエに視線を戻し、言った。

「今日は、いつものわざとらしいメガネもかけていないし、いよいよ俺に、正体を見せる気になったってことかな？」

「正体……？」

「君は、最初の現れ方からして唐突だったし、なにかあるとは思っていたんだが」

「なんのことでしょう？」

「その上、今日は、恋人までご同伴で……」

「えっ？ ……ああ、ちょうど駅でお会いして、ここへ来るとおっしやるからご一緒したんです。ね、刑事さん」

山田は、権藤のことを捜査本部の刑事だと思っ
てい
るはずだ。リエはそう考え、とぼけた。

「……え、ええ。またあなたに、おうかがいしたいこ
とができました」

権藤も、こちらに調子を合わせてきた。

「なるほど。じゃあ、そういうことに……」

「そういうことにしておこう」という意味なのだろ
う。山田は、少なからず、こちらの思惑に気づいてい

るようだった。

リエの方も、それにかまわず、とぼけてつぶけた。

「今日は、瀬瀬さんは、来てないんですね」

「ああ、どうせ来たってやることはないんだし、休んでいいと言ったんだ。また、鳥でも撮りに行ってるんじゃないか。もつとも、俺たち容疑者は、警察から所在をはっきりさせておけと言われているから、そんなに遠くには行けないんだろうがね」

山田はそう言いながら、権藤の方を冷笑気味に見た。そして、視線をふたたびリエに戻すと「で、君は？」ときいてきた。

「ええ、あたしも、先生にいくつかおききたいことがあって」

「なるほど、彼と同じ意向だというわけだ」

そう言ったあと、山田は、ちよつとなにかを考えるようにした。そして、そのあと、ふつと口の端を持ち

上げた。なんだか、自分の思いつきがおかしかったという感じだ。

「……いっそのこと、こういうのはどうだろう。じつは俺も、君には少なからず興味があつてね。特に、昨日、被写体として見てからは、その興味がさらに増した。もしよかったら、今から写真を撮りながら話さないか。その方が俺も、真正面から君に向かい合える気がするから」

こちらの顔を見つめながら言った山田の思わぬ提案に、リエは迷った。

そんなことに何の意味があるのかと思ったこともあ
るが、昨日、山田に見つめられた時と同様の不安が、
心をよぎったからでもあった。

山田に見られ、カメラを向けられれば、こちらは、
我を失い、好きなように操られてしまうのではないか。
たとえば……あの三人のモデルたちのように。

そんな気がしたのだ。

しかしさらに一方、もしかするとこれは、さつき権藤が言っていた「対決」ということなのかもしれないとも感じた。

敵は、こちらの正体がある程度承知の上で、自分の主戦場での対決を申し出ているのだ。これに応えないかぎり、相手を屈服させることはできないだろう。

そう考えたりエは、相変わらず感情を奥にひそめた

ままの山田の目を見返し、無言で首を縦に振った。

「……うむ、昨日の衣裳がまだ上に置いてある。準備してきてくれ」

まるでなにかを楽しんでもいるかのように、山田もうなずいた。

数基のストロボや三脚などを撮影ステージに向けてセットしている山田を、権藤は所在なく眺めていた。

いったい、なにを考えているんだ？ こいつも、それには……リエも。

と、ちょうど山田の準備が終わったらしいところでふたたびドアが開き、リエが戻ってきた。

「お待ちせしました」

その姿を見て、権藤は、思わず息を呑んだ。

首からすっぽりとタオル地のポンチヨのようなものを着ているが、短いその裾からは形よい太腿が露わに

なり、小さなサンダルをつつかけたすらりとした脚へとつづいている。光の集中するステージにくらべると薄暗いその場所でも、肌がほの白く輝き、殺風景なスタジオ全体の雰囲気を変えてしまうようなインパクトを持っていた。

さらに――

「……うむ。じゃあ、そこに立ってくれ」

山田の言葉に、リエはポンチョの首のリボンを解き、

肩を滑らすようにそれを脱いだ。

今度は、「息を呑む」ところを通り越し、権藤は呼吸困難に陥っていた。

ポンチョの下から現れた素肌にも、赤のビキニが衝撃的なほど似合っていた。

きれいに浮き出した鎖骨のふちにかかる細いストラップは、この前も感じたりエの肩のか細い魅力を際立たせていた。ぴんと張ったそのストラップに吊られ、

豊かなポリウムがふたつ、カップからはみ出し気味に揺れていた。その仕掛けを知っている権藤の目にも、それはつくりものとは見えぬ、下につづく細いウエストに向かい、理想的なカーブをつくり出している。

多少細めだが、つんと上を向いたヒップラインに、やはり真っ赤な水着のボトムが鮮やかだ。見てみると、それがすつと下に沈み、膝を揃えて屈んだリエは、脱いだサンダルの上にポンチヨを置いた。

裸足になって小走りにステージ中央に向かうその後ろ姿を見ながら、権藤は、この前、例のラブホテルで——人がなんと思おうが、そしてリエがなんと思おうが——、あのままベッドの上に押さえ込んでしまえばよかったと、それを悔やんだ。

「よし、まずは少し斜はすに立って、こっちを見つめて」
山田が言うと、リエは、両足を逆T字型にそろえて立ち、上体を少しひねるようにして山田を見た。

すでにモデル然としたその立ち姿に、権藤はふいに、
なんだかリエが自分とは別世界に行ってしまったとで
もいうさみしさに襲われた。すべての光が集中するス
テージと、自分が立つ薄暗闇との差が、余計にそう感
じさせるのかもしれなかった。

そして、そんな権藤とリエの間には、山田の後ろ姿
があった。

リエと山田は、しばらくその姿勢のまま、お互いの

顔を見つめ合っていた。山田の方も、目の前のカメラをのぞこうともせず、リエの顔を見ているようだ。

その、山田を見るリエの視線に、権藤が抱いたさみしさは、さらに形を変えていった。その視線の先に、自分とは別の男がいるということに、なぜか胸がしめつけられた。

と、そこで、山田を見返していたリエの顔に不安のようなものがよぎった。その目つきが、なにか、すが

るような視線に変わったのだ。山田の眼差しの前に意志が溶けていく：：その美しい肢体からリエという人格が抜け、人形になっていく：：そんな感じだった。

それに気づいたとたん、権藤は、山田に対する憎しみを抱いていた。山田が、自分の大切なものを奪っていくように思え、体の中を、暴力的とでも言っていいい衝動が走った。

もし、リエ自身が、そのまま山田の視線にからめ取

られていたなら、権藤は本当に、山田に殴りかかって
いたかもしれぬ。

しかし、リエは、なんとかそれをはね返したようだ。
いったんは失われかけた目の意志が、ふたたびよみ
がえつてきた。

「……ふっ、いいね。その正体を見せない感じがいい」
山田はそう言うと、やっと身を屈め、カメラに向か
った。

リエを意のままに操って人形のように撮ろうとし、それがだめなのがわかって、撮り方を変えた。

そんな感じが、権藤にも伝わってきた。

「一見素直そうなその顔の下には、どうやら、俺にはさわれない秘密が、いくつも隠されていてそうだ」

そんな山田の言葉に、リエも笑い返した。

「山田先生こそ、正体がよくわからないわ。きっと、そこがカメラマンとしての魅力なんでしょうね。その

正体のわからなさで、人の心を不安にして、モデルを自由に操る。写真だけでなく、現実の世の中でも、同じように人を操ってきたのかしら？」

しゃべるリエに合わせるように、何度もストロボが光った。表情がさまざまに変わるその瞬間の、的確なシヤッターチャンスをおさええていることが、権藤の素人目にもよくわかった。

「ううん、先生は、人を操るだけじゃなく、どうやら

時間まで、自分の思い通りに操れるみたいね」

「……ふふ、なにが言いたい？」

シャツターを押し続けながら、山田がきいた。

「先生のまわりで三人の女たちが次々に死んだ。おそらく先生を愛していた三人が。でも、あくまでクールな先生は、その死の瞬間を誰とも共有しなかった。もしかしたらそれは、先生が、時間も自由に操ったってことかな……なんて思ったものだから」

「いいね、その挑戦的な表情。どうせなら、もつと俺に挑んでこいよ。もう少し前屈みになるとか」

山田はそう言いながら、三脚からカメラをはずしてしまった。手持ちカメラで、リエに迫ろうということらしい。

「それにしても、今の言葉は、ひよつとして、俺が三つの事件の犯人じゃないかって疑ってるってことか？」

「さあ……」

リエの方も、山田に言われたとおり、前屈みになり、片方の肩をせり出すようにして挑発的な視線を向けている。

「あたしはただ、先生の秘密を、もっと知りたいだけ」
あのリエに、こんな顔ができることに、権藤は驚いていた。権藤自身はもちろん、リエのこんな表情を見たことがない。それが他の男に向けられているという

事実には、権藤の中で、またなにかがめらめらと燃え上がった。

「俺の秘密が知りたい？ たとえば、どんなことを：
：？」

「そうね：：、食べ物好みだとか、趣味だとか：
：？」

「ふふ、急にかわいらしいことを言うじゃないか。それをきいてどうする？ 俺とつき合ってくれらるとでも

いうのか？」

「場合によっては……」

山田は、リエの間近に迫り、その体を舐めるようにカメラを向ける。リエもまた、さまざまにポーズを変えながら、そのレンズに蠱惑的こわくな眼差しで応えていた。

離れた位置からそんな二人を見て、権藤はさらにいらついた。リエが、いったいどこに導こうとしているのか、その意味がわからないからでもあった。

「食べ物と言えは……先生は、ピザは好き？」

「……え？ ……ああ、特に好物というほどでもないが、撮影が深夜になるような時には、よくとって食べたりする」

「お仕事の時だけじゃなく、恋人の部屋に泊まった時なんかにも、デリバリーを頼んだんじゃない？ たとえは、茉莉さんの部屋とかでも」

権藤にもやつと、リエの意図がなんとなく理解でき、

思わずため息をついた。

「……ああ、そんなことも、あつたかもしれない」

「きつと、そんな時、時間を操る魔法を思いつくんで
しょうね」

「さあ、何のことだか……」

しかし、山田のガードは堅そうだ。

「じゃあ、今度は、趣味の話でもしましうか」

リエは、そう言いながら床に手をつけて腰を落とし、

山田を見上げるようにした。カメラの位置からは、ビ
キニの下の胸の谷間がはっきりと見えているはずだ。
そこにも、ストロボの光が何度も注がれている。

山田がそこを凝視していると思うと、権藤の心は、
やはり乱れた。

「べつに俺には、さしたる趣味なんてないさ」

「そんなこともないでしょ。この前、知多半島のロケ
で、笠置さんがモーターボートのことを言っ
てなかつ

た？ 先生は、あのあたりにモーターボートを持つてるとか」

「ああ。まあ、マリンスポーツは好きだからな」

「じゃあ、船舶免許も持つてるのね」

「五トン限定だが、いちおう一級だ」

「恋人の茉莉さんと、伊勢湾を走らせたりもしたんでしょうね」

「いや、彼女は、船はからきしダメだった。もともと、

一人で海釣りでもしようと思つて買ったボートさ」

「ふーん、釣り？　じゃあ、夜釣りなんかよくするんだ」

「：：ああ、時にはな。しかし、そんなにしよつちゆう行けるわけでもないさ。なにしろ、ここから知多までは、それなりに時間もかかる」

「そうね。でも、先生なら、ここからでも、みごとな魚が釣れそうだけど」

「まあ、よくいる釣りマニアのように、やたら釣果をちようか自慢する趣味もないんでね」

それは、暗に自分が犯人であることを認めただけだろうか。リエの挑発に対して、山田もぎりぎりの挑戦をしてきているようだ。

権藤は、その言葉の意味するところとはべつに、山田とリエの間にある、そんな濃密な空気にいらついた。

「自慢をしないのは、先生が、本当の自信家だからな

んでしようね。自信のない人ほど自慢話をしたがるものでしょ。でも、そんな自信家の先生も、昨日の朝は、ことを前にして、ちよつと自信がぐらついていたのかな」

「：：ん？ なんのことだ？」

「なんだか、しゃべりすぎてたから。茉莉さんが遅刻している理由まで、あれこれと説明して。でも、あれは失敗だったかもね。茉莉さんは、前日のうちに水着を借り出してたみたいよ」

「……やっぱり、そうか。それはうすうす勘づいていたんだ。水着を借りるなんて、口実だったんだな」

「……え？」

「だから、あの時も言ったろう。茉莉は、じつは君をモデルにしたことにすねていたんだ。君にメイクとかしたくないから、わざと遅れてきた。そういうことだ」

「……なるほど。そんな言い訳までちゃんと用意されてるのね」

「茉莉は、ああ見えて嫉妬深い女でね。まあ、仕事の立場上のこともあったんだろうが、俺が君を選んだことが気に入らなかつたんだろう。本当は、選んだのは笠置さんなのに、俺が君を気に入ったと勘違いして、君に嫉妬した。まあ、今となっては、彼女のそんな嫉妬深さも、悲しい思い出になってしまったわけだが」

「茉莉さんが死んで、先生も傷ついている？」

「ああ、むろんそうさ。心の中にぽっかりと穴が空い

たような気分さ。君が、そこを埋めてくれるとでもいうならありがたいが」

「ふふ、そうね。もう少し、先生のことを知ってから」
リエはそう言いながら、ステージの床に片肘をつき、寝そべってしまった。

山田は、その体にまたがるようにしてカメラを向けた。

「君が俺を落とすのか、それとも、俺が君を落とすの

か、そこにこだわっているわけだ、君は」

間断なく焚かれるストロボとシャッター音の中、ステージ上で繰り広げられるそんなふたりの絡み合いを、権藤は、なすすべもなく見守った。

ほとんど犯行を認めていながら、けつきよく山田は、謎を解く手がかりになるようなことはなにも漏らさなかつた。

「藤が丘」から地下鉄に乗ってからも、リエは無言で悔しさを噛みしめていた。

ふと横を見ると、権藤もまた不機嫌そうな顔で、窓外を通り過ぎる街の景色を見ていた。それでやっと、「シヤチ・フォト」を出てからなにも会話していないことに気づき、リエは言った。

「どう思った？」

「どうって……なんで、水着なんかになったんだ」

「……へ？」

言われたことの意味がわからず、リエが見返すと、権藤は、急にばつの悪そうな顔になり——しかし、全体としては未だ不機嫌な表情のまま——、ぷいと横を向いてしまった。

それでリエは、首を傾げながら、ふたたび事件に想念を集中した。

電車は、高架の「本郷」「上社」を過ぎ、「一社」

の手前で地面に潜って、本当の「地下鉄」になるところだった。

見るとはなしに見ていた窓外の景色が、一瞬、白い防音壁に代わり、すぐに暗い地下壕の壁に変わった。

その瞬間、窓のガラスに車内の光景が映り、同時に、今まで見ていた街の景色が残像として重なった。その残像はすぐに消えたが、なんだか、白黒反転したネガ写真のようだった。

反転……？

そこでリエは、なにか思いついた気がした。

そして、権藤に言った。

「……ねえ、こういうのはどうかしら？」

「……ん？」

さつき見せたばつの悪そうな顔を取りつくろうとでもいうように、権藤はすかさず返事してきた。

「きのう、二階でモニターを見ていた時、あたしたち

は、A・Bふたつのスタジオを見ているつもりでいた。でも、じつは、Bスタジオしか見ていなかった」

「ん？　　どういうことだ？」

「Aのモニターに映っていたのは、Bスタの色を反転した映像だった。同じひとつの映像の色を反転してふたつのモニターに映し、本当は、すでに茉莉の死体が転がっていたはずのAスタを隠した」

「いや、しかし、途中に映像を加工するような仕掛け

はなかったとミミは言ってたぞ」

「途中にはなかったかもしれないけど、モニター自体に色を反転する機能がついていた……とか」

「それにしても、ケーブルはそれぞれのモニターにつながってたわけだろう」

「二本のケーブルが二階に引かれている間のどこかで細工してあって、両方にBスタの絵が流れるようになっていたってことは可能じゃない？」

リエの言葉に、権藤は少しの間考え込み、しかし、すぐに「いいや」と首を振った。

「たとえばそんな仕掛けがあつたとしても、その話は無理だな。ステージそのものは白と黒だから、反転すればBスタジオがAスタジオに見えるかもしれぬ。でも、ビーチボールは赤と白だつたんだろう。白を反転しても、赤にはならない」

「……そうか」

「それに、Bスタジオには位置決め用の白いテープが貼ってあったと言っただけでなかったか？　だとしたら、Aの方の映像にも、黒いテープとして映ったはずだろう」

「……そうね」

けつきよく、今の思いつきが成立しないことを素直に認め、リエはすぐにその考えを棄てた。

しかし、その時頭に浮かんだ言葉だけは、妙に引っかかるものがあった。

：：、反転：：、逆転：：、リバーズ：：。

なんだか、その言葉が、三つの事件全体を貫くキーワードのように、リエには思えた。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

BQ2 リバース・ホライズン

BQ2 Reverse Hrizon

<公開版>

CopyRight 2004 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500